

図書館分類法における
ファセット概念の展開

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2014年9月

緑川信之

概要

図書館分類法におけるファセット概念の展開

研究目的とその背景

Ranganathan のファセットとは、特定の区分特性に基づいて区分されてできる区分枝の総体、のことである。単なる区分枝の寄せ集めではなく、特定の観点(区分特性)に基づく区分枝を集めたものがファセットである。本研究の目的は、ファセットを鍵概念として Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を明らかにすることである。そのために、(1)Ranganathan によるファセット概念の導入は図書館分類法においてどのような意義をもつのか、(2)Ranganathan はファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたのか、(3)Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をどのように考えていたのか、という 3 つの課題を設定した。

これらの課題の背景には、分類論や組織化論のテキストブック(以下、分類論のテキストブック)においてファセット概念が曖昧に使われている、という状況がある。たとえば、ファセット化分類法ではない階層構造分類法においてもファセット概念が使われている、という記述がみられる。また、Ranganathan 自身はファセット化分類法と分析合成型分類法を同義とはみなしていなかったにもかかわらず、分類論のテキストブックでは両者は同義であるとみなされている。その一方で、分析合成型分類法・ファセット化分類法ではない分類法として階層構造分類法と列挙型分類法があげられ、この 2 つの用語も同義として扱われることが多いが、「階層構造」と「列挙型」という語が同じ意味内容をもっているとは考えにくい。

筆者は、分類法を種類分けする際は構造と表示方法を明確に区別するべきであるという構造-表示方法説を以前から主張してきた。構造という面からみれば階層構造分類法と多次元構造分類法に区分でき、表示方法という面からみれば列挙表示の分類法と合成表示の分類法に区分できる。したがって、構造-表示方法説によれば、階層構造分類法と列挙型分類法(列挙表示の分類法)はまったく異なる概念である。また、分析合成型分類法とファセット化分類法は、どちらも多次元構造分類法に該当する概念のように見える一方で、合成表示の分類法という意味も含まれているように見える、という曖昧な概念であることがわかる。本研究では、3 つの課題を検討する際に、構造-表示方法説を分析の視点とした。

本論文の構成

第1章では、本論文の研究目的とその背景、論文の構成、使用する用語について説明した。

第2章では、本研究の分析視点である構造・表示方法説について説明した。2.1節で分類法の構造について、2.2節で分類法の表示方法について説明した。さらに2.3節では、ファセット概念の展開にとって重要な役割を果たしている複合的な主題(複合主題と混合主題の総称)について、構造・表示方法説の立場から論じた。その際に、構造と表示方法以外に記号法が深く関わっていることを明らかにした。これにより、筆者のこれまでの構造・表示方法説を一部修正することができた。

第3章では、RanganathanのColon Classification(CC)にファセット概念が導入される以前、および同時期の各種分類法について検討した。分析の観点として、ファセット概念の他に、構造、表示方法、記号法をとりあげた。その他に、各分類法の概要と作成の経緯について説明した。3.1節では、記号が単一要素からなる分類法としてDewey Decimal Classification(DDC)とExpansive Classification(EC)をとりあげた。3.2節では、記号が独立要素からなる分類法としてUniversal Decimal Classification(UDC)、Bibliographic Classification(BC)およびCCをとりあげた。3.3節では、各分類法の分析をふまえて、CCを中心とした観点から考察を行い、CCにおけるファセット概念導入の意義、すなわち本研究の課題(1)を明らかにした。

第4章では、Ranganathanによってファセット概念が導入され、展開されていく経緯を、Ranganathan自身の著作を逐次的に分析することで明らかにした。Ranganathanのファセット概念に関する著作は、その内容から3期に分けることができる。4.1節では、第1期にあたる1933年から1945年までの著作を分析した。次いで4.2節で、第2期にあたる1949年から1952年までの著作を、そして4.3節で、第3期にあたる1957年から1969年までの著作を、それぞれ分析した。この3期の区分と順序は、3つの課題(1)(2)(3)の内容と順序に一致している。そのため、課題(1)に関する本章の分析は第3章を補足するものとなった。また、課題(2)と(3)に関する分析は、第5章を先取りするものである。なおこの章では、できる限りRanganathan自身のことばでファセット概念の展開過程を追うことを目指すため、構造・表示方法説からの分析は行わなかった。

第5章では、第4章でみたRanganathanによるファセット概念の展開過程を、構造・表示方法説の観点から分析した。また、Ranganathanのファセット概念の普及に貢献したClassification Research Group(CRG)の代表としてVickeryのファセット概念をとりあげ、Ranganathanと比較することでファセット概念の意味をより明確にした。Vickeryは、多くの(理想的にはすべての)知識領域に現れるファセットとして共

通ファセットを提唱している。5.1 節では分析合成型分類法とファセット化分類法の関係について、そして、5.2 節では Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットの関係について検討した。

第 6 章では、以上の分析・考察から結論を導いた。

結論

課題(1)に関しては、以下の結論を得た。Ranganathan が提唱したファセットとは「特定の区分特性による区分肢の総体」という、理論的には特に新しい概念ではなかった。一方、合成による助記性の向上(利点A)と、独立要素からなる記号法による複合的な主題への対応(利点B)という、分類法がもつべき 2 つの望ましい性質も、すでに従来の分類法作成者によって認識されていた。Ranganathan は、ファセット概念を導入することによって、この 2 つの利点をより徹底しようとした。利点Aは合成表示によるものであり、利点Bは多次元構造と自由構造によるものである。それにもかかわらず、どちらもファセット概念がかかわっていたために、合成が複合的な主題への対応に有効であるという誤解を招いてしまった。Ranganathan によるファセット概念導入の意義には、合成と独立要素からなる記号法にいままで以上の体系性と一貫性を与えたという効の面と、合成と独立要素からなる記号法を混同してしまったという罪の面の、両面があったといえる。

課題(2)に関しては、以下の結論を得た。基本カテゴリーが導入された当初は、ファセット式はファセットを並べる形をとっていた。そして、基本カテゴリーはファセット式では使われておらず、分類作業の初心者がファセットを特定する際の手引きの役割を与えられていた。その後、基本カテゴリーは、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させられた。そのため、ファセット式で固定されるのは基本カテゴリーとされ、ファセットはファセット式には表示されなくなった。これが現在のファセット式の形である。

課題(3)に関しては、以下の結論を得た。Ranganathan は自身の分類法である CC の意義として、「ファセット」よりも「合成」の方が重要とみなしていたと考えられる。一方、Vickery にとっては、合成ができることよりもファセット化されていることの方が重要だったと推測される。このことが、Ranganathan は分析合成型分類法と呼び、Vickery はファセット化分類法と呼んでいる理由と考えられる。Ranganathan と Vickery の考え方の相違は、基本カテゴリーと共通ファセットという概念にも現れている。Ranganathan にとって基本カテゴリーとは、先にみたように、各種のファセットを体現させる源である。Vickery が共通ファセットを必要としたのは、一般分類法を構築するためである。Ranganathan も Vickery も、複合的な主題に対応できる分類

法を研究・構築しているという点では共通しているが、目指す方向が異なっていたといえる。**Ranganathan** は分析合成型分類法とファセット化分類法は異なる概念であると主張し、**Vickery** は両者の関係にこだわっていない。分類論のテキストブックで分析合成型分類法とファセット化分類法が同義であるかのように扱われているのは、**Vickery**(およびその他の **CRG** メンバー)の影響が大きいと考えられる。

以上、3 つの課題の検討を通して明らかになったことは、複合主題への対応が **Ranganathan** の図書館分類法研究にとって最も重要な問題の 1 つであったことである。他の分類研究者も同じ問題に取り組んでいたが、**Ranganathan** はファセット概念を導入することによって、他の研究者よりも問題の本質に迫ることができた。

Abstract

Development of the Concept of Facet in Library Classifications

Purpose and background

Facet, introduced by Ranganathan, is the totality of the classes of a main class based on a single characteristic of division. It is a set of classes based on specific characteristics rather than just a group of classes. The purpose of this study is to clarify Ranganathan's idea on library classification using "facet" as a key concept. For this purpose, three research questions were set. (1) Regarding the facet concept introduced by Ranganathan, what is its significance in library classification? (2) How did Ranganathan determine relationships between facets and fundamental categories? (3) How did Ranganathan conceptualize relations between faceted classification and analytico-synthetic classification?

In terms of the aforementioned research questions, the facet concept is ambiguously described in textbooks on classification theory. For example, some descriptions state that the facet concept is used in hierarchical structure classification, which is not a faceted classification. In addition, faceted classification and analytico-synthetic classification are considered synonymous in textbooks, whereas Ranganathan himself did not consider them synonymous. On the other hand, classifications that are not analytico-synthetic or faceted classifications are called hierarchical structure or enumerative classifications. These two terms are often treated as synonymous; however, it may be incorrect to consider the words "hierarchical" and "enumerative" to be similar in meaning.

The structure-expression style theory, proposed by the author in a previous paper, states that the structure and expression style of a classification should assuredly be distinguished when the types of classifications are divided. Types of classifications can be divided into multi-dimensional structure classification and hierarchical structure classification from the viewpoint of the terms of a structure, and can be divided into synthetic expression classification and enumerative expression classification from the viewpoint of the terms of expression styles. Therefore, according to the structure-expression style theory, enumerative

expression classification and hierarchical structure classification are completely different concepts. In addition, faceted classification and analytico-synthetic classification are ambiguous concepts, because while both seem like concepts corresponding to multi-dimensional structure classification, they seem to also include the sense of synthetic expression classification.

In this study, the analysis of the research questions was conducted from the viewpoint of the structure-expression style theory.

Structure of the thesis

In Chapter 1, we describe the research purpose and background, the structure of the thesis, and the technical terms used herein.

In Chapter 2, we explain the structure-expression style theory, which was the analysis viewpoint of this study. Classification structure is explained in Section 2.1, and the expression style of classification is explained in Section 2.2. In Section 2.3, we discuss a composite subject (generic name of compound subject and complex subject), which was important to the development of the facet concept from the viewpoint of the structure-expression style theory. It was revealed that the composite subject was as deeply related to the notation as it was to the structure and expression style. This, in part, modifies the structure-expression style theory proposed previously.

In Chapter 3, we examine classifications that were created before or at the same time as the facet concept introduced in the Colon Classification (CC) by Ranganathan. From an analytical point of view, structure, expression style, and notation were considered in addition to the facet concept. In addition, we summarize each classification and explain the process to develop them. In Section 3.1, Dewey Decimal Classification (DDC) and Expansive Classification (EC) were considered as classifications that have a notation consisting of a single element. In Section 3.2, Universal Decimal Classification (UDC), Bibliographic Classification (BC) and CC were considered as classifications that have a notation consisting of independent elements. In Section 3.3, consideration has been made on the basis of the analysis of each classification in the previous two sections, with a focus on CC in particular. As a result, we reveal the significance of introducing the facet concept to the CC (research question (1)).

In Chapter 4, we clarify the process by which the facet concept was introduced

and developed by Ranganathan, investigating each writing of Ranganathan chronologically. The writings of Ranganathan on the facet concept can be divided into three phases. In Section 4.1, we analyze the writings from 1933 to 1945, which comprise the first phase. Then, in Section 4.2, we analyze the writings from 1949 to 1952, which correspond to the second phase, and in Section 4.3, we analyze the writings from 1957 to 1969, which correspond to the third phase. These three phases and the order in which they are discussed are in accordance with the content and order of research questions (1), (2), and (3). Therefore, the analysis presented in this chapter that focusses on research question (1) supplements Chapter 3. In addition, the analysis on research questions (2) and (3) is presented before Chapter 5. The analysis from the viewpoint of the structure-expression style theory was not performed in this chapter, because this chapter mainly deals with the process of developing the facet concept on the basis of Ranganathan's own proposal.

In Chapter 5, the above-mentioned development process is analyzed again from the viewpoint of the structure-expression style theory. Furthermore, the facet concept proposed by Vickery was considered as a representative of Classification Research Group (CRG), which contributed to expanding the facet concept proposed by Ranganathan. The meaning of the facet concept became clearer by comparing the concept proposed by Vickery with that proposed by Ranganathan. Vickery proposed the common facets concept, which implies that facets appear in many areas of knowledge. The relation between analytico-synthetic classification and faceted classification is investigated in Section 5.1, and the relationship between the fundamental categories and the common facets is investigated in Section 5.2.

In Chapter 6, we summarize the main conclusions of the aforementioned analysis.

Conclusions

For research question (1), the following conclusions were obtained. Facet, which was proposed by Ranganathan, was the totality of the classes of a main class based on a single characteristic of division, and it was theoretically not a particularly new concept. In addition, conventional classificationists already recognized two desirable properties that classifications should possess: the improvement of mnemonic (property A) by synthesis and coping with composite subjects (property B) using notations consisting of independent elements. Ranganathan studied these

two desirable properties thoroughly by introducing the facet concept. Property A is satisfied by synthetic expression, and property B is satisfied using the multi-dimensional or free structure. However, the misunderstanding that “synthesis was effective for coping with composite subjects” resulted because the facet concept was related to both properties. The introduction of the facet concept by Ranganathan introduced both advantages as well as disadvantages; the advantage is that both notations consisting of independent elements and synthesis can be applied more consistently and systematically, and the disadvantage is that they can be confused for being the same as they perform the same function.

For research question (2), the following conclusions were obtained. When fundamental categories were introduced, the facet formula was used for arranging the facet, and fundamental categories were not used in the facet formula. These categories were used to guide beginner classifier in identifying facets. Then, fundamental categories were later used to allow large number of facets manifested from these categories to cope with deep subjects. Therefore, elements fixed in the facet formula became fundamental categories, and facets were not displayed in the formula. This is the current representation of the facet formula.

For research question (3), the following conclusions were obtained. It is believed that Ranganathan considered “synthesis” more important than “facet.” In contrast, Vickery believed that “facet” was more important than “synthesis.” Therefore, Ranganathan uses the term “analytico-synthetic classification,” and Vickery uses “faceted classification.” The difference in the ideas of Ranganathan and Vickery is also reflected in the difference between “fundamental categories” and “common facets.” The fundamental category of Ranganathan, as we saw earlier, is a source that manifests various types of facets. Vickery required common facets to build a general classification. Although Ranganathan and Vickery attempted to develop a classification that could cope with composite subjects, they focused on different issues. Ranganathan insisted that faceted classification is different from analytico-synthetic classification, and Vickery was unsure about the relationship between the two. It is believed that textbooks state faceted classification is synonymous with analytico-synthetic classification owing to the influence of Vickery (and other CRG members).

Through the above-mentioned examination of the three research questions, it was revealed that coping to the composite subject was the most important problem

for Ranganathan's study on library classification. Other classification researchers worked on the same problem, too. Ranganathan was able to approach in the essence of the problem than other researchers by introducing the facet concept.

目次

第 1 章 序論	1
1.1 研究目的とその背景	2
1.2 本論文の構成	5
1.3 本論文で使用する用語	7
第 2 章 構造-表示方法説	8
2.1 分類法の構造	10
2.1.1 階層構造	
2.1.2 多次元構造	
2.2 分類法の表示方法	16
2.2.1 階層構造の列挙表示と合成表示	
2.2.2 多次元構造の列挙表示と合成表示	
2.3 複合的な主題	19
2.3.1 複合主題と混合主題	
2.3.2 複合的な主題と分類法の構造	
2.3.3 複合的な主題と記号法	
2.4 第 2 章のまとめ	30
第 3 章 ファセット概念導入の意義	31
3.1 記号が単一要素からなる分類法	33
3.1.1 Dewey Decimal Classification	
3.1.2 Expansive Classification	
3.2 記号が独立要素からなる分類法	55
3.2.1 Universal Decimal Classification	
3.2.2 Bibliographic Classification	
3.2.3 Colon Classification	
3.3 考察	89
3.4 第 3 章のまとめ	96
第 4 章 Ranganathan におけるファセット概念の展開	99
4.1 第 1 期：1933 年－1945 年	101
4.1.1 1933 年－1939 年	
4.1.2 1944 年－1945 年	
4.2 第 2 期：1949 年－1952 年	112

4.2.1	1949年－1950年	
4.2.2	1951年－1952年	
4.3	第3期：1957年－1969年	125
4.3.1	1957年－1960年	
4.3.2	1961年－1964年	
4.3.3	1964年－1969年	
4.4	考察	144
4.4.1	ファセットとファセット式の導入	
4.4.2	基本カテゴリーの役割の転換	
4.4.3	分析合成型分類法の位置づけ	
4.5	第4章のまとめ	148
第5章	構造-表示方法説からみた	
	Ranganathan と Vickery のファセット概念	151
5.1	分析合成型分類法とファセット化分類法	153
5.1.1	Ranganathan の分析合成型分類法	
5.1.2	Vickery のファセット化分類法	
5.2	基本カテゴリーと共通ファセット	164
5.2.1	Ranganathan の基本カテゴリー	
5.2.2	Vickery の共通ファセット	
5.2.3	基本カテゴリーと共通ファセットの相違	
5.3	考察	174
5.4	第5章のまとめ	177
第6章	結論	179
謝辞		185
参考文献		186

文献リスト

全研究業績のリスト

第 1 章

序 論

1.1 研究目的とその背景

本研究の目的は、ファセットを鍵概念として、S. R. Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を明らかにすることである。

Ranganathan のファセットとは、

特定の区分特性に基づいて区分されてできる区分枝の総体

のことである(Ranganathan 自身による定義は第 3 章で示す)。単なる区分枝の寄せ集めではなく、特定の観点(区分特性)に基づく区分枝を集めたものがファセットである。

この定義自体は特別なことを何も示していないように思われる。別の用語を使えば、区分枝がインスタンスで、ファセットはクラスである。インスタンスを特定の区分特性によって区分することでクラスが作られる。分類法(分類体系)はこの区分を複数回行うことで形成される。したがって、分類法がクラスから成り立っているのは当然であり、あらためてクラスに該当するファセットを導入する理由はないように思われる。

もちろん、現実の分類法、特に図書館分類法は区分特性が厳密に適用されて形成されているわけではない。特定の区分特性だけでなく複数の区分特性によって区分されたインスタンスでクラス(厳密な意味でクラスとは呼べないが)が作られている場合も多い。したがって、ファセットという概念を導入するのは、特定の区分特性だけに基づいてクラスを作るべきである、ということを主張するためかもしれない。

しかし、Ranganathan がファセット概念を導入したのは、このような理論的な理由だけだったのだろうか。もっと現実的、実際的な理由はなかったのだろうか。また、ファセット概念自体が理論的には特別な概念でないとすると、Ranganathan がファセット概念を用いて作成した Colon Classification(CC)よりも前あるいは同時期に作成された分類法にもファセット概念という考え方が潜在的に含まれていたのではないかという疑問がでてくる。もし考え方自体はすでに存在していたとすれば、Ranganathan の果たした役割は何だったのだろうか。このように本研究では、まず、Ranganathan によるファセット概念の導入は図書館分類法においてどのような意義をもつのか、について検討する。

一方、Ranganathan はファセット概念を導入した後も、このファセット概念

を中心に分類法の研究を晩年まで続けている。その中でも特に重要なのが基本カテゴリーの導入である。基本カテゴリーとは、さまざまなファセットをグループ化したもので、**Personality, Matter, Energy, Space, Time** という 5 つの基本カテゴリーを設定している(詳しくは第 4 章)。ファセットだけではなく、基本カテゴリーを導入したのはなぜか。図書館分類法に対する **Ranganathan** の考え方が、この基本カテゴリーにどのように反映されているのであろうか。本研究の第 2 の課題は、ファセットと基本カテゴリーの関係を **Ranganathan** はどのようにとらえていたのか、を明らかにすることである。

さらに、ファセット概念の導入はその後の分類法作成にも影響を与えている。特に、イギリスの **Classification Research Group(CRG)** は、彼らの専門分類法を作成する際にファセット概念を取り入れ、そのような分類法をファセット化分類法と呼んでいる。**CRG** の活動はファセット概念の普及に大きな影響を与えた。ところが、**Ranganathan** は自身の作成した **CC** を分析合成型分類法と呼び、ファセット化分類法とは異なると主張している。ここにも、図書館分類法に対する **Ranganathan** の考え方が反映されていると思われる。そこで、**Ranganathan** は分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をどのように考えていたのか、を明らかにすることを本研究の第 3 の課題とした。

以上をまとめると次のようになる。冒頭でも述べたように、本研究の目的は、ファセットを鍵概念として **Ranganathan** の図書館分類法に対する考え方を明らかにすることである。そのために、

- (1)**Ranganathan** によるファセット概念の導入は図書館分類法においてどのような意義をもつのか
- (2)**Ranganathan** はファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたのか
- (3)**Ranganathan** は分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をどのように考えていたのか

という 3 つの課題を設定した。

この 3 つの課題を設定した背景には、分類論または組織化論のテキストブック(以下、「分類論のテキストブック」)においてファセット概念が曖昧に使われている、という状況がある。詳しくは緑川(1997a)で論じたが、1 つの典型的な例として、ファセット化分類法ではない分類法においてもファセット概念が使われていることがあげられる。たとえば、"**NDC**[日本十進分類法]はファセット分類表では

ないけれども、ここ[480 動物学]では結局、動物の種類、行動、部分といった動物学におけるファセットが展開されるのである"(野口と吉田 1996, p.71.; []内は引用者)や、"列挙型の分類表に対しても、項目の展開部分に対しては、ファセット分析を組織的に加えることができる"(丸山 1990, p.32)などの記述がみられる。また、やはりファセット化分類法ではない Dewey Decimal Classification(DDC)の第 17 版の編集者の序文でも、ある主題を複数の区分特性で区分することは第 1 版から行っており、「ファセット」という用語だけが新しく導入された、と述べている(Dewey 1965, p.45)。

さらに、課題(3)と特に関連するが、分類論のテキストブックにおいて、分析合成型分類法とファセット化分類法は同義であるとしている場合が多いという状況がある。たとえば、"この[ファセット化分類法の]方法は分析合成型分類法としても言及される"(Taylor 2009, p.387 ; []内は引用者)、"クラスを区分するには 2 つの方法がある。列挙型と、分析合成型あるいはファセット化である"(Rowley 2008, p.175)、"これらの原理に基づく分類法はファセット化または分析合成型分類法と呼ばれる"(Chan 2007, p.312)、"ファセット化分類法は合成型分類法と呼ばれる。専門用語を使えば、分析合成型である"(Batley 2005, p.111)、などである。その一方で、分析合成型分類法・ファセット化分類法ではない分類法として階層構造分類法と列挙型分類法があげられ、この 2 つの用語も同義として扱われることが多いが、「階層構造」と「列挙型」という語が同じ意味内容をもっているとは考えにくく、なぜ両者が同義として扱われるのかも疑問である。

筆者は、分類法の種類呼び方にこのような混乱があるのは、単に名づけの問題ではなく、分類法の種類分けの方法に問題があるからではないかと考え、分類法を種類分けする際は構造と表示方法を明確に区別するべきであるということを以前から主張してきた(緑川 1996a ; 緑川 1996b ; 緑川 1997a ; 緑川 2007)。構造という面からみれば階層構造分類法と多次元構造分類法に区分でき、表示方法という面からみれば列挙表示の分類法と合成表示の分類法に区分できる。詳しくは第 2 章で説明するが、この考え(便宜上、「構造-表示方法説」と呼ぶことにする)によれば、階層構造分類法と列挙型分類法(列挙表示の分類法)はまったく異なる概念である。また、分析合成型分類法とファセット化分類法は、どちらも多次元構造分類法に該当する概念のようにみえる一方で、合成表示の分類法という意味も含まれているようにみえる、という曖昧な概念であることがわかる。

本研究では、3 つの課題を検討する際に、構造-表示方法説を分析の視点とした。

1.2 本論文の構成

第 2 章では、本研究の分析視点である構造・表示方法説について説明する。2.1 節で分類法の構造について、2.2 節で分類法の表示方法について説明する。さらに 2.3 節では、ファセット概念の展開にとって重要な役割を果たしている複合的な主題について、構造・表示方法説の立場から論じる。その際に、構造と表示方法以外に記号法が深く関わっていることを明らかにする。これは筆者の構造・表示方法説を一部修正するものである。

第 3 章では、Ranganathan の CC にファセット概念が導入される以前、および同時期の各種分類法について検討する。分析の観点として、ファセット概念の他に、構造、表示方法、記号法をとりあげる。その他に、各分類法の概要と作成の経緯について説明する。3.1 節では、記号が単一要素からなる分類法として DDC と Expansive Classification(EC)をとりあげる。3.2 節では、記号が独立要素からなる分類法として Universal Decimal Classification(UDC)、Bibliographic Classification(BC)および CC をとりあげる。3.3 節では、各分類法の分析をふまえて、CC を中心とした観点から考察を行い、CC におけるファセット概念導入の意義、すなわち本研究の課題(1)を明らかにする。

第 4 章では、Ranganathan によってファセット概念が導入され、展開されていく経緯を、Ranganathan 自身の著作を逐次的に分析して、明らかにしていく。Ranganathan のファセット概念に関する著作は、その内容から 3 期に分けることができる。4.1 節では、第 1 期にあたる 1933 年から 1945 年までの著作を分析する。次いで 4.2 節で、第 2 期にあたる 1949 年から 1952 年までの著作を、そして 4.3 節で、第 3 期にあたる 1957 年から 1969 年までの著作を、それぞれ分析する。この 3 期の区分と順序は、本研究の 3 つの課題(1)(2)(3)の内容と順序に一致している。そのため、課題(1)に関しては第 3 章を補足するものとなる。また、課題(2)と(3)に関しては、第 5 章を先取りするものとなる。なおこの章では、できる限り Ranganatha 自身のことばでファセット概念の展開過程を追うことを目指すため、構造・表示方法説からの分析は行わない。

第 5 章では、第 4 章でみた Ranganathan によるファセット概念の展開過程を、構造・表示方法説の観点から分析する。5.1 節では Ranganathan のファセット概念について、5.2 節では分析合成型分類法とファセット化分類法の関係について、そして、5.3 節ではファセットと基本カテゴリーの関係について検討する。さらに、5.2 節と 5.3 節では、Ranganathan のファセット概念の普及に貢献した B. C.

Vickery のファセット概念を Ranganathan と比較しながらとりあげ、ファセット概念の意味をより明確にする。5.4 節では、Ranganathan の提唱する分析合成型分類法と Vickery が提唱するファセット化分類法は、分類論のテキストブックでは同義として扱われているが、彼ら自身はどのように考えていたのかを考察する。

第 6 章では、以上の分析・考察から結論を導く。具体的には、本研究の 3 つの課題(1)(2)(3)の結論、および、それらと関連して明らかになった事柄について述べる。

第 3 章から第 5 章の内容と 3 つの課題との関係を図 1-1 に示す。

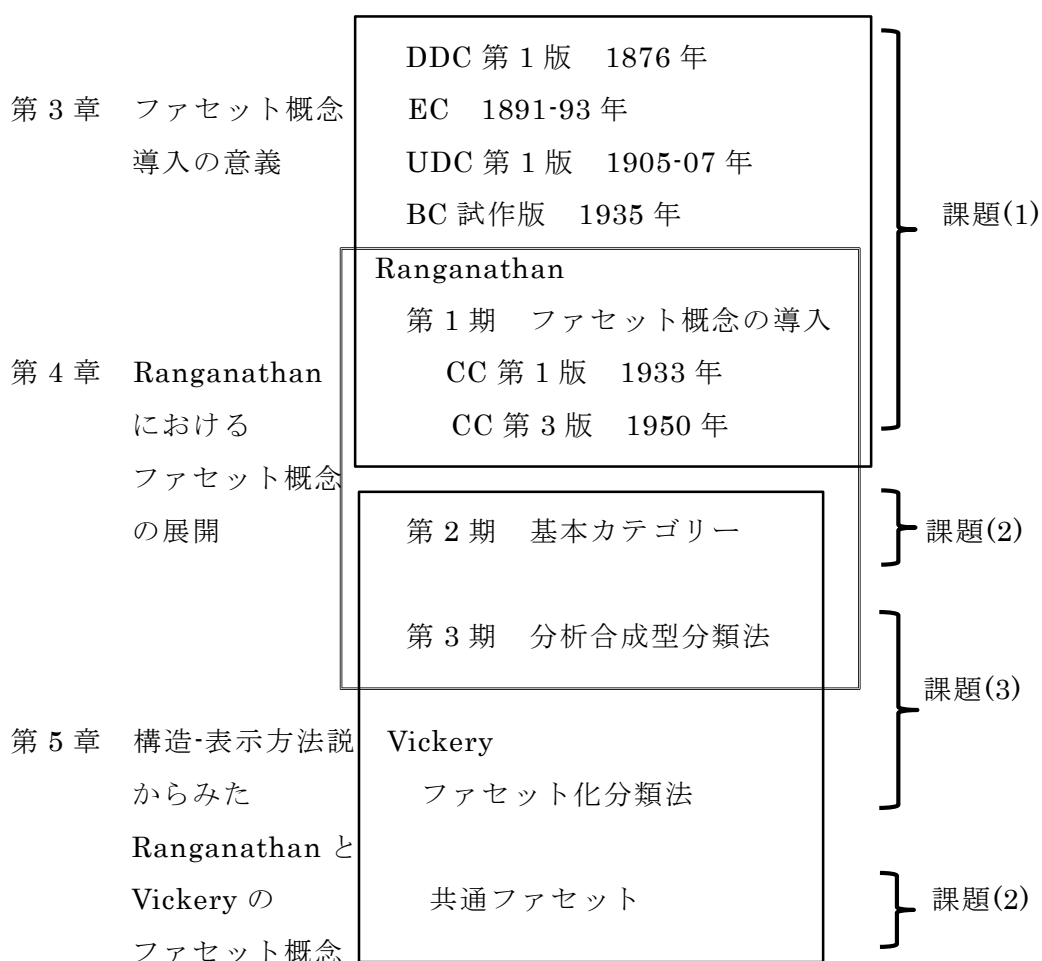


図 1-1 第 3 章から第 5 章と 3 つの課題との関係

なお、Ranganathan に関する文献は多数存在するが、本研究と同じように分類法の構造、表示方法、記号法との関係でファセット概念を論じているものはみあたらない。関連する先行研究は適宜必要な箇所を示す。

1.3 本論文で使用する用語

本論文で使用する「図書館分類法」という用語は、UDCのように必ずしも図書館での使用を主目的とするとは限らない分類法も含む。また、単に「分類法」と表記する場合もある。「分類法」と「分類表」を厳密に区別する文献もあるが、本論文では原則として「分類法」を使用する。ただし、和文の引用中では原文通りとする。英文の引用の訳語に関しては、classification を単独で使用するときは「分類」と「分類法」とを文脈で訳し分け、classification schedule は「分類表」、classification scheme と classification system は「分類法」と訳した。

その他の英文の引用に関して、faceted classification については、日本の大部分の著作において「ファセット分類法」と訳されているが、本稿では名詞的用法以外に、「よりファセット化した」や「ファセット化された」という表現も使うので、これらと整合性をとるために「ファセット化分類法」という訳語を用いた。また、divide を「区分」、subdivide を「細分」と訳し分けたが、分類法によって（あるいは同じ分類法の中でも）「～と同様に区分しなさい」に divide と subdivide の両方が使われている。これを訳し分けたり併記するのは煩わしいので、この場合に限り「区分」で統一した。

第2章以降で言及する図書館分類法の名称には図1-2の略称を用いる。

図書館分類法	略称
Bibliographic Classification	BC
Colon Classification	CC
Dewey Decimal Classification	DDC
Expansive Classification	EC
Library of Congress Classification	LCC
Subject Classification	SC
Universal Decimal Classification	UDC

図 1-2 図書館分類法の略称

第 2 章

構造-表示方法説

第1章で述べたように、分類論のテキストブックでは、図書館分類法をその体系によって列挙型分類法と分析合成型分類法に分け、前者を階層構造分類法と同義とし、後者をファセット化分類法とも呼ぶことが多い。これに対して筆者は、図書館分類法の体系を構造と表示方法という2つの観点で整理するべきであるという「構造-表示方法説」を主張してきた。本章の2.1節と2.2節では、構造-表示方法説に基づいて分類法の体系を説明する。2.3節では、図書館分類法におけるファセット概念の展開において重要な役割を果たしている「複合的な主題」を、構造-表示方法説の観点から説明する。なお、本章では理論的説明に限定し、実際の図書館分類法は第3章でとりあげる。

2.1 分類法の構造

分類法を構築する際は、対象をどの特性に基づいて区分するかを決める必要がある。たとえば、人間を血液型という特性に基づいて区分すればA型、B型、AB型、O型という4つの区分肢ができ、性別という特性に基づいて区分すれば男性と女性という2つの区分肢ができる。このように、対象を区分するための特性を区分特性(**characteristics of division**)と呼ぶ。区分の観点、区分原理とも呼ぶ。分類法を構築するためには、通常、複数の区分特性を適用する。それらの区分特性をどのように組合せるかで分類法の構造が異なる。組合せ方は種々考えられるが、区分特性を順番に適用するかそれとも独立に適用するかの2つが基本である。以下では、区分肢を分類項目または単に項目と呼ぶ。

2.1.1 階層構造

区分特性を順番に適用してできる構造を階層構造と呼ぶ。たとえば、人間という対象に血液型と性別という2つの区分特性をこの順序で適用すると、図2-1のようになる。まず「人間」が血液型で区分されてA型からO型までの4つの項目ができ、次に、それらが性別で区分されて「A型の男性」など8つの項目ができる。このように、区分特性が順番に適用されることで、対象が階層的に区分されていく。

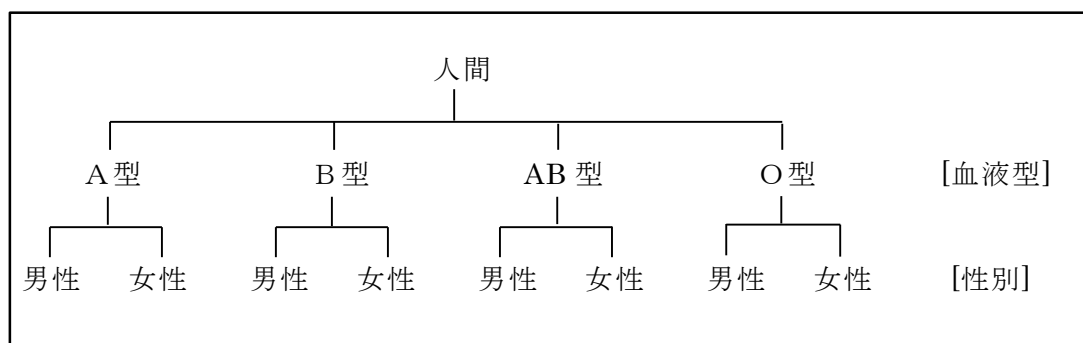


図 2-1 階層構造：血液型、性別の順に適用(樹形図形式)

なお、図2-1の項目名は、それぞれ上位項目の内容が省略されている。たとえば、「A型」という項目名は、正確には「A型の人間」を意味し、その下位項目の「男性」という項目名は「A型で男性の人間」を意味している。いちいち断らないが、分類項目名が上位項目の内容を省略していることは、以下の例すべてに

あてはまる。

階層構造の分類法では、区分特性の適用順序を変えると異なる体系になる。上の例で、血液型と性別という区分特性の適用順序を入れかえると、図 2-2 のようになる。図 2-1 と図 2-2 が異なる体系であることは明らかである。

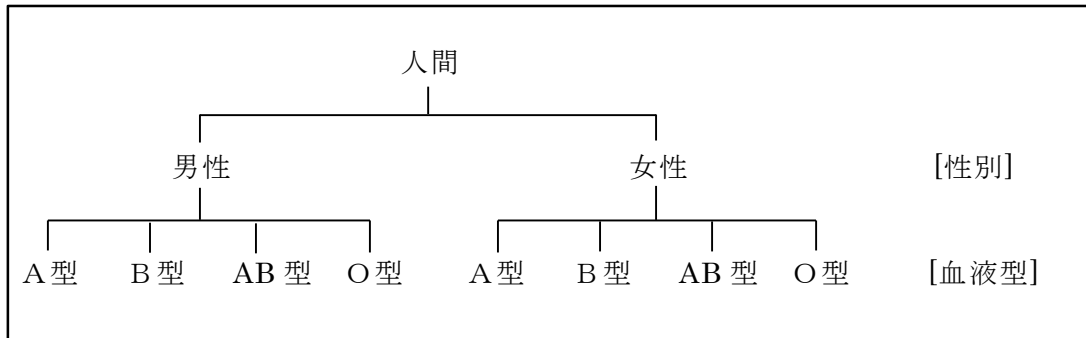


図 2-2 階層構造：性別，血液型の順に適用(樹形図形式)

なお，上記では樹形図の形式で示してきたが，他の形式で示すことも可能である。図書館分類法ではリスト形式が使われている。図 2-1 をリスト形式で示すと図 2-3 のようになる。「人間」の 1 段階下の項目に「A型」，「B型」，「AB型」，「O型」があり，「A型」の 1 段階下の項目に「男性」，「女性」があることがインデントでわかるようになっている。

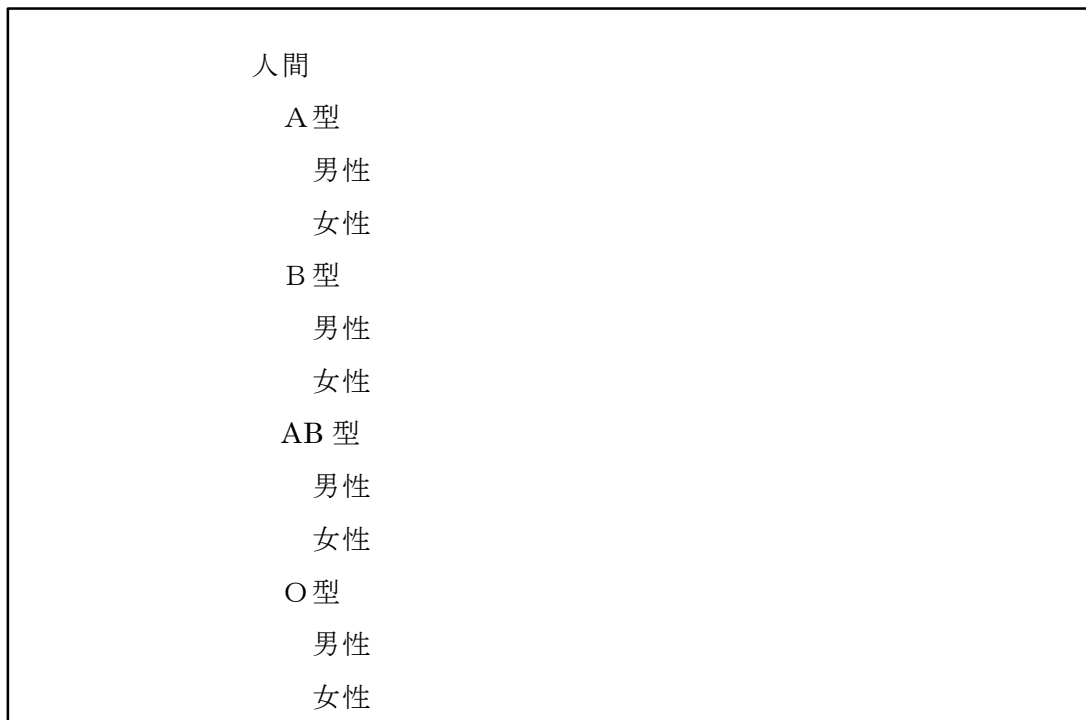


図 2-3 階層構造：血液型，性別の順に適用(リスト形式，インデントで階層を示す)

図 2-3 では階層をインデントで示しているが、十進分類法のように記号の桁で階層を示す方法もある。図 2-4 では、「11 A型」は「1 人間」の下位項目であり、「111 男性」は「11 A型」の下位項目であることが記号の桁でわかるようになっている。項目名が上位項目の内容を省略している場合、図 2-3 の例のように、「男性」や「女性」という項目名が複数生じ、項目名だけではどの階層の項目か区別がつかない。記号を利用すれば、同じ項目名でも区別がつく。たとえば、図 2-4 の「111 男性」と「121 男性」は同じ項目名であるが、記号が異なるので違う項目であることがわかる。

1 人間
11 A型
111 男性
112 女性
12 B型
121 男性
122 女性
13 AB型
131 男性
132 女性
14 O型
141 男性
142 女性

図 2-4 階層構造：血液型，性別の順に適用(リスト形式，記号の桁で階層を示す)

ただし、記号を用いている分類法でも、記号の桁が階層を示しているとは限らない。図 2-5 では、記号が階層とは関係なく一連番号となっている。この場合、同じ項目名でも記号で区別がつくことは図 2-4 と同じである。たとえば、「102 男性」と「105 男性」は同じ項目名でも、記号が異なるので違う項目である。しかし、両者が異なる階層に属する項目であることまではわからない。

- 100 人間
- 101 A型
- 102 男性
- 103 女性
- 104 B型
- 105 男性
- 106 女性
- 107 AB型
- 108 男性
- 109 女性
- 110 O型
- 111 男性
- 112 女性

図 2-5 階層構造：血液型，性別の順に適用(リスト形式，記号が階層を示していない)

このように階層を示さない記号を使う場合は，階層をインデントで示す必要がある(図 2-6)。こうすれば，「102 男性」は「101 A型」の下位項目であり，「105 男性」は「104 B型」の下位項目であることが明確である。

- 100 人間
 - 101 A型
 - 102 男性
 - 103 女性
 - 104 B型
 - 105 男性
 - 106 女性
 - [以下，省略]

図 2-6 階層構造：血液型，性別の順に適用(リスト形式，記号を使い，階層はインデントで示す)

2.1.2 多次元構造

区分特性を独立に適用してできる構造を多次元構造と呼ぶ。たとえば、人間という対象に血液型と性別という 2 つの区分特性を独立に適用すると、図 2-7 のようになる。人間を血液型で区分すると A 型から O 型までの 4 つの項目ができ(図 2-7 の上段), 性別で区分すると男性と女性の 2 つの項目ができる(図 2-7 の左端)。そして、それらを組合せると、「A 型：男性」など $4 \times 2 = 8$ の項目ができる(図 2-7 の内側)。

人間	A 型	B 型	AB 型	O 型
男性	A 型：男性	B 型：男性	AB 型：男性	O 型：男性
女性	A 型：女性	B 型：女性	AB 型：女性	O 型：女性

図 2-7 多次元構造：血液型と性別を独立に適用(表形式)

図 2-7 では表の形式で示したが、リスト形式で示すこともできる(図 2-8)。人間を血液型で区分すると A 型から O 型までの 4 つの項目ができ(図 2-8 の[血液型]という見出し), 性別で区分すると男性と女性の 2 つの項目ができる(図 2-8 の[性別]という見出し)。そして、それらを組合せると、「A 型：男性」など $4 \times 2 = 8$ の項目ができる(図 2-8 の[血液型×性別]という見出し)。

人間
[血液型] A 型, B 型, AB 型, O 型
[性別] 男性, 女性
[血液型×性別] A 型：男性, B 型：男性, AB 型：男性, O 型：男性 A 型：女性, B 型：女性, AB 型：女性, O 型：女性

図 2-8 多次元構造：血液型と性別を独立に適用(リスト形式)

さらに、血液型を縦軸上にとり性別を横軸上にとる座標の形式で示すことも可能である(図 2-9)。縦軸と横軸の区分特性を逆にしてもかまわない。2 つの区分特性を組合せた値、たとえば「A 型：男性」は縦軸上の「A 型」と横軸上の「男性」の交点に位置づけられる。区分特性が 3 つの場合は三次元座標、4 つの場合は四

次元座標というように、区分特性の数に対応して座標の次元が増える。区分特性が4つ以上になると記述が事実上不可能であるが、多次元構造という名称を最も理解しやすいのはこの座標形式であろう。

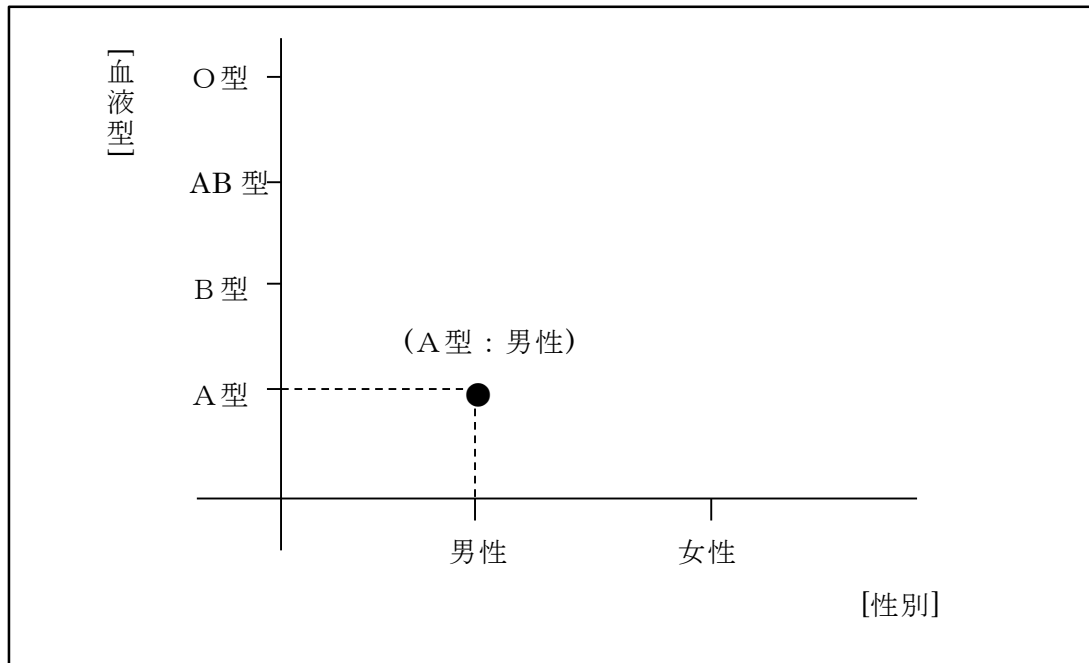


図 2-9 多次元構造：血液型と性別を独立に適用(座標形式)

2.2 分類法の表示方法

分類法には2種類の表示方法がある。1つは、すべての項目を表示する方法で、これを列挙表示と呼ぶ。もう1つは、必要な項目だけを表示しておいて、残りの項目は表示されている項目を合成して作る方法で、これを合成表示と呼ぶ。この2種類の表示方法は、階層構造の分類法と多次元構造の分類法のそれぞれに適用される。なお、この項でも2.1節で使用した例を用いる。また、階層構造も多次元構造もリスト形式のみで説明する。

2.2.1 階層構造の列挙表示と合成表示

階層構造での列挙表示の一例は図2-3である。階層の各段階における項目がすべて表示されている。

合成表示は、同じ区分特性によって同じ項目が複数箇所にできる場合は一箇所だけ残して他は表示しない、ということを行う。その際、残す場所を元の表の中にするか外に出すかで2種類の方法がある。

図2-3の列挙表示の分類法で4箇所に存在する「男性」、「女性」という項目を、「A型」の下位項目としてだけ残し、「B型」、「AB型」、「O型」の下位項目からは削除したのが図2-10である。

人間
A型
男性
女性
B型
[A型と同様に区分]
AB型
[A型と同様に区分]
O型
[A型と同様に区分]

図2-10 階層構造の合成表示(本表の中に一箇所だけ残す)

「B型」，「AB型」，「O型」では「A型と同様に区分しなさい」という合成指示だけが記載されている。この指示によって，「B型の男性」という主題を表現する項目は，「B型」の下を「A型」の下位項目と同様に性別で区分して得ることができる。すなわち，「B型」に「A型」の下位項目の「男性」を合成して「B型の男性」という項目をつくるということである。

もう1つは，「男性」「女性」という項目を元の表からすべて削除し，別の表とする方法である(図 2-11)。元の表を本表，外に出した別の表を補助表と呼ぶ。

「B型の男性」という項目は，本表の「B型」と補助表の「男性」を合成してつくることができる。

【本表】	【補助表】
人間	男性
A型	女性
[補助表で合成]	
B型	
[補助表で合成]	
AB型	
[補助表で合成]	
O型	
[補助表で合成]	

図 2-11 階層構造の合成表示(本表と補助表に分ける)

階層構造の合成表示は，各区分特性によってできる項目を合成しているのので，多次元構造と似ている。しかし，多次元構造の場合は区分特性を独立に適用するのに対して，階層構造では区分特性の適用順序は決められている。たとえば，図 2-11 においては，本表の「B型」に補助表の「男性」を合成するのであって，その逆はできない。あるいは，本表の「人間」に補助表の「男性」を直接合成することもできない。元の列挙表示の表(図 2-3)では，「人間」をまず「血液型」で区分しているからである。もし，「人間」を「血液型」で区分しているにもかかわらず，補助表の「男性」を「人間」に直接合成すると，「人間」は「血液型」と「性別」という2つの区分特性を同時に適用されることになる。これはもはや階層構造ではない。階層構造における合成表示は，階層構造を維持したまま(列挙表示の状態を再現できるように)行わなければならない。

2.2.2 多次元構造の列挙表示と合成表示

多次元構造の場合の列挙表示は、図 2-8 である。各区分特性でできる項目とそれらを組合せた項目がすべて表示されている。

多次元構造の合成表示は、各区分特性でできる項目(便宜上、基本項目と呼ぶことにする)だけを残し、それらを組合せた項目を削除したものである(図 2-12)。

人間 [血液型] A型, B型, AB型, O型 [性別] 男性, 女性
--

図 2-12 多次元構造の合成表示

削除した項目は、利用者が自分で基本項目を合成して作成する。たとえば、「A型の男性」という主題は、血液型から「A型」を選び、性別から「男性」を選んで、それらを合成して「A型：男性」とすることで表現できる。ただし、区分特性の順序は問わないので、「男性：A型」と表記してもよい(「男性」と「A型」の組合せであることがわかれば、どのような表記でもよい)。

2.3 複合的な主題

複合的な主題とは複数の側面をもつ主題のことである。たとえば、「日本の法学」という主題は、「日本」という側面と「法学」という側面をもつ複合的な主題である。「日本」という側面は「地理」という区分特性に関連し、「法学」という側面は「学問領域」という区分特性に関連している。一方、「科学と哲学」という主題も「科学」と「哲学」という複数の側面をもつ複合的な主題であるが、どちらも「学問領域」という1つの区分特性だけに関連している。複数の区分特性に関連する複合的な主題を「複合主題」と呼び、1つの区分特性だけに関連する複合的な主題を「混合主題」と呼ぶことにする。実際には、両者が混在した複合的な主題も存在する。なお、「複合的な主題」と「複合主題」が紛らわしく、前者を「多面的主題」などと呼ぶことも考えたが、分類法作成者の著作や分類論のテキストブックなどでは「複合主題」という用語で「複合的な主題」を意味する場合もあるので、あえて似通った用語を使うことにした。

2.3.1 複合主題と混合主題

(1) 複合主題

先に述べたように、複合主題とは、複数の区分特性に関連する側面をもつ主題のことである。

ここで注意しなければならないのは、ある文献が扱う主題が複合主題であるかどうかの判断は、その文献が扱う主題を分析する際に適用する区分特性によるということである。たとえば、ある文献の主題を学問領域という区分特性で区分すると、「法学」という主題として位置づけられるとする。また、学問領域的側面は考慮にいれずに、地理という区分特性だけで区分すると、「日本」という主題として位置づけられるとする。どちらの場合も、この文献の主題は複合主題ではなく、単一の側面をもつ主題(単一主題と呼ぶことにする)と判断される。しかし、この文献の主題を学問領域と地理という2つの区分特性で区分すると、「日本の法学」という複合主題と判断される。このように、ある文献の主題が単一主題とみなされるか複合主題とみなされるかは、注目する側面(区分特性)が1つか複数かによって異なるのである。

文献の主題を区分する際は、通常は分類法が使用される。したがって、ある文献の主題は、使用する分類法で用いられている区分特性に従って区分される。も

し、先ほど例にあげた文献の主題を、地理という区分特性がまったく用いられていない分類法を使用して区分する場合は、学問領域という区分特性だけで区分され、「法学」という主題に位置づけられる。使用する分類法に学問領域と地理という両方の区分特性が用いられていれば、「日本の法学」という主題に位置づけられるであろう。前者は単一主題、後者は複合主題である(もちろん、そのほかの区分特性がないとしての話だが)。

一方、分類法で用いられている区分特性を適用しても、その区分特性に対応する特性を文献がもっていない場合は、その区分特性は無視される。たとえば、特定の国の法学ではなく、法学全般を扱っている文献は、地理という区分特性を適用しても、どこにも位置づける項目がない。この場合は、「法学」という単一主題として扱われる。

以上から、文献の主題が複合主題と判断されるのは以下の場合である。

文献の主題が複合主題と判断される場合

ある文献に複数の区分特性が適用され、そのうちの2つ以上の区分特性によって、それぞれ特定の項目に位置づけられる場合は、その文献の主題は複合主題とみなされる。

この定義に対しては反論が予想される。ある文献が、学問領域という区分特性で「法学」という主題に位置づけられたとしよう。この文献を、今度は、法律の種類という区分特性で区分したとすると、「憲法」、「民法」、「刑法」などに区分されるであろう(たとえば、「憲法」に位置づけられたとする)。この2つの区分特性を用いると、「法学－憲法」という主題に位置づけられることになる。これは複合主題とはみなされず、「憲法という法律に限定した法学」というように、法学という単一主題を細分化しただけである、という意見である。

学問領域と地理という2つの区分特性を用いる場合は「日本の法学」という複合主題と判断されるが、学問領域と法律の種類という2つの区分特性を用いるときには「法学－憲法」という単一主題と判断されるように見える。この違いはどこから来るのであろうか。それは、適用される区分特性が、適用される項目に固有のものか、それとも広く適用されるものかという違いにある。

法律の種類という区分特性は、法学に固有の区分特性である(実際には法学に固有とは限らないが、とりあえずここではそうしておく)。この場合は、法学を細分化するという役割だけをもち、別の側面からとらえるという役割をもっていないように見える。それに対して、地理という区分特性は、法学以外にも広く適用す

ることができる。学問領域という区分特性と同等の重みをもっているといえる。したがって、法学を細分化するというよりは、別の側面からとらえるという役割をもっているようにみえる。

このように、ある区分特性によって区分されてできた項目に対して、そこに適用されるもう1つの区分特性がその項目に固有の場合は、別の側面を与えることにならず、複合主題を形成しないようにみえる。しかし、これは「そうみえる」だけであり、どのような区分特性であっても、区分特性である以上は「1つの側面」を与えるのである。「法律の種類」という区分特性も、実はこれ自体が区分特性なのではなく、「法律」を種類に区分する段階ですでに何らかの「区分特性」＝「法律を区分する際に注目する性質」を用いているのである。「法律の種類」は法学に固有かもしれないが、「法律を区分する際に注目する性質」は必ずしも法学に固有ではない。したがって、複数の区分特性が適用される場合(さらに、各区分特性ごとに特定の項目に位置づけられる場合)には、必ず複合主題と判断されるのである。

(2)混合主題

混合主題とは、これも先に述べたように、単一の区分特性に関連する複数の側面をもつ主題のことである。たとえば、「科学と哲学」という主題は、学問領域という区分特性だけが適用されても、「科学」と「哲学」という2つの項目に位置づけられれば、混合主題と判断される。

ここでも、複合主題の場合と同じ注意が必要である。上記の文献の主題を学問領域という区分特性が用いられている分類法で区分しても、この分類法に「哲学」という項目が存在しなければ、「科学」という項目だけに位置づけられる。この場合は単一主題と判断される。一方、分類法に「科学」と「哲学」の両方の項目が存在しても、文献の主題に「哲学」という側面が含まれていなければ、「科学」という側面だけをもつ単一主題と判断される(もちろん、そのほかの特性や側面がないとしての話だが)。

以上から、文献の主題が混合主題と判断されるのは以下の場合である。

文献の主題が混合主題と判断される場合

ある文献に1つの区分特性が適用され、その区分特性の複数の項目に位置づけられる場合は、その文献の主題は混合主題とみなされる。

ただし、区分特性の適用の仕方によっては、同じ主題でも混合主題とみなされる場合と複合主題とみなされる場合がある。たとえば、「キーツへのシェイクス

ピアの影響」という主題は、文学者という1つの区分特性だけを適用すると、「キーツ」と「シェイクスピア」という2つの項目に位置づけられる。これは混合主題である。しかし、影響を及ぼした文学者という区分特性と影響を受けた文学者という2つの区分特性を適用すると、前者では「シェイクスピア」に位置づけられ、後方で「キーツ」に位置づけられる。この場合は、複合主題とみなされる。

また、複合主題と混合主題が混在している場合もある。たとえば、上の例で、「シェイクスピア」という主題は、文学者という区分特性ではなく、学問領域という区分特性で「文学」に位置づけ、言語という区分特性で「英語」に位置づけることが可能である。この場合は、「シェイクスピア」は複合主題とみなされる。同様に、「キーツ」も複合主題とみなすことができる。そして、学問領域と言語という区分特性を適用した後で文学者という区分特性を適用すると、「シェイクスピア」と「キーツ」という複数項目に位置づけられるので、混合主題と判断される。したがって、この場合、複合主題と混合主題が混在した形となっている。

以上のように、同じ主題でも、単一主題とみなされるか複合主題とみなされるか、それとも混合主題とみなされるか、あるいは複合主題と混合主題が混在しているとみなされるかは、適用する区分特性によって異なるのである。ただし、概念としての複合主題と混合主題は明確に分けることができる。

2.3.2 複合的な主題と分類法の構造

(1) 複合主題と分類法の構造

階層構造と多次元構造の相違は、複合主題への対応に顕著に現れる。以下、2.1節で使用した、人間を血液型と性別という2つの区分特性で区分してつくる分類法を例として説明する。

階層構造の場合は、血液型、性別の順に区分特性を適用すると、図2-1のようになる。この分類法には、A型からO型までの4つの項目と、さらにそれぞれを性別で区分してできる「A型で男性」など8つの項目が存在する。しかし、「男性」と「女性」という項目は存在しない(2.1.1項で述べたように、それぞれの項目名は上位項目の内容が省略されている)。つまり、この分類法では、血液型によらない「人間の男性」や「人間の女性」という主題を表現することができない。

区分特性の順序を入れかえて性別で先に区分しその後で血液型で区分すれば、図2-2のように、「男性」と「女性」という項目ができる。しかし、今度はA型からO型までの4つの項目が存在しなくなる。つまり、この分類法では、性別によらない「A型の人間」などの主題を表現することができない。

以上のように、階層構造の分類法では複合主題の表現に限界がある。それに対して、多次元構造の場合は、図 2-7 でわかるように、A型からO型までの4つの項目も、「男性」と「女性」という項目も存在する。そして、それらを組合せた項目も存在する。

このように、階層構造よりも多次元構造の方が複合主題に対応しやすい。これは、階層構造は区分特性の適用順序が定まっているので、順序によっては表現できない主題がでてくるのに対して、多次元構造は区分特性を独立に適用するので、階層構造よりも区分特性の組合せが柔軟で、主題の表現力が高いからである。

ところで、図書館分類法は階層構造をとるものが多い。そして、階層構造で複合主題にいかに対応するかは重要な問題となっている。理論的には、上記のように、階層構造は多次元構造に比べて複合主題の表現力が劣る。そこで、1回の区分に複数の区分特性を同時に適用するという手段で複合主題に対応することが行われている。これまでの例でいうと、人間を血液型で区分すると同時に性別でも区分し、それらの項目を一緒に並べるのである(図 2-13)。そして、血液型で区分してできる項目をさらに性別で区分する。こうすれば、A型からO型までの4つの項目、「男性」と「女性」という項目、そして、それらを組合せた項目がすべて表現できる。

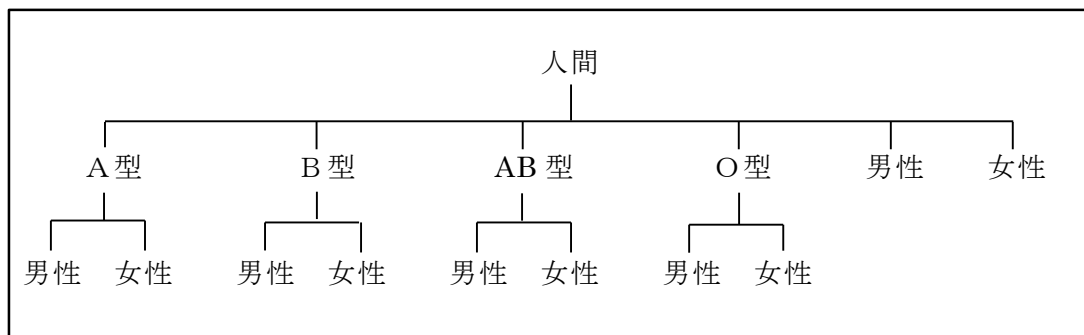


図 2-13 1回の区分に複数の区分特性を適用(1)

しかし、この方法にはいくつかの問題がある。まず、1回の区分に複数の区分特性を同時に適用するということは、それらの区分特性を順番に適用するのではないので、分類法は階層構造ではない。見かけ上は階層構造のようにみえるが、定義上は階層構造とはいえない。つまり、階層構造を維持したままでの解決方法ではない。複合主題への対応は、階層構造のままでは解決できない問題なのである。

定義の問題だけでなく、実用上からも問題が生じる。1回の区分に複数の区分特性を適用すると、包括的かつ相互排他的に区分すべきという区分の原則が成

り立たない場合がでてくる。図 2-13 では最初に血液型で区分してできる項目だけをさらに性別で区分したが、最初に血液型で区分してできる項目をさらに性別で区分することも可能である(図 2-14;ただし、便宜上、一部の項目は省略した)。図 2-14 では、第 1 区分の「A型」の下位項目に「男性」があり(実線の丸で囲んだ項目)、同じく第 1 区分の「男性」の下位項目には「A型」がある(破線の丸で囲んだ項目)。どちらも「A型の男性」を意味する項目である。同じ意味の項目が複数あるということは、相互排他的な区分にはなっていないということである。分類法が相互排他的な区分になっていないということは、単なる理論的問題だけでなく、どちらの項目に分類すべきか決まらないという現実的な問題も引き起こしているのである。

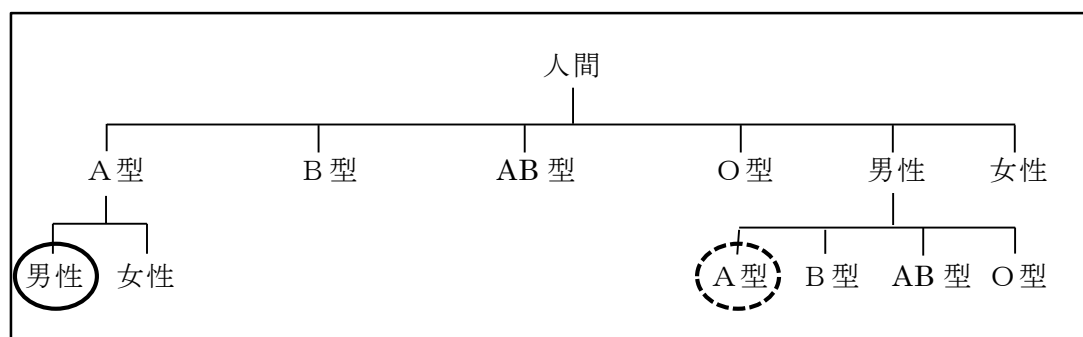


図 2-14 1 回の区分に複数の区分特性を適用(2)

図 2-14 のような状況を交差分類が生じているという。図 2-15 に必要箇所だけを抽出して示した。これでわかるように、左側は血液型、性別という順序で区分特性を適用しており、右側は性別、血液型という順序で区分特性を適用している。このように、複数の区分特性を交差して適用しているので交差分類と呼ばれる。交差分類を行うと、同じ内容の項目が複数でてきてしまう。

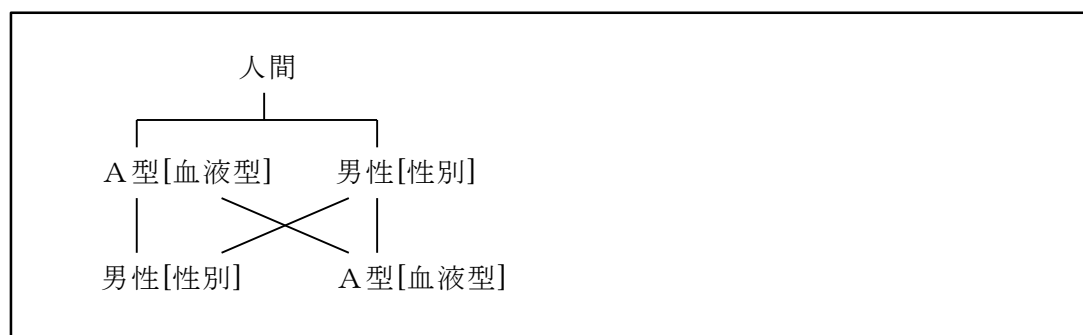


図 2-15 交差分類

なお、1 回の区分に複数の区分特性を同時に適用する際に、何らかの記号を挿

入して、一見、同時に適用しているのではないようにみせている場合もある。たとえば、図 2-16 のような場合である。人間を血液型で区分してできる 4 つの項目と並べて「0」を挿入している(「0」以外の記号でもよい)。そして、「0」の下に性別で区分してできる項目をおく。こうすれば、「0」は意味をもたないので、第 1 区分は血液型という 1 つの区分特性だけで区分されているように思われる。また、「A型」の下位項目である「男性」は「A型の男性」という意味をもつが、「0」の下の「男性」という項目は「男性」という意味である。したがって、「A型」の下位項目である「男性」と「0」の下の「男性」は意味が異なる。これは、交差分類も避けられているようにみえる。

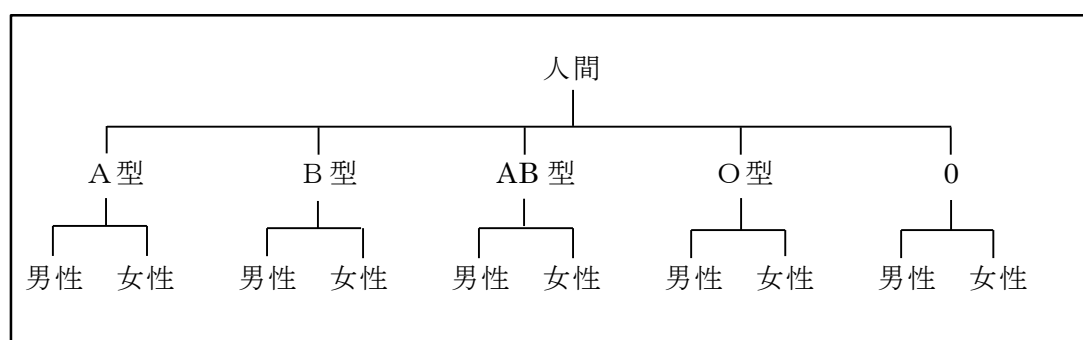


図 2-16 1 回の区分に複数の区分特性を適用(3)

しかし、実際には複数の区分特性を同時に適用しているのである。どのような区分特性かは明示されないが、「0」という項目を生じさせる区分特性は血液型ではないのであるから、第 1 区分には血液型ともう 1 つ別の区分特性が同時に適用されたということになる。つまり、図 2-16 も図 2-13 と同様に、複数の区分特性が同時に適用されているといえる。したがって、定義上、階層構造とはいえない。さらに、「0」の下にある「男性」や「女性」という項目をさらに血液型で区分することも可能で、その場合は、図 2-14 と同様の交差分類が生じる。

(2)混合主題と分類法の構造

利用する分類法が 1 つの区分特性しか用いていないなら、文献の主題が複合主題とみなされることはない。これは複合主題の定義から明らかである。しかし混合主題と判断される可能性はある。たとえば、「対象別の学問領域」という区分特性だけが用いられている分類法だとする。この分類法には、人間の思想を対象とした「哲学」、人間の社会を対象とした「社会科学」、自然を対象とした「自然科学」、歴史を対象とした「歴史学」、などの項目が存在する。ここで、「科学の歴史」という主題を考えると、これは、「自然科学」と「歴史学」という 2 つの項目に位置づけられる。したがって、「科学の歴史」という主題は、この分

類法では混合主題とみなされる。

1つの区分特性を適用するだけで混合主題が生じるのであるから、階層構造でも多次元構造でも混合主題に対応できない。階層構造も多次元構造も複数の区分特性を適用してできる構造であり、そのいずれか1つの区分特性を適用する際に混合主題が生じてしまうのであれば、他の区分特性による項目をどのように(順番に、あるいは、独立に)組合せても対応できないからである。なお、緑川(1997b)では、多次元構造の方が階層構造よりも混合主題に対応しやすいと書いたが、ここで訂正しておく。

ただし、(1)項でみたように、階層構造では本来対応できないはずの複合主題に、複数の区分特性を同時に適用することで強引に対応させようとする試み(ただし、もはや階層構造ではない、交差分類が生じるなどの問題がある)と同様に、混合主題にも何とか対応しようとする試みがある。

1つは、階層構造の分類法において、もともと同じ区分特性による項目のうち、いくつかを別の区分特性による項目のように扱う方法である。先ほどの例でいうと、「哲学」、「社会科学」、「自然科学」、「歴史学」のうち、「歴史学」だけ別立てにする。そうして、「哲学」、「社会科学」、「自然科学」、「歴史学」を「歴史学」で細分する。つまり、図 2-17 のようにするのである。そうすれば、「科学の歴史」は「自然科学」の下位項目「自然科学-歴史」に位置づけられる。しかし、もとの「歴史学」と、「自然科学」などを細分するための「歴史」は、実は同じ区分特性による項目である。つまり、同じ区分特性を階層を超えて適用しているのである。複合主題の場合と同様に、これはもはや階層構造ではない。すなわち、区分特性を順番に適用してできる構造ではない。

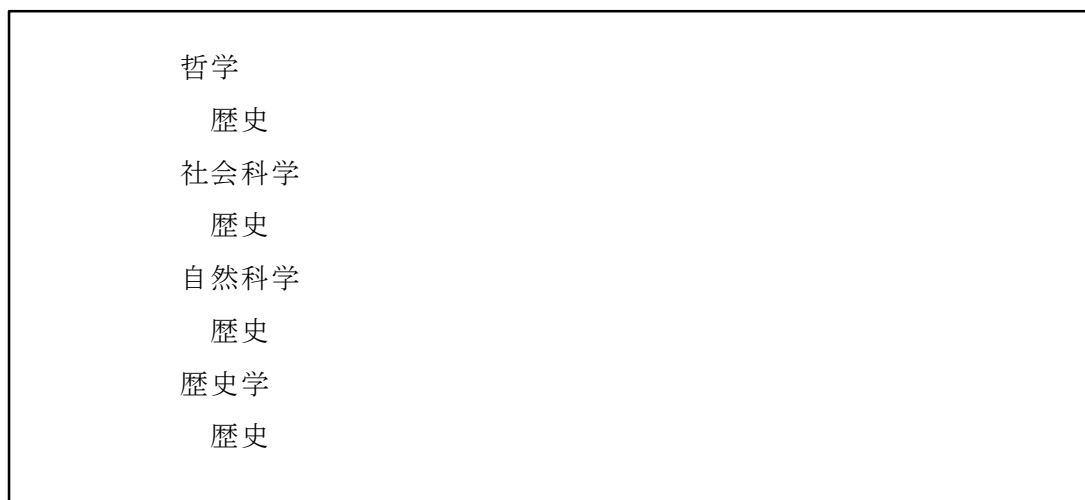


図 2-17 混合主題に対応する方法(同じ区分特性を複数回適用)

もう1つは、多次元構造の分類法において、異なる区分特性の項目を自由に組み合わせることができるのを拡大して、同じ区分特性による項目どうしを組み合わせる方法である。先ほどからの例でいえば、同じ区分特性による項目である「自然科学」と「歴史学」を組合せて、「自然科学－歴史」という項目を認めるのである。これはもはや多次元構造ではない。多次元構造は各区分特性による項目を組み合わせるのであって、同じ区分特性による項目どうしを組み合わせるのではないからである。

このように、階層構造の場合も多次元構造の場合も、混合主題に対応するためには、階層構造や多次元構造ではない、別の構造をとらざるを得ない。この問題については、次項の記号法との関連で再度検討する。

2.3.3 複合的な主題と記号法

前項では複合的な主題と分類法の構造との関係についてみてきた。分類法の構造は記号法とも関係している。記号法には、単一要素からなる記号法と独立要素からなる記号法がある。

階層構造の分類法では、単一要素からなる記号法が使用される。たとえば、図 2-18①のように、「83 ドイツ語の文学」を文学形式という区分特性で区分して「832 ドイツ語の戯曲」が得られるとする。この場合、図 2-18②のように、83 を言語という区分特性で区分することはできない。83 はすでに文学形式で区分されており、他の区分特性と一緒に適用することはできないからである。すなわち、階層構造の分類法では1回の区分に1つの区分特性だけが適用される。その結果、階層構造の分類法では、区分される箇所は記号の最右端の1箇所だけである。このような記号法を単一要素からなる記号法と呼ぶ。

①
8 文学
83 ドイツ語の文学(言語で細分)
832 ドイツ語の戯曲(文学形式で細分)
②
8 文学
83 ドイツ語の文学(言語で細分)
83? 低地ドイツ語の文学(さらに言語で細分)

図 2-18 単一要素からなる記号法での細分

一方、多次元構造の分類法では、独立要素からなる記号法が使用される。たとえば、「83 ドイツ語の文学」を文学形式で区分して「83：2 ドイツ語の戯曲」とすることもできるし(図 2-19①), 83 を言語で細分して「839 低地ドイツ語の文学」とすることも(図 2-19②), さらに、言語と文学形式という区分特性を同時に適用して「839：2 低地ドイツ語の戯曲」とすることも可能である(図 2-19③)。このような、複数箇所でも区分することができる記号法は、独立した複数の要素からなる記号法である。

①
8 文学
83 ドイツ語の文学(言語で細分)
83：2 ドイツ語の戯曲(文学形式で細分)
②
8 文学
83 ドイツ語の文学(言語で細分)
839 低地ドイツ語の文学(言語で細分)
③
8 文学
83 ドイツ語の文学(言語で細分)
839：2 低地ドイツ語の戯曲(言語と文学形式で細分)

図 2-19 独立要素からなる記号法での細分

この例でわかるように、独立要素からなる記号法をもつ分類法は、単一要素からなる記号法をもつ分類法よりも複合主題に対応しやすい、ということがいえる。これは、多次元構造の分類法の方が階層構造の分類法よりも複合主題に対応しやすいという 2.3.2(1)項の結果を、記号法のレベルで表現したものである。

ただし、多次元構造の分類法では独立要素からなる記号法が使用されるが、独立要素からなる記号法は多次元構造から外れた分類法にも使用することができる。多次元構造とは、区分特性を独立に適用してできる構造である。つまり、各区分特性による項目を独立に組み合わせることによってできる構造である。この各区分特性による項目の独立性を保証するのが独立要素からなる記号法である。記号の各要素が各区分特性による項目を表現しており、それらの各要素が互いに独立している記号法である。しかし、この独立要素からなる記号法は、記号の各要素

が、各区分特性による項目だけでなく、同一の区分特性による複数の項目を表現するように、役割を転換することも可能である。たとえば、「8 文学」を言語で区分してできる2つの項目「82 英語の文学」と「83 ドイツ語の文学」を組み合わせ、「82+83 英語とドイツ語の文学」とする場合である。これは混合主題である。

前項で述べたように、多次元構造分類法は複合主題には対応しやすいが、混合主題には対応できなかった。多次元構造で使われている独立要素からなる記号法を拡張することによって混合主題にも対応できるようにすることができるが、この場合の分類法はもはや多次元構造ではない。同一の区分特性による複数の項目が組み合わせられてできる構造だからである。項目の組み合わせが区分特性に制限されずに行えるという意味で、この構造を自由構造と呼ぶことにする。

以上みてきた、主題、構造、記号法の間を関数化すると、図 2-20 のようになる。

	単一要素記号法	独立要素記号法	
	階層構造	多次元構造	自由構造
単一主題	△	○	○
複合主題	△	○	○
混合主題	×	×	○

○：よく対応できる △：対応しにくい ×：対応できない

図 2-20 主題、構造、記号法の関係

ところで、自由に項目間の組合せを認めたら区分特性が意味をなさなくなるから、自由構造はもはや「分類法」ではない、という考えもあり得る。この立場に立てば、分類法で対応できるのは複合主題までで、混合主題は分類法では対応できない。しかし、実際には多次元構造以上の自由度で混合主題に対応しようと試みられているし、そのような試みを(分類法とみなすかどうかにかかわらず)多次元構造分類法と区別することは必要である。そこで、便宜上、「自由構造分類法」という名前と呼ぶことにする。

なお、分類法の作成者の著作や分類論のテキストブックで使われている「複合主題」という用語は、本章で定義した「複合主題」の意味なのか、それとも混合主題も含む「複合的な主題」の意味なのかが明確ではない。「複合的な主題」と「複合主題」を文脈で使い分けるのは困難であるし、混乱も招くと予想される。そのため、次章以降では、原則として「複合的な主題」を用い、複合主題と混合主題は両者を特に区別する必要があるときだけ使用する。

2.4 第2章のまとめ

2.1 節と 2.2 節では、分類法の体系を構造と表示方法という 2 つの観点で整理する「構造-表示方法説」について説明した。区分特性を順番に適用すると階層構造となり、独立に適用すると多次元構造となる。一方、表示方法には、項目をすべて表示しておく列挙表示と、最小限の項目だけを表示しておいて、その他の項目は表示されている項目を合成して作成する合成表示がある。構造と表示方法は別個の観点であるから、階層構造と多次元構造のいずれにおいても列挙表示と合成表示の両方の方法を選ぶことができる。

2.3 節では、複合的な主題について、構造-表示方法説の観点から検討を行った。複合的な主題は、複合主題と混合主題に分けられる。複合主題は複数の区分特性に関連する側面をもつ主題である。階層構造分類法は区分特性の適用順序が決まっているので、複合主題への対応が制限される。それに対して、多次元構造分類法は区分特性が独立に適用されてできる構造であるので、階層構造よりも柔軟性があり、多次元構造へもより対応しやすい。しかし、混合主題は単一の区分特性に関連する複数の側面をもつ主題である。そのため、階層構造はもちろん、多次元構造でも対応することができない。なお、表示方法は区分特性とは関わらないため、列挙表示か合成表示かという相違は複合的な主題への対応とは無関係である。

複合的な主題への対応を考える上で、もう 1 つ重要なのが記号法である。記号法には、単一要素からなる記号法と独立要素からなる記号法がある。単一要素からなる記号法は階層構造を表現するために使われる。一方、独立要素からなる記号法は多次元構造を表現することができる。しかし、要素の独立性は必ずしも区分特性とは関わらないので、同じ区分特性による複数の項目の記号をそれぞれ要素とすることができる。そのため、独立要素からなる記号法を使えば、混合主題にも対応できる。混合主題にも対応できる場合の独立要素からなる記号法が表現している構造は、区分特性に制限されないという意味で自由構造と呼ぶことにする。

第 3 章

ファセット概念導入の意義

本章では、Ranganathan によるファセット概念導入の意義を明らかにするために、DDC, EC, UDC, BC, CC の 5 つの分類法の分析を行う。分析の観点、構造、表示方法、記号法、ファセット概念である。そのほか、分類法の概要と作成の経緯を加えた。分類法によって、分析の観点の順番が異なる。これは、それぞれの分類法の特徴を反映している。なお、すべての分類法が合成表示を採用しているので、表示方法は合成表示の方法に限定する。

分類法は、単一要素からなる記号法をもつもの(DDC, EC)と、独立要素からなる記号法をもつもの(UDC, BC, CC)に分けられる。歴史的にもこの順序で作成されたので、それぞれ節を分けて 3.1 節と 3.2 節で検討する。ただし、DDC は 2011 年に第 23 版(Dewey 2011)が出版されているが、本稿では 1876 年に出版された DDC 第 1 版(Dewey 1876)から Vickery の 1975 年の著作(Vickery 1975)までを主な分析対象とするので、DDC もその範囲内の第 18 版(Dewey 1971)までを対象とする。本稿での分析に必要な DDC の情報は第 18 版までで十分である。

3.3 節では、3.1 節と 3.2 節での各分類法の分析をふまえながら、CC を中心にして考察を行う。それにより、Ranganathan によるファセット概念導入の意義を明らかにする。

3.1 記号が単一要素からなる分類法

3.1.1 Dewey Decimal Classification

(1)概要

DDC は現在も使用されている最も初期の図書館分類法であり，もともとは M. Dewey が勤務していたアメリカの大学図書館用に作成されたものであるが，現在では 139 国以上の図書館で使用されている (Dewey 2011, p.xliii)。また，UDC や日本十進分類法(NDC)などの作成にも影響を与えている。本稿で扱う 1876 年から 1975 年までの間に DDC は第 18 版まで改訂されている。図 3-1 に第 18 版までの出版年とページ数を示す。

版	出版年	本表ページ数	補助表ページ数
第 1 版	1876	10	0
第 2 班	1885	176	0
第 3 版	1888	215	0
第 4 版	1891	222	0
第 5 版	1894	222	0
第 6 版	1899	255	0
第 7 版	1911	408	0
第 8 班	1913	419	0
第 9 版	1915	452	0
第 10 版	1919	504	0
第 11 版	1922	539	0
第 12 版	1927	670	0
第 13 版	1932	890	4
第 14 版	1942	1044	4
第 15 版	1951	467	0
第 16 班	1958	1313	5
第 17 版	1965	1132	249
第 18 版	1971	1165	325

図 3-1 DDC 第 1 版～第 18 版の出版年とページ数

1876年にMelvil DeweyによってA Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Libraryという44ページの小冊子でDDC第1版(Dewey 1876)が出版された。本表のページ数は、19世紀第4四半期にはDDC第2版(Dewey 1885)の176ページからDDC第6版(Dewey 1899)の255ページまでほとんど変化がなかったのに対して、20世紀に入ってからDDC第7版(Dewey 1911)が408ページと大幅に増加し、その後も増加を続けて、DDC第14版(Dewey 1942)では1000ページを越えている。20世紀に入ってページ数が大幅に増加しているのは、学問領域の細分化によって新しく追加される項目が増加したためと考えられる。

DDC第15版(Dewey 1951)で本表の大幅な改訂が行われ、ページ数が467ページと半減している。第15版で大幅な改訂を行ったのは、第2版以来の記号の保全方針により、体系を変更することなく項目の追加と削除だけで学問領域の変化に対応してきたが、19世紀末の第2版の体系では20世紀半ばにはもはや時代遅れとなっていたことが1つの理由である。もう1つの理由は、項目の増加により小規模図書館では使いにくいという苦情が図書館界からでてきたことである。そのために、体系の改訂とともに項目の大幅な削減を行った。

しかし、体系自体を変えてしまうと項目と分類記号の対応関係が変化し、既に作成した目録等の分類記号を修正しなければならなくなる。この修正作業は規模の大きい図書館ほど困難である。また、大規模図書館にとっては詳細な分類法が必要である。そのため、第15版に対しては大規模図書館からの評価が低かった。そこで、DDC第16版(Dewey 1958)では再び項目数を大幅に増加させている。また、第15版の体系を今後も維持することを約束している(新たな記号保全方針)。ただし、体系をまったく変更しないと、第2版の体系が第14版で時代遅れになったように、第15版の体系もいずれは時代遅れになる。そこで、記号の保全方針を原則としつつも、必要があれば体系の変更も認めている。ただし、体系の変更は「避けがたい必要性と要求が生じた部分に対してのみ、控えめに行う」としている。具体的には、1回の改訂につき2,3箇所まで、下位の項目(原則として第4次区分以下)に対してのみ適用される(緑川 1996a, p.200-203)。

(2)構造

DDC第1版は知識全体を10のクラスに区分し、各クラスをさらに10のディビジョンに区分(図3-2)、さらに各ディビジョンを10のセクションに区分して(図3-3)、最終的に1000のセクションに区分している。このように、DDC第1版は3階層からなる階層構造の分類法である。

DIVISIONS.

<p>0</p> <p>10 BIBLIOGRAPHY.</p> <p>20 BOOK RARITIES.</p> <p>30 GENERAL CYCLOPEDIAS.</p> <p>40 HOLOGRAPHY.</p> <p>50 GENERAL PERIODICALS.</p> <p>60 GENERAL SOCIETIES.</p> <p>70</p> <p>80</p> <p>90</p> <p>100 Philosophy.</p> <p>110 METAPHYSICS.</p> <p>120</p> <p>130 ANTHROPOLOGY.</p> <p>140 SCHOOLS OF PSYCHOLOGY.</p> <p>150 MENTAL FACULTIES.</p> <p>160 LOGIC.</p> <p>170 ETHICS.</p> <p>180 ANCIENT PHILOSOPHIES.</p> <p>190 MODERN PHILOSOPHIES.</p> <p>200 Theology.</p> <p>210 NATURAL THEOLOGY.</p> <p>220 BIBLE.</p> <p>230 DOCTRINAL THEOLOGY.</p> <p>240 PRACTICAL AND DEVOTIONAL.</p> <p>250 HOMILETICAL AND PASTORAL.</p> <p>260 INSTITUTIONS AND MISSIONS.</p> <p>270 ECCLESIASTICAL HISTORY.</p> <p>280 CHRISTIAN SECTS.</p> <p>290 NON-CHRISTIAN RELIGIONS.</p> <p>300 Sociology.</p> <p>310 STATISTICS.</p> <p>320 POLITICAL SCIENCE.</p> <p>330 POLITICAL ECONOMY.</p> <p>340 LAW.</p> <p>350 ADMINISTRATION.</p> <p>360 ASSOCIATIONS AND INSTITUTIONS.</p> <p>370 EDUCATION.</p> <p>380 COMMERCE AND COMMUNICATION.</p> <p>390 CUSTOMS AND COSTUMES.</p> <p>400 Philology.</p> <p>410 COMPARATIVE.</p> <p>420 ENGLISH.</p> <p>430 GERMAN.</p> <p>440 FRENCH.</p> <p>450 ITALIAN.</p> <p>460 SPANISH.</p> <p>470 LATIN.</p> <p>480 GREEK.</p> <p>490 OTHER LANGUAGES.</p>	<p>500 Natural Science.</p> <p>510 MATHEMATICS.</p> <p>520 ASTRONOMY.</p> <p>530 PHYSICS.</p> <p>540 CHEMISTRY.</p> <p>550 GEOLOGY.</p> <p>560 PALEONTOLOGY.</p> <p>570 BIOLOGY.</p> <p>580 BOTANY.</p> <p>590 ZOOLOGY.</p> <p>600 Useful Arts.</p> <p>610 MEDICINE.</p> <p>620 ENGINEERING.</p> <p>630 AGRICULTURE.</p> <p>640 DOMESTIC ECONOMY.</p> <p>650 COMMUNICATION AND COMMERCE.</p> <p>660 CHEMICAL TECHNOLOGY.</p> <p>670 MANUFACTURES.</p> <p>680 MECHANIC TRADES.</p> <p>690 BUILDING.</p> <p>700 Fine Arts.</p> <p>710 LANDSCAPE GARDENING.</p> <p>720 ARCHITECTURE.</p> <p>730 SCULPTURE.</p> <p>740 DRAWING AND DESIGN.</p> <p>750 PAINTING.</p> <p>760 ENGRAVING.</p> <p>770 PHOTOGRAPHY.</p> <p>780 MUSIC.</p> <p>790 AMUSEMENTS.</p> <p>800 Literature.</p> <p>810 TREATISES AND COLLECTIONS.</p> <p>820 ENGLISH.</p> <p>830 GERMAN.</p> <p>840 FRENCH.</p> <p>850 ITALIAN.</p> <p>860 SPANISH.</p> <p>870 LATIN.</p> <p>880 GREEK.</p> <p>890 OTHER LANGUAGES.</p> <p>900 History.</p> <p>910 GEOGRAPHY AND DESCRIPTION.</p> <p>920 BIOGRAPHY.</p> <p>930 ANCIENT HISTORY.</p> <p>940 EUROPE.</p> <p>950 ASIA.</p> <p>960 AFRICA.</p> <p>970 NORTH AMERICA.</p> <p>980 SOUTH AMERICA.</p> <p>990 OCEANICA AND POLAR REGIONS.</p>
---	--

図 3-2 DDC 第 1 版のディビジョン(Dewey 1876)

HISTORY.

<p>900 History.</p> <p>901 Philosophy.</p> <p>902 Compendis, chronology.</p> <p>903 Dictionaries.</p> <p>904 Essays.</p> <p>905 Periodicals.</p> <p>906 Societies.</p> <p>907 Education.</p> <p>908 Charts.</p> <p>909 Universal Histories.</p> <p>910 Geography and Description.</p> <p>911 Historical.</p> <p>912 Ancient.</p> <p>913 Modern.</p> <p>914 <i>Europe.</i></p> <p>915 <i>Asia.</i></p> <p>916 <i>Africa.</i></p> <p>917 <i>North America.</i></p> <p>918 <i>South America.</i></p> <p>919 <i>Oceanica and Polar Regions.</i></p> <p>920 Biography.</p> <p>921 Of philosophy.</p> <p>922 " theology.</p>	<p>950 Asia.</p> <p>951 China.</p> <p>952 Japan.</p> <p>953 Arabia.</p> <p>954 India.</p> <p>955 Persia.</p> <p>956 Turkey in Asia.</p> <p>957 Siberia.</p> <p>958 Afghanistan.</p> <p>959 Other.</p> <p>960 Africa.</p> <p>961 North Africa.</p> <p>962 <i>Egypt and Nubia.</i></p> <p>963 <i>Abyssinia.</i></p> <p>964 <i>Morocco.</i></p> <p>965 <i>Algeria.</i></p> <p>966 Central Africa.</p> <p>967 <i>Guinea.</i></p> <p>968 South Africa.</p> <p>969 Other.</p> <p>970 North America.</p> <p>971 British America.</p> <p>972 <i>Canada.</i></p>
---	--

図 3-3 DDC 第 1 版のセクション「歴史」の一部(Dewey 1876)

複合的な主題については、最も有用と考えられる分類記号を割り当て、目録等において他の分類記号へ相互参照を出すことを推奨している(Dewey 1876, p.6)。すなわち、複合的な主題はどれか1つの側面しか表現できない。

DDC 第2版では4階層以降の細目まで掲載している。また、3桁目に小数点を入れている。以後の版でこの形が踏襲されている。

(3)合成表示

DDC 第1版には、分類表自体に合成の指示はなく、補助表もない。しかし、序文の中で必要に応じて合成してもよいと説明している(Dewey 1876, p.6)。ただし、合成という語は使用していない。その方法はセクション(3桁の記号)を細分して4桁や5桁の記号にするというものである。

例が2つあげられていて、その1つは時代区分である。たとえば、「952 日本」(図3-3)の後に時代を表す記号(「中世」が「3」だとする)を合成し、「9523 中世の日本」などとする。ただし、時代区分の表が用意されているわけではないし、本表の別の部分を使うわけでもない。また、時代区分に限定してもいない。特に説明はないが、おそらく、目録等の作成機関が独自に行ってよいのだと考えられる。

合成のもう1つの例は地理区分である。こちらは本表の別の部分を合成に使う方法である。たとえば、「557 北アメリカの地質学」(図3-4)に「978 メキシコ(の歴史)」の末尾「8」を合成して、「5578 メキシコの地質学」とする。地理区分については、助記性を与えるために有効であると説明している。「9 歴史」の末尾(セクション)の記号を合成するので、同じ国にはいつも同じ記号が割り当てられる。そのため分類記号の意味を記憶しやすくなるというわけである。

NATURAL SCIENCE.	
500 Natural Science.	550 Geology.
501 Philosophy.	551 Physical Geography, Meteorology.
502 Compendis.	552 Lithology.
503 Dictionaries.	553 Dynamical geology.
504 Essays.	554 Europe.
505 Periodicals.	555 Asia.
506 Societies.	556 Africa.
507 Education.	557 North America.
508 Travels.	558 South America.
509 History.	559 Oceania.
510 Mathematics.	560 Paleontology.
511 Arithmetic.	561 Plants.
512 Algebra.	562 Invertebrates.
513 Geometry.	563 <i>Protozoa and Radiates.</i>

図3-4 DDC 第1版のセクション「自然科学」(Dewey 1876)

DDC 第 2 版では合成の機能が大幅に増えている。DDC 第 1 版と同様に、地理区分は「9 歴史」の記号を使って合成する。ただし、DDC 第 1 版では末尾(セクション)の記号しか合成に使えなかったが、DDC 第 2 版では最初の「9」だけとり除いた記号を合成に使う。より正確にいうと、「940-999 と同様に区分しなさい」という指示に従う。たとえば、「英国で出版された図書の書誌」という主題は、「015 書誌(国別 Of Special Countries)」(図 3-5)に、「942 イングランド」(図 3-6)の「9」以降の記号「42」を合成して、「015.42」とする。つまり、「015 書誌(国別)」を「9 歴史」と同様に地理で細分したことになる。

010	Bibliography. <small>.1, Theory, Utility, etc.; .2, Compendia; .3, Dictionaries; .4, Essays; .5, Periodicals; .6, Societies; .7, Education, Training; .8, Polygraphy; .9, History.</small>
011	General Bibliographies. Universal Catalogs.
012	Bibliographies of Special Authors. <small>e. g., Goethe, Dante, Chaucer, Ruskin, etc.</small>
013	Of Special Classes of Authors. <small>e. g., Books written by Jesuits, by Catholics, by members of the Bavarian Academy, etc.</small>
014	Of Special Forms. Anonyms, Pseudonyms, etc.
015	Of Special Countries. <small>Books published in the country. Publishers' lists, current publications. Subdivided by countries like 940-999; e. g., 015.42, Bibliography of books published in England, as Lowndes or Watts. The history of literature, i. e., belles lettres, poetry, drama, fiction, etc., goes, of course, with those topics in 800, but the literary history of any given place or period covering the writings on all subjects as well as in literature, in bibliography, and goes, usually, in 015, though the literary history of some special class is 013.</small>
016	Of Special Subjects. <small>Subdivided like the main classification, from 000-999; e. g., 016.01, Bibliography of Bibliographies; 016.091, of Manuscripts; 016.1, of Science; 016.942, of English History, etc. Catalogs of General Collections. Catalogs of any special subject, whether Subject, Author, or Dictionary, go under its subject number, in 016, which is the ruling heading wherever it conflicts with another.</small>

図 3-5 DDC 第 2 版の「書誌」(Dewey 1885)

942	England.
	Period Divisions.
	<small>For specially minute work the 6th figure printed for each sovereign may be used; e. g., Henry VII is 942.051.</small>
.01	Anglo-Saxons. B. C. 55-A. D. 1066. Prehistoric, Roman, British, Danish.
.02	Norman. 1066-1154. 1, William I. 1066-1087; 2, William II. 1087-1100; 3, Henry I. 1100-1135; 4, Stephen 1135-1154.
.03	Plantagenet. 1154-1399. 1, Henry II. 1154-1189; 2, Richard I. 1189-1199; 3, John 1199-1216; 4, Henry III. 1216-1272; 5, Edward I. 1272-1307; 6, Edward II. 1307-1327; 7, Edward III. 1327-1377; 8, Richard II. 1377-1399.

図 3-6 DDC 第 2 版の「イングランド」(Dewey 1885)

この「～と同様に区分しなさい(subdivided like または divided like)」という指示は、本表の別の部分を合成に使うということである。本表の別の部分を使う合成は DDC 第 1 版でも使われていたが、DDC 第 2 版で初めて「～と同様に区分

しなさい」という指示の形が使われた。

「～と同様に区分しなさい」という形式が整えられたことによるのかもしれないが、この方式は地理区分以外にも拡張されている。

「～と同様に区分しなさい」という形式の 1 つ目は言語区分で、「4 言語学 (Philology) (DDC 第 15 版で Linguistics に、DDC 第 16 版以降は Language に変更される)において、英語以外の言語は細目が表示されておらず、「420 英語 と同様に区分しなさい」という指示だけがでている(図 3-7)。たとえば、「440 仏語」を「425.2 (英語の)構文」(図 3-8)と同様に区分する、つまり、「42」以降の記号である「52」を合成すると、「445.2 (仏語の)構文」となる。また、「890 主要でない言語(Minor Languages)の文学」(DDC 第 12 版以降は「その他の言語(Other Languages)の文学」に変更される)では、「490 主要でない言語の言語学」と同様に区分しなさい」という指示がでている(図 3-9)。

All Languages are subdivided like 420 English.	430 German.
	439 Minor Teutonic. <small>Including general works on Teutonic group.</small>
	.1 Low German.
	.2 Frisian. Old Saxon.
	.3 Dutch. Flemish.
	.4 Platt Deutsch.
	.5 Scandinavian.
	.6 Old Norse. Icelandic. Faroese.
	.7 Swedish.
	.8 Danish. Norwegian.
	.9 Gothic.
	440 French.
	449 Old French.
	.9 Provençal.
	450 Italian.
	459 Wallachian.
	.9 Rumansh.
	460 Spanish.
	469 Portuguese.
470 Latin.	
479 Minor Italic. <small>Mediæval Latin.</small>	
<small>Including general works on Romance group.</small>	
480 Greek.	
489 Minor Hellenic. <small>Modern Greek.</small>	
<small>Including general works on Hellenic group.</small>	

図 3-7 DDC 第 2 版の「英語以外の言語」(Dewey 1885)

425 Grammar.

425 includes General Works, covering also Orthography and Pronomy.

- .1 **Morphology. Inflection.** *Divided, .5 Nouns, etc. See 442.*
- .2 **Syntax.**
- .3 **Arrangement of Words and Clauses.**
- .4 **Particular Sentences; Conditional, Hypothetical, etc.**
- .5 **Nouns.**
- .6 **Adjectives. Articles.**
- .7 **Pronouns.**
- .8 **Verbs.**
- .9 **Particles.**

図 3-8 DDC 第 2 版の「(英語の)文法」(Dewey 1885)

890 Literature of Minor Languages.

Subdivided like 490, Philology of Minor Languages. If wished the .1, Poetry; .2, Drama, etc., numbers can be used after the language number. e. g., Russian Drama is 891.72; Hebrew Poetry 891.41; Bengali Poetry 891.441.

図 3-9 DDC 第 2 版の「主要でない言語の文学」(Dewey 1885)

「～と同様に区分しなさい」という形式の 2 つ目は主題区分で、「016 書誌(主題別 Of Special Subjects)」(図 3-5)には「主分類 000-999 と同様に区分しなさい」という指示がでていいる。たとえば「英国史の書誌」という主題は、「016」に、本表の「942 イングランド」(図 3-6)を合成して「016.942」とする。その他、文学に限定されてはいるが、文学形式区分もある。さらに、特定の項目にだけ適用される合成もある。「581 生理学的および構造学的植物学」の「591 と同様に区分しなさい」という指示はその一例である(図 3-10)。

581 Physiological and Structural Botany.

Subdivided where wished like 591.

- .1 **Physiology.**
- .2 **Pathology. Teratology.**
- .3 **Embryology. Germination.**
- .4 **Morphology. Comparative Anatomy.**
- .5 **Habits.**
- .6 **Economic.**
- .7 **Organography. Descriptive Anatomy.**
- .8 **Histology.**

図 3-10 DDC 第 2 版の「生理学的および構造学的植物学」(Dewey 1885)

DDC 第 2 版では本表の別の部分を使う合成(～と同様に区分しなさい)の他に、極めて簡略ながら補助表を使う合成もとり入れられている。補助表があるのは、上記の地理区分や文学形式区分などの合成によって細分することのできる本表の項目をリストした巻末の表の説明の中である。DDC 第 3 版以降ではこれらの表を総称して索引表(index tables)と呼んでいるので、ここでも索引表と呼ぶことにする。索引表自体が補助表なのではなく、その説明の中にでてくる、本表の項目へ合成可能な項目のリストが補助表の役をしているのである。

「地理区分」の索引表の説明中の注記 1 には、4: ヨーロッパ, 5: アジア, 6: アフリカ, 7: 北アメリカ, 8: 南アメリカ, 9: オセアニアの 6 項目が(図 3-11 上部の Note 1), また、「言語と文学」の索引表の説明の中には、1: 詩, 2: 戯曲, 3: 小説, 4: エッセイ, 5: 演説, 6: 手紙, 7: 風刺とユーモア, 8: 雑録の 8 項目があげられている(図 3-12 中程)。これらの項目のリストが補助表に該当する。

Table 1.—Geographical Divisions.

NOTE 1.—The following subjects may all be divided geographically by adding the geographical numbers: 4, Europe; 5, Asia; 6, Africa; 7, North America; 8, South America; 9, Oceania. These can be sub-divided as minutely as wished, like the history, 940-999, which see for full table; e. g.: 42, England; 73, United States; 944, New South Wales; 7471, New York City, etc.

These geographical figures, formed by omitting initial 9 from the historical numbers given in tables 930-999, are simply affixed to the number given in the table below; e. g.: Atlases, 912; Atlases of New South Wales, 912.944; History of mints, 332.49; History of mints in England, 332.4942; Colleges, 378; Colleges in N. Y. City, 378.7471.

<p>373. Academies, private. 379. " public.</p> <p style="text-align: center;">.....</p> <p>332.49 Mints, history. 923.5 Naval biography. 923.2 Nobles' lives.</p>		<p>342. Constitutional law. 922.4 Continental Protestants' lives.</p> <p style="text-align: center;">.....</p> <p>341.2 Treaties, texts and history. 378. Universities, history, reports, etc. 376.9 Woman education.</p>
---	--	---

NOTE 2.—The form distinctions 01, Philosophy; 02, Compend; 03, Dictionaries; 04, Essays; 05, Periodicals; 06, Societies; 07, Study and Teaching; 08, Polygraphy, Collective Works; 09, History, can be used wherever needed if these numbers are not already employed with other significations. They have been printed in the full tables only where they seemed specially needed.

図 3-11 DDC 第 2 版の地理区分の索引表(Dewey 1885)

Table 3, Part 1.—Languages and Literatures.

NOTE 3.—Changing initial 4 of any philology number to 8 gives the literature number for that language; e. g.:

French Philology 44	French Literature 84
Portuguese " 469	Portuguese " 869
Swedish " 439.7	Swedish " 839.7
Bulgarian " 491.81	Bulgarian " 891.81

The form divisions of English literature: 1, Poetry; 2, Drama; 3, Fiction; 4, Essays; 5, Oratory; 6, Letters; 7, Satire and Humor; 8, Miscellany; may be used to sub-divide other languages. The table below includes all mentioned in the classification, except those in 494-499, not yet sub-divided.

For philological topic numbers to be added to any of these language numbers, see part 2 of this table.

<p>491.58 Afghani. 492.8 Amharic. 429. Anglo Saxon, special division. see 829. 492.7 Arabic.</p>		<p>491.93 Lettish. 491.92 Lithuanian. 491.93 Livonian. 491.64 Manx. 491.46 Marathi.</p>
--	--	---

図 3-12 DDC 第 2 版の言語と文学の索引表(Dewey 1885)

ただし、地理区分と文学形式区分は、上記のように「～と同様に区分しなさい」という指示に従って本表の別の部分を使う方がより詳細な区分ができるので、索引表の説明の中ででてくる(本表の項目へ)合成可能な項目のリストは補助表としての意味があまりない。

DDC 第 2 版にはもう 1 つ、共通細目の補助表もある。地理区分の索引表の説明中の注記 2 として、01：哲学，02：要約的資料(Compendis)，03：辞典，04：エッセイ，05：逐次刊行物，06：学会，07：学習と教授，08：著作集・叢書，09：歴史の 9 項目があげられている(図 3-11 下部の Note 2)。

DDC 第 2 版で導入された地理区分，文学形式区分，共通細目の補助表は，上記のように 10 項目程度がリストされているだけのもので，独立した「表」の形式をもつものではない。これは DDC 第 12 版(Dewey 1927)まで続く(図 3-1 で補助表のページ数が 0 になっているのはそのためである)。

DDC 第 13 版(Dewey 1932)で，4 ページにわたる独立した表となる(図 3-13)。

Table 2 — Common subdivisions	
ooo Miscellaneous common subdivisions	
0001	Relation Divided like main classification
0002	Sources (literary etc) Documentation
0003	Administration See note under table 00 Viewpoints
31	Statistics
32	Quantities Finance
33	Contracts Specifications
34	Designs Drawings
35	Executiv Administrativ
.....	
oo Viewpoints	
001	Speculativ point of view Conception; purpose; statement of principles. Theoretic or experimental investigations and studies relating to an object
002	Point of view of realization Fulfilment; construction; materials; constituent elements; procedure
003	Economic point of view Industrial production; commercial output; cost and selling price
.....	
o Form divisions	
01	Filosofy Theory
011	General conception Definition, nature and caracter, origin, limits and extent, purpose, principles, plan
02	Compendis Handbooks Outlines
03	Dictionaries Cyclopedias

図 3-13 DDC 第 13 版の共通細目表(Dewey 1932)

「表 2 共通細目(common subdivisions)」という見出しの下に、「000 種々の共通細目(miscellaneous common subdivisions)」、「00 観点(viewpoints)」、「0 形式区分(form divisions)」の 3 種類に分けられている。DDC 第 14 版(Dewey 1942)でも、「統一細目(uniform subdivisions)」という見出しの下に、DDC 第 13 版と同じ 3 種類が順番を逆にして並べられている。DDC における本来の意味での補助表は、第 13 版の共通細目表と第 14 版の統一細目表が最初といえる(図 3-1)。

20 世紀半ばになると、学問領域の細分化がよりいっそう進み、分類法もますます詳細な項目が必要とされるようになってきた。これらの項目を列挙表示していたのでは、分類表が膨れるばかりである。そこで、DDC でも補助表による合成表示をこれまで以上に積極的に活用する方向に進んだ。第 15 版では本表の項目自体を大幅に削減したので、第 14 版で 4 ページあった補助表も廃止した(ただし、形式区分 9 項目と文学形式区分 8 項目を序文で提示し、合成表示ができることを説明している)が、第 16 版で本表の項目数を増やすとともに、形式区分(form divisions)という名称で補助表を復活させている(図 3-1)。さらに、第 17 版(Dewey 1965)では、形式区分を共通細目(standard subdivisions)と名称を変え、さらに膨大な地理区分の補助表(area table)を加えている。補助表が充実したことにより本表のページ数が第 17 版で少し減少している。しかし、第 18 版(Dewey 1971)では、補助表がさらに増えているにもかかわらず、本表のページ数も再び増加している。

以上、DDC 第 2 版以降では、補助表による合成(本格的には DDC 第 13 版から)と「～と同様に区分しなさい」という指示による合成が使われていることをみてきた。先述のように、合成をすることによって助記性が高まることが DDC 第 1 版で主張されていた。すなわち、地理区分が助記性を与えるために有効であるという説明である。合成表示と助記性との関係は、CC におけるファセット概念導入の意義を考える上で重要である(詳しくは 3.4 節で考察する)。

(4)記号法

DDC は単一要素からなる記号法を用いており、補助表や「～と同様に区分しなさい」という指示によって記号を合成しても、合成された記号はやはり単一要素からなることに変わりはない。したがって、複合的な主題への対応については、DDC では十分に満たすことができない。

(5)ファセット概念

地理区分や文学形式区分の補助表は、地理や文学形式という区分特性による項目をリストしたものである。したがって、こうした補助表はファセットとみなすことができるであろう。

さらに、DDC 第 2 版では本表中に「時代区分(Period Divisions)」という見出

しや「地理区分(Geographical Divisions)」という見出しの下に項目が列挙されている(それぞれ、図 3-14 の上部と下部)。

938 Greccc.		
Period Divisions.		
.01	Mythical Age.	To 776 B. C.
.02	Growth of States.	775-500 "
.03	Persian Wars. Union of Greccc.	519-479 "
.04	Athenian Supremacy.	479-431 "
.05	Peloponnesian War.	431-404 "
.06	Spartan and Theban Supremacy.	404-362 "
.07	Macedonian Supremacy.	362-323 "
.08	Roman Conquest of Greccc.	323-146 "
.09	Greek Subjection.	146 B. C.-323 A. D.
	<small>Byzantine Empire is put 949-5.</small>	
Geographical Divisions.		
.1	Macedonia.	
.2	Thessaly. Epirus.	
.3	Acarmania. Ætolia. Locris. Doris. Phocis. Ithaca.	
.4	Bœotia. Megaris. Eubœa.	
.5	Attica.	
.6	Peloponnesus.	
.7	Corinthia. Achaia.	
.8	Elis. Arcadia. Argolis.	
.9	Messenia. Laconia.	

図 3-14 DDC 第 2 版における見出しの例(Dewey 1885)

見出しの下に項目が列挙されている例は他にもみられる(図 3-15)。

788 Wind Instruments.	
<small>Including with each, History, Manufacture, Instruction, Music, etc.</small>	
Brass.	
.1	Trumpet. Slide and Valve.
.2	Trombone.
.3	Cornet.
.4	Horns and other Brass Wind Instruments.
.41	French Horn.
.42	Saxhorn.
.43	Saxophone.
.44	Euphonium.
.45	Ophicleide.
.46	Key Bugle.
.47	Valve Bugle.
.48	Bass. Tuba and Contrabass Tuba. Serpent.
.49	Other.
Wood. Flute Group.	
.5	Flute. Waldflute. Piccolo. Fife. Flageolet.
Wood. Reed Group.	
.6	Clarinet. Bass Clarinet. Bassethorn.
.7	Oboe. D'amore. Da Caccia. Cor Anglais.
.8	Bassoon. Double Bassoon. Bombardon.
.9	Other Reed Wind Instruments. Bagpipe.

図 3-15 DDC 第 2 版における中間見出しの例(Dewey 1885)

「788 管楽器(Wind Instruments)」では、「金管楽器(Brass)」という見出しの下に 788.1 から 788.49 までの項目が、また「木管楽器. フルート類(Wood. Flute Group)」という見出しの下には 788.5 が、そして「木管楽器. リード類(Wood. Reed Group)」という見出しの下には 788.6 から 788.9 までの項目が列挙されている。

時代区分と地理区分の見出しの下の項目は階層が異なるが、金管楽器と木管楽器の見出しの下の項目は同じ階層である。同じ階層の見出しを中間見出しと呼ぶことにする。なお、中間見出しは、DDC 第 15 版から「372-374 特定の教育レベル」というように分類記号で範囲を示すようになった。また、DDC 第 16 版から Centered Heading という名称を与えられた(なお、DDC 第 19 版から Centered Entry に変更された)。

これらの見出しや中間見出しは区分特性を明示しているといえる。明示された区分特性の下に、その区分特性による項目がリストされているのであるから、これも一種のファセットとみなすことができる。

(6)作成の経緯

Dewey が DDC を考案したのはアマースト・カレッジの図書館に勤務していたときである。L. E. La Montagne(1961)はこの間の様子を次のように記述している。

Dewey は、アマースト図書館の学生アシスタントとして働いていた 1873 年に図書館分類に興味をもちはじめた。・・・彼は図書館学の文献を何ヶ月も勉強し、さらに図書館の整理方法(library arrangement)に関して直に情報を得るために 50 以上の図書館を訪問した。彼の本来の関心は目録と索引にあったが、彼が訪れた図書館の大半が固定配架方式(fixed-location systems)をとっていることに驚き、その後の数ヶ月は、多くの図書館がかかえている問題を解決するよりよい方法を考案することを夢みていた。ある日曜日の朝、・・・答が浮かんだ。すべての知識の分類項目を列挙するために、最も単純な記号、アラビア数字を使えばよい。

1873 年 5 月 8 日、22 歳の Dewey はアマースト図書館委員会に彼の計画案を提出した。委員会はこの若い学生ライブラリアンの勧告を受け入れ、Dewey は、彼の生涯の友人となる Walter Stanley Biscoe とアマーストの教員の助けを借りて十進分類法を開発した。おかしなことに、Dewey は分類そのものよりも付随的な要素である記号法に関心をもっていた。彼は次のように書いている。「哲学的あるいは理論的な区分に関しては、私の意見は重要でない。分類法のこの部分はほとんどアマーストの教員によるものである。」

分類法は、1876年に"A Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Library"として出版される前に、アマースト図書館で3年間徹底的に試験された。(La Montagne 1961, p.179-180)

このLa Montagneの説明によると、その当時支配的であった固定配架方式に疑問を感じたことが、Deweyが十進分類法を考案するきっかけとなったようである。実際、Dewey自身もDDC第1版の序文で次のように述べている。

書架に図書を並べる際に、書架記号と図書記号による絶対配架方式(absolute location)を全面的に廃止し、分類記号と図書記号による相対配架方式(relative location)を採用したことがこの計画の最も重要な特徴の1つである。(Dewey 1876, p.6-7)

絶対配架方式とは、書架に記号を割りあてて、その記号を請求記号として使うという方式である。つまり、各図書は書架の特定の場所に固定される。そのため、固定配架方式とも呼ばれる。それに対して相対配架方式とは、請求記号として分類記号を利用する方式である。したがって、相対配架方式における請求記号は書架の特定の場所を意味していない。書架上の相対的な位置を示すだけである。

この相対配架方式の利点をDeweyは2つあげている。第1は、書架の配置換えをしても請求記号のつけ直しをしなくてすむという点である。絶対配架方式では請求記号と書架記号は1対1の関係にあるので、蔵書量の増加や書庫の増設などで図書の配置換えを行うと請求記号も換えなければならない。これは目録を作りなおすことを意味する。

この目録の作りなおしはとても費用がかかるので、少数の非常に裕福な図書館を除いては実施が不可能である。この[相対配架]方式では、書架の並べ方や建物、それに図書の配置に変化があっても、目録と図書記号はそのままである。(Dewey 1876, p.8; []内は引用者)

相対配架方式の第2の利点は、関連する主題の図書を近くを集めることができるということである。絶対配架方式では主題に関係なく配置されるので、内容的に同じか似ている図書が書架上で分散してしまう。

こうして、[相対配架方式では]ある主題の図書はすべて同じ場所でみつけることができ、どのような追加や変更もそれらを分離することはない。その主題に関するすべての図書をまとめて探しだすことができるだけでなく、その主題に最も関連のある主題の図書をその前後で見つけることができるし、さらにそれらに関連のあるほかの主題についてもその前後で探すことができる。(Dewey 1876, p.7; []内は引用者)

今日ではあたりまえのこの相対配架方式を、絶対配架方式が支配的であった当時において実現したという点に DDC 成立の最大の意義があるといえよう。

このように、図書館分類法における DDC の歴史的意義は大きいですが、DDC の体系のすべてが Dewey の独創によるというわけではない。Dewey は DDC の考え方の源について次のように説明している。

いまではいちいち謝辞を述べることはできないが、この問題について様々な文献を読み、手紙のやりとりをし、議論を交わす中で示唆を受け、アイデアを得たことは疑う余地がない。おそらく、最も実りの多い考え方の源は、ミラノの Natale Battezzati による *Nuovo Sistema di Catalogo Bibliografico Generale* であろう。そこから何も模倣してはいないが、1871 年にイタリアの出版社が採用したこのシステムに恩恵を被っていることは確かである。セントルイス・パブリックスクールの図書館およびニューヨーク徒弟図書館の分類体系は、私のものとある点では似ているが、公開されてはいないので、基本的な性格が決まるまでみたことはなかった。9 つの類を並べる際に、セントルイス図書館の逆ベーコン型配列(inverted Baconian arrangement)に従った。先行の分類法が存在するいかなる部分についても、著者の独創を主張するつもりはない・・・。(Dewey 1876, p.10)

ここで最初にあげられている Battezzati の *Nuovo Sistema* は、いわゆるフランス方式である J.-C. Brunet の体系に基づいていた(Comaromi 1976b)が、Dewey が採用したのはフランス方式ではなかった。フランス方式の分類法とは、17 世紀の G. Naudé による分類法(Naudé 1627; Naudé 1643)に端を発すると言われている。Naudé の分類法は当時の大学の学部構成を反映している。フランス方式の集大成が 19 世紀前半の Brunet による分類(Brunet 1810)である。DDC 第 1 版以前の分類法は、フランスやイギリスではいわゆるフランス方式(French system)と呼ばれる分類法が主流であり、アメリカではフランス方式とともにベーコン方式

(Baconian)の分類法が大きな影響力をもっていた(Shamurin 1955-59)。ベーコン方式の分類法とは、17世紀のF. Baconによる著作『学問の進歩』(Bacon 1605)に示されている学問分類に基づく分類法である。彼は、まず、人間の知力による学問と神の啓示による学問(啓示神学)とに分けた。人間の知力による学問は、「人間の知力」を第1区分特性として3つに区分される。それは記憶力、想像力、理性で、各々に対応して歴史、詩、哲学に大別される。このBaconの「人間の知力による学問」の分類は、後にD. DiderotとJ. R. d'Alembertによる『百科全書』(Diderot and D'Alembert 1751-80)の項目立てに使われる。

中世以来の伝統的な大学の学部構成に基づくフランス方式の分類法がフランスやイギリスといったヨーロッパで主流となっていたのに対して、「学問の進歩」を主張するBaconに始まり、フランス啓蒙主義の象徴ともいえる『百科全書』にも採用されたベーコン方式の分類法が、アメリカの図書館分類法に大きな影響を及ぼすことになる。特に重要なのは、DDCが基にしたとされるW. T. Harrisの分類法(Harris 1870)である。

Deweyが第2にあげている分類法が、セントルイス・パブリックスクール図書館の分類法、すなわち、Harrisの分類法である。上述のDeweyの引用文の中で"9つの類を並べる際に、セントルイス図書館の逆ベーコン型配列に従った"と述べられているように、DDCのメインクラスの配列はこのHarrisの分類法の配列を基にしている。DDCが十進法を採用しているのに対して、Harrisの分類法では全体が100に区分されている。また、Harrisの分類法では付録という項目が最後に(98-100)におかれているが、DDCではこれに対応する項目が最初(0)におかれている(Harrisでは「その他」的な扱いであったものが、DDCでは「総合」的な位置に格上げされている)。こうした相違はあるが、DDCはHarrisの分類法の配列順序を踏襲しているのだから、ベーコン方式であるといえることができる。

Deweyが第3にあげているニューヨーク徒弟図書館の分類法は、J. Schwartzが1871年から開発を始め、1873年には図書館の蔵書に適用し(La Montagne 1961, p.188-189)、1879年に完成したものである(Schwartz 1879)。DDC第1版が1876年出版であるから、Deweyは完成する前のものをみたのかもしれない。Schwartzの分類法には21のメインクラスがある。そして、メインクラスB, C, E, H, O, U, Vは「歴史(History)」, D, F, K, L, P, R, Wは「文学(Literature)」, A, G, J, M, N, S, Tは「科学(Science)」の3つの領域に該当すると説明している。これはベーコン方式といえよう。メインクラスの分類記号にはアルファベットの大きい文字が使われている。このアルファベットは分野名の頭文字となっており、Schwartzはこれを助記性(mnemonic system)と呼んでいる。メインクラスの下位

のサブクラスは9に区分され、分類記号には1から9までのアラビア数字が使われている。しかも、サブクラスも項目名のアルファベット順に並べられ、ここでも助記性が維持されている。

以上でみてきたように、Deweyがあげている3つの分類法のうち、Battezzatiの分類法はDDCの体系に影響を与えていないようである。一方、Harrisの分類法とSchwartzの分類法はともにベーコン方式であり、特に、Harrisの分類法の項目の順序はDDCのメインクラスの順序と非常によく一致している。さらに、Harrisの分類法とSchwartzの分類法の分類記号にはアラビア数字が使われている。特に、Schwartzの分類法はサブクラスが1~9の9区分である。

Deweyの先の引用文(Dewey 1876, p.10)で、"公開されてはいないので、基本的な性格が決まるまでみたことはなかった"と述べてはいるが、その一方で、"様々な文献を読み、手紙のやりとりをし、議論を交わす中で示唆を受け、アイデアを得たことは疑う余地がない"とも述べているので、Harrisの分類法とSchwartzの分類法から大きな示唆を得ていることは間違いないように思われる。ただし、J. P. Comaromiは慎重に以下のように結論づけている。

もし・・・ほかの要因、すなわちDeweyの才能が加われば、この2つの方法(Harrisのアラビア数字とSchwartzの十進法による細分)が一緒になって、というよりはそれぞれ別々に、Deweyに影響を及ぼすことができたかもしれない。もちろん、Deweyが彼の構想をひとりで考えついたという可能性はいつまでも残るが。(Comaromi 1976a, p.15)

3.1.2 Expansive Classification

(1)概要

C. A. Cutterが作成したEC(Cutter 1891-93)は、図書館の規模に応じて使い分けられるように、項目の詳細さの異なる7つの分類表で構成される。第1分類表(First Classification)は、A, B, E, F, G, H, L, X, Y, Y_Fの10項目(9つのクラスと1つのディビジョン)のみからなる(図 3-16)。Y_F(小説)はY(文学)の下位項目(ディビジョン)である。各項目にこれ以上の細目はない。第2分類表(Second Classification)では、第1分類表の10項目にH, M, Q, R, V, Wを加えて16項目としている(15のクラスと1つのディビジョン)。第3分類表(Third Classification)以降、クラスとディビジョン、およびそれらの下位項目が順に増加していく。

FIRST CLASSIFICATION.

For a very small Library.

A Works of reference and works of a general character covering several classes

Includes such works as are usually kept in the Delivery Room or the Reading Room for the free use of the public, such as the best dictionaries of languages and other subjects; encyclopædias, both general and special, handbooks of dates, dictionaries of biography and peerages, gazetteers, manuals of statistics, books of quotations, concordances, etc.

B Philosophy and Religion

Includes Moral philosophy.

E Historical sciences

Includes Biography, History, and Geography and Travels.

H Social sciences

Includes Statistics, Political Economy, Commerce, the Poor, Charity, Education, Peace, Temperance, the Woman question, Politics, Government, Crime, Legislation, Law.

L Sciences and Arts, both Useful and Fine

X Language

Y Literature

Includes Literary history, Bibliography, and the arts that have to do with books.

YF Fiction

To save time it is not unusual to omit the class-mark of the class Fiction, calling for and charging novels by the book-mark alone.

But it is better to divide History into three classes, thus:

E Biography

To be arranged in the order of the persons whose lives are told. On distinguishing between the collective and the individual works see, forward, "The method of arranging biography."

F History

History includes the allied subjects: Antiquities, Inscriptions, Numismatics, Chivalry and Knighthood, Heraldry, Peerage.

G Geography and Travels.

It will be noticed that there are gaps in the alphabetic order of the letters used. C, D, I, J, K, M-W, and Z are not employed. The reason for this will appear later.

How the scheme works may be better understood from

図 3-16 EC の第 1 分類表(Cutter 1891-93)

(2)構造

EC は階層構造の分類法である。第 1 分類表では Y(文学)と Y_F(小説)の間の階層

関係しか存在しないが，第 2 分類表では F と G を階層構造的に展開している(図 3-17)。

F	History
F 30	Europe
F 39	France
F 45	England, Great Britain
F 47	Germany
F 60	Asia
F 70	Africa
F 80	America
F 83	United States
G	Geography and Travels
G 30	Europe
G 39	France
G 45	England
G 47	Germany
G 60	Asia
G 70	Africa
G 80	America
G 83	United States

図 3-17 EC の第 2 分類表における階層構造の例(Cutter 1891-93)

(3)合成表示

第 3 分類表以降に合成表示がでてくる。合成には本表の記号に補助表の記号を合成する場合と，本表どうしの記号を合成する場合がある。

a)補助表を使う合成

①地理区分の補助表を使う合成

分類表全体の特定の項目の下で，地理区分の補助表(Local List : 図 3-18)を使うことが指示されている。

LOCAL LIST.	
.....	
SYNOPSIS.	
The World 11	
Zones (running East and West) 13, 14	
Lunas (running North and South) 15-29	
Continents 30-99	
Europe 30	
Asia 60	
Africa 70	
America 80	
.....	
67	Japan
68	Further India
68r	East Indian Archipelago
6811	Philippines

図 3-18 EC の地理区分の補助表(Cutter 1891-93)

指示の表現は様々で、「use the full place list」、「with the place list」、「with the local list」、「marked from the local list」、「the local list may be used」、「subdivided by local list」などがある。たとえば、EC 第 4 分類表の「G 地理および旅行(Geography and Travels)」には下位項目がなく、「use the full place list」という指示だけがでている。したがって、「日本の地理」という主題は、「G」と地理区分の補助表の「67 日本」を合成して「G67」となる。

地理区分の補助表は非常に詳細で、DDC には第 16 版まで本格的な補助表がないのに比べると、EC の補助表は充実しているといえる。

②文学形式区分の補助表を使う合成

文学(Y)および文学史(Zy)の下で、文学形式区分の補助表(Form List : 図 3-19)を使うことが指示されている。たとえば、EC 第 7 分類表の「Yv ドイツ文学」に文学形式区分の補助表の記号「F 小説(Fiction, Novels)」を合成すると、「YvF ドイツの小説」となる。

FORM LIST FOR COLLECTIONS	
E	<p>Essays, Lectures, etc.</p> <p><i>Ans, Thoughts, etc., may be put here or in BA.</i></p> <p><i>Volumes of essays, lectures, etc., that are sufficiently homogeneous to be put in any subject class should go there, even if they are not entirely confined to that one subject.</i></p>
F	<p>Fiction, Novels</p> <p><i>In English at least this division should include single authors, whether the other form divisions are confined to collections or not.</i></p> <p><i>For economy of marks, the large class English fiction (Y:F) may be left, without class mark, as Y:2257 Thackeray's Vanity Fair. Or an arbitrary mark (V for instance) may be substituted for Y:F with the omission of the size-mark for octavo.</i></p> <p><i>Religious fiction may be put in Ckz, but this separation is not recommended, being of little use and difficult of execution.</i></p>
G	<p>English translations of foreign fiction</p> <p><i>It is better to put these in Y:F in the same alphabet as the English novels, or, more scientifically but less conveniently for popular use, with their originals under the various literatures, in which case they will take the -E (for English) in the author mark, e. g.</i></p> <p><i>Yv:SA65p:E George Sand's La petite Fadette.</i></p>

図 3-19 EC の文学形式区分の補助表(Cutter 1891-93)

ただし、「ドイツ文学」という主題は「Yv」ではなく、「Y 文学」に地理区分の補助表(図 3-18)の「47 ドイツ」を合成して「Y47」とすることもできる。その場合、「ドイツの小説」は「Y47」に文学形式区分の補助表(図 3-19)の記号「F 小説」を合成して「Y47F」となる。このように、目録作成機関によってどの方法を採用するか自由度が与えられている。これは他の項目や補助表についても同様である。

③任意の記号による細分

特定の項目の下で、任意の記号を使って細分することが指示されている。記号の例が示されている場合と示されていない場合がある。

例が示されている場合：

方言(Yz)の下で、「divide alphabetically e.g. YzD ドーセットの方言」

例が示されていない場合：

「alphabetically arranged」, 「arrange alphabetically by the name of」,
「arrange chronologically」など

これらの記号はあらかじめ表の形で用意されているわけではないが、仮想的な表があるとみなすこともできる。つまり、バーチャルな補助表による合成とみることができる。

b)本表どうしの記号の合成

「～と同様に区分しなさい」という指示による合成がある。特定の項目の下で、「to be divided like」, 「use the same place divisions as」, 「marked as other languages」, 「for particular periods see the Seventh Classification」, 「add the class-mark of the subject」, という指示がある。いずれも「～と同様に区分しなさい」という意味だが、表現はさまざまである。たとえば、EC 第3分類表の「F 歴史と関連主題(History and subjects allied)」は「G 地理と旅行」と同様に場所で区分する(図 3-20)。「イタリア(の地理と旅行)」という主題は「G35」であるから、「イタリアの歴史」は「F35」となる。これは、「F」に「35」を合成したことになる。

F	History and subjects allied
F 02	Ancient history, generally
F 03	Modern history, generally
F 04	Medieval history, generally
	Use the same place divisions as in Geography and Travels (G).
G	Geography and Travels
G 30	Europe
G 32	Greece
G 35	Italy
G 36	Rome, Roman Empire
G 38	Switzerland
G 39	France
G 40	Spain and Portugal
G 45	England, British Empire
G 46	Netherlands

図 3-20 EC の「～と同様に区分しなさい」の例(Cutter 1891-93)

(4)記号法

DDCと同様に、ECは単一要素からなる記号法を用いており、補助表や「～と同様に区分しなさい」という指示によって記号を合成しても、合成された記号はやはり単一要素からなることに変わりはない。したがって、複合的な主題への対応は十分には満たされていない。

(5)ファセット概念

DDCの場合もそうであったが、地理区分や文学形式区分の補助表は地理や文学形式という区分特性による項目をリストしているの、一種のファセットとみなすことができるであろう。ただし、DDCにみられた区分特性の明示(見出しや中間見出し)は、ECにはみあたらない。

(6)作成の経緯

EC作成の経緯について、Cutter(1879)は以下のように説明している。

この計画に沿って、おそらく独立に考案された、いくつかの方式が複数の人々によって使用されているが、最初にアマースト大学で使われた Dewey 氏の可動式の十進法[DDC 第 1 版]が最も広く知られている。私はそれを自分の図書館[ボストン・アテニアム図書館(Boston Athenaeum Library)]に適用しようとした。しかし、しばらくして不適合であることがわかった。というのは、詳細に分類しようとする[記号の桁の]数が非常に多くなってしまふからである。また、クラスの数を 10 に限定し、その細目もそれぞれ 10 に限定するのは、分類作業者の心に窮屈感を与え、主題を十分に展開することを妨げると私には思われたからである。他の人たちもこの印象を共有していることを知り、また特に、もっと大きな基数(10 の数字の代わりに 26 文字のアルファベット)を自分で試したときでさえ窮屈感を感じるようになったので、この印象に確信をもった。そのため、文字に加えて 0-9 の数字を・・・[書誌や歴史などのいわゆる総記類に]・・・使用しようと考えた。・・・この結論を出したときに、Dewey 氏がもっとよい方法を考案した。彼は、文字と数字を区別なく使うことによって、1, 2, ～ 8, 9, a, b, ～ x, y, z の順に割り振られた 35 のクラスができ、さらに必要ならば、各クラスに 35 のディビジョンをつくることができると示唆したのである。(Cutter 1879, p.236)

ここで述べられているように、DDCは各区分を10に限定しているが、実際には10以上の区分を必要とする場合もあり、自然な区分ができない。そこで、ECでは数字とアルファベットを組合せて基数を大きくした。DDCが十進という体系

の「わかりやすさ」を重視したのに対して、EC では対象の区分の「適切さ」を重視したといえよう。"Dewey は分類そのものよりも付随的な要素である記号法に関心をもっていた"(La Montagne 1961, p.180)のである。それに対して、Cutter は「分類そのもの」に関心をもっていた。ここでみたように、対象を適切に区分できるようにすることがその1つの現れである。

もう1つは、項目の配列順序についてよく検討したことである。

記号を選択したら、次の段階は35のクラスを選定し、それらの順序を決めることである。・・・数多くの体系を試しては退けることを続けた後、図書館のどの箇所を利用している人でも、彼が最も利用したいと思う図書[が複数]のクラス[にまたがっていてもそれら]を同時に手にとれるようにするために、実際的に関連のあるクラスが一緒になるようにグループ分けするべきであるという一般理論を設定した。この考えはいつでも実行できるわけではない。なぜなら、3つや4つのクラスと密接に関連するクラスも存在し、当然、そのうちの2つの間にしか入れられず、この2つ以外との関連は無視せざるを得ないからである。しかし、それ[一般理論]は私の体系に強い影響を及ぼしている・・・。(Cutter 1879, p.237)

このように、関連する項目をできるだけ近いところに集めるために苦心をしている。項目の配列順序への関心はこの後の分類法にも引き継がれていく。

なお、EC 自体は改訂版が出ていないが、LCC の基礎としてその考え方が受け継がれている。LCC は1897年のアメリカ議会図書館の移転の際にあらたに考案され、1899年に最初の大綱が公表されている。1897年時点でのアメリカには、DDC 第5版(Dewey 1894)とEC(Cutter 1891-93)が主要な分類法として存在していた。LCC は、DDC ではなく EC を基礎にして作成された。Cutter も1903年に亡くなるまでLCC の作成に参加していた。LCC が EC を基礎にしていることは、記号が階層性を表現していないこと、Cutter が考案したカッター記号を利用していることに反映されている。さらに、メインクラスの配列順序も EC とよく一致している。EC では哲学・歴史・社会科学の部分と言語・芸術の部分が離れているのに対し、LCC では2つの部分を一続きにして人文・社会科学関係の分野を1つにまとめ、自然科学・技術関係の分野の前に配置した点を除けば、両者の配列はよく一致している。

3.2 記号が独立要素からなる分類法

3.2.1 Universal Decimal Classification

(1)概要

UDC は、もともとは図書館のための分類法ではなく書誌のための分類法として、P. Otlet によって DDC を拡張することで作成された。UDC 第 1 版(UDC 1905-07)が完成するのは 1905 年から 1907 年にかけてである。UDC 第 2 版(UDC 1927-33)もフランス語で出版され、UDC 第 3 版(UDC 1934-53)はドイツ語、UDC 第 4 版(UDC 1936 ; UDC 1943-)は英語で出版された。基本的に版による内容の相違はほとんどない。以下では、UDC 第 4 版英語版の例を使用する。

UDC はメインクラスの表と補助表とからなる(日本語では主標数と補助標数と訳されることが多いが、英語では Main Classes と Auxiliary Classes であるから、ここでは他の分類法の訳語と合わせた)。UDC のメインクラスは基本的に DDC のメインクラスと同じである(図 3-21)。メインクラスの細目は DDC と同じように階層構造的に細分されている。

0	Generalities. Bibliography. Library Science
1	Philosophy
2	Religion
3	Social sciences. Law
4	Philology
5	Pure Science
6	Applied science. Medicine. Technology
7	Art
8	Literature
9	History. Geography. Biography

図 3-21 UDC 第 4 版のメインクラス(UDC 1936)

ここまでは UDC と DDC の体系はほぼ同じである。しかし、大きな相違点が 2 つある。1 つは、UDC 第 1 版が作成された 1905 年から 1907 年には、DDC は第 6 版(1899 年)で合成機能がほとんどなかったのに対して、UDC には合成機能が大幅にとり入れられている点である。もう 1 つは、多次元構造と自由構造の要素がとり入れられた点である。

合成表示はいずれの構造でも可能で、記号を合成するという点では同じであるが、階層構造を維持したまま記号を合成するか、それとも、多次元構造的あるいは自由構造的に合成するかという相違がある。UDC の合成表示には、階層構造的、

多次元構造的，自由構造的のすべての種類がある。そこで，前節とは逆の順になるが，合成表示を先に検討し，その後で構造について検討することにする。

(2)合成表示

UDCにおける記号の合成は，メインクラスの記号への補助表の記号の合成と，メインクラスの記号どうしの合成がある。

a)補助表を用いる合成

①共通補助表(common auxiliary)による合成

共通補助表には，「言語 =」，「形式 (0)」，「場所 ()」，「時間 < >」，「観点 .00」がある(図 3-22～図 3-26)。補助表名の後の記号はメインクラスの記号と合成する際の連結記号である。

Table of Subdivisions of Language.	
=00	Polyglot
=083	Modern languages
=089	Artificial languages
=20	English
=202	Anglo Saxon. Old English
=30	German
=393	Language of the Netherlands. Dutch
=393.6	Afrikaans
=396	Norwegian
=397	Swedish
=398	Danish
=40	French
=490	Provençal

図 3-22 UDC 第 4 版の言語の共通補助表(UDC 1936)

(0: ...)	General subdivisions of Form
(02)	Books in which the subject matter is arranged systematically. Treatises
(03)	Books in which the subject matter is arranged alphabetically. Encyclopædias. Dictionaries
(04)	Brochures. Discourses. Letters. Essays. Regulations. Indexes. Notices
(05)	Periodicals. Newspapers. Reports of Societies. Annuals. Directories
(06)	Publications by Societies
(07)	Didactic works. School books
(08)	Polygraphs. Collected works
(09)	Historical works. Original sources of historical and legal information

図 3-23 UDC 第 4 版の形式の共通補助表(UDC 1936)

- (1) Indications of situation in general
- (100) Universal as regards place
- (.) Boundaries of various kinds
- (2) Physical localities
- (3/9) Political localities
- (3) Places in the ancient world
- (4/9) Contemporary place names
- (4) Europe
- (5) Asia
- (6) Africa
- (7) North America
- (8) South America
- (9) Oceania. Arctic regions. Antarctic regions

図 3-24 UDC 第 4 版の場所の共通補助表(UDC 1936)

Centuries and decades are indicated by the use of two and three figures respectively.
 E.g. «03» *The fourth century A. D.*
 «19» *The twentieth century*
 «180» *The decade from 1801 to 1810*
 «192» *The decade from 1921 to 1930*

図 3-25 UDC 第 4 版の時間の共通補助表(UDC 1936)

- .001 Theoretical point of view
- .002 Executive point of view
- .003 Economic and financial point of view
- .004 Point of view of application and utilization
- .005 Point of view of installation and equipment
- .006 Point of view of space and locality
- .007 Point of view of the staff
- .008 Point of view of organization
- .009 Social and moral point of view

図 3-26 UDC 第 4 版の観点の共通補助表(UDC 1936)

それぞれの例を以下に示す(下線部が補助表の記号)。

- 622.33≡2 炭坑業に関する英語の著作 [言語]
- 622.33(021) 炭坑業ハンドブック [形式]
- 622.33(42) 英国の炭坑業 [場所]
- 622.33"18" 19 世紀の炭坑業 [時間]
- 622.33.004.8 炭坑業からの副産物の導出 [観点]

これらの合成は原則として連結順序は自由だが、意味が異なる可能性がある。たとえば、「622(02)"17"」は「18世紀に出版された炭坑業に関する図書」であるが、「622"17"(02)」は「18世紀の炭坑業に関する図書」である。

②分析的細分(analytical subdivisions)

これは、現在では固有補助表(special auxiliary tables)と呼ばれているものである。共通補助表は原則としてどの項目にも合成できるが、分析的細分は特定の項目にだけ適用できる。「テンゼロ .0」 と「ハイフン -」の2つがある。たとえば、

622.33.04 炭坑の採掘跡 [テンゼロ]

622.33-78 炭坑の安全装置 [ハイフン]

などである(下線部が分析的細分による記号)。この例では、どちらも「622.33」の下でのみ合成が可能である。

③文字による細分

地名、人名などを表す文字を付加(合成)することで細分することができる。たとえば、

622.33Penistone ペニストーン炭坑 [文字]

などである。これは特に表が用意されているわけではないが、地名や人名などのバーチャルな表があると考えれば、補助表による合成とみなすことができる。

b)メインクラスの記号どうしの合成

①補助記号による合成

メインクラスの記号どうしを「+」(併置)、「/」(拡張)、「:」(関係)という3つの記号で合成することができる。「拡張」は連続した3つ以上の項目を「併置」する場合に使用し、最初と最後の項目をスラッシュ(/)で結ぶ。たとえば、

622.33+662.74 石炭の採掘と炭坑労働 [併置]

622.33/.34 石炭と鉱石の採掘 [拡張]

622.33 : 338.97 炭坑業の経済的危機 [関係]

などである。「+」と「:」による合成は順序によらず意味は同じである。たとえば、「622 : 51」と「51 : 622」はどちらも「採鉱技術への数学の応用」を意味している。

②「～と同様に区分しなさい」による細分

特定の項目の下に、「～と同様に区分しなさい(subdivide as, subdivied like, subdivied analogously to)」という指示がみられる。たとえば、「029.9 情報源」の下に「093/095 と同様に区分しなさい」という指示がある。

(3)構造

(1)項で述べたように、UDC の合成表示には階層構造を維持したまま記号を合成するものと、多次元構造的または自由構造的に合成を行うものがある。

a)階層構造を維持する合成表示

まず、補助表による合成のうち、観点の共通補助表(図 3-26)、分析的細分(テンゼロとハイフン)、文字による細分(バーチャルな補助表)は階層構造を維持した合成である。(2)項であげた例を以下に再掲する。

622.33.004.8 炭坑業からの副産物の導出 [観点]

622.33.04 炭坑の採掘跡 [テンゼロ]

622.33-78 炭坑の安全装置 [ハイフン]

622.33Penistone ペニストーン炭坑 [文字]

いずれもメインクラスの記号「622.33 炭鉱業」の後に合成され、本表の記号を細分化している。すなわち、DDC や EC の補助表による合成と同じで、メインクラスの記号を階層構造を維持したまま補助表の記号で細分した形になっている。

次に、メインクラスどうしの記号の合成のうち、「～と同様に区分しなさい」という指示による合成は、階層構造を維持したままの合成である。これも、DDC や EC と同様である。

b)多次元構造的な合成表示

まず、共通補助表のうち、「言語 =」(図 3-22)、「形式 (0)」(図 3-23)、「場所 ()」(図 3-24)、「時間 < >」(図 3-26)が多次元構造的な合成に使われる。以下に、(2)項であげた例を再掲する。

622.33=2 炭坑業に関する英語の著作 [言語]

622.33(021) 炭坑業ハンドブック [形式]

622.33(42) 英国の炭坑業 [場所]

622.33"18" 19世紀の炭坑業 [時間]

たとえば、メインクラスの記号「622.33 炭鉱業」に、形式の共通補助表の記

号「(021)ハンドブック」を合成して、「622.33(021)炭鉱業ハンドブック」とすることができる。しかし、622.33 と(021)は必要な場合には順序を入れかえて「(021)622.33 炭鉱業ハンドブック」とすることもできる。これは、たとえば図書館の蔵書を分類記号順に配架する際に、ハンドブック類を 1 カ所に集めたい、というような場合に適用される。メインクラスの区分特性は学問領域であり、形式の共通補助表の区分特性は資料の形式である。区分特性の適用順序を問わないのが多次元構造である。したがって、この合成は多次元構造的といえる。言語、場所、時間の共通補助表による合成についても同様である。

ただし、メインクラスの記号に 2 つ以上の共通補助表の記号を合成する場合は、その順序によって意味が異なる場合がある。(2)項でみた例を再度示すと、「622(02)"17"」は「18 世紀に出版された炭坑業に関する図書」であるが、「622"17"(02)」は「18 世紀の炭坑業に関する図書」という場合である。したがって、区分特性の適用順序がまったく自由というわけではなく、多次元構造が一部制限されている。

c)自由構造的な合成表示

UDC の合成表示には、もう 1 つ、自由構造をもたらすものがある。それは、補助記号による合成で、「併置」、「拡張」、「関係」の 3 つである。(2)項であげた例を以下に示す。

622.33+662.74 石炭の採掘と炭坑労働 [併置]
622.33/.34 石炭と鉱石の採掘 [拡張]
622.33 : 338.97 炭坑業の経済的危機 [関係]

たとえば、メインクラスの記号「622.33 炭鉱業」と「338.97 経済危機」との間に、「関係」の記号「:」を連結記号として挿入すると、「622.33 : 338.97 炭坑業の経済的危機」となる。「:」による合成は順序によらず意味は同じである。いまの例では、「338.97: 622.33」としても意味が変わらない。したがって、この合成は階層構造的ではない。また、「622.33 炭鉱業」と「338.97 経済危機」のどちらもメインクラスの記号であり、同じ区分特性による項目である。したがって、異なる区分特性の項目を組み合わせることによってできる多次元構造でもない。本項ではこのような構造を自由構造と呼んでいる(2.3.3 項参照)。「併置」についても同様である。「拡張」に関しては、メインクラスの記号どうしの合成であり、階層構造的でもないが、順序を入れかえることはできないので、自由構造がいくらか制限されている。

(4)記号法

UDCでは独立要素からなる記号法が採用されている。それは、多次元構造的な合成表示に使われている共通補助表による合成「言語 =」,「形式(0)」,「場所()」,「時間 < >」,それに、自由構造的な合成表示に使われている補助記号による合成「併置 +」と「関係 :」である。これらの合成では、連結記号によって記号がいくつかの要素に分けられ、各要素はお互いに独立している。ただし、多次元構造的な合成表示の説明で述べたように、要素の順序によって意味が異なる場合は、後の要素は前の要素に従属しているということだから、完全に独立しているとはいえない場合もある。このような多少の制限があるとはいえ、19世紀に作成されたDDCやECでは使われていなかった独立要素からなる記号法を、なぜUDCでは導入したのであろうか。

Otletは世界書誌のための分類法としてDDCを拡張して使うことを提唱し、最終的にUDCを作成した。UDC第1版が完成するのは1905年から1907年にかけてであるが、1895年の段階である程度構想ができていた。ここでは、1895年のOtletの論文(Otlet 1895-96)に基づいてその基本的な考え方を検討する。

Otletは従来の分類法(DDCなど)の2つの問題点を指摘する。第1の問題点は、複合的な主題の位置づけである。

・・・[従来の分類法は]執筆することが可能なすべての主題をクラス、ディビジョン、セクションに区分した膨大な略図である。これは分類されるべき主題が完全に列挙されているにしても、次の重要な問題がある。すなわち、分類は異なる視点から行うこともできるし、各主題の位置づけをまったく異なる方法で同じように満足に行うことも可能である。(Otlet 1895-96, p.51)

これを具体例でみると、「民法、結婚、英国の法制度」という3つの主題で表現される著作は、(a)国によらず結婚に関するすべての著作をまとめて集める、(b)制度によらずに英国の法制度に関するすべての著作をまとめてみつける、というように目的によってどの主題の下に位置づけるべきかが異なる。しかし、従来の分類法ではどこか一箇所にしか位置づけることができない。

従来の分類法の第2の問題点は、細目の展開が右端にしかできないことである。

[従来の分類法の]分類番号は、単純な数字を並置することによってより一般的な観念をより特定化する、一種の[記号の桁の]展開によって形成される。実際、これが分類番号の構造の最も基本的な形である。(Otlet 1895-96, p.52)

たとえば、以下のように書いたとしよう。

591.1 生理学的動物学

591.14 軟体動物の生理学的動物学

後に生理学的動物学を，種ではなく，循環系，呼吸系，神経系といった生理学の主要な主題で区分する方が適切であると考えたとき，この方法ではそれができない。(Otlet 1895-96, p.53)

この最後の部分は，「生理学的動物学 591.1」の下位項目は動物の種類(たとえば，軟体動物)で区分されているので，生理学の主題(たとえば，呼吸系)では区分できない，ということである。これは，2.3.3節でみた，単一要素からなる記号法での細分の説明と同じである(図 2-18)。

この両方の問題に対する解決策は，分類法の記号に単一構造ではなく複合構造をもたせればよい，というものである。

・・・地理的，歴史的，形式的カテゴリーといった，分類のあらゆる部分に存在するいくつかの基本的観念があることにすぐに気がつくであろう。・・・また，分類の中のどの個別の区分肢においても，規則的に繰り返す項目がある。たとえば動物学では，それぞれの種を，解剖，進化，奇形・異常形成，形態，経済的有用性といった観点から想定することができる。

・・・分類番号は，あたかも話し言葉の中の複合語のように，異なる要素からなり，それぞれの要素の意味が並置されて複合的な観念を表現する，複雑な数的記号である。もし，地理的カテゴリーで英国はいつも(42)という記号で表現され，この記号がすべてまたは一部の分類番号に直接結合することができるなら，上記の問題は完全に解決される。(Otlet 1895-96, p.52；下線は引用者)

ここではまず，分類の多くの箇所に出現する基本的観念・規則的に繰り返す項目があることを指摘している。分類はこうした要素からなる複合構造をもつというわけである。そして，記号法もそれを反映して各要素の記号からなる複合構造という形をとれば，上記の問題は解決されると主張している。

・・・このような記号法の手法を一般化することが有用であることは明らかである。[①]まず，この手法は助記性をおおいに高める。[②]次に，この手

法は分類番号の理解しやすさを増進させる。なぜなら、外見の構造の構成要素を一瞥するだけで、全体の観念を形成している個々のさまざまな観念が明らかになるからである。[③]これらの要素は、いったんお互いに明確に区別がつけば、多様な組合せを形成することができる。・・・

実際、括弧つきの(42)=英国は、理論的にどの分類番号とも結合することができるため、数千の新しい下位項目を作ることができる。[④]この手法を続けることの最後の利点は、各構成要素の個別性を維持することで、同じ観念に対して、ある人は主の要素であると思い、他の人は従属的な要素であると思うのに応じて、異なる記号法が可能になるということである。すなわち、要素が交換可能なため、以下の3つの分類番号の意味は維持されている。

(42)347.62 347.62(42) 347(42)62

(Otlet 1895-96, p.52-53; 下線と丸つき番号は引用者)

この最後の④は、従来の分類法の第1の問題点(複合的な主題の位置づけが困難)に対する利点である。第2の問題点(細目の展開が右側にしかできない)に対する利点は③であるが、Otletは、"さらに、要素による記号法は、将来の要素ごとに独立した拡張を可能とする"(Otlet 1895-96, p.53; 下線は引用者)と述べた上で、先ほどの「生理学的動物学 591.1」の例を使って説明をしている。すなわち、この下位項目「軟体動物の生理学的動物学」を従来の分類法のように「591.14」と表記するのではなく、「591.1:954(生理学的動物学:軟体動物)」と表記しておけば、「591.11:9545(生理学的動物学,呼吸系:軟体動物,頭足類)」というように、生理学で細分する(591.11)ことも、動物の種類で細分する(9545)ことも可能である、というわけである。これは、2.3.3節でみた、独立要素からなる記号法での細分の説明と同じである(図 2-19)。この③と④は、記号が構成要素ごとに独立していることからくる利点である。このように、複合的な主題に対応するためには独立要素からなる記号法が必要であることを、Otletは明確に認識していた。

さらに、Otletの考える分類法(分類記号に構造をもたせる方法)の利点としてあげられている①は助記性である。Deweyも合成表示をすることによって助記性が高められると述べていた(3.1.1節)が、Otletも助記性の重要性を指摘している。助記性の問題については3.4節で考察する。

(5)ファセット概念

「言語」、「形式」、「場所」、「時間」、「観点」の各共通補助表は、それぞれの区分特性による項目をリストしている。したがって、これらはファセットとみなすことができるであろう。これらの補助表は19世紀に作成されたDDCやEC補助

表よりも種類が増えている。

(6)作成の経緯

UDCは、OtletとH. La Fontaineが世界中の記録された知識の書誌(世界書誌)を作成する際に、DDCをフランス語に翻訳して書誌のための分類法として利用しようとしたことに始まる。1895年の第1回国際書誌会議で、世界書誌の連合体をつくることが提案され、その書誌のための分類法としてDDCを使うことが推奨された(根本1981)。ただし、当時のDDCは1894年の第5版(Dewey 1894)が最新版で、世界中のあらゆる文献を分類するという目的のためには詳細さが十分ではなく、OtletはDDCを拡張して使うことを提唱した。

しかし、DDCとUDCの関係は微妙である。D. Batty(1981)はこの間の状況を次のように記述している。

OtletとLa Fontaineは、・・・[世界書誌]はアルファベット順に配列するよりも体系的に編成するべきであるという点で合意に達していた。彼らは、真に国際的な体系の基礎になりうるものとしてDewey Decimal Classificationに注目した。DDCは「主題」を記述するという考えに基づいており、国際的に(少なくとも西洋諸国では)通用する記号法を備えている。また、小数方式による区分はいくらでも細分を可能にする。さらに、OtletとLa Fontaineがどれだけ気づいていたかは定かでないが、DDCには、「もの(entity)」が先にきて「こと(activity)」が後にくるというパターンが、多くの場合は暗黙のうちに、ときには明確に存在し、これが合成型のための非常に大きな可能性を提供していたのである。

OtletとLa FontaineはIIB[Institut International de Bibliographe : 国際書誌協会]の索引にDDCを利用するためにDeweyと交渉した。彼らは、それ[DDC]をフランス語に翻訳すること、本表を拡張し真に国際性をもったものにする、図書以外の資料も含めた編成にすることを認めること、の3点を希望した。Deweyは感銘を受け同意に傾いたが、彼の助手たち(特にDorkas Fellows)が原型に対するそのような変更を許容することができなかった。交渉は、ベルギー人たち[Otletたち]が見切りをつけて独自の道をとるまでだらだらと続いた。(Batty 1981, p.126 ; []は引用者)

もともとOtletとLa FontaineはDDCを世界書誌のために利用しようとしただけで、独自の分類法を作成する意図はなかった。Deweyも彼らの行為はDDCのフランス語版をつくることだと考えていた。しだいに両者の食い違いが明確に

なってきたが、どちらも譲らずにあいまいな関係が続いた。そのうちに UDC の英語版を作成するという構想がでてきたが、DDC の側からすれば、UDC は DDC の英語以外の版という位置づけなのだから、UDC の英語版などは認められない。最終的には、1943 年から刊行されている UDC 第 4 版(UDC 1943-)のはしがきに、以下の 2 つの文を入れることで一応の決着がついた。

この Universal Decimal Classification の英語版は、・・・Dewey Decimal Classification の出版者であるニューヨーク州レイク・プラシッドクラブ教育基金の承認を得て出版される。(UDC 1943-, p.2)

UDC は Melvil Dewey が創作した十進分類法を拡張したものである。(UDC 1943-, p.2)

この 2 つの文があるので UDC は DDC から完全に独立したわけではないが、UDC の英語版が承認されたことは、事実上、UDC は DDC と別の分類法であると認められたことになる。

このように、もともとは DDC の翻訳という構想で始まった UDC が、最終的には独立の分類法として発展せざる得なかった理由を、Batty(1976)は次のように説明している。

IIB が DDC との関係を断ち切って UDC を独立に開発したのは、おそらくその当時の DDC 事務局の頑迷さにもよるであろうが、書誌コントロールのための体系を作ろうという IIB の要求にも原因がある。その当時の DDC は、図書館の分類以上のものをほとんど指向していないし、(Melvil Dewey のもともとの意図にもかかわらず)書架分類の域さえもあまり越えてはいなかった。DDC 事務局の職員はすべて激烈な党派心と忠義心の持ち主で、分類法の真の意味での普及と受容を実現しようとしているようには見えなかった。Melvil Dewey 自身でさえ、しばしば、才能のある子供のために常に野心を抱いている親ばかのような話し方をした。その子供は現にカーネギーホールで演奏を「している」というのに。(Batty 1976, p.304)

3.2.2 Bibliographic Classification

(1)概要

H. E. Bliss は、1910年に自身が考案した分類法の概要を論文(Bliss 1910)として発表し、1935年にBCの試作版(Bliss 1935)を、そして、1940年から1953年にかけて完成版(Bliss 1940-53)を公表した。また、BC完成版全4巻のうち、第3巻と第4巻を刊行する前の1952年に第1巻と第2巻の第2版(Bliss 1952)を合冊で刊行している。

BCはメインクラスと補助表とからなる。BC完成版のメインクラスを図3-27に、また、補助表の一覧を図3-28に示す。

MAIN CLASSES		125
A	Philosophy and General Science, including Logic, Mathematics, Metrology, and Statistics.	
B	Physics, including applied physics and special physical technology.	
C	Chemistry, including Chemical Technology, industries; Mineralogy.	
D	Astronomy, Geology, Geography, and Natural History, including Microscopy. <i>Geography here comprises only the General and the Physical.</i>	
E	Biology, including Paleontology, and Biogeography.	
F	Botany, including Bacteriology.	
G	Zoology, including Zoogeography and Economic Zoology.	
H	Anthropology, General and Physical, including the Medical Sciences, Hygiene, Eugenics, Physical Training, Recreation, etc.	
I	Psychology, <i>Alternative is A1, under Philosophy.</i> including Comparative Psychology, and Racial, and Psychiatry.	
J	Education, including Psychology of Education.	
K	Social Sciences: Sociology, Ethnology, and Anthropogeography. <i>Alternative is P; if Religion and Ethics be placed here.</i>	
L	History, Social, Political, and Economic, including Geography, historical, national (political), and Ethnographic; Numismatics and other ancillary studies. Ancient History, Medieval History, and Modern (general).	
M	Europe.	
N	America.	
O	Australia, East Indies, Asia, Africa, and Islands. Geography, Ethnography, and History.	
P	Religion, Theology, and Ethics. <i>Alternative is A3, or K, or Z.</i>	
Q	Applied Social Science and Ethics.	
R	Political Science, philosophy, and ethics, and Practical Politics.	
S	Jurisprudence and Law.	
T	Economics.	
U	Arts: Useful, Industrial Arts, and the less scientific technology.	
V	Fine Arts and Arts of Expression, Recreation, and Pastime.	
W	Philology: Linguistics, and Languages other than Indo-European.	
X	Indo-European Philology, Languages and Literatures.	
Y	English, or other, language and literature; and Literature in general, Rhetoric, Oratory, Dramatics, etc.	
Z	Bibliology, Bibliography, and Libraries. <i>Alternatives are 2 and 34.</i>	

図 3-27 BC 完成版のメインクラス(Bliss 1940-53)

TABLE IV
LIST OF SYSTEMATIC AUXILIARY SCHEDULES

- I Systematic Schedules Applicable thruout the System
- NUMBER
- 1 Numeral subdivisions of any class or section. (p. 132)
Mnemonics, some constant, some adaptable.
 - 2 For Geographical subdivision. (p. 134)
Applicable where requisite under sciences, especially the social sciences, and under Humanities, industries, and arts, but not under History, Human Geography, Ethnography, the languages and the literatures, where other classifications are provided.
 - 2a Schedule 2, expanded. (p. 135)
- II Auxiliary Schedules, Historical and Philological
- 3 For subdivision by Language. (p. 150)
Applicable under Literature, especially for the "forms" of literature, for translations, etc., it may be applied elsewhere instead of Schedule 2, to arts, Modern Philosophy (AD), and to the History of Science.
 - 4 For subdivision by Historical Periods. (p. 151)
 - 4a For subdivision under the History of countries, nations, states, etc., (Vol. II)
 - 4b Supplementary for states, countries, duchies, provinces, cities, and other localities. (Vol. II)
 - 5 For subdivision of the Philology of any Language. (Vol. III)
But for the chief literary languages Schedule 5a is more complete.
 - 5a For the linguistics of the chief literary languages.
 - 5b For the History and Criticism of the Literatures.
 - 5c For the "Forms" of the Literature, especially for collections.
 - 6 For sub-classification under an Author. (Vol. III)
 - 7 For sub-classification under any personage. (Vol. III)
- III Special Auxiliary Schedules
- 8 For sub-classification under Special Chemistry (CI-CR). (p. 254)
 - 9 " " " " Chemical Industries. (p. 278)
 - 10 " " " " Astronomical bodies, planets, etc. (p. 296)
 - 11 " " " " Systematic Botany. (p. 370)
 - 12 " " " " Zoölogy. (p. 421).
 - 13 " " " " Special Diseases. (Vol. II)
 - 14 " Societies, Associations, Institutions. (Vol. II)
 - 15 " Races, Ethnographic studies, Folk-lore, etc. "
 - 16 " Religions, Churches, Sects, etc. (formerly Schedule 10). "
 - 17 " Social Problems, etc., for sub-classification. "
 - 18 " Governments, Courts, Commissions, etc. "
 - 19 " Law, sub-classification of. "
 - 20 " Arts, Technologies, Industries, Trades, Special Business, etc.

図 3-28 BC 完成版の体系的補助表一覽(Bliss 1940-53)

補助表は版によって数も名称も異なる。1910年の論文では、BCはメインクラスの表(main classes)と2つの助記表(mnemonics)からなると説明されている(Bliss 1910)。助記表とはいわゆる補助表のことで、「区分および細分のための助記表」と「主要な国の助記表」の2つである。前者はいわゆる形式区分で、「1.事典、辞書」、「2.書誌」、「5.全集・エッセイ」、「6.逐次刊行物」など13項目からなる。後者はいわゆる地理区分である。この他に、「英国以外のヨーロッパのための助記的細目(mnemonic subdivisions)」と「言語およびその言語の文学のための細目」がある。これらも一種の補助表(いわゆる固有補助表)といえよう。

BC 試作版(Bliss 1935)では、メインクラス以外の表を体系表(systematic schedules)と総称し、表の数が10に増えた。また、BC完成版(Bliss 1940-53)ではこれらを体系的補助表(systematic auxiliary schedules)と呼び変え、数も20に増えている(図 3-28)。さらに、BC完成版の第2版(Bliss 1952)では体系的補助表の数が22に増えている。

(2)合成表示

BCにおける合成表示は、補助表によるものとメインクラスの記号どうしの合成とがある。

(1)項でみたように、BCには多くの補助表が用意されている。BC完成版では20の補助表があり、UDCの5つの共通補助表、2つの分析的細分、および文字による細分(バーチャルな補助表)を合わせたよりもさらに多くなっている。

BC試作版でもBC完成版でも、補助表に「体系的(systematic)」という語が使われている。Blissは体系性を分類法にとって重要な特徴であるとし、補助表が体系性を高めると主張している(Bliss 1940-53)。

多くの主題は、歴史年代や、国・言語・関連する研究教育との関わり、そして表現・処理・編成の形式、などによって同時に複数の方法で特定化される。逆に、これらの特定化は、多くの主題に類似する「共通」のものに関連している。そのため、それらは体系全体で「繰り返される」あるいは適用できるであろう。したがって、それらは項目の中で一般化され、補完的な記号で「系統立てる」ことができる。そうすれば、分類表の中でそれらが適用できる特定主題のそれぞれで繰り返す必要がない。すなわち、それらは補完的な、あるいは「補助的な」表に縮約することができる。このような表を、私たちは「体系」表、あるいは「体系的補助表」と名づけた。それらは、その特定化が適用されるどのクラスあるいはディヴィジョンにも補完できる。こうした補完的な下位分割(sub-classification)を、私たちは「合成的(composite)」分

割と名づけた。(Bliss 1940-53, vol.1, p.19)

また、Bliss(1910)では、補助表を「助記表」とか「助記的細目」と呼んで助記性を高めるための表であることを強調している。さらに、CutterのECにおけるlocal list(いわゆる地理区分表)が助記性にとってよいアイデアである(ただし、項目が多すぎる)と述べている。これらから、Blissは補助表によって助記性が向上することを認識していたと考えられる。

メインクラスの記号どうしの合成もあるが、「～と同様に区分しなさい」という指示による合成はBCでは採用されていない。

(3)構造

BCにおける合成表示は、階層構造的、多次元構造的、自由構造的のすべての種類がある。

a)階層構造的な合成表示

メインクラスの記号への補助表の記号の合成は階層構造的である。たとえば、「造船の歴史」という主題をBC完成版で分類すると、「UN 造船(メインクラス)」(図 3-27)に「3 歴史(体系的補助表 1)」(図 3-29)を合成して、「UN3」となる。「UN」と「3」の順序は入れかえることができない。これは、メインクラスの記号「UN」を補助表の記号「3」で、階層構造を維持したまま細分した形をとっている。

b)多次元構造的な合成表示

補助表の記号どうしの合成は多次元構造的である。たとえば、「18世紀のメイン州における造船の歴史」という主題をBC完成版で分類すると、「UN 造船(メインクラス)」(図 3-27)、「3 歴史(体系的補助表 1)」(図 3-29)、「bai メイン州(体系的補助表 2)」(図 3-30)、「K 18世紀(体系的補助表 4)」(図 3-31)を合成して、「UN3bai,K」となる。しかし、「18世紀」を「メイン州」より前に出したいときは「UN3Kbai」とすることができるし、「メイン州」を「歴史」よりも前に出したいときは「UNbai3K」となる(どちらの場合もKの前のコンマは省略される)。

このように、補助表どうしの記号の順序は入れかえることができる。各補助表はそれぞれの区分特性による項目をリスとしたものであるから、区分特性が独立に組み合わせられていることになる。すなわち、補助表の記号どうしの合成は多次元構造的である。

SCHEDULE 1

NUMERAL SUBDIVISIONS OF ANY CLASS OR SECTION

The nine numerals are made mnemonics, four constant, five adaptable, as indicated below. They may be arranged either anterior to or subsequent to the general subject of the class. On this question see the Introduction, Chapter II, Section 2. The letters X and Y are also available mnemonic for Pamphlets and Miscellaneous materials, which may be requisite there instead of under the mnemonics 5 and 7.

- 1 Reference books: Dictionaries, Glossaries, Encyclopedias, Indexes; Handbooks, Pocketbooks, Atlases, Concordances, etc.
Constantly mnemonic.
- 2 Bibliography, Historical, Enumerative, Selective.
Abstracts.
Constantly mnemonic.
- 3 History, Scope, Relations: Books about the subject, its Study, profession, organization, etc.
Alternative is 8. The study of the subject may be placed there, or here. The history may in either location be subdivided by Schedule 2, or 4.
- 4 Biography relevant to the subject; *Alternative is 9.*
or study, etc. of it; *Alternative is 8, or 3.*
or subdivision by Schedule 2 or 3. *Alternative is 9.*
- 5 Documents, Ancillary material, etc.:
Institutional and Governmental publications, Associations' Societies', Congresses', Committees'
Reports, Bulletins, Circulars, Annuals (not periodicals);
Ancillary illustrative material: Photographs, Portraits;
Phonograph records, Cinema films, Microfilms, etc.;
Catalogs, Exhibitions, etc. Museums.
Charts, Maps. Expeditions. *Alternatives are 7 and 8.*
Statistics ancillary to the subject. *Alternative is 9.*
Special collections. *Alternatives are Y and Class 8.*
- 6 Periodicals.
Constantly mnemonic.
Serial publications of Societies, etc., not treated as periodicals, may be included under 5, or here.
- 7 Miscellanies:
Collected, or Selected, writings of several authors;
Essays, Addresses, Lectures, Miscellanies, Fragments,
of one writer, or of several writers;
Readings, selected, or systematic; Symposia.
Adaptively mnemonic. Alternatives are 5 and 9.
- 8 Study of the subject, Books about it: *Alternative is 3, or 4.*
Scope, Relations of the subject;
History, or Historical treatment of it;
Education, or Training in it;
Profession of it, organization, etc.
- 9 Antiquated or Superseded books or other materials;
or those under a Superseded Classification.
Alternative for Biography, or Schedule 2, or Statistics, or Readings, preferred in 4, 5, and 7, as specified above.

図 3-29 BC 完成版の体系的補助表 1(Bliss 1940-53)

SCHEDULE 2
FOR GEOGRAPHICAL SUBDIVISION

CONDENSED

Geographical rather than historical and convenient rather than logical, this schedule is applicable to any subject that may be specified with regard to countries, nations, etc., under sciences, technologies, and arts, and especially under social sciences and economic studies, but not where other classifications are provided, as under Philosophy, History, Ethnography, Human Geography, the languages, and the literatures. This condensed schedule may economically serve for most subjects, but for some subjects the more detailed schedule that follows this may be requisite. For certain other subjects Schedule 3 is better adapted, as is suggested in the schedules of the respective subjects. Notation by lower-case letters is adopted here as most distinctive and economical. In the "expanded" schedule, however, an alternative numeral notation is indicated on the right-hand margin, tho it is less convenient and less economical. Five of the letters are marked with the apostrophe ' to avoid confusion. Regarding this Schedule see The Introduction, Chapter III, Section 4.

ALTERNATIVES AS IN SCHEDULE 3

- | | |
|--|--|
| <p>a America, or North America.
Alternative is y.</p> <p>b United States.</p> <p>c Latin America: Mexico, Central America,
and South America
Alternative is Z.</p> <p>d Europe.</p> <p>e England, Great Britain, British Empire.</p> <p>f France.</p> <p>g Spain, including Portugal.</p> <p>h Southern Europe, or Southwestern Europe:
Mediterranean countries.</p> <p>i Italy.</p> <p>j Central Europe: The Alps, Switzerland, Austria,
Czecho-slovakia, Bohemia, Moravia; and Poland.</p> <p>k Germany.</p> <p>l' Northern Europe: Scandinavian and Baltic countries:
Netherlands, Norway, Sweden, Denmark, Iceland,
and Belgium;</p> | <p>Or Ancient,
or Egyptian.</p> <p>Or Grecian, or Hellenic,
or Medieval.</p> <p>Or Latin, or Modern.</p> <p>Or Recent.</p> |
|--|--|

.

Completer detail may be located by the Index, and furthermore may be adapted from Sections NL-NV and adjusted to the notation of this Schedule.

b	United States.	2
ba	Northeastern United States.	21
bai	Maine.	212
bap	White Mountains.	214
baw	Green Mountains.	214
bb	New England.	215
bbc	Massachusetts.	216
bbg	Boston.	217
bbv	Connecticut.	219
bbw	Connecticut River and Valley.	219
bc	New York State.	22
bch	Hudson River.	22
bcj	Adirondacks.	22
bd	New York City, including Brooklyn.	223
be	Eastern United States.	224

図 3-30 BC 完成版の体系的補助表 2(Bliss 1940-53)

SCHEDULE 4
FOR SUBDIVISION BY HISTORICAL PERIODS

For the history of countries, nations, states, provinces, colonies, cities, industries, arts, sciences, and other subjects this schedule is applicable, at least in part— sometimes with modifications. It is especially appropriate for the countries, or nations, of Europe, Class N. For the History of America a special classification is provided in Class N. Ancient History is also classified specially in Class L. But under some of the sections of these two classes and under many of the sections of Class O, Australia, East Indies, Asia, Africa, and Oceanic Islands, Schedule 4 is adaptable. However, the history of each country has its own periods, and these often are incommensurate with the centuries. Such a schedule as this must therefore be not only schematic but tentative. The difficulty is increased by historians selecting the periods of their several histories.

Where it is desired to indicate that the classification and notation are composite the comma should be prefixed to the notation of this schedule. This safeguard against confusion need not be used where the history is not otherwise subdivided.

,A Ancient, Before Christ (B.C.) and to the V Century (A.D.)

Grecian Age:

Hellenistic period.

Roman Age.

Before Christ.

Byzantine period.

First Five Centuries (A.D.).

,B Medieval, V to XV Century (A.D.), The Middle Ages.

The Dark Ages (V to XI Century).

The Age of the Crusades (XI to XIII Century).

XIII Century.

XIV Century.

,C Modern (since the middle of the XV Century).

,D Renaissance period (XIV - XVI) Centuries.

XV Century.

,E Sixteenth Century.

Reformation period in Europe.

,F Latter half of the XVI Century.

Elizabethan period.

,G Seventeenth Century.

,H First half of the XVII Century.

Thirty-years War period.

Stuart period in England. Age of Richelieu.

,I Latter half of the XVII Century. Age of Louis XIV.

English Restoration and Revolution. Dutch Wars period.

,J Seventeenth and Eighteenth centuries.

The Age of the European Despots (1648-1789).

,K Eighteenth Century.

Georgian period in England.

Period of the Wars of the Spanish Succession.

Middle of the century and period of Frederick the Great.

,L French Revolution and the Napoleonic Wars (1789-1815).

,M Modern Age, since 1789, or since 1815.

c)自由構造的な合成表示

BCではメインクラスの記号どうしの合成も独立に行える。たとえば、「ジャーナリズムにおける女性」という主題は、「YV ジャーナリズム」と「QW 女性」を連結記号「Y」で合成して、「YVYQW」または「QWYYV」となる(Bliss 1940-53, p.24)。前者は「ジャーナリズム」の下に配列され、後者は「女性」の下に配列される。このように、「YV」と「QW」は独立したまま合成されるのであって、どちらか一方、たとえば「YV」を右側に記号を展開して細分するのではないから、階層構造的ではない。また、メインクラスという同じ区分特性による項目どうしの合成であるから、多次元構造的でもない。これは自由構造的な合成といえるであろう。

(4)記号法

多次元構造的な合成において、補助表の記号の順序を選択できるということは、補助表による記号が独立していることを意味している。自由構造的な合成におけるメインクラスの記号どうしについても同様である。したがって、BCは独立要素からなる記号法を採用しているといえる。

(5)ファセット概念

BC完成版には20の体系的補助表がある。それらは、それぞれの区分特性による項目をリストしている。したがって、これらはファセットとみなすことができるであろう。(2)項で述べたように、体系的補助表の数はUDCの各種補助表を合わせた数よりも多くなっている。19世紀に作成されたDDCやECに比べて、一段とファセットの種類が増えているといえる。

(6)作成の経緯

BlissがBCで採用した重要な概念に「並置(collocation)」がある。これは、関連する主題を近くにまとめるという機能である。特定の区分特性に基づいて区分すると、別の観点からみて関連すると考えられる主題が離ればなれになってしまう可能性がある。関連しているかどうかは主観的かつ目的によって決められるが、それに柔軟に対応して関連する主題を近くにまとめられる並置の機能を分類法は備えていなければならないという主張である。この考えは、ECの作成者であるCutterの「実際的に関連のあるクラスが一緒になるようにグループ分けすべきである」(Cutter 1879, p.237)という考えと共通している(3.1.2(6)項参照)。Blissは独自の分類法を考案する前にECの改良を考えていて、Cutterとも話し合ったと述べている(Bliss 1910, p.353)ので、BCの作成にはCutterの影響があると考えられる。

3.2.3 Colon Classification

(1)概要

CCはRanganathanによって作成された分類法で,第1版(Ranganathan 1933)から第7版(Ranganathan 1987)までが出版されている。ただし,Ranganathan自身が生前に公表したのはCC第7版の試案(Ranganathan 1969)までで,第7版は,Ranganathanの没後にM. A. Gopinathによって引き継がれ,出版された。CCの各版については第4章で詳しく論じるので,ここでは主に,第1版と,ファセットという用語を初めてCCで用いた第3版(Ranganathan 1950a)について検討する(ファセットという用語自体は,CC第3版より前に出版された著作の中ですでに使用している;第4章参照)。

(2)ファセット概念

CCはこれまでみてきた分類法と異なり,ファセットを分類体系の中心においている。そこで,この項ではファセットから検討することにする。

a)CC第1版におけるファセット概念

CC第1版(Ranganathan 1933)ではまだファセットという用語は使われていない。しかし,ファセットに該当するものはすでにでてきている。

まず,いわゆるメインクラスに該当する主題区分表(subject divisions)と呼ばれている表がある(図3-32)。

1. SUBJECT DIVISIONS			
	Generalia	N	Fine arts
A	Science (General)	O	Literature
B	Mathematics	P	Philology
C	Physics	Q	Religion
D	Engineering	R	Philosophy
E	Chemistry	S	Psychology
F	Technology	T	Education
G	Natural science (General) and Biology	U	Geography
H	Geology	V	History
I	Botany	W	Politics
J	Agriculture	X	Economics
K	Zoology	Y	Miscellaneous social sciences including Sociology
L	Medicine	Z	Law
M	Useful arts		

図3-32 CC第1版の主題区分表(Ranganathan 1933)

主題区分の下位項目は細目(subdivisions)と呼ばれている。主題区分「2 図書館学」の細目の一部を図3-33に示す。

2 LIBRARY SCIENCE			
<i>Divisions based on Problem or P Characteristic</i>		<i>Divisions based on Library or L Characteristic</i>	
1	Building and equipment	1	National and similar libraries
11	Stack room	11	National library
12	Catalogue room	12	Central library
13	Reading room	13	Copyright library
14	Counter	15	Regional library
15	Periodicals room	2	Public library
16	Office room	21	City library
17	Exhibition room	22	Rural library
18	Lecture room	3	Academic library
19	Other rooms	31	School library
2	Legislation	32	College library
3	Finance	33	University library
4	Administration	34	Library of research organisations
41	Book selection	35	Library of learned societies
42	Book order	4	Business library
43	Periodicals work	41	Industrial library
44	Accessioning	42	Commercial library
45	Preparation of the book	45	Government departmental library

図 3-33 CC 第 1 版の「図書館学」(Ranganathan 1933)

図 3-33 の左側に「問題特性による区分表(Divisions based on Problem or P Characteristic)」とあるが、これが CC 第 3 版で「問題ファセット」と呼ばれるようになるものである(後述)。また、図 3-33 の右側にある「図書館特性による区分表(Divisions based on Library or L Characteristic)」は CC 第 3 版の「図書館ファセット」に対応する。ファセットという用語は使われていないが、ファセット概念は CC 第 1 版からすでに存在していたといえることができる。

対象となる主題を分類する際は、その主題を各区分特性で区分し、コロン記号を使って合成する。たとえば、「国立図書館における閲覧室」という主題は、主題区分表の「2 図書館学」において、問題特性による細目「13 閲覧室」と、図書館特性による細目「11 国立図書館」をコロン記号で連結して、「213:11」とする。

b) CC 第 3 版におけるファセット概念

CC 第 3 版では、まず、すべての主題がメインクラス(main class)に分けられる(図 3-34)。メインクラスは、「1 to 9 総記」の後、Sciences という見出しの下に「A 科学(一般)」、「B 数学」、・・・「M (その他の)応用化学, 有用技術」、「Δ 超自然的経験と神話的解釈」という項目が並び、さらに Humanities という見出しの下に「N 美術」、「O 文学」、・・・「Y 社会学を含む(その他の)社会科学」、「Z 法律」という項目が並んでいる。

1 MAIN CLASSES			
1 to 9	Generalia	Δ	Spiritual experience and mysticism
	<i>Sciences</i>		<i>Humanities</i>
A	Science (General)	N	Fine arts
B	Mathematics	O	Literature
C	Physics	P	Linguistics
D	Engineering	Q	Religion
E	Chemistry	R	Philosophy
F	Technology	S	Psychology
G	Natural science (General) and Biology	T	Education
H	Geology	U	Geography
I	Botany	V	History
J	Agriculture	W	Political science
K	Zoology	X	Economics
L	Medicine	Y	(Other) social sciences including sociology
M	(Other) applications of sciences, Useful arts	Z	Law

図 3-34 CC 第 3 版のメインクラス(Ranganathan 1950a)

メインクラスの下位クラスをカノニカルクラス(canonical class)あるいはカノニカル区分表(canonical divisions)と呼ぶ。カノニカルクラスは従来の学問領域を指す Ranganathan の用語である。CC 第 3 版では「カノニカル」の意味についての説明はないが、分類法の理論書(Ranganathan 1937)では「伝統的な区分(traditionally divided)」と説明している。たとえば、メインクラス「B 数学」のカノニカルクラスとして「B1 計算」、「B2 代数」、「B3 解析」などがあり、第 2 次のカノニカルクラスとして「B23 方程式の理論」、「B33 微分・積分方程式」などがある。

メインクラスやカノニカルクラスの下にファセットが出てくる。ファセットは次のように定義されている。

区分特性の系列(a single train of characteristics)に基づく、あるメインクラスまたはカノニカルクラスの区分肢の総体(totality of the classes)は、その[クラスの]ファセットの 1 つを構成する。(Ranganathan 1950a, pt. I : p.41)

わかりにくい定義だが、要するに、メインクラスやカノニカルクラスを特定の区分特性に基づいて区分したとき、それによってできる区分肢の総体をファセットと呼ぶ、ということである。メインクラスやカノニカルクラスには様々な区分

肢が含まれているが、それらを区分特性ごとにまとめたものがファセットである。ファセットの中の各区分肢をフォーカス(focus; 複数形 foci)と呼んでいる。なお、上の引用文で、メインクラスやカノニカルクラスの Class(頭文字が大文字)は「クラス」と訳し、その他の class(すべて小文字)は「区分肢」と訳した。1つの Class の中の classes がいくつかのファセットにまとめられると、各ファセット内の classes は foci と呼ばれるようになる、ということである。

各メインクラスまたはカノニカルクラス(以下、特に断らない限り、両者を総称して「クラス」と呼ぶことにする)は、ファセット式(facet formula)に基づいて区分される。ファセットおよびファセット式はクラスごとに異なっている。

図 3-35 に示した「2 図書館学(Library Science)」クラスにおいては、「問題ファセット(Problem or P Facet)」(図 3-35 左側)と「図書館ファセット(Library or L Facet)」(図 3-35 右側)があり、それらのファセットごとに区分した後で、ファセット式 2[P]:[L] (図 3-35 上部)によって連結される。

2 LIBRARY SCIENCE			
2 [P]: [L]			
<i>Foci in</i>		<i>Foci in</i>	
Problem or P		Library or L	
<i>Facet</i>		<i>Facet</i>	
1	Building and equipment	1	National and similar libraries
11	Stack room	11	National library
12	Catalogue room	12	Central library
13	Reading room	14	Copyright library
14	Counter	15	Regional library
15	Periodicals room	2	Public library
16	Office room	21	Rural library
17	Exhibition room	25	City library
18	Lecture room	3	Academic library
19	Other rooms	31	School library
4	Administration	32	College library
41	Book selection	33	University library
42	Book order	34	Library of research organisations
43	Periodicals work		
44	Accessioning		
45	Preparation of the book		

図 3-35 CC 第 3 版の「図書館学」(Ranganathan 1950a)

たとえば、「国立図書館の閲覧室」という主題の場合、まず、問題ファセットによって「閲覧室」に区分される。「閲覧室(Reading room)」の分類記号は「13」である。次に、図書館ファセットによって「国立図書館」に区分される。「国立図書館(National library)」の分類記号は「11」である。これらの記号をファセット式に代入すると、「国立図書館の閲覧室」という主題の分類記号「213:11」が得られる。

c)ファセット概念考案の理由

では、Ranganathan はなぜこのようなファセット概念を考案したのであろうか。彼は CC 第 1 版の序文の中で、従来の分類法と CC との相違点を以下のように説明している(引用文中にでてくる「メカノ」は、19 世紀末にイギリスで考案され、1901 年に設立されたメカノ社が販売した玩具で、会社は転々としているが、現在でも販売されている)。

コロン分類法はデューイの十進分類法や大冊の議会[図書館]分類法とは基本的な点で異なる。それら[の分類法]の明白な目的は、大部分のトピックに対して既製の分類番号を与えることである。そのため、それらの冊子の大部分は表(schedules)で構成されている。そして、それらの表はコロン分類法よりも数倍大きなものである。

しかし、コロン分類法では既製の分類番号をトピックに割り当ててのではない。コロン分類法の表は、いわゆる原基表(standard unit schedules)で構成されていると見てよいであろう。これらの原基表はメカノ器具の規格化された部品に対応する。子どもでも知っているように、これらの規格化された部品をいろいろな方法で組合せることで、さまざまな異なる目的物を構築することができる。同様に、異なる原基表の番号を指定された順列組合せで結合することによって、考え得るすべてのトピックに対する分類番号を構築することができる。この分類法においては、コロン(:)がメカノのボルトとナットの役割を果たしている。(Ranganathan 1933, p.xiii; 下線は引用者)

ここでは、従来の分類法は項目(分類項目)が確定している表の中から特定の主題に対応する項目を探す(既製の分類番号を与える)のに対して、CC はいくつかの表(原基表)の項目を組合せることで、表の中には存在しない項目をつくることができる、と説明している。原基表とは、「問題特性による区分表」や「図書館特性による区分表」のことであり、CC 第 3 版でファセットと呼ばれるようになるものである。

では、CC のこの特徴がどのような利点をもたらすのだろうか。Ranganathan は CC 第 1 版の序文で 2 つの利点をあげている。そして、それぞれの利点が合成表示と独立要素からなる記号法に関係している。

(3)合成表示

a) CC の特徴がもたらす利点 A

CC の特徴がもたらす利点の 1 つは助記性(mnemonic)である。これを「利点 A」と呼ぶことにする。CC 第 1 版の序文では以下のように述べられている。

トピックに対して既製の分類番号ではなく原基表[の番号]を与えるこの方法の 1 つの自然な結果が、分類法が獲得した並はずれた助記性である。
(Ranganathan 1933, p.xiii-xiv)

なぜ CC では助記性が高くなるかを、(2)項でみた「213:11 国立図書館の閲覧室」の例で説明しよう。この主題は、「2 図書館学」と「13 閲覧室」と「11 国立図書館」の 3 つの部分で構成されている。「13 閲覧室」に注目すると、これは図書館特性による細目が「11 国立図書館」であろうと、他の種類の図書館であろうと変化はしない。「閲覧室」は常に「13」という記号で表現される。同様に、「国立図書館」は、問題特性による細目が「13 閲覧室」であろうと他の項目であろうと、常に「11」で表現される。このように、特定の意味に特定の記号を割り当てることによって助記性が高まる。

実は、Ranganathan 自身は述べていないが、助記性を高める手段は区分特性による細目(原基表, ファセット)の組合せだけではない。同じ意味に対して同じ記号を何度も使用するためには、その一覧表を用意しておけばよい。原基表(ファセット)はその 1 つである。CC はその他に 2 つの手段を備えている。それは、補助表による合成と「～と同様に区分しなさい」という指示による合成である。

b)補助表による合成

助記性を高める 1 つの手段は、いわゆる補助表による合成である。CC 第 1 版には、主題区分表(subject divisions)の他に、共通細目表(common subdivisions), 地理区分表(geographical divisions), 言語区分表(language divisions), 時代区分表(chronological divisions)という 4 つの表がある(図 3-36～図 3-39)。共通細目表は、その記号を主題区分表の記号に合成することで、主題区分表の項目が表現する主題を「書誌(Bibliography)」、「地図(Maps, atlases)」、「学協会(Societies)」、「政府刊行物(Government departmental reports and similar reports)」、「統計(Statistics)」などの出版形式で細分するための表である。地理区分表、言語区分表、時代区分表も、それぞれ、主題区分表の項目が表現する主題を地理、言語、時代で細分するための表である。主題区分表はメインクラスであるから(実際、CC 第 3 版ではメインクラスと呼ばれるようになる)、他の 4 つの表は補助表といえるであろう。

2 COMMON SUBDIVISIONS			
a	Bibliography	l	Societies
b	Profession	m	Periodicals
b1	Qualification	n	Yearbooks, directories, calendars, almanacs
b2	Recruitment		
b3	Training	p	Conferences, congresses, conventions, anniversaries, centenaries
b4	Research		
b5	Service conditions	q	Bills, acts, codes
b51	Grades	r	Government departmental reports and similar reports
b52	Salary		
b53	Leave	s	Statistics
b55	Amenities	t	Commissions, committees
b56	Superannuation	u	Travels, expeditions, surveys, explorations, topography
b57	Tenure		
b6	Control	v	History
b7	Unions, associations	w	Biography, letters
b8	Powers and duties	x	Collected works, selections
c	Laboratories, observatories	y	Scope, syllabuses, outlines, synopses
d	Museums, exhibitions	z	Digests, parodies, adaptations, variations
e	Instruments, machines, appliances, formulas		
f	Maps, atlases		
g	Charts, diagrams, graphs, handbooks		
j	Miscellanies, memorial volumes, Festschriften		
k	Cyclopaedias, dictionaries, concordances		

図 3-36 CC 第 1 版の共通細目表(Ranganathan 1933)

3 GEOGRAPHICAL DIVISIONS	
1	World
13	Pacific countries
15	Atlantic countries
151	Mediterranean countries
2	Mother country
3	Favoured country
4	Asia
41	China
4111	Kiang-su
4112	An-hwei
4113	Che-kiang
4121	Kiang-si
.....	
44	India
441	Madras Presidency (excluding the Indian States)
4411	Eastern districts
44111	Madras

図 3-37 CC 第 1 版の地理区分表(Ranganathan 1933)

4 LANGUAGE DIVISIONS			
1	Indo-European	1512	Mahārāṣṭrī
11	Teutonic	1516	Ardhamāgadhi
11011	Gothic	1517	Māgadhi
110153	Low Frisian	152	Hindī
110155	Old Frisian	153	Panjābī
111	English	154	Gujarātī
112	Dutch	155	Marāṭhī
113	German	156	Uriyā
114	Swedish	157	Beṅgālī
115	Norwegian	16	Iranian
116	Danish	161	Avestic
117	Icelandic	162	Pahlavi
12	Latin	164	Persian
121	Italian	165	Afghan (Pushtu)
122	French	168	Urdu
123	Spanish	17	Armenian
124	Portuguese	18	Albanian
129	Celtic	191	Tocharish
1293	Welsh	2	Semetic
1295	Irish	21	Babylonian including Syriac
1297	Scotch Gaelic	22	Assyrian
13	Greek		
.....			
4	Other Asiatic languages	8	Other Australian languages
5	Other European languages	9	Other oceanic languages
6	Other African languages	<i>N. B. Divisions 4-9 to be divided by the Geographical Device</i>	
7	Other American languages		

図 3-38 CC 第 1 版の言語区分表(Ranganathan 1933)

5 CHRONOLOGICAL DIVISIONS			
A	Before 1999 B. C.	N	1900 to 1999 A. D.
B	1999 to 1000 B. C.	P	2000 to 2099 A. D.
C	999 to 1 B. C.	Q	2100 to 2199 A. D.
D	1 to 999 A. D.	R	2200 to 2299 A. D.
E	1000 to 1099 A. D.	S	2300 to 2399 A. D.
F	1100 to 1199 A. D.	T	2400 to 2499 A. D.
G	1200 to 1299 A. D.	U	2500 to 2599 A. D.
H	1300 to 1399 A. D.	V	2600 to 2699 A. D.
I	1400 to 1499 A. D.	W	2700 to 2799 A. D.
J	1500 to 1599 A. D.	X	2800 to 2899 A. D.
K	1600 to 1699 A. D.	Y	2900 to 2999 A. D.
L	1700 to 1799 A. D.	Z	3000 to 3099 A. D.
M	1800 to 1899 A. D.	AA	4000 to 4090 A. D.

図 3-39 CC 第 1 版の時代区分表(Ranganathan 1933)

たとえば、「インドの歴史文書資料」は、主題区分表(図 3-32)の「V 歴史(History)」, 地理区分表(図 3-37)の「44 インド(India)」, そして、「V 歴史」の細目表(図 3-40)における観点(Point of View)特性の細目「8 アーカイブズ(Archives)」を組合せて「V44:8」とする。この例のように、「インド」という国(意味)には常に「44」という記号を割り当てることになるので、助記性という点では原基表を組合せるのと同等の効果がある。

V HISTORY	
Divisions based on	
Point of view or V	
Characteristic	
1	Political and general
12	Home policy
17	Colonial policy
18	Mandatory policy
19	Foreign policy
2	Constitutional
21	Crown, president
.....	
8	Archives
817	Colonial correspondence
819	Diplomatic correspondence
822	Minutes of the executive

図 3-40 CC 第 1 版の「歴史」(Ranganathan 1933)

いまの「V44:8 インドの歴史文書資料」と(2)項でみた「213:11 国立図書館の閲覧室」を比べてみると、形はまったく同じである。「213:11」の場合は「13」が原基表(ファセット)の記号であるのに対して、「V44:8」の「44」は地理区分表の記号である点が違うだけである。つまり、この例の場合、原基表(ファセット)と地理区分表は同じ役割を果たしているといえる。

c) 「～と同様に区分しなさい」という指示による合成

原基表(ファセット)と補助表の他に、助記性を高めるもう 1 つの手段は、「～と同様に区分しなさい」という指示による合成である。以下に例をあげる。

① 「to be divided as」

「B13 整数(数論)」における方法特性による細目の中に「39 特殊関数の利用による解析的方法」があり、そこに、「to be divided as B39」という指示がでていいる。「B39 特殊関数」には様々な関数が列挙されている。たとえば、「B393M24 リー関数」なので、「B39」より後の記号「3M24」を方法特性による細目「39」に合成すると、「393M24 リー関数の利用による解析的方法」となる。

② 「same as」

「H2 岩石学」の問題特性には細目がなく、「same as those for mineralogy except '8'」という指示がでている。これは「H1 鉱物学(Mineralogy)」における問題特性の項目(8番台以外)を使いなさい、という意味である。たとえば、H1には「25 光学的性質」があるので、これをH2の問題特性の細目として使うことができる。

③言語区分表と地理区分表の合成

言語区分表(図 3-38)の中に「注 4-9 は地理区分表を用いて細分しなさい(Divisions 4-9 to be divided by the Geographical Device)」という指示がある(geographical device は geographical divisions のことだと考えてよい)。たとえば、「4 その他のアジアの言語」には細目がない。この細目は、地理区分表の「4 アジア」の細目を使う。たとえば、「日本語」は言語区分表の「4 その他のアジアの言語」に地理区分表の「42 日本」を合成して「442」とする。

これらの例からわかるように、この「～と同様に区分しなさい」という手段は、同じ表の他の部分、あるいは、別の表のある部分を借用するということである。同じ部分を様々な箇所でも借用して使うということは、その部分が助記性に関して原基表や補助表と同じ役目を果たしているということになる。

d)Ranganathan の認識

以上でみてきたように、補助表や「～と同様に区分しなさい」も原基表(ファセット)と同様に助記性を高める手段であることがわかる。ただし、補助表や「～と同様に区分しなさい」が助記性に関して効果があるということについて CC 第1版では言及がなく、Ranganathan 自身が認識していたかどうかは定かではない。しかし、Prolegomena 第1版では、コロン記号による原基表の連結以外にも、地理区分表や時代区分表などの使用によって助記性が高められると述べている(Ranganathan 1937, p.127)。また、同じ著作で DDC の「～と同様に区分しなさい(divide like)」も助記性を高める手段としてあげている(Ranganathan 1937, p.121-122)。さらに、助記性を高めるには、同じ意味には常に同じ記号を割り当てるだけでなく、それらを常に同じ順序で配列することが必要であることを、「首尾一貫した配列の規準(canon)」としてあげている(Ranganathan 1937, p.46)。この時点で、補助表や「～と同様に区分しなさい」が助記性に関して効果があるということを Ranganathan が明確に自覚していたことがわかる。

(4)記号法

a) CC の特徴がもたらす利点 B

CC の特徴がもたらすもう 1 つの利点は、複合的な主題への対応である。これ

を「利点B」と呼ぶことにする。

CC 第1版で Ranganathan は次のように述べている。

この分類法のもう1つの特徴は、多くの主題領域で極めて詳細な区分ができるということである。極めて専門化されたモノグラフであろうと、この分類法は他の分類法よりも容易に個別化が可能である。(Ranganathan 1933, p.xiv ; 下線は引用者)

いくつかの表の項目を組合せることによって、(従来の分類法の1つだけの表よりも)詳細な区分ができ、主題を特定化(個別化)することができるというわけである。これは、(2)項であげた引用文の中で「考え得るすべてのトピックに対する分類番号を構築することができる」と述べられていたことと同じである。

そして、「詳細な区分」や「考え得るすべてのトピックへの対応」とは、複合的な主題への対応である。組み合わせる区分特性の数が増すほど主題の複合性も増し、同時に、より詳細な(特定の)主題になるからである。厳密に言うと、2つの区分特性を組み合わせるだけで「複合的な主題」となり、必ずしも「詳細な主題(特定の主題、深い主題)」とは限らないが、「複合的な主題への対応」というときは「詳細な主題(特定の主題、深い主題)への対応」の意味であるから、以後、特に断らない限り両者を同義として扱う。

b)独立要素からなる記号法

しかし、いくつかの表の項目を組合せるだけでは、1つだけの表よりも詳細な区分ができるとはいえない。組合せてできる項目を1つの表の中にすべて収録すれば、まったく同じ詳細さをもつ表ができるからである。詳細さは、単に組合せることによって生まれるのではなく、もっと別の何かが必要である。それは、やはり CC 第1版のコロン記号についての説明の中で述べられている。

これらの[複数の特性をもつ主題の]場合、各特性に対応する部分は、他の特性に対応する部分とはまったく独立にさらに細分することができる。これは規則に基づいてコロンを挿入することによって実行される。(Ranganathan 1933, p.I-32 ; 下線は引用者)

このように、コロン分類法においては、分類番号とそれらによって表現される主題は、ちょうど人間の体の骨のように、完璧に関節で繋がれた体系を形成する。そして、コロンは、骨どうしを連結すると同時に、他の骨から独

立に成長し動くことができる自由度を与えている靱帯と軟骨の役割を果たしている。・・・

さらに、コロンを使うことによって、どの分類番号も多くの部分に分節された番号となり、右端に[記号の桁を]展開するだけでなく、コロンの数だけの箇所で展開することが可能となる。他の分類法では、分類番号は右端にしか展開できない。言い換えれば、コロン記号法は他の記号法の何倍も柔軟性がある。

記号法の柔軟性の限界が、その分類法が達成できる詳細さの限界を課している。コロン分類法の記号法がもつ非常に高い柔軟性のために、コロン分類法の分類項目は非常に高い詳細さを達成することができる。(Ranganathan 1933, p.I-34; 下線は引用者)

上の引用中で「他の分類法では、分類番号は右端にしか展開できない」とあるのは、2.3.3節の図 2-18 に示したように、最右端の側に記号を展開して細分することを指している。これは単一要素からなる記号法である。それに対して、CC のようなコロン記号法を使うと、区分特性ごとに細分することができる。それが、図 2-19 に示した独立要素からなる記号法である(もちろん、各要素を区切る記号はコロンでなくてもよい)。

独立要素からなる記号法をもつ分類法は、単一要素からなる記号法をもつ分類法よりも複合的な主題に対応しやすい、ということを示したが、CC はまさに複合的な主題に対応するために、独立要素からなる記号法を採用したのである。すなわち、CC が従来の分類法よりも詳細な区分ができるのは、いくつかの表の項目を組合せるからだけでなく、各表の項目を独立に区分することができるからである。この独立した区分によって複合的な主題に対応しやすくなるのである。

(5)構造

前項でみたように、CC は独立要素からなる記号法を採用している。したがって、多次元構造または自由構造をとることができる。

CC 第 2 版(Ranganathan 1939)までは、メインクラスと、区分特性の異なる各種原基表(ファセット)の記号を独立に組み合わせることによってできる多次元構造のみであった。

CC 第 3 版(Ranganathan 1950a)以降で自由構造もとり入れている。まず、第 3 版でフェイズ(phase)関係を導入した。これは、メインクラス内の複数の項目を組み合わせる方法である。たとえば、「物理学と化学の比較」という主題は、メイン

クラスの「B 物理学」と「C 化学」を連結記号「.c」で組み合わせて、「B.cC」という記号で表現する。順序を入れかえて「C.cB」としても意味は同じである。これは、同じ区分特性によるメインクラス内の項目の組み合わせであり、組み合わせの順序も入れかえることができるので、自由構造といえる。さらに、CC 第 5 版(Ranganathan 1957a)でファセット内(intra-facet)関係が導入される。ファセット内関係とは、同じファセット内の項目を組み合わせる方法である。また、同じファセット内で、同じ上位項目をもつ同じ階層の項目をアレイというが、CC 第 6 版(Ranganathan 1960)ではアレイ内(intra-array)関係とそれ以外のファセット内関係を区別している。たとえば、「Y310n35 地方と都会の差異」は、「Y31 地方」と「Y35 都会」という同じファセット内で、しかも同じ上位項目「Y3」の 1 つ下の階層の項目を組み合わせている(連結記号は「0n」)ので、アレイ内関係である。アレイ内関係も含めて、ファセット内関係は同じ区分特性による項目を組み合わせているので、自由構造をもたらす。

(6)作成の経緯

a)UDC との関係

3.2.1(4)項で引用した Otlet の文(Otlet 1895-96, p.52)の中で、「分類のあらゆる部分に存在するいくつかの基本的観念」や「どの個別の区分肢においても、規則的に繰り返す項目」という表現がある。これらは、まさにファセット概念そのものといえよう。上に引用した論文を含む Otlet の著作の英訳版で、訳者の Rayward は、"今日ではファセット化分類法と呼ばれる最初の分類法が UDC であった"(Otlet 1895-96, p.4)と述べている。また、CC の名前の由来となった「コロンの(:)」を連結記号として使用している点も、UDC とよく似ている。

Ranganathan(1965a)は、CC 第 1 版作成までの経緯を次のように回想している。

1924 年 10 月から 1925 年 6 月まで、ロンドンの University College の School of Librarianship で分類についてのコースを受講していたとき、School の図書館でその当時利用できた分類法について、初めて数週間をかけて勉強した。それらは、Decimal Classification, Expansive Classification, Library of Congress Classification, Subject Classification である。Universal Decimal Classification は英語では利用できなかった。・・・分類の講師は W. C. Berwick Sayers だった。・・・授業時間外にファセット化分類法の考えを Sayers と議論した。この考えに対する彼の知的共感は励みになった。・・・Sayers は、任意の 2 つのファセット間に挿入する記号としてコロンの(:)を使う考えに同意した。これが、新しい種類の分類法の設計へと導く刺激的なインスピレー

ジョンとなった。(Ranganathan 1965a, p.11-13)。

ここで Ranganathan は、CC 第 1 版を作成する際に、UDC は当時利用できなかったので参考にしなかったと説明している。ただし、その説明は著作によって微妙に異なる。1951 年の著作では、"分析合成型の要素をもつ最初の分類法は UDC であった。CC を設計しているときは UDC は利用できなかった(not accessible)。そのため、CC の設計におけるモデルとして利用することができなかった"(Ranganathan 1951a, p.99)と述べていた。しかし、上に引用した 1965 年の著作では、"Universal Decimal Classification は英語では利用できなかった"(Ranganathan 1965a, p.11)というように、1951 年の著作での「利用できなかった」という説明が、「英語では利用できなかった」に変わっている。1933 年以前では、UDC はフランス語版しかでていなかったことを指している(英語版の一部がでたのは 1936 年)。さらに、1967 年の著作では、"私は UDC を利用したことがなかった(no access to)が、その説明[161]は読んだことがあった"(Ranganathan 1967, p.106)となる。ここにあげられている注[161]には、"Sayers の Introduction to Library Classification(1935)。これは Ranganathan が UDC について最初に読んだものである"(Ranganathan 1967, p.606)と書かれている(Ranganathan は自分のことを「私」ではなく名前で呼ぶことが多い)。このように、Ranganathan が UDC についてどこまで知っていたのかは曖昧である。

b)BC との関係

CC の第 1 版が出版されたのが 1933 年であるから、BC 完成版(Bliss 1940-53)はもちろん、BC 試作版(Bliss 1935)も出版は CC より後である。しかし、Bliss は 1910 年の論文(Bliss 1910)ですでに BC の概要を示している。Ranganathan が CC の作成に着手するのは、a)項の引用に書かれているように、ロンドンに留学した 1920 年代半ば以降である。

Bliss は BC 試作版に先立って、分類法の理論的研究書(Bliss 1933)を 1933 年に出版しているが、同じ年に CC 第 1 版(Ranganathan 1933)も出版されている。その時点まではお互いの業績を知らなかったようである。1934 年に Bliss の方から Ranganathan にお互いの著作を交換しようと提案している(La Barre 2000)。その後、Bliss は 1935 年の BC 試作版で Ranganathan の CC に言及し、Ranganathan も Prolegomena 第 1 版で Bliss(および Ranganathan の師である Sayers)の著作から刺激を受けたと述べている。

Ranganathan が Bliss の著作からどのような影響を受けたのか具体的には記述されていないが、以下のことが推測される。Bliss が「並置(collocation)」の重要

性を唱えていたことは 3.2.2(6)項で述べたが、並置の機能を備えた分類法を *synthetic classification* と呼んでいる(Bliss 1940-53, p.110)。Bliss によれば、*synthetic* は並置をより具体化した概念である。一方、体系的な補助表による合成によって助記性を高めることができる分類法を、*composit classification* と呼んでいる(Bliss 1940-53, p.111)。それに対して、Ranganathan は *Prolegomena* 第 1 版(Ranganathan 1937)で CC のような合成ができる分類法を *synthetic classification* と呼んでいる。おそらく Ranganathan は Bliss の著作を読んで、*synthetic* を実現する手段が「合成」であると考え、CC のような合成ができる分類法を *synthetic classification* と呼んだのではないかと考えられる。

それに対して Bliss は、*Prolegomena* 第 1 版への書評(Bliss 1938)の中で、*synthetic* という語は *analytic* と対になる語で、補助表などによる合成という意味では間違った使い方をしており、正しくは *composit* を使うべきである、と述べている。後に Ranganathan が *Prolegomena* 第 1 版での *synthetic classification* から *analytico-synthetic classification* へ表現を変える(第 4 章参照)のは、この「*synthetic* という語は *analytic* と対になる語」だという Bliss の指摘が影響しているかもしれない(ただし、*composit classification* への変更はしなかった)。

なお、Bliss は先ほどの書評の中で、Bliss が使用している用語の *coordination* と *subordination* を、Ranganathan は *array* と *chain* という語におき換えていると指摘している。またこれは Ranganathan 自身が認めていることであるが(Ranganathan 1937)、Bliss がいわゆる形式区分のことを *anterior numeral classes*(メインクラスの前に配置された数字で表記されるクラス)と呼んでいるのに対して、Ranganathan はそのまま *anterior subdivisions* と呼んで CC で使用している。これらのことから、Ranganathan は Bliss の著作からかなり影響を受けていると考えられる。

3.3 考察

前節までに、19世紀第4四半期に作成され、単一要素からなる記号法をもつ分類法(DDC, EC)と、20世紀前半に作成され、独立要素からなる記号法をもつ分類法(UDC, BC, CC)を対象に、それらの構造、表示方法、記号法、ファセット概念に関して分析を行った。その結果を図3-41にまとめた。

	表示方法	構造	記号法	ファセット概念
DDC	合成表示	階層構造	単一要素	補助表 見出し・中間見出し
EC	合成表示	階層構造	単一要素	補助表
UDC	合成表示	多次元構造 自由構造	独立要素	補助表
BC	合成表示	多次元構造 自由構造	独立要素	補助表
CC	合成表示	多次元構造 自由構造(第3版以降)	独立要素	ファセット 補助表

図3-41 各分類法の構造、表示方法、記号法、ファセット概念

本節では、この結果をふまえた上で、CCを中心に考察を行う。

Ranganathanによるファセットの定義は、「クラスを特定の区分特性に基づいて区分したとき、それによってできる区分枝の総体」である(3.2.3(2)項)。この定義であれば、CCだけでなく、最も初期のDDCですらすでにファセット概念は導入されていた、ということができる。本章で検討したいずれの分類法にも、補助表という形で、特定の区分特性による項目がまとめられているからである。

さらに、DDCには見出しや中間見出しによって区分特性が明示されている箇所もある(図3-14と図3-15)。これをCCのファセット(図3-35)やその基になった原基表(図3-33)と見比べると、形式的にとってもよく似ていることがわかる。特に、中間見出しはまったくそっくりだといってよい。いずれも区分特性を明示して、その下に区分枝を列挙している。実際、DDC第17版(Dewey 1965)の編集者の序文に以下の説明がある。

ある主題を複数の区分原理あるいは区分特性で区分することは第 1 版から行っている。・・・「ファセット」という語だけが新しく導入された。Dewey はこの概念を理解していた。(Dewey 1965, p.45)

そして、言語のクラスを「411-418 言語学(の問題)」と「420-490 個々の言語」という複数の区分特性で区分するという例をあげている。これらはいずれも DDC 第 17 版で中間見出しとなっている。また、中間見出しをファセット構造と呼ぶ分類論のテキストブックもある(Rowley 2000)。

このように、「特定の区分特性による区分肢の総体」という意味でのファセット概念は、UDC, BC, CC といった独立要素からなる記号法をもつ分類法だけでなく、DDC や EC のような単一要素からなる記号法をもつ分類法にも存在する。したがって、ファセット概念は本来は記号が単一要素からなるか独立要素からなるかということとは無関係なのである。

ところが、ファセット概念を最初に明示的に導入した CC では、「合成による助記性の向上」が利点の 1 つ(利点 A)として強調されていた。これは、特定の区分特性による同じ区分肢集合を多数の項目に対して合成するという事は、同じ分類記号が繰り返し使用されるということであり、助記性を高めることになるからである。この「同じ区分肢集合」はファセットだけでなく、補助表等でもよい(「～と同様に区分しなさい」の「～」の部分も「同じ区分肢集合」といえるが、以下では煩雑さをさけるために「補助表等」の中にも含めることにする)。そして、補助表等は DDC, EC, UDC, BC で使われているだけでなく、CC でも使われている。

Ranganathan が CC の利点として「合成による助記性の向上」をあげたとき、ファセットの組合せと補助表等による合成を区別していたかどうかは定かではない。しかし、3.2.3(3)項でみたように、Prolegomena 第 1 版(Ranganathan 1937)では、コロン記号による原基表(ファセット)の連結以外にも、地理区分表や時代区分表などの使用によって助記性が高められると述べていることなどから、この時点で Ranganathan がファセットの組合せと補助表等による合成を助記性の向上に関しては同等であるとみなしていたことがわかる。

このように、CC の(したがって分類法一般の)望ましい性質である「助記性」と、その実現手段との関係は、図 3-42 のように認識されていたと考えられる。

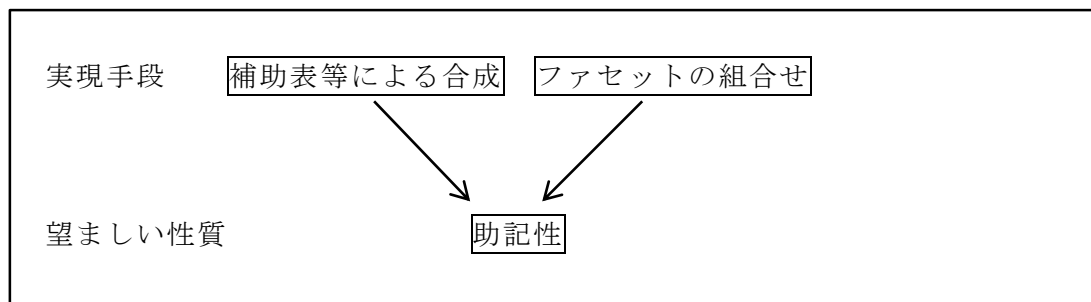


図 3-42 分類法の望ましい性質「助記性」とその実現手段

ファセット概念の明示的な提唱者である Ranganathan 自身がこのように認識している、さらに、補助表等による合成が CC 以外のすべての分類法でも使われていることから、後世の人たちが「ファセット」と「補助表等による合成」を同等視してしまったのではないかと考えられる。実際には、「ファセットの組合せ」と「補助表等による合成」は「助記性」の向上に対する効果としては同等であるが、「ファセット」と「補助表等による合成」の意味は同等ではない。「ファセット」は必ずしも組み合わせて使われるとは限らず、DDC における見出しや中間見出しのように、特定の箇所だけに存在する場合もあるからである。

一方、CC のもう 1 つの利点は「独立要素からなる記号法による複合的な主題への対応」(利点 B)である。これは単に各ファセットの区分肢を組合せるだけで実現するのではなく、それぞれが独立しているという点が重要である。記号に関していえば、独立した構成要素をもっているということである。これは CC 以外にも、UDC と BC で実現されている。記号が独立した構成要素をもつことによって、単一要素からなる記号法の分類法(DDC や EC)よりも柔軟に複合的な主題に対応できるのである。

ところが、3.2.3(2)項でみたように、CC 第 1 版で Ranganathan は「複合的な主題への対応」に関して 2 種類のことを述べている。すなわち、

異なる原基表の番号を指定された順列組合せで結合することによって、考え得るすべてのトピックに対する分類番号を構築することができる。
(Ranganathan 1933, p.xiii)

コロン分類法の記号法がもつ非常に高い柔軟性のために、コロン分類法の分類項目は非常に高い詳細さを達成することができる。(Ranganathan 1933, p.I-34)

である。1つ目の引用では原基表(ファセット)の記号を組合せることで複合的な主題に対応できると述べており、2つ目の引用では記号法の柔軟性(独立要素からなること)によって複合的な主題に対応できると述べている。

もちろん、Ranganathan の意図としては、1つ目の引用での「原基表の番号の結合」とは、それぞれの原基表の番号を独立に組合せることを意味していたであろう。しかし、この2つの引用に象徴されるように、「原基表(ファセット)の記号を独立に組合せる」という文は、「①原基表(ファセット)の記号を組合せる」と「②独立に組合せる(独立要素からなる記号法を使用する)」という2つの文に分解できる。そして、複合的な主題に対応することによって本質的なのは②であるのに、いつのまにか①も複合的な主題に対応するために不可欠であるかのようにとらえられてしまったのではないかと考えられる。少なくとも、分類論のテキストブックの記述からはそのように読みとれる。Ranganathan 自身がどう考えていたかは第4章で検討する。これを図式化したのが図3-43である。「ファセットの組合せ」は実際には複合的な主題への対応にとって本質的ではないので、破線とした。

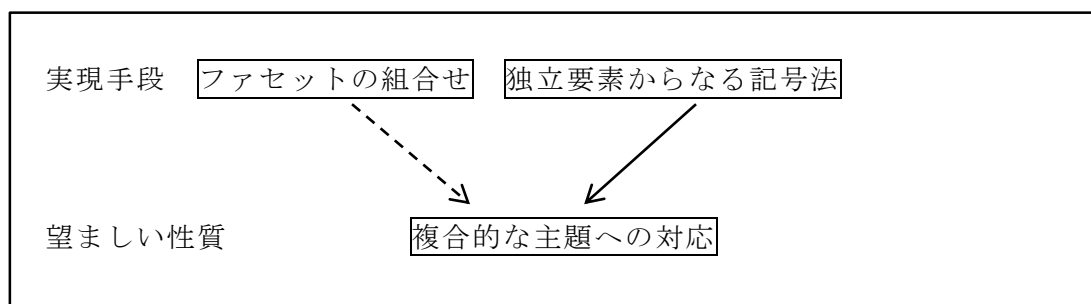


図 3-43 分類法の望ましい性質「複合的な主題への対応」とその実現手段

もともとファセット概念は「特定の区分特性による区分肢の総体」という単純かつ明確な意味をもっていた。このファセット概念は記号が単一要素からなる分類法においても使われていた。しかし、Ranganathan がファセット概念を導入した CC は、記号が独立した構成要素からなる分類法であった。ファセットの組合せと独立要素からなる記号法は別の概念であるが、同じ分類法の中で一体となって使われたことが、後に「ファセットの組合せ=独立した構成要素をもつ記号法」というとらえ方がなされるようになる1つの大きな要因ではないかと考えられる。

このようにして、先ほどみた図3-42の図式からの「ファセットの組合せ=補助表等による合成」という帰結と、図3-43の図式からの「ファセットの組合せ=独立した構成要素をもつ記号法」という帰結が導かれたと考えられる。そして、図3-42と図3-43を合わせると、図3-44のようになる。

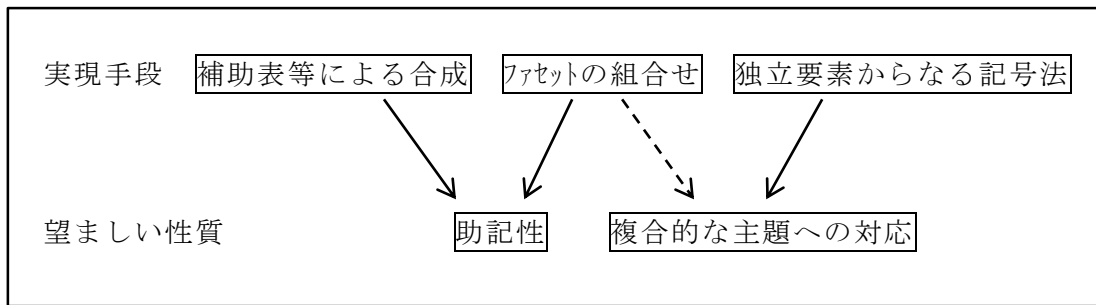


図 3-44 分類法の望ましい性質とその実現手段(1)

ここでさらに、「ファセットの組合せ」を媒介として、「補助表等による合成」も複合的な主題への対応に有効であると考えられるようになったのではないかと推測される。すなわち、図 3-45 の図式である。実際には、「補助表等の組合せ」は複合的な主題への対応に効果があるとは限らない(単一要素からなる記号法を維持したままの合成では効果がない)ので、破線で示した。

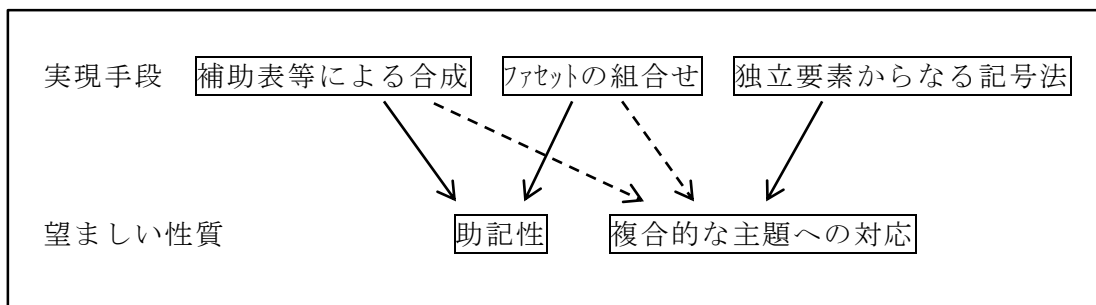


図 3-45 分類法の望ましい性質とその実現手段(2)

以上の考察を前節までの分析と合わせると、以下の結論が得られる。

第 1 章冒頭でみたように、Ranganathan が導入したファセット概念自体は、「特定の区分特性による区分枝の総体」という、理論的には特に新しい概念ではなかった。また、実際的にも、すでに DDC 以来の分類法でファセット概念に対応する考えはとり入れられていた。特に、補助表はファセットの一種とみなすことができる。そして、補助表等による合成表示は助記性を高めるということも認識されていた。

しかし、Ranganathan は、従来の分類法の補助表は本表に対する補足的なものでしかないことを問題とした。本表自体がファセットで構成されていなければならないと考えたのである。これは、助記性をいっそう高めるためにも必要である。このように、Ranganathan によるファセット概念導入の 1 つの意義は、従来の補助表等による合成を、ファセットを使ってより体系性、一貫性をもたせようとしたことにある。

一方、Ranganathan はこのファセット概念を用いて、複合的な主題に対応するために、区分特性に独立性を与えようとした。これは独立要素をもつ記号法を採用することで実現される。独立要素をもつ記号法もすでに UDC や BC で採用されていたが、それは補助表やメインクラスどうしの記号の合成によるものであり、体系性、一貫性に欠けていた。Ranganathan はファセット概念を導入することによって、合成の体系性、一貫性だけでなく、区分特性の独立性にも体系性、一貫性を与えようとしたのである。これがファセット概念導入のもう 1 つの意義である。

ファセット概念を導入することによって区分特性の独立性に体系性と一貫性を与えたということの重要性は、複合主題への対応と混合主題への対応の区別に顕著に現れている。図 3-41 に示されているように、UDC や BC は多次元構造と自由構造を区別なくとり入れているが、CC は第 2 版まで多次元構造のみをとり入れ、自由構造をとり入れたのは第 3 版からである。すなわち、CC 第 2 版まではファセット式によって(まだファセット式とは呼んでいないが)異なるファセットの項目を独立に組合せることだけを行っている(多次元構造)が、第 3 版以降ではフェイズ関係やファセット内関係を導入して同じファセット内の項目も組合せることができる(自由構造)ようにした。前者が表現できるのが複合主題で、後者が表現できるのが混合主題である(2.3.1 項)。「特定の区分特性による区分肢の総体」という意味のファセット概念を意図的に導入したからこそ、ファセット間とファセット内の相違に気づき、複合主題への対応と混合主題への対応を区別することができたのである。UDC や BC では独立要素からなる記号法を用い、ファセット概念を補助表という形で無意識的に用いているが、ファセット概念を意識して用いていないために、複合主題と混合主題の区別に気づかなかつたと考えられる。

このように、Ranganathan によるファセット概念の意図的な導入は、合成と区分の独立性の両者に体系性、一貫性を与えるという意義があった。しかし、上で考察したように、補助表やファセットによって合成を行うということと、独立要素からなる記号法を採用するということは、必ずしも同じではない。Ranganathan は、前者を助記性向上のためとし、後者を複合的な主題に対応するため、として区別していた。したがって、両者の相違を(おそらく無意識的に)認識していたと思える。ところが、どちらもファセット概念が関わっていたために、この相違が見過ごされ(意識的に区別できずに)、ファセットと独立要素からなる記号法の一体化、および、ファセットの組合わせと補助表等による合成の同等視、が生じたと考えられる。これが、合成が複合的な主題への対応に有効であるという誤解の原因と推測される。

Ranganathan が、補助表やファセットによって合成を行うということと独立要素からなる記号法を採用することの相違を意識的に区別できなかったのは、ファセット概念が CC という特定の分類法の中で使われたということと、CC も含めて当時の分類法が記号の合成をとり入れていたということが、直接の原因であると考えられる。さらに、合成は合成表示という表示方法に関わるものであり、独立要素からなる記号法は多次元構造や自由構造という構造に関わるものである、ということを確認には認識していなかった(ただし、無意識的にでも両者を異なる目的に結びつけていたことは、漠然と認識していた可能性を示唆している)ことが、間接的な原因としてあげられる。これは Ranganathan や当時の分類法作成者にかぎらず、分類法のテキストブックの著者にもいえることである。

Ranganathan によるファセット概念導入の意義には、合成と独立要素からなる記号法にいままで以上の体系性と一貫性を与えたという効の面と、合成と独立要素からなる記号法を混同してしまったという罪の面の、両面があったといえる。

3.4 第3章のまとめ

Ranganathan によるファセット概念導入の意義を検討するため、DDC から CC までの主要な分類法における構造、合成表示の方法、記号法、ファセット概念について分析を行った。分類法は、単一要素からなる記号法をもつものと、独立要素からなる記号法をもつものに分けられる。そして、時代的にも、単一要素からなる記号法をもつ分類法は 19 世紀の第 4 四半期に作成され、独立要素からなる記号法をもつ分類法は 20 世紀前半に作成されている。

3.1 節では、単一要素からなる記号法を採用している分類法として、DDC と EC を検討した。

DDC では、補助表による合成(本格的には DDC 第 13 版から)と「〜と同様に区分しなさい」という指示による合成(明示的には DDC 第 2 版から)が使われている。また、EC における合成表示の方法には、本表の記号に補助表の記号を合成する場合と、本表どうしの記号を合成する場合がある。後に Ranganathan は、CC の利点の 1 つとして「合成による助記性の向上」(利点 A)をあげるのだが、DDC も EC も合成表示を実現している。合成をすることによって助記性が高まることについては、すでに DDC 第 1 版で「地理区分が助記性を与えるために有効である」と主張されていた。

一方、Ranganathan があげる CC のもう 1 つの利点「独立要素からなる記号法による複合的な主題への対応」(利点 B)については、DDC でも EC でも満たされていない。DDC も EC も単一要素からなる記号法を用いており、補助表や「〜と同様に区分しなさい」という指示によって記号を合成しても、合成された記号はやはり単一要素からなることに変わりはないからである。

CC における「特定の区分特性による区分枝の総体」としてのファセット概念に該当することは、Dewey も Cutter も明示的には述べていない。しかし、DDC も EC も地理区分や文学形式区分など、「特定の区分特性による区分枝の総体」に該当する項目を補助表としてまとめている。これは、どちらの分類法も実質的にはファセット概念をとり入れているといえる。さらに、DDC の見出しや中間見出しは区分特性を明示しており、ファセットを形成しているといえる。

3.2 節では、独立要素からなる記号法を採用している分類法として、UDC, BC, CC を検討した。

Otlet は UDC の中に、「地理的、歴史的、形式的カテゴリーといった、分類のあらゆる部分に存在するいくつかの基本的観念」や「どの個別の区分枝において

も、規則的に繰り返す項目」などがあると説明している。また、BlissもBCの中に、「歴史年代や、国・言語・関連する研究教育との関わり、そして表現・処理・編成の形式」などの、「多くの主題に共通の項目」があり、それらは「体系全体で繰り返される」と説明している。そして、これらの「基本的概念」や「共通の項目」、「規則的に繰り返す項目」を補助表としてまとめることを行っている。すなわち、UDCではこれらの「基本的概念」や「規則的に繰り返す項目」を共通補助表などにまとめ、BCでは「多くの主題に共通の項目」や「体系全体で繰り返される項目」を体系表や体系的補助表にまとめている。これらの「基本的概念」や「共通の項目」は、CCにおける「特定の区分特性による区分枝の総体」としてのファセット概念に該当するといえる。

次に、CCの利点である「合成による助記性の向上」(利点A)と「区分の独立性による複合的な主題への対応」(利点B)であるが、OtletはUDCを作成するにあたり、記号が複合構造をもつ(独立要素からなる記号法を採用している)分類法の利点として、a)助記性を高める、b)構成要素に分かれていることにより分類記号全体の意味が理解しやすくなる、c)多様な組合せを形成することができる、d)分類する人の観点によって異なる分類記号を与えることが可能になる、をあげている。a)の「助記性を高める」は、CCの利点Aと一致する。c)とd)は、独立要素からなる記号法によって実現されるものであり、CCの利点Bと一致する。もともと、DDCなどの従来の分類法では細目の展開が右端にしかできず(単一要素の記号法)、複合的な主題への対応が困難であることが、DDCを基にしながらも新しい分類法としてUDCを作成した理由である。つまり、UDCは利点Bを意図して作成されたのであるが、その結果、利点Aも実現されたのである。

一方、BCにおいては、Blissは「体系的補助表」をもととは「助記表」とか「助記的細目」と呼んでおり、補助表が助記性を高める手段であると認識していた。これは、CCの利点Aである。また、体系的補助表の記号の順序は選択することができ、体系的補助表による記号は独立している。すなわち、BCは独立要素からなる記号法をもつ分類法であるから、利点Bも実現されている。

CCについては、第1版と第3版を中心に検討し、CC第3版でファセットという用語で呼ばれることになる概念がすでにCC第1版に存在していたこと、また、従来の分類法に対するCCの利点(したがって、CCを作成した理由)は、先ほどから示している利点Aと利点BであることをRanganathanが認識していたことをみてきた。さらに、利点Aの助記性については、原基表(ファセット)以外に補助表等でも同等の効果があること、また、利点Bの区分の独立性は、独立要素からなる記号法によって実現されていること、をみた。

3.3 節では、以上の結果を基に考察を行った。

「特定の区分特性による区分肢の総体」という意味でのファセット概念は、すでに DDC の初期の版から使われていたことを確認した。一方、Ranganathan が CC の利点の 1 つとしてあげた「助記性を高める」(利点 A)に関しては「ファセットの組合せ」だけでなく「補助表等による合成」も同等の効果があることから、「ファセットの組合せ」と「補助表等による合成」が同等視された。また、もう 1 つの利点である「複合的な主題への対応」(利点 B)が、本来は「独立要素からなる記号法」によるものであるにもかかわらず、「ファセットの組合せ」も複合的な主題への対応にとって効果的であるととらえられるようになった。

そしてさらに、「独立要素からなる記号法」と「ファセットの組合せ」の同等視、および、「ファセットの組合せ」と「補助表等による合成」の同等視から、「ファセットの組合せ」を媒介として、「独立要素からなる記号法」と「補助表等による合成」の同等視も生じたと考えられる。

これらはいずれも、ファセットという用語が始めて導入された CC が、独立要素からなる記号法をもち、ファセットの組合せだけでなく補助表等による合成も可能であったことが直接の原因と考えられる。また、間接的な原因として、構造-表示方法説という視点が当時の分類法作成者にはなかったことがあげられる。

以上の考察を通して、Ranganathan によるファセット概念導入の効と罪を明らかにした。

第 4 章

Ranganathan における ファセット概念の展開

本章では、ファセット概念、ファセットと基本カテゴリーの関係、ファセット化分類法と分析合成型分類法の関係について、Ranganathan の考え方の変遷を検討する。J. P. Tennis(2012)も述べているように、Ranganathan は著作ごとに微妙に考え方が変化していく。

Ranganathan の分類理論の第 1 の特徴は、常に変化しているということである。1920 年代後半に[理論を]自身の実践に反映させ始めたときから、1960 年代の彼の最後の出版物まで、彼の考えが進化しているのがわかる。これは、Ranganathan の分類理論が何であるのかを考えると、彼の仕事のどの段階を議論しているのかを明らかにしなければならないことを意味している。(Tennis 2012, p.302 ; []は引用者の補足、以下同様)

そのため、本章では Ranganathan の著作を発表年順に逐次的に分析する方法をとった。ただし、必要に応じて時期が多少前後する場合もある。また、Ranganathan の著作に関しては一部前章でとりあげたが、多少重複しても、ファセットに関係する Ranganathan の著作を網羅的に検討した。

Ranganathan のファセットに関する著作は、以下の 3 期に分けることができる。

第 1 期：1933 年－1945 年

第 2 期：1949 年－1952 年

第 3 期：1957 年－1969 年

各期の特徴は以下の各節で検討する。なお、上記の Tennis(2012)も Ranganathan の分類研究をいくつかの段階に区分しているが、必ずしもファセットだけに注目しているわけではないので、本章での区分と同じではない。

4.1 第1期：1933年－1945年

この節では、CC第1版(Ranganathan 1933)からCC第3版(Ranganathan 1950a)までを対象とする。ただし、CC第3版は1950年の出版であるが、後に述べるように、CC第3版の内容は第2期に属する1949年以降の著作の成果を反映していない。そのため、本節の見出しを、CC第3版の前に出版された1945年の著作までの「1933年－1945年」とし、CC第3版もこの中に入れることにした。

CC第1版が出版された1933年以前に作成された主要な分類法には、DDC第1版(Dewey 1876)からDDC第13版(Dewey 1932)まで、EC(Cutter 1891-93)、LCC(Library of Congress 1899：最初の大綱)、UDC第1版(UDC 1905-07：フランス語)とUDC第2版(UDC 1927-33：フランス語)がある。また、1933年から1945年の間には、UDC第3版(UDC 1934-53：ドイツ語)とUDC第4版(UDC 1936およびUDC 1943-：英語)、BC試作版(Bliss 1935)とBC完成版(Bliss 1940-53)、DDC第14版(Dewey 1942)が出版されている。

4.1.1 1933年－1939年

(1) Colon Classification 第1版(1933年)

3.2.3項でみたように、CC第1版(Ranganathan 1933)ではまだファセットという用語は使われていないが、ファセット概念に該当するものはすでにでてきている。

CC第1版は、まず知識の全領域を主題区分(subject division)に分ける。主題区分には、「総記」、「A 科学(一般)」、「B 数学」、・・・「M 有用技術」、「N 美術」、「O 文学」、・・・「Y 社会学を含むその他の社会科学」、「Z 法律」などがある。各主題区分は、それぞれいくつかの区分特性に基づいて細目(divisions)に区分される。主題区分「2 図書館学」の細目の一部を図4-1に示す(図3-33の再掲)。

2 LIBRARY SCIENCE			
<i>Divisions based on Problem or P Characteristic</i>		<i>Divisions based on Library or L Characteristic</i>	
1	Building and equipment	1	National and similar libraries
11	Stack room	11	National library
12	Catalogue room	12	Central library
13	Reading room	13	Copyright library
14	Counter	15	Regional library
15	Periodicals room	2	Public library
16	Office room	21	City library
17	Exhibition room	22	Rural library
18	Lecture room	3	Academic library
19	Other rooms	31	School library
2	Legislation	32	College library
3	Finance	33	University library
4	Administration	34	Library of research organisations
41	Book selection	35	Library of learned societies
42	Book order	4	Business library
43	Periodicals work	41	Industrial library
44	Accessioning	42	Commercial library
45	Preparation of the book	45	Government departmental library

図 4-1 CC 第 1 版の「図書館学」(Ranganathan 1933)

たとえば、主題区分の「2 図書館学」を、問題特性(Problem or P Characteristic)に基づいて区分すると細目「13 閲覧室」が得られ、図書館特性(Library or L Characteristic)に基づいて区分すると細目「11 国立図書館」が得られる。そして、これらの分類記号を連結記号コロン(:)を使って合成すると、「213:11 国立図書館における閲覧室」という主題を表現することができる(主題区分の後ろにはコロン記号を使わない)。

ここで、「問題特性に基づく細目(Divisions based on Problem or P Characteristic)」は CC の第 3 版で「問題[P]ファセット」と呼ばれるようになる。「図書館特性に基づく細目」も同様である。CC 第 1 版において、ファセットという用語は使われていないが、ファセット概念はすでに存在していたといえることができる。

Ranganathan がファセット概念を考案した理由も、すでに 3.2.3 項でみた。それは、従来の分類法(DDC や EC など)は項目(分類項目)が確定している表の中から特定の主題に対応する項目を探すのに対して、CC はいくつかの原基表(後のファセット)の項目を組合せることで、表の中には存在しない項目をつくることのできる、ということである。

この相違点から、Ranganathan は、従来の分類法に対する CC の利点を 2 つあ

げている。それは、区分特性による細目(原基表)を使うことによって助記性が高められること(利点A)と、区分特性ごとに区分が独立に行われるため複合的な主題に対応した区分ができること(利点B)、である。

(2)Prolegomena 第1版(1937年)

CC 第1版を公表した後、Ranganathan は分類の理論書を執筆した。それは Prolegomena to Library Classification の第1版(以下、Prolegomena 第1版)(Ranganathan 1937)で、第3版まで改訂されている。全体が2部で構成され、第1部で分類の理論について説明し、第2部で各種分類法の比較を行っている。第2部の比較にとり上げられた分類法は、DDC, EC, LCC, SC, CCである。

第1部の理論編では、まず分類の一般理論が述べられる。アレイ(array)とチェイン(chain)もここで導入されている。それに続いて、分類の規準(canon)について詳しい説明が行われる。規準は、区分特性、アレイ、チェイン、用語(terminology)、記号法(notaiion)の5つの基本カテゴリーに与えられる(ここでの基本カテゴリーという用語は、後の PMEST という5つの基本カテゴリーとはまったく関係がない)。たとえば、

区分特性に関する規準

- ・同時適用の規準：2つの区分特性を同時に適用するべきではない。
- ・永続性の規準：各区分特性は、分類法の目的が変わらない限り、範囲が明確で、不変であり続けるべきである。

アレイに関する規準

- ・包括性の規準：アレイ内のクラスは・・・全体を包括するべきである。
- ・相互排他性の規準：アレイ内のクラスは相互に排他的であるべきである。

などがあげられている。

規準の他に、章としてまとまってはいないが、各所で分類の原理(principles)について説明がでてくる。たとえば、分類項目の配列順序に関する原理(量の順、発展経緯の順などの原理に基づいて配列するべきである)や階層関係に関する原理(親の下に子ではなく孫を位置づけるようなことをしないようにするべきである)などである。規準との関係についての説明はないが、原理は規準より具体的である。

この Prolegomena 第1版で重要なのは、合成ができる分類法を合成型分類法(synthetic classification)と呼んでいることである。

Prolegomena 第1版ではまた、CC 第1版で説明なしに用いられていた「区分

特性」という用語について定義を与えている。

区分特性は、実体の類似または非類似を判定できる、少なくとも 2 つの実体が異なるものであると判定できる、属性または属性の複合である。

例：

1. どちらも属性ではあるが、身長は子どもの区分特性であるのに対して、顔に付いているもの[目、鼻など]はそうではない。顔に付いているものはすべての子どもに等しく共通している属性であり、それに関してすべての子どもは同じである。したがって、それは実体としての子どもの区分特性ではない。(Ranganathan 1937, p.9)

そして、CC 第 1 版で各主題区分を細分するために使用した区分特性を「区分特性の系列(train of characteristics)」と呼び変えている。「区分特性の系列」とは区分特性が複数使われることを意味している。CC 第 1 版では区分特性は単数だったのに、なぜ複数にしたのかについては説明がない。しかし、だいたい後のことになるが、D. J. Campbell による用語集(Campbell 1957)では、区分特性の系列について、「細目のチェーンを導くために使われる連続した区分特性」と説明されている。つまり、何段階か階層的に区分するために複数の区分特性が使われる、ということのようである。

Prolegomena 第 1 版のもう 1 つの重要な点は、CC 第 1 版であげられていた従来の分類法に対する CC の利点「区分特性による細目(原基表)を使うことによって助記性が高められる」(利点 A)に関連する言及である。実際には、助記性を高めるという点では、補助表や「～と同様に区分しなさい」という指示による合成でも同等の効果がある。しかし、CC 第 1 版ではこのことに言及していない。ところが、Prolegomena 第 1 版では、DDC の「～と同様に区分しなさい」も助記性を高める手段としてあげている(Ranganathan 1937, p.121-122)だけでなく、コロン記号による原基表の組合せ以外に、地理区分表や時代区分表などの使用によって助記性が高められると述べている(Ranganathan 1937, p.127)。この時点で Ranganathan は、原基表の組合せと補助表等による合成は助記性に対して同等の効果があることに気づいていたと思われる。

ただし、CC のもう 1 つの利点「区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合的な主題に対応した区分ができる」(利点 B)からみれば、原基表の組合せと補助表等による合成には本質的な違いもある。それは、原基表の項目どうしは独立に組合わされるが、補助表等による合成は必ずしも独立が保たれた合成ではな

い，ということである。上述のように，原基表の組合せができる分類法を合成型分類法と呼び，補助表等による合成ができる分類法についてはその名前で呼んでいないのは，組合せまたは合成の際の独立性の有無によると考えられる。

(3) Colon Classification 第 2 版(1939 年)

Prolegomena 第 1 版で分類理論を深めた後，CC 第 2 版(Ranganathan 1939)を出版している。ファセット概念に関連して重要なのは，区分特性の組合せ方法を表示していることである。図 4-2 の例では「2 [P]: [L]」と表示されている。これは，主題区分の「2 図書館学」に，問題特性[P]を合成し，さらに連結記号コロン(:)を使って，図書館特性[L]を合成する，という意味である。

2 LIBRARY SCIENCE			
2 [P]: [L]			
<i>Divisions based on the train of Problem or P Characteristic</i>		<i>Divisions based on the train of Library or L Characteristic</i>	
1	Building and equipment	1	National and similar libraries
11	Stack room	11	National library
12	Catalogue room	12	Central library
13	Reading room	14	Copyright library
14	Counter	15	Regional library
15	Periodicals room		

図 4-2 CC 第 2 版の「図書館学」(Ranganathan 1939)

この区分特性の組合せ方法の表示は，後に区分特性の式(formula of characteristics)と呼ばれ，さらにファセット式(formula of facets)と呼ばれるようになる。

4.1.2 1944 年—1945 年

1930 年代に CC の第 1 版と第 2 版および分類の理論書である Prolegomena 第 1 版を出版した Ranganathan は，1940 年代半ばに豊富な実例を盛り込んだ分類の解説書と簡略な解説書を相次いで出版し，1950 年に CC 第 3 版を公表している(CC 第 3 版をここに入れる理由は本節冒頭で説明した)。これらの著作の中でファセットという用語が使われている。

(1) Fundamentals(1944 年)

豊富な実例を盛り込んだ分類の解説書とは，Library Classification: Fundamentals & Procedure(以下，Fundamentals)(Ranganathan 1944)である。この Fundamentals の中でファセットという用語を初めて使用している。

下記の 11 のメインクラスでは 2 つ以上の区分特性の系列に基づく細分が認められており、したがってまた、それら[のメインクラス]に属する特定の主題は同じ数のファセットを提示している。(Ranganathan 1944, p.63)

ここで述べられているメインクラスとは、化学、技術、神秘主義と超自然的経験、文学、言語学、宗教、心理学、地理、歴史、政治学、経済学である。これらのクラスでは区分特性の系列に基づいて区分して細目を作る。それによって、区分特性の系列の数と同じだけのファセットができる、というのである。たとえば、『(キリスト教の)神学入門』という図書の主題はメインクラス「宗教」に属する。このメインクラスは区分特性の 2 つの系列に基づいて区分される。それは宗教研究と宗教上の問題である。この図書は「キリスト教」に関するもので、それによって派生する問題は「神学」である。したがって、この主題は 2 つのファセットをもつ。それは、宗教ファセットとしての「キリスト教」と、問題ファセットとしての「神学」である。(Ranganathan 1944, p.65 の例から引用)

この Fundamentals ではファセットとは何かという直接の定義は与えられていない。上記の引用文の説明が間接的にファセットを定義している。つまり、「区分特性の 2 つの系列に基づいて区分される」と「2 つのファセットをもつ」が対応していることから、「区分特性の系列に基づいて区分されてできる区分肢の総体」が「ファセット」であると推測される。

このようにファセットという用語は Fundamentals で初めて導入された。しかし、CC 第 2 版(Ranganathan 1939)で導入された区分特性の組合せ方法の表示は、区分特性の式と呼ばれ、まだファセット式という名称は使われていない。区分特性の式は多数の用例があげられている。たとえば、E[P]:[S] という区分特性の式において、E は化学、[P]は問題ファセット、[S]は物質ファセットである。「E33:5」という分類記号は、「化学(E)における有機物質(5)の定量分析(33)」という意味になる(Ranganathan 1944, p.73 の例から引用)。このように、用語は区分特性の式のままであるが、式の中に連結記号(connecting symbol)としてコロンが使われている。そして、連結記号によってファセット間に独立性が与えられていると述べている。

連結記号の導入により各ファセットにいわば自律性が与えられ、したがって、コロン番号は独立したファセットの連合体(federation)のようである・・・(Ranganathan 1944, p.337)。

CC 第 1 版(Ranganathan 1933)でみた CC の利点の 1 つ「区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合的な主題に対応した区分ができる」(利点 B)が、ここでも強調されている。

しかし、その一方で、DDC にもファセットがあることを認めている。Fundamentals の 2 年前に出版された DDC 第 14 版には「表 3 言語と文学」と「表 4 言語区分」があり、表 3 にリストされている言語の項目および文学の項目は、表 4 にリストされている言語区分の分類番号を加えることで細分することができる、と説明している。表 3 は、本表中の特定言語、または特定言語の文学の項目を、言語名のアルファベット順に列記している。要するに、本表の特定言語に関する索引である。たとえば、アラビア語は、「492.7 Arabic 892.7」というように、言語名を中心に、左にその言語の分類記号、右にその言語の文学の分類記号が示されている。表 4 は言語区分の補助表といえるものである。「1 正字法」、「3 辞書」、「51 形態論」、「52 統語論」などがある。ただし、分類記号の順ではなく、言語区分名のアルファベット順に列記している。そして、本表の項目である表 3 の「429.7 アラビア語」に、補助表の項目である表 4 の「1 正字法」を加えると「429.71 アラビア語の正字法」ができる。Ranganathan はこれを「ファセット分析！ メカノの原理!!」(Ranganathan 1944, p.333)と呼んでいる。メカノとは CC 第 1 版で言及したメカノ玩具のことである。このように、Ranganathan は DDC の合成もファセットの合成であるとしているのである。たしかに、ファセットとは、「特定の区分特性による区分枝の総体」のことであるから、言語区分という特性によって作られる「表 4 言語区分」はファセットといえるであろう。

問題は、DDC の「ファセット」が CC のファセットのように独立性を与えられているかどうかである。「メカノの原理」と呼んでいるということは、合成されるものどうしの独立性を認めているようにも思える。しかし、独立性を与えるためにはコロンのような連結記号が必要である。Ranganathan は、DDC の小数点を連結記号として使えばよいという B. I. Palmer の提案を紹介している(Ranganathan 1944, p.426-428)ことから、いまのままで DDC の「ファセット」が独立性を与えられているのではなく、適切な連結記号が使用されれば独立性が得られる、と考えていたように思われる。

Fundamentals には基本カテゴリー(fundamental categories)という用語もでてくる。

私たちはファセット分析に関わる最後の点に到達した。異なる主題のファセ

ットを調査することによって、それらはすべて 5 つの基本カテゴリーのいずれかに関連していることが明らかとなった。それは、**Time, Space, Energy, Matter, Personality** である。どのような分析も最終的にはそこに行き着く。したがって、分類の上級コースの学生は、背景にあるそれら[基本カテゴリー]の存在に慣れてきて、それらに関連させて自分の考えを明確にすることができれば、助けになるであろう。・・・まず **Time** から始めよう。これはおそらく、5 つの中で最も抽象的である。・・・**Space** はおそらく **Time** より具体的であろう。しかし、その他のカテゴリーほどではない。・・・カテゴリー **Energy** は他のものよりもずっと多くの使い道がある。これに関連するファセットをもたないクラスはほとんどない。・・・カテゴリー **Matter** においては、比較的抽象性が少なく、かなり具体性のあるものに出会う。・・・5 つ目の基本カテゴリーである **Personality** は、上で述べたように、非常に一般化した意味で使うべきで、分析不能である。それは注意深く全体として扱わなければならない。(Ranganathan 1944, p.429-434)

このように、5 つの基本カテゴリー **PMEST** も **Fundamentals** で初めて導入されている。ただし、この後に出版される **CC 第 3 版**(Ranganathan 1950)では使われていない。それどころか、この **Fundamentals** でも上記の説明があるだけで、実際には使われていない。先ほどの『(キリスト教の)神学入門』の例でみたように、「宗教ファセット」や「問題ファセット」というメインクラスに特有のファセットを使っているのである。

上の引用文にもあるように、基本カテゴリーは初心者がファセット分析(課題となっている主題に属するファセットが何であるかを分析する行為)を行う際の手引きのような役割を想定していて、一般化したファセット式(この時点ではまだ「区分特性の式」)で使うことは考えていなかったと思われる。基本カテゴリーがファセット分析の補助的手段ではなく本質的な役割を与えられるようになるのは、**CC 第 3 版**より後のことである(4.2.1 項参照)。

なお、**Prolegomena 第 1 版**で詳しく説明された分類の規準と原理が本著作でも提示されている。

(2)Elements 第 1 版(1945 年)

Elements of Library Classification の第 1 版(以下、**Elements 第 1 版**)(Ranganathan 1945)は、インドの大学での講義録をもとにした冊子である。**Prolegomena 第 1 版**(Ranganathan 1937)や **Fundamentals**(Ranganathan 1944)に比べると簡潔な内容になっているが、ファセット分析という章もある。そこで

は、

Fundamentals は「ファセット」・・・の概念を導入した。・・・[この]概念・・・は、「区分特性の系列」・・・よりも洗練されていることがわかった。
(Ranganathan 1945, p.75)

と述べている。つまり、Fundamentals では間接的な表現であったが、ここでは「区分特性の系列」が「ファセット」という用語でおき換えられたことを明記している。また、Fundamentals ではまだ区分特性の式と呼ばれていたが、このElements 第1版ではファセット式と呼ばれている。基本カテゴリーについてはまったく言及がない。Prolegomena 第1版やFundamentals と同様に、規準は1つの章として、原理は各所で説明されている。

(3) Colon Classification 第3版(1950年)

Ranganathan が CC でファセットという用語を用いたのは第3版(Ranganathan 1950a)が最初である。3.2.3項でみたように、CC 第3版ではすべての主題がメインクラスに分けられる。メインクラスはCC 第1版の主題区分に該当するもので、項目もほぼ同様に「1 to 9 総記」、「A 科学(一般)」、「B 数学」、・・・「M(その他の)応用化学, 有用技術」、「Δ 超自然的経験と神話的解釈」、「N 美術」、「O 文学」、・・・「Y 社会学を含む(その他の)社会科学」、「Z 法律」となっている。メインクラスの下位クラスをカノニカルクラスと呼ぶ。そして、ファセットは次のように定義されている。

区分特性の系列に基づく、あるメインクラスまたはカノニカルクラスの区分枝の総体は、その[クラスの]ファセットの1つを構成する。(Ranganathan 1950a, pt. I : p.41)

要するに、ファセットとは「区分枝の総体」である。ただし、単なる項目の寄せ集めではなく、特定の区分特性による区分枝の総体であり、ファセット内の区分枝間にはその区分特性に関わる共通の性質がある。

ファセットの組合せ方法の表示はCC 第2版(Ranganathan 1939)で導入され、Fundamentals(Ranganathan 1944)で区分特性の式という名称を与えられ、Elements 第1版(Ranganathan 1945)でファセット式と呼ばれるようになったが、このCC 第3版でもファセット式という用語が使われている。各クラスは、ファセット式に基づいて区分される。

ファセットおよびファセット式はクラスごとに異なっている。たとえば、「2 図書館学」クラスにおいては、「問題(P)ファセット」と「図書館(L)ファセット」があり、それらのファセットごとに区分した後で、ファセット式 2[P]:[L] によって連結される(図 4-3: 図 3-35 の再掲)。たとえば、「国立図書館の閲覧室」という主題の場合、まず、問題ファセットによって「閲覧室」に区分される。「閲覧室」の分類記号は「13」である。次に、図書館ファセットによって「国立図書館」に区分される。「国立図書館」の分類記号は「11」である。これらの記号をファセット式に代入すると、「国立図書館の閲覧室」という主題の分類記号「213:11」が得られる。

2 LIBRARY SCIENCE			
2 [P]: [L]			
<i>Foci in</i>		<i>Foci in</i>	
Problem or P		Library or L	
<i>Facet</i>		<i>Facet</i>	
1	Building and equipment	1	National and similar libraries
11	Stack room	11	National library
12	Catalogue room	12	Central library
13	Reading room	14	Copyright library
14	Counter	15	Regional library
15	Periodicals room	2	Public library
16	Office room	21	Rural library
17	Exhibition room	25	City library
18	Lecture room	3	Academic library
19	Other rooms	31	School library
4	Administration	32	College library
41	Book selection	33	University library
42	Book order	34	Library of research organisations
43	Periodicals work		
44	Accessioning		
45	Preparation of the book		

図 4-3 CC 第 3 版の「図書館学」(Ranganathan 1950a)

基本カテゴリーは使用していないし、言及してもいない。Fundamentals で初めて基本カテゴリーの概念を導入しておきながら、Fundamentals の中で実際に使用していない理由は、(1)項で、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していたからであろうと推測をした。しかし、Fundamentals 出版の 1944 年以降、CC 第 3 版出版の 1950 年ころまでの間に、Ranganathan は、図書館の蔵書だけでなく学術雑誌の論文なども分類の対象にするためには、基本カテゴリーの積極的な活用が必要だということに気づいていた。この問題については 4.2 節で検討するが、それではなぜ CC 第 3 版で使わなかったのかについて、以下の文が推測の鍵を与えてくれる。

最初は選択ファセット(optional facet)という新しい概念に関する作業を完成

させるつもりだった。これは、ドキュメンテーションサービス、雑誌の抄録作業、それに事務所の記録物や博物館・ワークショップの資料をファイリングし整理する際に生じる深い分類(depth classification)の要求を満たすために開発されたものである。それをこの版の中に組み込んで、1950年代後半に発表しようと考えていた。・・・[しかし]第2版はかなり突然に売りきれとなってしまった・・・。そのためこの版は、物理学、文学、教育の表以外には多くの変更を行わずに公表した。(Ranganathan 1950a, pt. I :p.14)

基本カテゴリー自体については何も述べていないが、この引用にでてくる選択ファセットや深い分類は基本カテゴリーの使用と密接に関連している。したがって、基本カテゴリーに関して、理論的にはある程度研究が進められていたと考えられる。それにもかかわらず CC 第3版で使用しなかったのは、急いで出版しなければならなかったためとり入れている余裕がなかったからであると推測される。基本カテゴリーが CC で使用されるようになるのは第4版からである。

4.2 第2期：1949年－1952年

本節では、1949年－1952年の期間に発表された著作を検討する。短い期間であるが、分類に関して Ranganathan の最も生産的な時期である。

3.2節でみたように、UDC, BC, CC が独立要素からなる記号法を採用したのは、複合的な主題を表現できるようにするためであるが、第二次世界大戦を経た20世紀半ばにはこの要求がますます高まった。特にそれは科学技術文献の流通、蓄積、検索の領域で強く求められ、分類もそのための手段として重要視される。

4.2.1 1949年－1950年

(1) Self-perpetuating(1949年)

4.1.2(2)項でみたように、5つの基本カテゴリーPMESTが初めて導入されたのは1944年出版の Fundamentals(Ranganathan 1944)においてであるが、そこではまだ、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していて、一般化したファセット式(当時は「区分特性の式」)で使っていない。しかし、基本カテゴリーに関する研究は Fundamentals 以降も続けられていた。1949年の著作 Self-perpetuating scheme of classification(以下、Self-perpetuating)(Ranganathan 1949)では、以下のように述べている。

ファセット分析の根底にある基本カテゴリーは、・・・伝統的なカテゴリーtime, space, energy, matter, personality である。異なる主題のファセットは異なる体現(manifestations)ではあるが、それ[基本カテゴリー]を通じてすべて関連させることができる。(Ranganathan 1949, p.232)

基本カテゴリーは主題によらず共通のものであるが、同じ基本カテゴリーに関連するファセットであっても主題によって異なる現れ方をする、ということである。つまり、これまで主題ごとに異なるファセットを使ってきたが、それらはいくつかのカテゴリーにまとめることができる。そのカテゴリー(基本カテゴリー)が Time, Space, Energy, Matter, Personality の5つである。ファセットは(基本カテゴリーの)体現である、という位置づけが与えられている。この点については後の著作でより明確に述べられる。

このように、基本カテゴリーについて言及してはいるが、ファセット式では使

っていない。

Colon Classification では、構文が明確な規則によって規定されていて、それはファセット式と呼ばれる形式で表現されている。・・・たとえば、肺の結核の病因=(医学)(肺の):(結核の):(病因)=L43:421:2 である。最初のコロンは器官ファセットから問題ファセットへの移行を、そして 2 つ目のコロンは問題ファセットから処理ファセットへの移行を指示している。(Ranganathan 1949, p.227)

このように、ファセット式では、あいかわらず器官ファセットや問題ファセットが使われている。

こうしたことから、基本カテゴリーは **Fundamentals** のときと同様に初心者のための手引きという位置づけをでていないと思われる。ただし、CC 第 3 版にもでてきた選択ファセットがここでも言及されている。

[雑誌論文の中にしかでてこない主題や図書のこれまでにない大幅な増加という状況のもとで]現在のドキュメンテーション業務と将来の図書分類のためにより強力な記号法を案出して、分類番号を簡潔にしなければならない。ここ数ヶ月の間に、**Delhi School** は私たちが選択ファセットと呼ぶものを思いついた。それはこの問題に成功裏に対応できることを約束しているようにみえる。選択ファセットの連結記号はドットである。(Ranganathan 1949, p.230)

ここでも、選択ファセットとは何かや基本カテゴリーとの関係が説明されていない。実は、この選択ファセットは、本著作のタイトルでもある「自己永続性 (self-perpetuation)」とも関係がある。

自己永続性は、新しく形成された知識領域に対する適切な分類番号の構築は、思慮分別のある分類作業員(classifier)ならだれでも可能である、ということの意味する。彼はその分類番号に関して分類法作成者(classificationist)に聞く必要はない。(Ranganathan 1949, p.230)

Colon Classification は自己永続性の可能性を実証してきた。それ[CC]は他の分類法よりも、はるかにおおきな自律性を分類作業員に与えている。

(Ranganathan 1949, p.231)

新しい分野が形成されたときに、それに対応する新しいファセットを CC にとり入れることができ、それは分類法作成者による改訂を待たずに、現場の分類作業者が自分で行えるということである。これを自己永続性と呼んでいる。選択ファセットの意味もここからある程度推測される。

この著作でもう 1 つ重要な点は、Prolegomena 第 1 版(Ranganathan 1937)で使った合成型分類法という用語を、列挙型分類法と対比させていることである。この用語は A. J. Wells によるもののようである。

Wells 氏によって考案された用語を使うなら、Library of Congress Classification と Decimal Classification は列挙型(enumerative)である。すなわち、それらはすべての可能な特定主題をリストしそれに分類番号を与えようとする。・・・非列挙型(non-enumerative)または合成型と呼ぶべき Colon Classification では、大部分が複合的な概念から導かれる特定主題を列挙せずに、基本的な要素的概念だけを列挙して、それらのいくつかを組合せて特定主題を構成する。(Ranganathan 1949, p.232)

ここでもまだ分析合成型という表現は使われていない。また、これ以上の詳しい説明はない。

(2)Philosophy(1951 年)

この項でとり上げる著作 Philosophy of Library Classification(以下、Philosophy)(Ranganathan 1951b)は 1951 年の出版であるが、序文の日付は 1949 年 2 月となっている。また、(3)項でとり上げる 1950 年出版の著作中で、この Philosophy が 1950 年の出版として言及されている。こうしたことから、何らかの理由で出版は 1951 年になったが、実際はもっと早く、遅くとも 1950 年には完成していたものと考えられる。内容からみても、(3)項の著作よりも以前のものと思われる。そのため、出版年にかかわらずこの項でとり上げることにする。

まず、基本カテゴリーという考えは Wells と Palmer との共同作業から生まれたことが述べられている。

私たち[Wells と Palmer と自分]は、ファセット分析に関わる基本的な点によろやく到達した。異なる主題のファセットを調べた結果、それらはすべて 5 つの基本カテゴリー-Time, Space, Energy, Matter, Personality のどれか 1 つ

と関連させることができた。(Ranganathan 1951b, p.56)

(1)項でみた Self-perpetuating(Ranganathan 1949)でも,

Wells と Palmer が私と一緒に,ファセット式の案出とファセット内の細目の
列挙に着手した。(Ranganathan 1949, p.229)

と書かれていたが, この Philosophy でも,

ファセット式を構築する際に,逆順配列の原理(principle of inversion)が心に
浮かんだ。この原理は, A. J. Wells 氏と Bernard I. Palmer 氏, それに私が
1948年の7月に,いくつかの新しい主題をファセット式に適合させる問題を
解こうとして,日曜日を一日中ロンドンのチャーサーハウスで過ごしていた
ときに発見した。(Ranganathan 1951b, p.54)

と述べている。Wells と Palmer は後に CRG 結成時のメンバーになるのだが,
Ranganathan の考えをインド以外に初めて体系的に紹介し, Ranganathan の分
類理論普及に貢献している。

次に,ファセット式であるが,やはりまだ基本カテゴリーは使われていない。
しかし,これまで連結記号はコロンしか使われていなかったが,もう1つ,ドッ
トも使われるようになった。

ファセット式 2[L].[D].[G].[C]:[P].[S].[M]

図書館学[図書館の種類].[部署].[地理区分].[時代区分]:[問題].[主題].[資料]
ここで,最初の3つと最後の2つの連結記号は,コロンの代わりにドットで
ある。まず,この変更の理由を説明する。すべての連結記号がコロンである
としよう。そうすると,規則によって,後に続くファセットが空席(vacant)
の場合でもコロンは保持されなければならない。そうすると,いくつかのフ
ァセットが空席の場合,複数個連続するコロンが生じてしまう。・・・例えば,
248:::75 [政府機関(48)の図書館(2)におけるドキュメンテーションサービス
(75)]・・・このコロンの重なりはとても不便であろう。(Ranganathan 1951b,
p.111-112)

CC 第3版まではファセット式は固定されていて,当該の主題に存在しないフ

ファセットは空白とされた。ファセットが空白のときに連結記号までとり除いてしまうと、その次のファセットと連結してしまうことになる。連結記号はすべて同じコロンなので、どのファセットが空白となり、どのファセットが残って連結しているのかがわからなくなる。それを防ぐために、連結記号コロンはファセットが空白の場合でも残すという方法をとっていた。しかし、これは好ましくないもので、以下の方法を考えたのである。

通常ファセット式で規定されている次元の間または後に、外部から仮の次元をつけ加えることができないか試してみた。言い換えれば、選択ファセットのための手段を講じることを求めたのである。それらのどれかが不在の場合でも、その連結記号を保持して不在であることを示す必要はない、という意味で私たちはそれらを選択(optional)と呼んでいる。私たちはこの可能性を前提とし、選択ファセットに対する連結記号としてドットを設定した。・・・選択ファセットを挿入したファセット式を、拡張されたファセット式と呼ぶことにする。(Ranganathan 1951b, p.112)

すなわち、必ず存在するファセットはあらかじめファセット式に入れておいて、それらはコロンで連結する。必要に応じて加えるファセットの連結記号はドットで表すことにする。そうすれば、ファセットが存在しなければその連結記号であるドットも記載されない。このようにして拡張されたファセット式が、先ほどの例の 2[L].[D].[G].[C]:[P].[S].[M] である。この例では、必ず存在するファセットは [P] だけである。たとえば、政府機関の [L] 図書館における [2] ドキュメンテーションサービス [P] は、248:75 となる。このように、必要に応じて挿入されるファセットが選択ファセットで、その連結記号はドットである。

(1)項でみたように、新しい分野が形成されたときに、それに対応する新しいファセットを CC にとり入れることができることを自己永続性と呼んでいたが、選択ファセットはそのために必要とされたのである。

(3) Coding(1950 年)

Ranganathan は UNESCO の報告書 Classification, Coding and Machinery for Search(以下, Coding)(Ranganathan 1950b)で、図書館分類法をドキュメンテーションの機械化のために利用するにはどのような性質が必要かを論じている。

この著作では、基本カテゴリーについて以下のように述べている(基本カテゴリーではなく基本要素(fundamental elements)と呼んでいるが、意味は同じである)。

すべてのファセットは、5つの基本要素—Time, Space, Energy, Matter, Personality—のどれか1つの体現とみなされる。・・・異なる主題においては、それらは異なる名前と機能を体現する。(Ranganathan 1950b, p.21)

(1)項でみた **Self-perpetuating**(Ranganathan 1949)では「異なる体現としてのファセットが基本カテゴリーを通じて関連させられる」という説明であったし、(2)項の **Philosophy**(Ranganathan 1951b)では「異なる主題のファセットは基本カテゴリーのどれか1つと関連させられる」という説明であった。本項の **Coding**で初めて「ファセットは基本カテゴリーの体現である」という表現がなされている。以後、この表現が使われることになる。前二者は「ファセットが先にあって、それらが基本カテゴリーでまとめられる」という意味であるが、後者は「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体現する」という意味になる。この違いは大きいが、この著作ではまだその違いの意味を明らかにするところまで踏み込んでいない。

次に、各基本カテゴリーに異なる連結記号を与えている。ただし、**Time**と**Space**は他の手段で区別をするので、同じ連結記号を使うとしている(「他の手段」について説明はないが、**Time**の細目を表現する記号にはアルファベットと数字を組合せて使い、**Space**の細目を表現する記号には数字のみを使う、という意味だと思われる)。

Time	. (終止符)
Space	. (終止符)
Energy	: (コロン)
Matter	; (セミコロン)
Personality	, (コンマ)

Philosophyではコロン以外の連結記号はドット(ここでは終止符と呼んでいる)だけだったが、ここでは、セミコロンとコンマも導入されている。しかも、個別ファセットの連結記号ではなく、基本カテゴリーの連結記号である。先に、ファセットと基本カテゴリーの関係が今までと逆になったことを述べたが、連結記号に関しても基本カテゴリーに視点を移していることがわかる。

ただし、まだこの著作でも、基本カテゴリーを使ったファセット式は示されていない。また、次のように述べていることから、基本カテゴリーはまだ、分類作業者がファセット分析を行う際の手引きという位置づけであると考えられる。

このアプローチは、新しいファセットを提示する新しい主題が生まれたときに、分類作業者が、それら[のファセット]が体現となるそれぞれの基本要素を認識し、それらの中の各細目を決定し、それをファセット式ですでに指定されているファセットに属する細目の中の適切な位置に挿入することを可能にする。誰が分類作業者であっても、同じ新しいファセットを認識し、同じ位置を指定するであろう。(Ranganathan 1950b, p.21)

この著作でもう 1 つ重要な点は、初めて分析合成型分類法という用語が使われていることである。ここでは、既存の分類法を以下の 3 種類に分けている(Ranganathan 1950b, p.5-6)。ただし、いずれも詳しい説明はない。

- ・ 列挙型分類法 : DDC
- ・ 列挙型と分析合成型のハイブリッド型分類法 : UDC
DC と UDC の主な相違点は、前者が本質的に列挙型であるのに対して、後者はこの列挙型の DC の中核に多少の分析と合成 (analysis-cum-synthesis) を加えた。
- ・ 分析合成型分類法 : CC

4.2.2 1951 年－1952 年

4.2.1 項では、ファセットと基本カテゴリーとの関係、選択ファセットと自己永続性(新しい主題に対応するファセットの挿入)との関係についてみてきた。しかし、まだ基本カテゴリーと選択ファセットや自己永続性との関係が明らかになっていない。

(1) Bibliographic Organization(1951 年)

シカゴ大学の Graduate Library School が開催した 1950 年の年次大会(全体テーマは Bibliographic Organization)で、Ranganathan も CC についての発表を行っている(以下、Bibliographic Organization)(Ranganathan 1951c)。

この著作では記号の硬直化(rigidity)をとり上げている。まず、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘する。

記号法の硬直化は分類にとって致命的である。記号法の硬直化を打ち破るこ

とによってのみ分類は生き残ることができ、知識の領域における特定主題の豪雨による閉じこめから脱出することができる。分類の歴史全体が硬直化の打破の歴史である。(Ranganathan 1951c, p.96-97)

ここで言われている硬直化とは、新しい主題を既存の分類法にうまくとり込めないことを指していると思われる。それは、硬直化を打ち破る従来の3つの方法として、①項目に空位を設ける、②小数点方式を採用する、③オクターブ記号法(octave notation)を使用する、をあげていることから推測される(Ranganathan 1951c, p.98-100)。①の空位とは、新しい主題に対応する分類項目を入れるための空位である。②の小数点方式とは、細目を展開する、すなわち記号の桁を延ばすことで、新しい主題に対応する項目を用意するということである。数字の整数は間が埋まるとそれ以上増やせないが、小数ならば小数点以下いくらかでも桁を延ばして数を増やすことができることから、この方式を小数点方式と呼んでいる。③のオクターブ記号法とは、DDCのように、1～8までの数字を主要な言語にあて、それ以外のマイナーな言語を9に入れることである。9の中には、さらにまた重要度に応じて、91～98に入れる言語と、それ以外の99に入れる言語とに分けられる。これを繰り返すのがオクターブ記号法である。以上の3つの方法は、いずれも新しい主題を挿入するために使われると述べていることから、硬直化とは新しい主題をうまくとり込めないことだといえる。

そして、CCのファセット化記号法(faceted notation)は、硬直化を打ち破る第4の方法であるという(Ranganathan 1951c, p.100)。これは、CC第1版で他の分類法に対するCCの利点としてあげられた「区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合的な主題に対応した区分ができる」(利点B)から来るものである(4.1.1(1)項参照)。そこでは複合的な主題に対応できるとされているが、柔軟な細分ができることから、新しい主題への対応も可能であるというのがRanganathanの主張である。

しかし、ファセット化記号法でも硬直化があるという。

それは、ファセット式内でのファセットの順序に関係している。Colon Classificationの出版済みの版[第3版まで]では、ファセット式は必須のファセットだけを与える。それらは数が少ない。・・・しかし、多数のファセットが要求されるドキュメンテーションの分類では、すべてのファセットの順番を厳密に固定するのは危険であることが明らかであると思われる。この硬直化を打破しようと試みたことによって、すべての可能な特定主題のすべての

可能なファセットは、5つの基本カテゴリーTime, Space, Energy, Matter, Personalityのどれか1つの体現とみなすことができる、ということに気づいた。これら5つの基本カテゴリーの体現であるファセットに対してそれぞれ異なる連結記号を使えば、大きな自由度を獲得するであろうということを暫定的に推測してきた。(Ranganathan 1951c, p.101)

ここで言われていることを補足すると以下のようになる、図書館の蔵書のためだけの分類法ではなく、雑誌論文なども含むドキュメンテーションのための分類法とするためにはより多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定をするのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体現させればよいので、自由度が得られる。

そして、上記の方法は選択ファセットについて検討する過程から生まれたと述べている(Ranganathan 1951c, p.101)。ここで初めて、選択ファセットと基本カテゴリーの関係が明らかとなった。また、新しい主題に対応する項目の挿入を可能とするための方法だから、基本カテゴリーは自己永続性のための方法でもある。

(2)Communication(1951年)

1951年にもう1冊の図書 Classification and Communication(以下, Communication)(Ranganathan 1951a)を出版している。

基本的には、これまでとほぼ同じことが述べられている。

Colon Classificationの最初の3版においては、論じている世界の中のファセットの数は一定であることを暗黙裏の前提としている。(Ranganathan 1951a, p.41)

Colon Classificationの既存の版はこのような[新しい主題に対応する項目を挿入するための]装置をもっていない。(Ranganathan 1951a, p.42)

・・・進行中の研究の最も重要な貢献は、選択ファセット化記号法の利用である。それは、複合的で無限の世界においては、すべての可能な特定主題のファセットは一部だけが知られているし、またいつでも追加される可能性がある、ということを表現している。・・・使われている手法は、Time, Space, Energy(=Action, Process, Problems, etc.), Matter, Personality・・・と名づ

けられた 5 つのファセットの類を認識することである。これらは 5 つの基本
カテゴリーと呼ばれる。以下の表のように、これらの類のそれぞれに異なる
連結記号が使われる。(Ranganathan 1951a, p.42-43)

などである。

この著作で重要なのは、深い分類という用語がでてくることである。これも選
択ファセットとともに CC 第 3 版で名前だけあげられていた用語である(4.1.2(3)
項)。ここでは「深い」の意味、および選択ファセットや基本カテゴリーとの関係
が説明されている。

それゆえ、細目全体のいっそうの先鋭化、すなわち深い分類の成功は、まさ
にファセットの数の増加に依存している。これには困難が山積している。選
択ファセット化記号法を設定すること、・・・Time, Space, Energy, Matter,
Personality という基本カテゴリーの異なる体現である 120 ないし 2400 の原
初的な表を構築することは、望ましい結果をもたらす方法の 1 つであると思
われる。(Ranganathan 1951a, p.112-113)

それは、特定主題の意図していることを可能な限り深いレベルまで探求し、
またそのために、最大の透過力と深度をもつ分析を採用していることから、
深い分類と呼ばれる。(Ranganathan 1951a, p.113)

ここで述べられているように、「深さ」とは主題分析の深さであり、その結果と
しての細目の詳細さである。こうした深い分類を可能にするために、選択ファセ
ットや基本カテゴリーという方法が必要となる。(1)項でみた Bibliographic
Organization(Ranganathan 1951c)での議論と合わせると、1950 年前後という時
期は雑誌論文なども含むドキュメンテーションが強く求められるようになり、図
書館の蔵書だけでなく雑誌論文なども分類できるように深い分類が必要となった。
そのための方法として選択ファセットやそれを実現するための基本カテゴリーと
いう考え方がでてきた、ということになるであろう。

もともと基本カテゴリーは、初心者のための手引きという役割をもっていたが、
この時点で深い分類のためという新たな役割を与えられたと考えることができる。
4.2.1(3)項でみたように、「ファセットが先にあって、それらが基本カテゴリーで
まとめられる」から「基本カテゴリーが先にあって、そこからファセットが体現
する」というように、ファセットと基本カテゴリーの関係が今までと逆になった

のは、この状況を反映していると思われる。すなわち、初心者にとっては最初から個々のファセットを考えるよりも、それらをまとめた基本カテゴリーを考えてからそれに属する個別のファセットを考える方がわかりやすいであろう。この場合の基本カテゴリーは手引きとしての役割を果たしている。一方、深い分類をするためには多数のファセットが必要であり、それらをファセット式で固定すると新しい主題に対応するファセットを適切に挿入できない。そこで、ファセット式で固定するのは基本カテゴリーとし、そこから多様なファセットを体現させることにすれば、硬直化が防げる。この深い分類のためというのが、基本カテゴリーのもう 1 つの役割である。

なお、4.2.1(3)項でみた Coding(Ranganathan 1950b)と同様に、分類法を列挙型、ハイブリッド型、分析合成型という 3 種類に分けて次のように述べている。

これまでの章でみたように、・・・分類がとるべき方向は詳細さを増加させることである。列挙型分類がこの方向に適していないことはわかっている。列挙型に分析合成型を加えたハイブリッド型分類でさえも、すぐにその適合性を失ってしまう。詳細な分類という重圧に耐えられるのは純粋な分析合成型分類だけである。(Ranganathan 1951a, p.112)

(3)Colon Classification 第 4 版(1952 年)

以上みてきた基本カテゴリーを CC で最初に使ったのは第 4 版である(Ranganathan 1952)。ただし、基本カテゴリーについての説明はない。実例として使っているだけである。実例の 1 つを以下に示す。

メインクラス歴史では、3 つのファセット[P], [E], [T]があり、ファセット式は、

$$V [P] : [E] . [T]$$

である。色彩に富んだ(colourful)語を使うと、

$$V [Community] : [Problem] . [Period]$$

となる。(Ranganathan 1952, pt. I :p.45)

ここで、[P], [E], [T]は基本カテゴリーであるが、ファセットと呼ばれている(式の名前も基本カテゴリー式ではなくファセット式である)。基本カテゴリーの体現としてのファセットは、「色彩に富んだ語」と呼ばれている[Community], [Problem], [Period]の方である。

CC 第 4 版では、レベル(level)とラウンド(round)も導入されている。レベルは階層関係を表現する手段である。たとえば、メインクラス植物学では、I [P], [P2] : [E] というファセット式が与えられている。[P]は、1 隠花植物, 2 葉状植物, 7 単子葉植物, 8 双子葉植物, など植物の種類を表すファセットで、[P2]は、1 基本部位, 11 細胞, 12 組織, 13 根, など植物の部位を表すファセットである。つまり、[P]と[P2]は植物の種類とその植物の部位という階層関係になっている。ラウンドは、同じ階層で同じ種類のファセットがでてきたときに区別するための手段である。たとえば、メインクラス教育では、T [P] : [E], [2P] というファセット式が与えられている。[P]は、1 前中等教育, 13 就学前児童, 15 初等教育, 2 中等教育, など教育段階を表すファセットである。[2P]は、A 科学, B 数学, C 物理学, など教育内容を表すファセットである。

ラウンドはファセット式に表示されていなくても挿入できる場合がある。たとえば、メインクラス図書館学では、2 [P] ; [M] : [E] というファセット式が与えられている。ここにはラウンドは存在しない。しかし、図書館学の解説部分に、

Energy ファセットの細目が決まった後に、主題を表す第 2 ラウンドの Personality ファセットが必要になる場合は、コンマに続けて記載する。
(Ranganathan 1952, pt. I : p.72)

という説明がある。例として、「2:51N3,2 図書館学のコロソ分類法」があげられている。最初の「2」はメインクラス図書館学を表す。「51」は Energy ファセットの細目「分類」で、「N3」は Time ファセットの細目で「1930 年代」を表す。つまり、「2:51N3」までで「1930 年代に作成された分類法＝コロソ分類法」を意味する。この後ろに、第 2 ラウンドの Personality ファセットの細目である「2 図書館学」がコンマに続けて挿入されて、上記の主題を表す記号になる。なお、この例では、ファセット式に存在しない Time ファセットも挿入されている。このように、ファセット式が与えられていても、それ以外のファセットを挿入する自由度が残されている。

以上みてきたように、基本カテゴリーやラウンドなど、CC 第 4 版は硬直化をとり除くための手段が具体的にとり入れられている。Ranganathan は後に次のように振り返っている。

シカゴ大学の Graduate Library School からの、1950 年 7 月の第 15 回年次大会への参加の招待が、Colon Classification に存在する硬直化について考え

る機会を与えてくれた。これが、5つの基本カテゴリーPMEST(Personality, Matter, Energy, Space, Time), ラウンド, レベル, 一般化されたファセット式といった概念による, いくらかの硬直化の除去に導いた。・・・ Colon Classification の第4版(1952)はこれらの考えをとり込んでいる。(Ranganathan 1965a, p.18)

「シカゴ大学の Graduate Library School からの年次大会への招待」というのが, (2)項でみた Communication(Ranganathan 1951a)である。

なお, 列挙型, 分析合成型という用語はでてこない。これらの用語が CC に登場するのは第5版からである。

4.3 第3期：1957年－1969年

1950年頃から、UDCを推進する *Fédération Internationale de Documentation* (FID：UDCの作成者である Otlet らによって設立された *Institut International de Bibliographie* の後継機関)、新しい分類法の開発にとり組む CRG, CC を図書館の蔵書以外の様々な文献にも適用できるように改良を続ける Ranganathan, 補助表の充実によって蔵書数の増加への対応と図書館の蔵書以外の資料への対応を改訂ごとに進めていく DDC という、分類に関する4つの主要な流れが存在した。そして、これらに共通するのは、複合的な主題にいかに対応するか、という問題であった。Ranganathan はこれを深い分類と呼んだ。CC 第3版までのファセットおよびファセット式では硬直化が生じていて、深い分類に対応できなかった。基本カテゴリーの活用によってこの問題にある程度の解決をみたのだが、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。

4.3.1 1957年－1960年

(1) Colon Classification 第5版(1957年)

4.2.2(3)項で述べたように、CC に分析合成型という用語が登場するのは第5版 (Ranganathan 1957a) からである。その第0章:概要で以下のように述べている。

Colon Classification はいくつかの基本的な点で Decimal Classification や Congress Classification と異なっている。[DDC や LCC のような]分類法は列挙型分類法と呼ばれている。・・・ Colon Classification においては、既製の分類番号がトピックスに割り当てられるのではない。・・・したがって、それは分析合成型の分類法である。(Ranganathan 1957a, pt. I : p.12-13)。

ただし、前後の説明は第1版以来ほとんど同じで、DDC や LCC に列挙型、CC に分析合成型という名称を与えているだけである。合成型という用語を Prolegomena 第1版 (Ranganathan 1937) で導入した後、分析合成型という用語を Coding (Ranganathan 1950) で導入し、Communication (Ranganathan 1951) およびこの CC 第5版でも使っているが、いずれも分類法の種類を分ける名称として使っているだけで、具体的な説明はほとんどない。

(2)Dorking 会議(1957 年)

1957 年に分類法に関する非常に重要な国際会議が開催された。いわゆる Dorking 会議である。会議録の付録には CRG によるファセット化分類法の必要性に関する論文(Classification Research Group 1955)が再録されている。この国際会議で Ranganathan も発表を行っている(以下, Dorking 会議)(Ranganathan 1957c)。

この著作で重要なのは、分析合成型分類法という名称に明確な意味づけを与えたことである。

分析合成型分類法は、文献に体现されている主要な考えを、ある基礎的な基本カテゴリーに対応するファセットへ、概念段階(idea plane)で分析する(analysis)ことから始まるのでこう呼ばれている。Colon Classification は 5 つの基本カテゴリーtime, space, energy, matter, personality に基づいている。どのようなカテゴリーが採用されようと、その分類法は、各ファセットの細目の名前を・・・細目の番号に変換し、最後に、記号段階(notational plane)で細目の番号を分類番号に合成する(synthesizes)。(Ranganathan 1957c, p.4; 下線は引用者)

このように、分析合成型分類法とは、ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法であるとしている。

この著作では、これまで Prolegomena 第 1 版(Ranganathan 1937)以来使われてきた規準と原理に加えて、公準(postulates)という用語が初めて登場する。

・・・私たちは分析合成型の分類法はいくつかの公準を必然的に含んでいることを発見した。たとえば、Colon Classification は 21 の公準を含んでいることがこれまでに見出されている。(Ranganathan 1957c, p.3)

ただし、ここでは詳しい説明はなく、21 の公準自体も(3)項でとり上げる Prolegomena 第 2 版に記載されることを示唆しているだけである。

ところで、先に書いたように、Ranganathan のこの著作が掲載された Dorking 会議の会議録には、CRG によるファセット化分類法に関する論文(Classification Research Group 1955)が収録されている。この CRG 論文の出版年は 1955 年であるが、Ranganathan は 1957 年のこの会議でもファセット化分類法という表現は使っていない。ファセット化分類法という用語は、1951 年に Palmer と Wells

が使ったのが最初ではないかと思われる。彼らは、

列挙型分類法は多くの基本概念で構成される複合的な主題をリストしている。ファセット化分類法は基本的な用語をリストし、複合的な用語を構築することは分類作業者に残している。(Palmer and Wells 1951, p.37)

と書いている。Palmer と Wells が後に CRG 結成メンバーとなったことは 4.2.1(2) 項で述べたが、1955 年の CRG 論文は彼らの用語を採用したと考えられる。

(3)Prolegomena 第 2 版(1957 年)

1937 年に第 1 版が出版されてからちょうど 20 年後に Prolegomena の第 2 版(以下, Prolegomena 第 2 版)(Ranganathan 1957b)が出版された。この著作でも、(2) 項でみた Dorking 会議(Ranganathan 1957c)と同様、ファセット分析から記号の合成までの過程を必要とする分類法を分析合成型分類法と呼んでいる。

(1)主題を・・・ファセットに分析し、各ファセット内の細目に名前をつける。・・・(2)・・・(3)・・・(4)・・・(5)基本クラスの番号とそれぞれの[ファセット内の]細目の番号を、連結記号を使って分類番号に合成する。これら 5 段階における意識的な作業を必要とする分類法が分析合成型分類法である。(Ranganathan 1957b, p.228-229; 下線は引用者)

一方で、列挙型という面に注目して、既存の分類法を区分している。

知識領域の列挙型分類法においては、すべての既知の主題をほぼ網羅的にカバーするために、クラスが単一の表に列挙され、それに数個の補助表がつく場合とつかない場合がある。LC は厳密に列挙型(severely enumerative)である。SC もそう[厳密に列挙型]であるが、そのカテゴリー区分表は長い補助表を形成している。DC はほぼ列挙型(largely enumerative)であるが、その共通細目は補助表を形成している。UDC は主として列挙型(mainly enumerative)であり、5つの補助表をもっている。・・・しかし、本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。BC は仮想的な列挙型(virtually enumerative)である。しかし、それは UDC と同程度に純粋の列挙型から導き出されたものである。その一般的に使われる補助表は 4 つである。・・・さらに、特定のメインクラスで使われる 41 の補助表がある。・・・本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。さらに、本

表は、前者の補助表の助けを借りて作成されたクラスを散在させている。これは列挙的な質を増加させる。CC は列挙型からはほど遠い。それは一般的に利用するための4つの補助表[材料, 場所, 言語, 時間]をもっている。・・・本表は1ページである。各メインクラスに一組の細目表が与えられている。分類番号は、各細目表と補助表からとられた番号を集めて合成される。(Ranganathan 1957b, p.138)

この説明によると、本表に比べて補助表が充実しているほど、特に、本表が列挙型を基にしているのではないほど、列挙型としての性質が減少する、と考えているように思われる。Ranganathan にとって列挙型分類法の対極にあるのは分析合成型分類法である。ということは、ファセット分析から記号の合成までの過程を必要とする(可能にする)のが分析合成型分類法であるという先ほどの説明と、列挙型の性質が消失した(本表に比べて補助表が完全に充実した)という意味での分析合成型分類法という説明とがあることになる。しかし、補助表の充実だけが、あるいは、ファセット分析から記号の合成までの過程に基づくことだけが、分析合成型分類法を可能にする唯一の条件ではないはずである。

分析合成型分類法に必要なのは、ファセットの独立性、すなわち、ファセットに対応する分類記号を合成する際の自由度の高さである。これは、CC 第1版(Ranganathan 1933)でみた、他の分類法に対するCCの利点「区分特性ごとに区分が独立に行われるため、複合的な主題に対応した区分ができる」(利点B)である。これがCCと他の分類法を分ける条件であった。CCが分析合成型分類法で、他の分類法がどの段階かはともかく列挙型分類法であるというなら、この利点Bこそが分析合成型分類法を可能にする条件であろう。

実際、Ranganathan は別の方向からそのことを再確認している。それは、前章でみた深い分類の研究の中で明らかになってきたことである。Ranganathan は深い分類の研究の進展について説明する中で、以下のように述べている。

分析合成型分類法に伴う自由度はCCにおいて最大となる。これは、基本クラスと[ファセット内の]細目のレベルだけに列挙を減少させたことによる。(Ranganathan 1957b, p.279)

このように、分析合成型分類法の必要条件は自由度の高さであることを深い分類の探求という方向から再発見しているのである。しかし、それにもかかわらず、上記の分析合成型分類法に関する説明には反映されていない。この不整合が、

Ranganathan の次の文にも現れているように思われる。

知識の全領域における新しい[領域の]形成を、CC にあげられているファセット内の細目だけですべて表現できるわけではない。追加のファセットがあるかもしれない。それらは各々、適切な基本カテゴリー、ラウンド、レベルに割り当てられなければなら[ない]・・・。そのため、異なる分類作業者は異なる分類番号に到達するであろう。・・・これは分類作業者の自律性を減じることを意味している。これは CC の限界である。(Ranganathan 1957b, p.279-280)

この限界は CC だけに固有のものであろうか。それとも、いかなる分析合成型の分類法にとっても限界となるのであろうか。これらの質問に答えるには、分析合成型の分類法についての私たちの経験があまりに乏しい。推測だけが可能である。・・・(Ranganathan 1957b, p.280)

もともと、分析合成型分類法(CC)の条件はファセットの独立・自由度の高さである。しかし、自由度が高いと分類作業の一貫性が保証されない。そこでファセット式の充実・固定によって一貫性を保証しようとしたのだが、深い分類の必要性の認識から再び自由度が求められるようになり、基本カテゴリーや選択ファセットが導入された。ところが、それが再度、分類作業の一貫性を損なう結果となっている。つまり、分析合成型分類法は完成の域に達していない。少なくとも Ranganathan はそう考えていたと思われる。

なお、この Prolegomena 第 2 版において、Dorking 会議(Ranganathan 1957c)で予告されていた 21 の公準がリストされている。たとえば、以下のものがある(Ranganathan 1957b, p.23)。

公準 1 : Time, Space, Energy, Matter, Personality は 5 つの基本カテゴリーとして公準化されている。

公準 2 : 各区分特性は 1 つだけの基本カテゴリーに適用することができる。

公準 7 : Energy ファセットは 1 つだけのアレイをもつことができる。

公準 14 : Space と Time は最後のラウンドだけに出現できる。

このように、公準はファセット分析を行う際の規則を与えている。

(4)Elements 第2版(1959年)

1945年に第1版を出版した *Elements of Library Classification* の第2版(以下、*Elements* 第2版)(Ranganathan 1959)が1959年に出版された。第1版に比べて、ファセット分析の章が拡張され、第1版にはなかった基本カテゴリーの章が立てられている。その中で、公準もあげられている。また、規準と原理のリストが付録として収録されている。

分析合成型分類法と列挙型分類法については次のように述べている。

ファセット分析を容認し、ファセットの配列に関する規則を用意し、多様な主題に必要な種々のファセットを用意し、連結記号を用意し、ある主題の基本クラスと細目の番号を分類番号へ合成することを認めている分類法は、分析合成型の分類法と呼ばれる……。Colon Classification と Universal Decimal Classification は分析合成型の分類法である。前者は後者より徹底している。……。それに対して、列挙型の分類法はファセット分析に基づいていない。(Ranganathan 1959, p.84)

基本的にはこれまでの説明と同じである。ただし、UDC の位置づけが異なる。(3)項でみた Prolegomena 第2版(Ranganathan 1957b)では補助表の充実度という観点から UDC は「主として列挙型」として扱われていたが、ここではファセット分析および記号の合成の観点から分析合成型と呼ばれている。

(5)Colon Classification 第6版(1960)

CC 第6版(Ranganathan 1960)は Ranganathan が生前に編集した最後の版である。基本的には CC 第5版(Ranganathan 1957a)と大きな違いはない。今後の展開にとって重要な点は、公準を CC の中で初めて使用したことである。ただし、リストに名称があげられているだけで、説明については Prolegomena 第2版(Ranganathan 1957b)の節番号を示してそちらを参照するように指示している。原理は CC 第3版(Ranganathan 1950a)から使用されていたが、第6版で初めてリスト化された。規準は CC 第1版(Ranganathan 1933)から使用されており、リスト化も CC 第5版から行われている。このように、規準、原理、公準の順に CC に導入され、扱いも「規準と原理」が優先されていた((4)項でみたように、*Elements* 第2版(Ranganathan 1959)では規準と原理のリストが付録としてつけられているが、公準のリストはなかった)。

4.3.2 1961年－1964年

(1) On the March(1961年)

Ranganathan の分類の師でもあり、分類論を体系化したイギリスの研究者 Sayers の追悼論集に、CRG のメンバーを中心として 15 人の論文が収録されている。もともと Sayers の 80 歳の誕生記念を意図して企画された論集で、Ranganathan の著作 *Library classification on the March*(以下、*On the March*)(Ranganathan 1961)も収録されている。

この著作では、Sayers の思い出とともに、Ranganathan の分類理論の発展の過程を整理している。まず、ファセット分析の説明をした後で、ファセット式について言及する。

各基本クラスにはファセット式が与えられている。この式は分類作業者が概念段階で分析をおこなう際に役立つ手引きを提供する。これはまた、記号段階で合成する前に、ファセットの順序を一貫性をもって決めるのに役立つ。(Ranganathan 1961, p.83)

次に分析合成型分類法の説明を行っている。

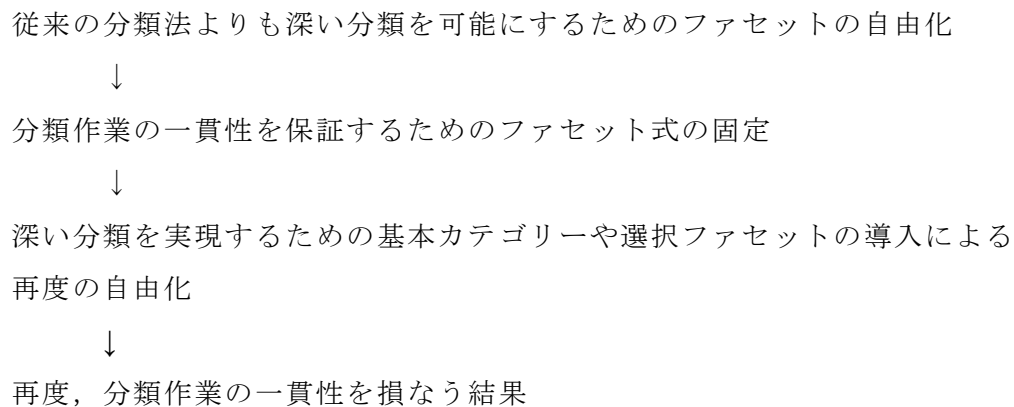
分析合成型分類法は、現在の書架上の図書を分類して配列する前に、ファセット式を与えることができる。しかし、バーティカルファイル中のマイクロな文献[雑誌論文など]や書誌の中でのそれらの記入を分類し配列するための、10 以上の適正なファセット式を前もって与えることはできない。誕生しようとしているマイクロな考え方が直面しているこの問題は、分析合成の手法をよりいっそう深いところへ急潜行させてこれから発展しようとする段階まで導き、マイクロな考え方の膨大な文脈の中で多様なファセットとして体現する生産的なあるいは基本的なカテゴリーを探させる。(Ranganathan 1961, p.88)

ところが、基本カテゴリーは P, M, E, S, T の 5 つだけである。

PMEST によって事態が複雑化した。それらは 5 つだけである。しかし、1 ダース以上のファセットに責任を負わなければならない。この困難には PMEST のラウンドとレベルの概念を要請することで対応した。ある主題中のファセットのいくつものラウンドやレベルを扱うことができ、それによっ

て、マイクロな文献やそれらの記入を有用に配列することができる図書館分類は深い分類と呼ばれるようになった。(Ranganathan 1961, p.88-89)

以上の、Ranganathan 自身が整理した分類理論の発展過程を図式化すると下記のようなになる。



Prolegomena 第2版を出版した1957年当時は、Ranganathan自身はまだこの整理がきちんとできていなかった。しかし、上の引用でみたように、この著作ではその整理ができたように思われる。そして、この整理の作業を通じて、CCあるいはより一般的に分析合成型分類法のかかえる問題(深い分類における分類作業の一貫性の欠如)の解決策を提示するに到った。それは、公準と原理に基づくことである。

公準と原理を組合せることによって、その主題の分類番号に到達することができ、すべての主題がこれらの分類番号で配列されるとき、それらは有用な順序になる。(Ranganathan 1961, p.93)

そして、

図書館分類への公準によるアプローチは、クラスをいたるところで列挙することによる硬直化と、各基本クラスのファセット式をあらかじめ決めておくことによる硬直化から、図書館分類を自由にする。(Ranganathan 1961, p.72)

とも述べている。これは、ファセット式を固定化することによる硬直化を防ぐために基本カテゴリーや選択ファセットを導入した深い分類の問題を、公準と原理

によって解決できるということである。

公準についてはこれまでの著作でも説明されていたが、深い分類の問題を解決するための手段という位置づけがここで与えられたことになる。なお、これまでは規準と原理が組合せられていたが、ここでは公準と原理が組合わされている。

(2)Elements 第3版(1962年)

Elements of Library Classification の第3版(以下、Elements 第3版)(Ranganathan 1962)で、これが最後の版である。Elements 第1版(Ranganathan 1945)でファセット分析の章が1つだけだったのに対して、Elements 第2版(Ranganathan 1959)では2つに増え、この第3版ではファセット分析という見出しの章が3つになり、さらに基本カテゴリー、分類法の種類という2つの章が加わった。ただし、小分けをしているだけで、内容的にはほとんど第2版と同じである。実質的に増えたのは、分類法の実例の章だけである。

(3)Seventy Papers(1963年)

シンポジウムの講演集で、70論文のうち29論文をRanganathanが書いている。その中で、分類を扱った論文(以下、Seventy Papers)(Ranganathan 1963)をとり上げる。このRanganathanの著作では、CCにおけるファセット分析の発展段階を5段階に分けている。

最初の段階は1925年から1933年である。1925年はCCの最初の設計の年である。1933年はCCの第1版が出版された年である。最初の段階では、ファセット式は認められたファセットだけを列挙していた。また、ファセットの順序を固定していた。この厳密な規定によって、どの基本クラスに属する分類番号の中でも、ファセットの順序の一貫性が自動的に保証された。(Ranganathan 1963, p.606)

第2段階は1933年からCCの第2版が出版された1939年までであるが、特に重要なのはファセット式(この当時は「区分特性の式」)が導入されたことである。続いて、

第3段階は1939年から1950年である。CCの第3版が1950年に出版された。・・・この第3段階では、ドキュメンテーションが広範囲に流行し始めた。・・・このことが、あらゆる主題の(基本ファセット以外の)すべてのファセットを、5つの基本カテゴリーP, M, E, S, Tのいずれかの体現とみなす可能性へと導いた。(Ranganathan 1963, p.607)

そして、

第4段階は1950年から1957年である。CCの第5版が1957年に出版された。この段階の間に、P, M, E, S, Tの考えが追求された。・・・これはファセット式の硬直化の多くをとり除いた。その上、特定の基本クラスの主題の間だけでなく、・・・すべての主題の間で、ファセットの順序の一貫性が保証されていた。・・・さらに、新しいマイクロな主題を・・・既に配列されている主題の間の適切な箇所に位置づけるメカニズムを提供した。(Ranganathan 1963, p.607-608)

最後に、

第5段階はまだ進行中である。それは1956年の末から始まった。その主要な特徴は、分類を一組の公準に基づかせることである。・・・ファセットを一定のラウンドとレベルに割り当てることを規定するための原理もある。(Ranganathan 1963, p.608)

このように、(1)項の On the March(Ranganathan 1961)でみた Ranganathan の分類理論の発展過程を、ここでは CC の発展過程として整理している。基本的な内容は同じであるが、CC は必ずしも Ranganathan の分類理論をすぐに反映しているわけではないので、CC の改訂版を段階の区切りとするのは無理があるように思われる。ただし、公準と原理に基づく分類法がまだ進行中であると明言している点には着目する必要がある。

(4)Subject Heading(1964年)

1964年の著作でも、公準と原理に基づくファセット分析という表現がでてくる(Ranganathan 1964, p.109, 112)。1961年から1964年にかけてこの考えが確定されていったものと思われる。

4.3.3 1964年－1969年

(1)Elsinore 会議 (1964年)

Dorkin 会議(4.3.1(2)項参照)に続く重要な国際会議が、1964年9月に FID の分科会 FID/CR(Classification Research)主催の国際会議として開催された。通称 Elsinore 会議と呼ばれている。この会議の会議録(以下、Elsinore 会議)に

Ranganathan の著作 2 件が収録されている。

1 件は *Library classification through a century*(Ranganathan 1965b)で、100 年間に作成された様々な分類法を時代によって区分している。その時代区分は以下の通りである。

- 1 前ファセット時代：1876 年から 1896 年(DDC, EC)
単一の列挙型の表と若干の補助表からなる。[p.19-20]
- 2 ファセット時代への移行期：1897 年から 1932 年(UDC)
基本は単一の列挙型の表であるが、いくつかのファセットを備え、雑誌論文などのミクロな文献にも対応する試みがなされている。[p.20-21]
- 3 ファセット時代：1933 年から 1975 年(CC)
 - 3.1 限定された(restricted)ファセット式時代：1933 年から 1949 年
すべてのファセットに対して同じ連結記号コロンを指定する。最後尾のファセットにだけでなく、どのファセットにも新しい記号を加えることができる。[p.22]
 - 3.2 限定されないファセット式時代：1950 年から 1956 年
ある主題のファセットを、5 つの基本カテゴリー PMEST のいずれかの体現とみなす。異なる基本カテゴリーに異なる連結記号を指定する。[p.22]
 - 3.3 相対的(relativity)時代：1957 年から 1975 年
 - 3.3.1 Dorking 時代または公準と原理の時代：1957 年から 1964 年
公準に基づく分類の広範囲な実施。ファセットの順序に対して 5 つの原理を前提する。[p.26-27]
 - 3.3.2 Elsinore 時代または協同設計(Co-operative Design)時代：
1965 年から 1975 年
この時代はまったく将来のことである。[p.32]
エルシノア時代が協同設計時代という別名を与えられるように、次の 10 年間に国際的なチームワークのプログラムが実行されることが期待されている。[p.35]

まず、前ファセット時代とファセット時代への移行期が CC 以前の分類法とされている。CC とそれ以前の分類法は分析合成型分類法と列挙型分類法という区分をされるが、この著作では分析合成型という用語がでてこない。4.3.1(3)項でみた *Prolegomena* 第 2 版(Ranganathan 1957b)の列挙型の度合いで分類法を区分する方法に近いと思われる。

一方、CC 自体の発展段階の区分である 3.1, 3.2, 3.3 は、4.3.2(3)項でみた *Seventy Papers*(Ranganathan 1963)の CC の改訂版で区分する方法とほぼ同じである。「3.1 限定されたファセット式時代：1933 年から 1949 年」が CC 第 1 版(1933 年)と第 2 版(1939 年), 「3.2 限定されないファセット式時代：1950 年から 1956 年」が CC 第 3 版(1950 年)と第 4 版(1952 年), 「3.3.1 Dorking 時代または公準と原理の時代：1957 年から 1964 年」が CC 第 5 版(1957 年)と第 6 版(1960 年)である。「3.3.2 Elsinore 時代または協同設計時代：1965 年から 1975 年」は CC の新しい版(第 7 版)を想定していると考えられる。

なお、この著作でファセット化分類法という用語がでてくるが、先述のように分析合成型分類法という用語はでてこず、ファセット化分類法についての説明もない。

Elsinore 会議での Ranganathan のもう 1 つの著作(Ranganathan 1965c)では、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係について述べている。

分類法の設計は、公準の他に、・・・ある主題におけるファセット間の順序を決めるための指定された原理によって導かれる。・・・一組の確立された公準と原理に従う分類法は、導かれた分類法(guided scheme)と呼ばれる。(Ranganathan 1965c, p.85)

[分類法間の]本質的な相違は、分類法を設計する際の導きとなる公準と原理によってのみ生じる。列挙型の分類法と分析合成型の分類法は本質的に異なっている。ファセット化分類法は、もしそれが[公準と原理に]導かれたものでないなら、分析合成型ではない。(Ranganathan 1965c, p.81)

しかし、もしそれが[公準と原理に]導かれた分類法なら、ファセットに関する無限の受容力(hospitality)[新しいファセットを挿入できるなど]を提供することができる。そのとき初めて、ファセット化された分類法は真の分析合成型の分類法となる。しかし、現在、ファセット化と分析合成型という 2 つの用語は、あたかもそれらが同義であるかのように大雑把に(loosely)使われている。(Ranganathan 1965c, p.86)

2 つ目の引用で述べられているように、「列挙型の分類法と分析合成型の分類法は本質的に異なっている」のであるから、分類法はすべて列挙型か分析合成型かに区分される。ファセット化分類法は、列挙型にもなりうるし分析合成型にもな

りうる。公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法となり、そうでなければ列挙型分類法である。このように、Ranganathan はファセット化分類法と分析合成型分類法は同義ではないと明言している。

ただし、Elsinore 会議の会議録が出版されたのと同じ 1964 年に、インド規格協会による分類の用語集(Indian Standards Institution 1964)が出版されている。この用語集は Ranganathan が委員長として編集したものである。この中に「分析合成型分類法」という項目があるが、その説明の最後に「別名(Alternate term)ファセット化分類法」(p.72)と書かれている。Ranganathan はこの記述に気づかなかったのだろうか。

(2)Rutgers Seminar(1965 年)

1964 年 11 月にラトガース大学で行われた Ranganathan のセミナーの講演録(以下、Rutgers Seminar)(Ranganathan 1965a)で、自身の研究を振り返っている。その中で、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係について次のように述べている。

実際、ファセット化された分類法をすべて分析合成型の分類法と呼ぶのは適切でない、ということがいまやよりいっそう明らかとなった。ファセット化された分類法は、その表の設計や拡張が一組の公準と原理に導かれる場合、そしてその場合にのみ、分析合成型の分類法となる。(Ranganathan 1965a, p.20-21)

これは(1)項の Elsinore 会議(Ranganathan 1965c)での説明と同じである。しかし、さらに踏み込んで次のように述べている。

分析合成型分類法はすべてファセット化分類法であるが、ファセット化分類法のすべてが分析合成型分類法というわけではない。(Ranganathan 1965a, p.275)

前半の「分析合成型分類法はすべてファセット化分類法である」という説明は、公準と原理に導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法であるという説明から推測はされるが、Elsinore 会議では「ファセット化されていない分析合成型分類法は存在しない」とは明言されていなかった。さらに、次の引用文では、Elsinore 会議ではでていなかった「ファセット化されていない列挙型分類法」という表現も使われている。

Colon Classification の第 1 版は単なるファセット化分類法であった。しかし、ファセット化されていない列挙型分類法よりは硬直化が少なかった。
(Ranganathan 1965a, p.10)

以上を整理すると、分類法は、

ファセット化されていない列挙型分類法
ファセット化された列挙型分類法
ファセット化された分析合成型分類法

に区分されることになる。そして、CC 第 1 版は「単なるファセット化分類法」と呼ばれていることから、「ファセット化された列挙型分類法」に入れられることになる。

実際、セミナー終了後の質疑応答で、CRG によって開発されたファセット化分類法は CC の改訂の基礎になりうるか、という P. Atherton からの質問を受けて以下のように答えている。

私を知る限り、英国の分類研究グループによって開発されたファセット化分類法は分析合成型ではありません。それらは Colon Classification の初期の版、そうですね、1955 年までの版の段階にあるように思われます。この理由から、それらを Colon Classification の改訂の基礎にすることはできません。
(Ranganathan 1965a, p.275)

CC の 1955 年までの版とは、第 5 版が 1957 年であるから、その前の 1952 年に出版された第 4 版までのことである。第 4 版までの CC はファセット化分類法ではあるが、まだ分析合成型分類法ではないということになる。

(3) Prolegomena 第 3 版(1967 年)

Prolegomena to Library Classification の第 3 版(以下、Prolegomena 第 3 版)(Ranganathan 1967)で、最後の版である。この中で Ranganathan は、分類法を以下のように区分している(説明文は筆者の要約である。各項目の最後の角括弧内の数字は説明が記述されているページを示す)。

①列挙型分類法(enumerative classification) : LCC, Rider

列挙型の分類法は、本質的に、過去、現在および予測される未来のすべて

の主題を列挙した単一の表からなる。そのような表は必然的に長くなる。しかも、予測した以上の主題の出現にすぐに圧倒されてしまう。圧倒されてしまうというのは、新しい主題をそれぞれ既存の主題の間の適切な場所 (filiatory position) に位置づけることが困難であるという意味である。さらに、列挙型の表の分類番号は、意味的に豊かな記号(連結記号のような意味をもたない記号ではないということ)の連続体となり、有意味なファセットに分けられていないことが多い。この意味で、その分類番号は単一構造体(monolithic)といえるであろう。[p.95]

②ほぼ列挙型分類法(almost-enumerative classification) : DDC, SC

ほぼ列挙型の分類法は、過去、現在および予測される未来の大部分の主題を列挙した 1 つの大規模な表と、数個の共通細目の表からなる。主題の表は基本主題だけでなく複合的な主題も列挙する。そのため、主題の表は長くなる。(主題の表に列挙されていない複合的な主題の分類番号を、共通細目の表の助けを借りて少しは構築することができる。それにもかかわらず、予測をした以上の、あるいは共通細目と列挙されている主題を結合することで得られる以上の、主題の出現にすぐに圧倒されてしまう。さらに、ほぼ列挙型の表の大部分の分類番号は、意味的に豊かな記号の連続体となり、意味をほとんどもたない記号(連結記号のこと)によって有意味なファセットに分けられていないことが多い。この意味で、その分類番号は単一構造体といえるであろう。[p.97]

③ほぼファセット化分類法(almost-faceted classification) : UDC, BC

ほぼファセット化された分類法は、過去、現在および予測される未来の大部分の主題を列挙した 1 つの大規模な表に加えて、数個の共通細目の表といくつかの特殊な細目の表からなる。主題の表は基本主題だけでなく多数の複合的な主題も列挙する。そのため、主題の表は長くなる。複合的な主題の分類番号を、共通細目の表だけでなく各主題ごとに与えられる特殊細目の表の助けを借りてより多く構築することができる。共通細目もしくは特殊細目の助けを借りて形成される複合的な主題の分類番号は、表の中でクラスやその細目の番号のために使われる意味的に豊かな記号とは別の連結記号を備えている。したがって、そのような複合的な分類番号は多重構造体(polyolithic)といえる。[p.102]

④硬直化したファセット化分類法(rigidly-faceted classification) : CC 第 1 版～第 3 版

ファセット化分類法は、基本クラス、共通細目および特殊な細目の表だけ

からなる。ファセット化分類法においては、複合的な主題を列挙した表は存在しない。複合的な主題の分類番号はすべて、それぞれの主題を列挙した基本主題、共通細目、および特殊な細目の助けを借りて構築される。通常、すべての表が短い。それらの多くは2つないし3つの欄を超えることはない。ファセット化分類法は、新しい主題の出現に圧倒されることはない。それらはせいぜいのところ、細目の表の新設か既存の基本主題や細目の表の拡張を必要とするだけである。複合的な主題の分類番号は、表の中でクラスやその細目の番号のために使われる意味的に豊かな記号とは別の連結記号を備えている。したがって、ファセット化分類法のすべての複合的な分類番号が多重構造体といえる。[p.106]

硬直化したファセット化分類法においては、基本クラスに伴うすべての主題に対するファセットとその順序が事前に決められている。これは硬直化ということである。硬直化したファセット式では、中間のファセットが空位だと連結記号がつながってしまう。さらに、事前に決められた硬直化したファセット式は、新しい複合的な主題が提示する追加のファセットの挿入を妨げた。[p.107-108]

⑤自由なファセット化分類法(**freely faceted classification**) : CC 第4版以降

自由なファセット化分類法においては、基本主題に伴う複合的な主題に対する硬直化し事前に決められたファセット式は存在しない。自由なファセット化分類法においては、既存の表によって影響されたり妨げられたりすることなく、複合的な主題に生じるいかなるファセットもその主題のファセット分析によって見出される。そして、見出されたファセットの適切な順序は明示された公準と原理に従って決定される。このように、各複合的な主題がそれ自身のファセットを決定するのである。また、それ自身のファセット順序も決定する。ファセットの数や順序に何も制限はない。すべてが自由である。これが、この分類法が自由なファセット化分類法と呼ばれる理由である。さらに、分析と合成の観点から分類法の進展を順にみていくと、この種類の分類法の別名(**another name**)は分析合成型分類法である。複合的な主題のファセットの順序は、どのような複合的な主題にも適用できる基礎的な公準と原理に従って決定されるので、分析合成型分類法のこの特徴を強調するために、公準と原理に導かれた分析合成型分類法と呼ばれる。いかなるファセット化分類法も、それが自由なファセット化でなければ、分析合成型ではないことを強調しておく。[p.109]

以上が Prolegomena 第 3 版における分類法の区分である。(2)項でみた区分に対応させると、

- ①②：ファセット化されていない列挙型分類法
- ③④：ファセット化された列挙型分類法
- ⑤：ファセット化された分析合成型分類法

となるであろう。ただし、④と⑤は少し微妙である。(2)項の Rutgers Seminar(Ranganathan 1965a)では CC 第 4 版までがファセット化された列挙型分類法という位置づけで、第 5 版以降がファセット化された分析合成型分類法とみなしていたはずである(Atherton の質問への回答)。しかし、この Prolegomena 第 3 版では、⑤の自由なファセット化分類法に CC 第 4 版を入れている。⑤の最後の部分で、自由なファセット化分類法が分析合成型であると述べているのだから、CC 第 4 版はファセット化された分析合成型分類法ということになる。

(4)Colon 第 7 版 Preview(1969 年)

Ranganathan は生前に CC 第 7 版の試案(以下、Preview)(Ranganathan 1969)を公表していた。この中では、分類法を以下のように 6 つの種類に区分している(Ranganathan 1969, p.12-13)。

- ①純列挙型の分類法(purely enumerative scheme) : Rider
- ②ほぼ列挙型の分類法(almost enumerative scheme) : DDC
- ③ほぼファセット化された分類法(almost faceted scheme) : UDC
- ④完全だが硬直化したファセット化分類法(fully but rigidly faceted scheme) : CC 第 1 版～第 3 版
- ⑤ほぼ自由なファセット化分類法(almost freely faceted scheme) : CC 第 4 版～第 6 版

多様な種類のファセットに対する別個の指示記号[連結記号]およびラウンドとレベルの概念の使用が、複合的な主題中に生じるファセットの数と順序における深刻な硬直化をとり除いたので、「ほぼ自由なファセット化」と呼ばれる。しかし、ラウンド内のファセットのレベルに関してはいくらかの硬直化が潜んでいた。このために、完全に自由なファセット化ではなかった。(Ranganathan 1969, p.13)

- ⑥自由なファセット化分類法(freely faceted scheme) : CC 第 7 版(準備中)
- セクター記号法(sector notation)の助けを借りて、[⑤に]潜んでいたラウン

ド内のファセットのレベルの数とそれらの順序における硬直化がほぼとり除かれた。[その他の改善点をあげている]したがって、[⑥における]Colon Classification はいまや自由なファセット化分類法となった。(Ranganathan 1969, p.13)

(3)項でみた Prolegomena 第3版(Ranganathan 1967)では「⑤自由なファセット化」に入れられていた CC 第4版以降が、ここでは新しく設けられた区分「⑤ほぼ自由なファセット化」に第4版から第6版までとして入れられている。そして、「⑥自由なファセット化」にはこれから出版予定の CC 第7版が入っている。なお、⑥にでてくるセクター記号法とは、順序の値はもつが意味をもたない空記号(empty digit)を使って、意味をもつ記号の基底の数を増やす方法のことである(Ranganathan 1967, p.238-240, 244.)。たとえば、分類記号(意味をもつ記号)の基底としてアルファベットの小文字 a···z, アラビア数字 1···9, アルファベットの大文字 A···Z が使われているとする。このままでは基底の数は $26+9+26=61$ である。ここで、各記号系の最後の記号(z, 9, Z)を空記号として使うことにする。また、0 も空記号とする。空記号を使って新しい基底が作成できる。すなわち、00a···00y や 001···008, 0za···0zy, Z9a···Z9y などである。00, 0z, Z9などは空記号で意味をもたないが、00a と 0za, Z9a をそれぞれ区別するために使われる。同じ空記号を使ってできる一組の基底、たとえば 00a···00y をセクターと呼ぶ。

以上みてきたように、(2)項の Rutgers Seminar(Ranganathan 1965a), (3)項の Prolegomena 第3版, そしてこの Preview と, それぞれで CC 各版の位置づけが変わってきている。しかし、それ以上に大きな変更がこの Preview でみられる。それは以下の文である。

「分析合成型の分類法」という用語は、複合的な主題が最初に概念段階でファセットに分析され、後に言語段階(Verbal plane)と記号段階のそれぞれで合成される分類法全体を指す一般的な用語である。例: Colon Classification はどの版も完全な(fully)分析合成型である。Universal Decimal Classification は分析合成型の性質をわずかにもっている。分類法がファセット化という性質をもつということは、それが分析合成型になるということを意味していることがわかる。(Ranganathan 1969, p.13-14)

ここでは、CC はどの版も分析合成型であると述べている。(3)項の Prolegomena

第 3 版までは自由なファセット化分類法だけが分析合成型であるとされていた(上の区分では⑤⑥)のに、ここでは硬直化したファセット化分類法(④)も分析合成型とされているのである。しかも、「分類法がファセット化という性質をもつということは、それが分析合成型になるということを意味している」と述べている。これは、ファセット化と分析合成型はそれぞれ定義は異なるが、結果的にほぼ同じものを指していると考えているように思われる。

最初は分析合成型という用語を使ってファセット化という用語は使わなかったが、後に公準と原理に導かれたファセット化分類法だけが分析合成型分類法である(Elsinore 会議, Rutgers Seminar)として両者の違いを強調し、さらに、公準と原理に導かれたファセット化を自由なファセット化と呼び、それだけが分析合成型であるという立場を続けた(Prolegomena 第 3 版)が、最後になってファセット化分類法と分析合成型分類法がほぼ同じものを指しているような説明をしているのである。この変化が何によるものかは推測でしかないが、CRG によるファセット化という用語の普及が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

なお、Ranganathan の死後に Gopinath によって編集された CC 第 7 版(Ranganathan 1987)では、CC 第 7 版を自由なファセット化分類法と呼んでいる。これは Preview の Ranganathan の区分と一致する。しかし、自由なファセット化分類法の別名(another name)は分析合成型分類法であるとし、自由なファセット化でなければ分析合成型ではないと述べている(Ranganathan 1987, 序文 p.8)。これは Preview よりも前の Ranganathan の見解に戻ってしまう。

4.4 考察

4.4.1 ファセットとファセット式の導入

Ranganathan のファセット概念に関わる研究の第 1 期は 1933 年から 1945 年までで、この時期はファセットおよびファセット式概念が導入され、確立されていく過程としてとらえることができる(4.1 節)。

CC 第 1 版(1933 年)では区分特性と呼ばれているが、事実上のファセット概念はすでに CC 第 1 版から存在していたといえる。Prolegomena 第 1 版(Ranganathan 1937)では、「区分特性」を「区分特性の系列」と呼び変えている。ファセットという用語を初めて使用したのは、Fundamentals(Ranganathan 1944)においてである。ただし、ファセットとは何かという直接の定義は与えられていない。「区分特性の系列に基づく細目」と「ファセット」が対応させられているだけである。「区分特性の系列」が「ファセット」という用語でおき換えられたことを明記したのは、Elements 第 1 版(Ranganathan 1945)においてである。CC の中でファセットが用いられるのは第 3 版(Ranganathan 1950)からで、そこでは「区分特性の系列に基づく区分肢の総体」と定義されている。

一方、ファセット式概念に対応するものは、CC 第 2 版(Ranganathan 1939)の区分特性の組合せ方法の表示である。Fundamentals ではファセットという用語を使い始めたにもかかわらず、ファセット式ではなく区分特性の式と呼んでいる。ファセット式と呼ばれるようになるのは Elements 第 1 版からである。

Ranganathan が CC を作成した理由は、DDC や EC などの従来の分類法では複合的な主題に対応できないと考えたことにある。複合的な主題に対応するためには、単一要素からなる記号ではなく、複数の独立の要素からなる記号を採用する必要に気づいたのである。そして、独立の要素からなる記号に対応して、ファセットという独立要素とそれらを組合せるファセット式を導入した。

第 3 章でみたように、ファセット概念自体は「特定の区分特性による区分肢の総体」という単純かつ明確な概念であるが、これが CC という特定の分類法の中で使われたことにより、ファセットの組合せによる助記性の向上(利点 A)と、区分の独立性による複合的な主題への対応(利点 B)、という 2 つの利点がファセット概念自体の理解に影響を与え、さらには、後のファセット化分類法と分析合成型分類法の関係の理解にも影響を及ぼしているものと考えられる。

4.4.2 基本カテゴリーの役割の転換

第2期は1949年から1952年までで、この時期は基本カテゴリーの役割が変遷していく過程としてとらえることができる(4.2節)。

5つの基本カテゴリーPMESTは、第1期でみた Fundamentals(Ranganathan 1944)ですでに導入されている。しかし、そこではまだ、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していて、一般化したファセット式で使うことは考えていなかったと思われる。Ranganathan が基本カテゴリーの役割を変えるようになった背景には、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした深い主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

Self-perpetuating(Ranganathan 1949)や Philosophy(Ranganathan 1951 : 実際の執筆は1949年か1950年)、それに第1期に入れた CC 第3版(Ranganathan 1950)には、選択ファセットという用語がでてくる。これは、ファセット式の中で連結記号コロンで合成されているファセットだけでなく、必要に応じて連結記号ドットを使ってそれ以外のファセット(選択ファセット)を挿入できるようにするというものである。それによってより深い主題に対応しようと考えたのである。しかし、CC 第3版にも述べられているが、まだ完成してはいなかった。

この選択ファセットの考えは、ファセット式の硬直化の問題とも関係している。Bibliographic Organization(Ranganathan 1951)では、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘している。深い主題に対応するためには、より多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定をするのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体現させればよいので、自由度が得られる。こうして、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定されていた基本カテゴリーが、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させられたのである。また、深い主題に対応することは、深い分類とも呼ばれる。Communication(Ranganathan 1951)ではこの深い分類という用語を使って、上記と同じ基本カテゴリーの役割の転換を論じている。

この役割の転換は、Bibliographic Organization 以前の Coding(Ranganathan 1950)でもある程度は行われていた。そこでは「ファセットは基本カテゴリーの体現である」という表現が使われている。それまでは、「ファセットが先にある、それらが基本カテゴリーでまとめられる」という意味で使われていたが、「基本カ

テゴリーが先にある、そこからファセットが体现する」という意味に変換されたのである。しかし、この著作ではまだこの変換の意味を明らかにするところまでは踏み込んでいなかった。

4.4.3 分析合成型分類法の位置づけ

第3期は1957年から1969年までである。基本カテゴリーの活用によって深い主題に対応することができるようになったが、ファセットの数や順序がファセット式で固定されないため、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。この問題を検討するとともに、UDCやDDCとの差異を明確にすること、CRGが主張するファセット化分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすること、がRanganathanの分類研究の最後の段階である。

基本カテゴリーの活用によって深い分類には対応できたが分類作業の一貫性が保てなくなったという問題に対して、公準と原理を用いるという解決策を見出した。第1期のProlegomena第1版(1937年)以来使われてきた規準と原理に加えて、公準という用語が初めて登場したのはDorking会議(Ranganathan 1957)においてである。また、CCで公準を初めて用いたのは第6版(Ranganathan 1960)である。しかし、これらの著作ではまだ基本カテゴリーの問題との関連は論じられていない。基本カテゴリーを用いなおかつ分類作業の一貫性を保つためには、基本カテゴリーに対応する新しいファセットの挿入や、それらの順序などに関する規則が必要である。それが公準と原理である、ということを確認しているのはOn the March(Ranganathan 1961)においてである。

一方、UDCやDDCとの差異やCRGが主張するファセット化分類法との関係については、分析合成型分類法という概念を用いて検討を続けていた。すでに第1期のProlegomena第1版(Ranganathan 1937)で、合成ができる分類法を合成型分類法と呼んでいる。また、第2期のSelf-perpetuating(Ranganathan 1949)では、合成型分類法を列挙型分類法と対比させている。そして、やはり第2期のCoding(Ranganathan 1950)で、分析合成型分類法という用語を初めて使用している。第3期のCC第5版(Ranganathan 1957)にも分析合成型という用語が登場する。しかし、いずれも詳しい説明はなかった。Dorking会議(Ranganathan 1957)で、分析合成型分類法という名称に初めて明確な意味づけを与えている。それは、ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法、ということである。しかし、Prolegomena第2版(Ranganathan 1957)では、本表に比べて補助

表が充実しているほど、特に、本表が列挙型を基にしているのではないほど、分析合成型分類法になるという説明になっている。このように、分析合成型分類法という概念は曖昧なものであった。

分析合成型分類法という概念の曖昧性は、各種分類法の区分にも反映されている。Seventy Papers(Ranganathan 1963), Prolegomena 第3版(Ranganathan 1967), Preview(Ranganathan 1969)でそれぞれ分類法の区分を行っているが、少しずつ異なる区分となっている。特に、CCの各版の位置づけが著作によって変わるのである。これは、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係についても同様である。Elsinore 会議 (Ranganathan 1965c)では、公準と原理に導かれたファセット化だけが分析合成型であるとし、Prolegomena 第3版(Ranganathan 1967)では、公準と原理に導かれた自由なファセット化だけが分析合成型であるとして、ファセット化分類法と分析合成型分類法は同義ではないと主張していた。しかし、Preview(Ranganathan 1969)では、ファセット化と分析合成型はそれぞれ定義は異なるが、結果的にほぼ同じものを指していると考えているように思われる。

このように、Ranganathan自身の著作に、分析合成型分類法という概念の曖昧さと各種分類法の位置づけの揺れがみられる。これも、CCが、合成による助記性の向上(利点A)と区分の独立性による複合的な主題への対応(利点B)、という2つの利点をもつことと関係があると思われる。この点については、第5章であらためて検討する。

4.5 第4章のまとめ

4.1 節では、1933年から1945年の期間に発表された著作を検討した。この期間は、ファセットおよびファセット式概念が導入され、確立されていく過程として特徴づけることができる。

RanganathanがCCを作成した理由は、DDCやECなどの従来の分類法では複合的な主題に対応できないと考えたことにある。複合的な主題に対応するためには、単一要素からなる記号ではなく、複数の独立の要素からなる記号を採用する必要があると考えて、各要素がファセットを構成し、各ファセットは独立している分類法としてCCを考案した。その一方で、ファセットの組合せが助記性を向上させることもRanganathanは認識していた。こうしたことから、CCは、合成による助記性の向上(利点A)と区分の独立性による複合的な主題への対応(利点B)、という2つの利点をもつ分類法となった。

ファセット概念自体は「特定の区分特性による区分肢の総体」という単純かつ明確な概念であるが、これがCCという特定の分類法の中で使われたことにより、上記のCCの2つの利点がファセット概念自体の理解に影響を与えたと考えられる。これは第3章の結論でも述べたことである。

4.2 節では、1949年から1952年までに発表された著作を検討した。この時期は基本カテゴリーの役割が変遷していく過程としてとらえることができる。

5つの基本カテゴリーPMESTは、当初は、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定されていた。Ranganathanが基本カテゴリーの役割を変えるようになった背景には、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした深い主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

深い主題に対応するためにはファセットの数を増やす必要がある。そのために、ファセット式の中で連結記号コロンで合成されているファセットだけでなく、必要に応じてそれ以外のファセット(選択ファセット)を挿入できるようにすることを考えた。

この選択ファセットの考えをさらに進めたのが、基本カテゴリーの役割転換である。ファセット式で多数のファセットを固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定をするのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体现させればよいので、自由度が得られる。こうして、初心者がファセット

分析を行う際の手引きのような役割を想定されていた基本カテゴリーが、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させられたのである。

4.3 節では、1957 年から 1969 年までに発表された著作を検討した。

第 2 期において、基本カテゴリーの活用によって深い主題に対応することができるようになったが、ファセットの数や順序がファセット式で固定されないため、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。この問題に対して、第 3 期の Ranganathan は公準と原理を用いるという解決策を見出した。基本カテゴリーを用いなおかつ分類作業の一貫性を保つためには、基本カテゴリーに対応する新しいファセットの挿入や、それらの順序などに関する規則が必要である。それが公準と原理である。

第 3 期における Ranganathan の分類研究のもう 1 つの課題は、UDC や DDC との差異を明確にし、CRG が主張するファセット化分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすることである。分析合成型分類法はファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法である、という定義を与えているが、その概念は曖昧なものであった。概念の曖昧性は各種分類法の区分にも反映されていて、著作によって少しずつ異なる区分となっている。これは、ファセット化分類法と分析合成型分類法との関係についても同様である。Ranganathan 自身の著作に、分析合成型分類法という概念の曖昧さと各種分類法の位置づけの揺れがみられる。

4.4 節では、以上の結果を基に考察を行った。

Ranganathan は、合成による助記性の向上(利点 A)と区分の独立性による複合的な主題への対応(利点 B)、という 2 つの利点をもつ CC を作成した。この CC の 2 つの利点がファセット概念自体の理解に影響を与えたと考えられる。

基本カテゴリーは、当初は初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していたが、後に、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させている。基本カテゴリーの役割を変えるようになった背景には、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした深い主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

基本カテゴリーの活用によって深い主題に対応することができるようになったが、ファセットの数や順序がファセット式で固定されないため、分類作業の一貫性が保てないという新たな問題に直面することになる。この問題を検討するとともに、UDC や DDC との差異を明確にすること、CRG が主張するファセット化

分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすること，が **Ranganathan** の分類研究の最後の段階である。

基本カテゴリーの活用によって深い分類には対応できたが分類作業の一貫性が保てなくなったという問題に対しては，公準と原理を用いるという解決策を見出した。

一方，UDC や DDC との差異や CRG が主張するファセット化分類法との関係については，分析合成型分類法という概念を用いて検討を続けていた。しかし，**Ranganathan** の著作には，分析合成型分類法という概念の曖昧さと各種分類法の位置づけの揺れがみられる。これも，CC の 2 つの利点と関係があると思われる。

第 5 章

構造-表示方法説からみた

Ranganathan と Vickery のファセット概念

第4章では、ファセットおよびそれに関連する概念の展開過程を Ranganathan の著作をもとに分析し、考察を行った。本章では、筆者の提唱する構造-表示方法説の視点から再分析を行う。ただし、4.1節で検討した Ranganathan の第1期の著作については、第3章ですでに構造-表示方法説に基づいて分析を行っており、ファセット概念導入の意義に関する結論を得ているので、本章では第2期と第3期の著作を中心に分析を行う。その際、Ranganathan の考えの特徴をより明確にするために、Vickery の著作を分析し、比較検討する。

分類論のテキストブックにおけるファセット概念の記述には、Ranganathan だけでなく CRG も大きな影響を与えたことが知られている。たとえば、L. Spiteri は、"図書館情報学(LIS)の分野においては、ファセット分析の理論の発展は2つの源に負っている：S. R. Ranganathan と Classification Research Group(CRG)である"(Spiteri 1998, p.1-2)と述べている。

この CRG の中心的人物が Vickery で、設立メンバーの人選にも関わり、1960年にロンドンを離れるまで幹事として活動した(Vickery 2004)。Vickery は、CRG の設立宣言と呼ばれる「Classification Research Group」というタイトルの1953年の論文(Vickery 1953a)をはじめ、分類法関係の論文を多数執筆している。なかでも、1955年の「The need for a faceted classification as the basis of all methods of information retrieval」というタイトルの論文(Classification Research Group 1955)は、CRG を代表してファセット化分類法を支持することを明確に述べている。この論文の著者名は CRG になっているが、実質的には Vickery が執筆したことが認められている(Foskett 1988)。その他にも、1960年の *Faceted Classification: A Guide to Construction and Use of Special Schemes*(Vickery 1960)や1966年の *Faceted Classification Schemes*(Vickery 1966)のように、タイトルに「ファセット化分類法」という名称を含む著作を執筆している。また、1958年に出版された *Classification and Indexing in Science*(Vickery 1958)という著作はファセット化分類法のテキストブックとして大きな影響を与え、1975年の第3版(Vickery 1975)まで改訂されている。こうしたことから、CRG のなかでも Vickery が分類論のテキストブックにおけるファセット概念の記述に最も大きな影響を及ぼしていると考えられる。

Vickery は晩年(2009年没)まで分類法に関する著作を執筆しているが、現在のテキストブックに影響を与えたのは、主として1950年代、60年代の著作であり、Vickery (1975)はその集大成といえる。Ranganathan の分類法に関する最後の著作(Ranganathan 1969)が1969年であるから、Vickery についても1975年の著作までとする。

5.1 分析合成型分類法とファセット化分類法

5.1.1 Ranganathan の分析合成型分類法

(1) 列挙型分類法の対極としての分析合成型分類法

Ranganathan が、合成ができる分類法を合成型分類法 (synthetic classification) と呼んだのは、1937 年の Prolegomena 第 1 版 (Ranganathan 1937) である。異なる区分特性に関連する部分ごとに分類記号をコロンの区切ることによって複合的な主題への柔軟性を高めたのが、合成型分類法である CC の利点であると述べていることから、合成型分類法は独立要素からなる記号法をもつ分類法、すなわち多次元構造または自由構造の分類法(以下、「多次元・自由構造」)を指していることがわかる。つまり、この著作では分析合成型分類法(この時点ではまだ合成型分類法と呼んでいる)を多次元構造・自由構造分類法の意味で捉えていると考えられる。

ところが、1949 年の著作 (Ranganathan 1949) では、「列挙的」という用語を導入し、それを「非列挙的または合成的」に対置している。

Wells 氏によって考案された用語を使うなら、Library of Congress Classification と Decimal Classification は列挙的 (enumerative) である。すなわち、それらはすべての可能な特定主題をリストしそれに分類番号を与えようとする。・・・非列挙的 (non-enumerative) または合成的 (synthetic) と呼ぶべき Colon Classification では、大部分が複合的な概念から導かれる特定主題を列挙せずに、基本的な要素的概念だけを列挙して、それらのいくつかを組合せて特定主題を構成する。(Ranganathan 1949, p.232)

つまり、この著作では分析合成型分類法(この時点でもまだ合成型分類法と呼んでいる)と列挙型分類法を対置しているのである。構造-表示方法説に基づけば、列挙型分類法(列挙表示の分類法)に対置されるのは合成表示の分類法である。そうだとすると、分析合成型分類法を合成表示の分類法という意味で捉えていることになる。しかし、この著作では列挙的と合成的について詳しい説明はなく、先述の Prolegomena 第 1 版と同様に、分析合成型分類法を多次元構造・自由構造分類法の意味で捉えている可能性もある。その場合は、構造-表示方法説に基づけば多次元構造・自由構造分類法に対置されるのは階層構造分類法であるから、列

挙表示の分類法と階層構造分類法を混同していることになる。

Ranganathan が分析合成型分類法という用語を初めて用いたのは、1950年の著作(Ranganathan 1950b)においてである。この著作では既存の分類法を、列挙型分類法(DDC)、列挙型と分析合成型のハイブリッド型分類法(UDC)、分析合成型分類法(CC)の3種類に分けている。詳しい説明はないが、UDCをハイブリッド型と呼んでいるのは、UDCの基になったDDCが列挙型で、それに各種補助表やコロン記号による記号の合成をとり入れているからであろう。ただ、列挙型分類法に対置される分析合成型分類法が、構造-表示方法説の用語でいう合成表示の分類法と多次元構造・自由構造分類法のどちらを想定しているのか、この著作でも明かでない。

Ranganathan が分析合成型分類法という名称に明確な意味づけを与えたのは1957年のいわゆる Dorking 会議での発表論文(Ranganathan 1957c)においてである。それは、「ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法」という意味である。同じ年に出版された Prolegomena 第2版(Ranganathan 1957b)でも、同じ定義を与えている。その上で、各種分類法の位置づけを行っている。

知識の全領域(universe of knowledge)の列挙型分類法においては、すべての既知の主題をほぼ網羅的にカバーするために、クラスが単一の表に列挙され、それに数個の補助表がつく場合とつかない場合がある。LCは厳密に列挙型(severely enumerative)である。SCもそうであるが、その categorical divisions は長い補助表を形成している。DCはほぼ列挙型(largely enumerative)であるが、その共通細目は補助表を形成している。UDCは主として列挙型(mainly enumerative)であり、5つの補助表をもっている。・・・しかし、本表(main schedule)の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。BCは仮想的な列挙型(virtually enumerative)である。しかし、それはUDCと同程度に純粹の列挙から導き出されたものである。その一般的に使われる補助表は4つである。・・・さらに、特定の主類で使われる41の補助表がある。・・・本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。さらに、本表は、前者の補助表の助けを借りて作成されたクラスを散在させている。これは列挙型の質を向上させる。CCは列挙型からはほど遠い。それは一般的に利用するための4つの補助表(auxiliary schedules)をもっている。[materials, place, language, timeの補助表]・・・本表は1ページである。各主類に一組の細目表が与えられている。分類番号

は、各細目表と補助表からとられた番号を集めて合成される(is synthesised)。(Ranganathan 1957b, p.138 ; []は引用者の補足、以下同様)

この引用から、Ranganathan は、本表が短く補助表が充実しているほど列挙型の要素が減少するとみなしていること、そして、CC は列挙型からほど遠いと位置づけていることがわかる。CC を分析合成型と呼んでいることはこれまでの著作と同様である。したがって、列挙型の対極にあるのは分析合成型ということになる。

ここで、構造-表示方法説に基づけば、列挙型分類法(列挙表示の分類法)と対になるのは合成表示の分類法である。そして、上でみてきたように、「本表が短く補助表が充実しているほど列挙型の要素が減少する」という特徴は合成表示の説明そのものである。このことは、Ranganathan の分析合成型分類法は合成表示の分類法を指しているように思える。

しかし、その一方で、以下のようにも述べている。

分析合成型分類法に伴う自由度は CC において最大となる。これは、基本クラスと[ファセット内の]細目のレベルだけに列挙を減少させたことによる。(Ranganathan 1957b, p.279)。

ここでは、分析合成型分類法の性格づけとして自由度の高さをあげている。自由度の高さは独立要素からなる記号法によって実現される。したがって、分析合成型分類法を多次元構造・自由構造分類法とみなしているようにもとれる。

以上でみてきたように、Ranganathan は分析合成型分類法の対極に列挙型分類法をおいているが、分析合成型分類法自体には多次元構造・自由構造分類法と合成表示の分類法の両方の性格を与えているように思われる。

(2)分析合成型分類法とファセット化分類法

Ranganathan が分析合成型分類法という名称に明確な意味づけを与えたのは1957年のDorking会議での発表論文(Ranganathan 1957c)においてであることを(1)項で述べたが、この著作では公準という用語を初めて導入し、分析合成型分類法と公準との関係に触れている。ただし、詳しい説明はない。その後、1961年の著作(Ranganathan 1961)において、分析合成型分類法は公準と原理に基づくべきである、という結論に到達する(第4章参照)。そしてその後は、CRGが提唱するファセット化分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすることを試みている。

1965年のいわゆる Elsinore 会議での発表論文(Ranganathan 1965c)では、分析合成型分類法とファセット化分類法との関係について以下のように述べている。

しかし、もしそれが[公準と原理に]導かれた分類法なら、ファセットに関する無限の受容力[新しいファセットを挿入できるなど]を提供することができる。そのとき初めて、ファセット化された分類法は真の分析合成型の分類法となる。しかし、現在、ファセット化と分析合成型という2つの用語は、あたかもそれらが同義であるかのように大雑把に使われている。(Ranganathan 1965c, p.86)

このように Ranganathan は、公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法であると述べ、分析合成型分類法とファセット化分類法は同義ではないと明言している。

同じ 1965 年にラトガース大学で行われた Ranganathan のセミナーの講演録(Ranganathan 1965a)でも、Elsinore 会議での説明と同様、「公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法である」と述べる。その上で、さらに踏み込んで次のように述べている。

分析合成型分類法はすべてファセット化分類法であるが、ファセット化分類法のすべてが分析合成型分類法というわけではない。(Ranganathan 1965a, p.275)

1967年の Prolegomena 第3版(Ranganathan 1967)では、「公準と原理に導かれる」というこれまでの条件に、「自由な」という条件が分析合成型分類法に加えられる。

いかなるファセット化分類法も、それが自由なファセット化でなければ、分析合成型ではないことを強調しておく。(Ranganathan 1967, p.109)

そして、自由なファセット化に基づかないファセット化分類法を硬直化したファセット化分類法と呼んでいる。

この Prolegomena 第3版までは、「公準と原理によって導かれたファセット化分類法」あるいは「公準と原理によって導かれた自由なファセット化分類法」だけが分析合成型分類法であるとしていたが、1969年の著作(Ranganathan 1969)

において変化がみられる。この著作では、分析合成型分類法とファセット化分類法は、それぞれ定義は異なるが結果的にほぼ同じものを指している、と考えているように思われる。ただし、定義が異なるのであるから、分析合成型分類法とファセット化分類法はそもそも別の概念であると考えていることは従来と変わらない。

一方、既存の分類法の位置づけも著作によって微妙に変化する。一例として Prolegomena 第 3 版(Ranganathan 1967)での位置づけをみると図 5-1 のようになる。なお、(1)項でみた Prolegomena 第 2 版(Ranganathan 1957b)での位置づけを右欄に示した。

分類法	Prolegomena 第 3 版 (Ranganathan 1967)	Prolegomena 第 2 版 (Ranganathan 1957b)
LCC	列挙型分類法	厳密に列挙型の分類法
DDC	ほぼ列挙型の分類法	ほぼ列挙型の分類法
UDC	ほぼファセット化された分類法	主として列挙型の分類法
CC 第 3 版まで	硬直化したファセット化分類法	非列挙型分類法
CC 第 4 版以降	自由なファセット化分類法 ＝分析合成型分類法	＝分析合成型分類法

図 5-1 Ranganathan による各種分類法の位置づけ

LCC と DDC の位置づけは Prolegomena 第 2 版と第 3 版とではほぼ同じである。UDC は、第 2 版では列挙型に入れられていたが、第 3 版ではファセット化に入れられている。これは、列挙型である DDC を基にしている点を重視するか、合成の要素を豊富にとり入れている点を重視するかの違いと考えられる。CC は、Prolegomena 第 2 版ではすべて分析合成型とされていたが、Prolegomena 第 3 版ではすべてファセット化であり、その中の自由なファセット化を分析合成型と呼んでいる。つまり、

- ①Prolegomena 第 2 版での「分析合成型分類法」が第 3 版で「ファセット化分類法」と呼ばれるようになり、
- ②Prolegomena 第 3 版での「分析合成型分類法」は「ファセット化分類法」とは区別されている、

のである。分類論のテキストブックにおいて、分析合成型分類法とファセット化分類法を同義として扱っているのは①の側面だけをみているのであって、②の側面を無視していることになる。

一方、(1)項でみたように、ファセット化分類法という概念を使用する以前(Prolegomena 第2版や同時代の著作で)は、分析合成型分類法が合成表示の分類法と多次元構造・自由構造分類法の両方の性格を与えられていた。これは、Ranganathan が独立要素からなる記号法(多次元構造・自由構造分類法)と記号の合成(合成表示の分類法)とを混同していたからであると(1)項で推測した。Prolegomena 第3版においては、ファセット化分類法および分析合成型分類法(=自由なファセット化分類法)が列挙型分類法に対置されている。ここには、独立要素からなる記号法(多次元構造・自由構造分類法)と記号の合成(合成表示の分類法)との混同だけでなく、ファセットと独立要素からなる記号法との一体化というもう1つの要因も関係していると思われる。すなわち、「ファセット」、「独立要素からなる記号法」、「記号の合成」という3つの概念が明確に区別されていないという、第3章でみた CC 第1版以来の課題を引きずっていると考えられる。

5.1.2 Vickery のファセット化分類法

(1)分析合成型分類法とファセット化分類法

5.1.1 項でみたように、Ranganathan は 1937 年の Prolegomena 第1版(Ranganathan 1937)で、合成ができる分類法を合成型分類法と呼んだ。Ranganathan が分析合成型分類法という用語を初めて用いたのは、1950年の著作(Ranganathan 1950b)においてである。

Vickery は、1950年の著作(Vickery 1950)で合成型分類法と呼び、1953年の著作(Vickery 1953b)から分析合成型分類法と呼ぶ。そして、1955年の著作(Classification Research Group 1955)で以下のようにファセット化分類法と呼ぶようになる。

細目の組を複数つくることができ、それぞれが並行する種の同質のグループとなるように、ある1つの類を複数の方法で細分することができる分類法の型が必要とされている。そのような分類法は、いわゆるファセット化された分類法である。(Classification Research Group 1955, p.267)

ただし、Vickery は同じ著作の中で、Ranganathan らの用語として分析合成型

分類法も用いている。

Ranganathan や Cordonnier が考案したような分析合成型の分類法は、主題を構成するそれぞれの用語を分類記号に変換し、そうした記号の集合体で主題を表現する。これらすべての手法が特定主題の複合的な性質を認識している。(Classification Research Group 1955, p.264)

両者を同義として扱っていることは、後の著作(Vickery 1960, Vickery 1975)の中で、分析合成型分類法をファセット化分類法と言い換えていること(あるいはその逆の言い換え)からわかる。

最近 10 年間に発展した分類法の新しい様式は、その代表的人物である Ranganathan によって提唱された名称「分析合成型」あるいは「ファセット化」として知られるようになった。(Vickery 1960, p.8)

ファセット化または分析合成型分類法を支持する他の人たちと同様に、Ranganathan は・・・。(Vickery 1975, p.193)

一方、5.1.1 項でみたように、Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法は同義ではないと主張していた。1965 年の著作(Ranganathan 1965c)では「公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法である」と述べ、1967 年の著作(Ranganathan 1967)では「公準と原理に導かれる自由なファセット化分類法」が分析合成型分類法であるとしている。また、1969 年の著作(Ranganathan 1969)においても、分析合成型分類法とファセット化分類法は結果的にほぼ同じものを指していると認めながらも、定義が異なる、すなわち別の概念であると考えている。

Vickery が 1955 年に「ファセット化分類法」という用語を使い始め、Ranganathan が 1965 年の著作からファセット化分類法への言及を始めるのは、この 10 年間に「ファセット化分類法」という用語が普及したことの現れと考えられる。

Ranganathan が両者の違いにこだわったのは、Vickery ら CRG による用語の使い方への不満、あるいは、Vickery らがファセット化分類法を支持しながらも、CC も含めて既存のファセット化分類法には批判的である(5.2.2 項参照)ことへの反論、とも考えられるが、おそらくそれ以上に分類法に対する考え方の違いもあ

ったと思われる。その1つが、5.2.3項で検討する Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットの考え方の違いである。

(2) 列挙型分類法とファセット化分類法

Ranganathan と同様に、Vickery がファセット化分類法と対置しているのは列挙型分類法である。Vickery は階層関係(hierarchical relations)や階層的樹(hierarchical tree)という用語を使用している(Vickery 1975)が、これらはファセット化分類法におけるファセット内での階層を意味しており、構造-表示方法説の階層構造分類法のことではない(Ranganathan の著作には階層構造分類法や階層(hierarchical, hierarchies)という用語自体が、筆者の確認した範囲ではみあたらなかった)。

だが、Vickery の列挙型分類法という用語には、実は階層構造分類法の意味が含まれている。Vickery は 1955 年の著作(Classification Research Group 1955)で列挙型分類法を「知識の樹」と呼んでいる。

伝統的な列挙型の分類法は、「[知識の]全領域」から始めて、それを一連のメインクラスに区分し、必要な詳細さが得られるまで区分を続けて、1つの巨大な知識の樹を構築することによって、属関係[種類関係]を正確に表示できるとみなしている。この区分の過程は論理的である、すなわち、各類は特定の区分特性によって種に区分される、ということが強調される。(Classification Research Group 1955, p.266-267)

これは階層構造分類法の説明そのものである。Vickery にとっては、列挙型分類法と階層構造分類法は同義であるといえる。

第3章および第4章でみたように、Ranganathan が分析合成型分類法を考案したのは、複合的な主題に対応するためであった。Vickery がファセット化分類法を提唱したのも、複合的な主題への対応が主な理由である。1955年の著作(Classification Research Group 1955)で次のように述べている。

・・・ある論文の特定の主題は、知識の巨大なキャビネットの中の1つの整理棚に手際よくしまい込めるような、単純な概念ではない。それは、単純な概念の複合体であり、少なからず複雑である。(Classification Research Group 1955, p.264)

ここにでてくる「知識の巨大なキャビネット」とは先の引用の「知識の樹」の

ことであり、列挙型分類法(実際には階層構造分類法)では「概念の複合体」を扱うことが困難であると主張している。そして、既存の列挙型分類法(実際には階層構造分類法)では、複合的な概念をとり入れているために、もはや正しい階層構造になっていないことを指摘する。

主要な分類法の表を調べた結果、実際にはこれ[属関係の正確な表示]が真実ではないことが明らかとなった。・・・グループにまとめられている用語は、理論がそうあるべきだと主張しているようには関連していない。それらは、単一の特性によって類から区分けされた並列の種ではない。このように列挙型の分類法は用語間の正しい関係を表示することに失敗している。
(Classification Research Group 1955, p.267)

単一の区分特性によって区分されれば、理論的には同じ特性をもつ用語のグループ(クラス)ができるはずである。しかし、既存の列挙型分類法(実際には階層構造分類法)のクラスには、1つの区分特性によって集められた用語ではなく、複数の区分特性によって区分けされたものが混在しているのが現状である。そのために属関係が乱れ、階層構造分類法とはいえなくなっている、というのである。そこで、複数の区分特性によって区分けされたものを、それぞれファセットとして仕分ける必要がでてくる。

ある類、たとえばメインクラス、の下にまとめられた用語は、すべてが単一の区分特性を用いた差異化によってその類から導かれたものとはいえない・・・それらは、それぞれ異なる特性によって類から導かれるグループまたはファセットに仕分けることができる。関連する用語のつながりを正確に表示するためには、ファセット化された分類法が必要である。
(Classification Research Group 1955, p.263)

このようにして Vickery は、複合的な主題に対応するためにはファセット化分類法が必要であることを主張した。

一方、複合的な主題に対応するためには、独立要素からなる記号法の方が単一要素からなる記号法よりも優れていることを Ranganathan は認識していたが、Vickery もファセット化分類法が複合的な主題に対応しやすいことを記号の特性としてとらえている(Vickery 1952)。

まず、記号を、(a)意味的集合体(semantic aggregates), (b)膠着体(agglutinates),

(c)融合体(amalgamates), (d)単離体(isolate)の4種類に分ける。(a)の記号は「2つ以上の部分に分離することができ,各部分はそれ自身の固定された意味をもつ。その意味は他の部分から分離されたときにも維持される」というもので,日常言語の例として「milk-man, post-man, post-card」を,また,UDCの例として「547:541, 546:541, 546:545」をあげている。要するに,(a)はUDCのコロン連結である。コロンの前後の記号は独立していて,それ自身の意味をもっている。また,それぞれ単独で使用することもできる。つまり,独立要素からなる記号法である。以下,詳しい説明は省略するが,(b)は補助表による合成で,前半の記号(たとえば535)と後半の記号(たとえば01)はそれぞれ独立した意味をもつが,後半の記号は単独で使用することはできない。(c)は階層性を表現した記号で,各桁の記号が階層の段階に対応した意味をもっている。列挙型分類法(実際には階層構造分類法)は伝統的にこの融合体の記号を使用していると指摘している。(d)はUDCには存在しない記号で,CCのフェイズ関係に対応する(実際には,UDCのプラス(+)連結とコロン(:)連結はフェイズ関係も表現することができる(3.2.1(3)項参照))。

このように記号の種類を分け,それぞれに既存の分類法の記号法をあてはめている。そして,ファセット化分類法がもっとも柔軟性のある(a)の意味的集合体の記号法を採用しており,今後も発展する分類法であると指摘している。このように,記号の柔軟性が,列挙型分類法(実際には階層構造分類法)ではなくファセット化分類法を支持する理由としてあげられている。記号が柔軟であることによって,複合的な主題へも対応できることになるからである。

さらにVickeryは,"多くの場合においてこのこと[意味的集合体に関してなり立つこと]は膠着体にもいえるが,柔軟性は制限されている"(Vickery 1952, p.19)と述べて,膠着体の記号は意味的集合体の記号のような柔軟性のある程度備えているが,限界があるとしている。すなわち,補助表などによる合成の機能では複合的な主題への対応に限界があるということである。このように,Vickeryは独立要素からなる記号法と合成表示とを区別している。しかし,(a)の意味的集合体から(d)の単離体までの区分は一次元的であり,構造・表示方法説の構造と表示方法という二次元的な区分にはなっていない。そのため,意味的集合体(独立要素からなる記号法)は構造面からみた場合の多次元構造・自由構造(区分特性を独立に適用)に対応し,膠着体(記号の合成)は表示方法の面からみた場合の合成表示に対応する,ということまでは認識していない。つまり,構造と表示方法との区別はできていない。

なお,この記号に関する著作の中でも日常言語の例があげられているが,

Vickery は 17 世紀の言語学者 Wilkins の研究を考察した著作(Vickery 1953c)で、以下のように述べている。

Wilkins の超越的接辞(transcendental particles)は、合成型分類法(synthetic classification), すなわち、基本用語の組合せによる複合的な観念の表現、のたいへん興味深い例である。(Vickery 1953c, p.336)

文献分類法を学ぶ現代の学生にとって、Wilkins の仕事はいろいろな意味で非常に興味深い。

(1)それは、基本用語の組合せによる特定主題の表現という、合成型分類法(composite classification)の考えに基づいている。[(2)と(3)は省略](Vickery 1953c, p.342]

このように、Vickery は記号の研究の基礎として言語学を考慮に入れている。意味的集合体(独立要素からなる記号法)と膠着体(記号の合成)との区別はその成果といえよう。それに対して Ranganathan は、独立要素からなる記号法は、ボルトとナットで部品を組み立てるメカノという玩具からヒントを得たと語っている(Ranganathan 1933)。Ranganathan が直観で得た概念を、Vickery は理論的に探究したということであろう。両者の相違は、個人的属性、概念の提唱者と継承者、時代背景などの相違が影響しているように思われる。しかし、この点に関してはさらに研究が必要である。

5.2 基本カテゴリーと共通ファセット

5.2.1 Ranganathan の基本カテゴリー

Ranganathan が 5 つの基本カテゴリー—Personality, Matter, Energy, Space, Time を初めて導入したのは、1944 年の著作(Ranganathan 1944)である。ここでは、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していた。つまり、ファセットは領域によって異なり、初心者にとってはわかりにくい。特に、新しい領域でどのようなファセットが存在するかを分析するのは困難である。そこで、各領域に現れるファセットを整理してまとめたところ、5 つの基本カテゴリーに収められることがわかった。各領域でどの基本カテゴリーが必要かを示しておけば、基本カテゴリーに基づいてその領域に必要なファセットをみつけることが容易になるであろう、というわけである。

その後、Ranganathan はこの問題を継続的に検討し、上記の基本カテゴリーに与えた役割を変化させていく(第 4 章参照)。その背景には、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした深い主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

新しい役割を明確に与えたのは、1951 年の著作(Ranganathan 1951c)である。この著作では、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘している。深い主題に対応するためには、より多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。そこで、ファセット式で固定をするのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする(そういう意味では「ファセット式」ではなく「基本カテゴリー式」と呼ばれるべきもの)に変わったのであるが、現在も「ファセット式」と呼ばれている)。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体現させればよい。こうすることによって自由度が得られる。

このように、いままで基本カテゴリーは初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を与えられていたが、新しい考え方では、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させられたのである。

5.2.2 Vickery の共通ファセット

(1)ファセットとカテゴリー

Vickery はファセットをカテゴリー(Ranganathan の基本カテゴリーの意味ではない)という用語でおき換え、ほぼ同義として扱っている。以下にその例を示す。

したがって、Colon Classification における様々なカテゴリーあるいはファセットは、特定の順序で引用されなければならない。(Vickery 1952, p.23)

私たちがファセットと呼ぶ概念的カテゴリーが有効に適用できるのは、そのような用語の「因数分解」においてである。(Vickery 1958, p.16)

「ほぼ同義」としたのは、下記のような使用例もあるからである。

これら 3 つの情報源から全部で 18 のカテゴリーが得られた。後に、私はこれらのカテゴリーを 8 つのファセットにまとめた。(Vickery 1958, p.23-24)

この例のようにカテゴリーとファセットを使い分けている場合もあるが、大部分の場合において同義として扱っていると考えてよいであろう。

(2)一般分類法と共通ファセット

1952 年の CRG 設立以来、Vickery をはじめとする CRG のメンバーは、もっぱら専門分類法(知識の特定領域を対象とする分類法)の構築を念頭においていた。それはかれらの多くが専門図書館員だったからであろう。Vickery も化学関係の企業図書館に勤務していた。Vickery および CRG のメンバーが一般分類法(知識の全領域を対象とする分類法)への関心を表明したのは、おそらく、先述の Dorking 会議においてである。その会議での報告(Vickery 1957a)で Vickery は次のように述べている。

[一般分類法への反発と特定の機関のための専門分類法への需要の高まりがあるが]しかし、より広い普遍的な分類法を求める声も、とりわけより包括的な図書館や書誌での利用に関して、依然として残っている。Classification Research Group は、第 1 に、一般分類法を構築する目的は道理に適合しているし実用的でもある、第 2 に、既存の分類法はどれも適切ではない、第 3 に、満足できる一般分類法は専門分類法を構築しようとする人の大きな助けとなるであろう、と信じている。(Vickery 1957a, p.43)

ここでは、一般分類法は専門分類法を構築する際にも役に立つと述べている。ただし、既存の一般分類法ではなく、「満足できる」一般分類法が構築されたならばである。ここには、一般分類法の意義を認めることと、「満足できる」一般分類法でなければならないという慎重な態度との二面性がみられる。Vickery のこの二面性はその後も継続される。たとえば、以下のように述べている。

詳細で、多様性があり、柔軟で、利用が簡単であるという現代の情報索引法が求めていることをすべて提供する一般分類法を設計することが可能であることは確かであろう。そのような一般分類法が提供されるまで、新しい専門分類法が構築されるであろう。(Vickery 1960, p.7)

私はこの[一般分類法の目標は誤りであるという]見解に与しないが、もし一般的に役立つ分類法を構築するならば、広範囲で網羅的な文献の調査に基づかなければならないことを強調しておく。(Vickery 1958, p.23)

そして、1962年の著作(Vickery 1962)では、満足できる一般分類法を構築するための条件を示している。

一般分類法は、単に専門分類法の集合体とすることはできない……。より満足のいく解決法は、[あるファセットの]単一の表を用意し、必要ならば、その表から用語をとり出して他のファセットからの用語と結合できるようにすることである。(Vickery 1962, p.246)

そのような解決法は、全体として科学と技術のどのような主題でも表現するのに十分な、しかし重複はとり除いた、一組の同質のファセットを形成することが要求される。(Vickery 1962, p.246)

ここでは、満足できる一般分類法を構築するためには、専門分類法のファセットを寄せ集めるだけでは十分でなく、領域によらない「同質のファセット」を形成する必要があるとしている。なお、ここでの「一般分類法」は知識の全領域を対象としたものではなく科学技術の全領域を対象とした分類法という意味で使われている。

Vickery は、この「領域によらない同質のファセット」を「共通ファセット (common facets)」と呼んで検討している。では、何が共通ファセットになるのか。

Vickery は次のように答えている。

・・・最初に広く使われた共通ファセットは形式区分，時代区分，地理区分，言語区分である。これらは，大体において，基本クラスに関係なくどの特定主題にも出現するファセットである。(Vickery 1957b, p.8-9)

[CCにおいて]多くの基本クラスに出現することのできるファセットは，どれも共通ファセットである。(Vickery 1962, p.8)

1つ目の引用にあるように，DDCなどの形式区分，時代区分，地理区分，言語区分を共通ファセットとみなしている。2つ目の引用にある「CCにおいて多くの基本クラスに出現することのできるファセット」は，Ranganathan の5つの基本カテゴリーのことではなく，たとえば Energy ファセット(この著作ではカテゴリーと呼ばずファセットと呼んでいる)に現れる Measurement, Control, Moderationなどを指している。

別の著作(Vickery 1957a ; Vickery 1958)では，以下のような共通ファセットの例をあげている(「知識のすべての領域」と述べてはいるが，実際は「科学技術の全領域」という意味である)。

塑性限界は「変化量(variation)」を示し，風化は速いまたは遅い「割合(rate)」で生じ，注流はある「強さ(intensity)」で行われる。これらの一般的属性は知識のすべての領域に共通しているように思われる。(Vickery 1957a, p.46-47)

科学と技術において有用なカテゴリーのいくつかの例はすでに第1章で示した，Substance, State, Property, Reaction, Operation, Device, Organ, Agent, Handling, Apparatus, Process などである。(Vickery 1958, p.22)

以上からわかるように，Ranganathan は基本カテゴリーP, M, E, S, Tを導入したときから一貫して同じものを使い続けているのに対して，Vickery は著作によって何を共通ファセットとするかに変化がみられる。Vickery の1957年の著作(Vickery 1957b)では，Measurement, Control, Moderation という科学技術分野に共通のファセットのほかに，形式区分，時代区分，地理区分，言語区分という全領域に共通のファセットをあげている。1958年の著作(Vickery 1958)では，

Substance, State, Property, Reaction, Operation, Device, Organ, Agent, Handling, Apparatus, Process を、そして、1962年の著作(Vickery 1962)では、Variation, Rate, Intensity をあげている。一般分類法の意義を認めながらも「満足できる」一般分類法でなければならないという慎重な態度が、一般分類法を構築するための条件である共通ファセットの確定にも現れていると考えられる。

(3)共通ファセットの課題

ここで時間を少し戻して、一般分類法への関心を表明した1957年のDorking会議よりも前の1955年の著作(Classification Research Group 1955)をみてみよう。そこでは以下のように述べていた。

知識の全領域をカバーするのに必要なカテゴリーの数に制限を設けることができるかどうか、Classification Research Groupの中でいくらか議論がなされている。Colon Classificationでは、すべてのファセットが5つの「基本的」カテゴリー、すなわち、Personality, Matter, Energy, Space, Timeのどれかひとつの体现であるとみなされている。Groupではこの見解を採用していない。私たちは、知識のどの領域にも現れるわずかな数の基本的カテゴリーだけが存在するに違いないとは仮定していない。それにもかかわらず、私たちは、ある領域を実際に調査することによって形成された一組の暫定的なカテゴリーの利用は、他の領域にはじめてアプローチする際に役立つことを認識している。知識の成長に伴ってカテゴリーの組は修正される必要があるだろう。(Classification Research Group 1955, p.267)

ここでは、「わずかな数の基本的カテゴリーだけが存在するに違いないとは仮定していない」と述べている。この文中の「基本的カテゴリー」は、Ranganathanの5つの基本カテゴリーだけを指すのではなく、より一般的な意味で「知識のどの領域にも現れるカテゴリー」すなわち、後に共通ファセットと呼ぶものを意味していると考えられる(そのため、あえて「基本的カテゴリー」と訳した)。そして、基本的カテゴリー(共通ファセット)の数が少ないことだけが問題なのではなく、固定をすることが問題だと述べている。それは、「知識の全領域をカバーするのに必要なカテゴリーの数に制限を設けることができるかどうか」についてCRGで議論がされていることや、「知識の成長に伴ってカテゴリーの組は修正される必要がある」ことをあげていることから推測される。知識が変化し、領域ごとのカテゴリーの組が変化すれば、基本的カテゴリー(共通ファセット)も変化する可能性があり、数を固定することはできないからである。

実は、Ranganathan 自身も知識構造が静的ではないと認識していることを、Vickery は 1954 年の著作(Vickery 1954)で指摘していた。

・・・Ranganathan は知識の全領域は静的ではないことを強調している。「それは動的な連続体である。したがって、その構造は常に変化している。それゆえ、現時点での構造を知るだけでは十分ではない。私たちはその展開の様式も理解するべきである」。(Vickery 1954, p.140)

しかし、それにもかかわらず Ranganathan は基本カテゴリーを 5 つに固定している、というのが先の 1955 年の著作(Classification Research Group 1955)での批判である。

このように、1957 年の Dorking 会議よりも前の段階では、共通ファセットに関して懐疑的な見解をもっていた。一般分類法の意義を認めるようになってから後も慎重な態度をとっていたのは、一般分類法構築の条件である共通ファセットへの懸念があったからではないかと思われる。

実際、1957 年以降も Ranganathan の基本カテゴリーには批判的である。1975 年の著作(Vickery 1975)でも、以下のように述べている。

知識の、あるいは、科学と技術のどの領域にも適用できる、「基本的(fundamental)」カテゴリーの簡潔で、表面的には(ostensibly)完全なリストを作成する試みがなされてきたし、いまもなされている。たとえば、Ranganathan は 5 つの基礎的な(basic)カテゴリー、「personality」、「energy」、「matter」、「place[原文通り]」、「time」だけを認めている。(Vickery 1975, p.17-18)

ここでは、「表面的には完全なリスト」と呼んで、Ranganathan の 5 つの基礎的なカテゴリー(基本カテゴリー)を例にあげている。これは、5 つの基本カテゴリーでは「完全なリスト」になっていないことを指摘している。

共通ファセットが解決すべき課題は、変化を続ける知識構造に対して共通ファセットの完全なリストが作成できるのか、という問題だけではない。多くの領域に共通しているように思われるファセットでも領域によって扱いが異なる場合もある、というもう 1 つの課題を Vickery は指摘している。

・・・Dewey と Bliss によって与えられたかなりの数の多重配置(multiple

locations)は、ファセット化分類法においては必要がない。その一方で、用語の属関係は変動しないという仮定は、十分な調査をしないで性急に行うべきではない。(Vickery 1958, p.38)

したがって、伝統的な分類法における多重配置の多くの例が必要でないとしても、ある概念の属関係が変動する場合には複数の階層にそれらが現れることを正当化する。(Vickery 1958, p.39)

上記の最初の引用では、ファセット化分類法ならば同じ内容を表す項目はファセットとしてまとめられており、同じ項目を複数箇所に配置(多重配置)する必要はないのだが、同じ内容を表しているようにみえる項目(同じ名称の項目)であっても、上位と下位の関係が変われば位置づけも変わる可能性がある、ということ述べている。その例として動物をあげている。動物の種類は、動物学にも農業にも出現するが、農業における動物は家畜としての動物であり、動物学としての動物とは扱いが異なる、というわけである。このことから、2つ目の引用で、同じ内容を表す(ようにみえる)項目であっても、複数箇所に出現する可能性がある結論している。このような項目は共通ファセットにはならない、ということである。

上位と下位の関係(属関係)以外にも、同じ項目が異なる扱いを必要とする場合がある。それは次の場合である。

ある知識領域において補助的なファセット(航空学における物質の **Property** のように)が、他の領域(この場合は物理学)においては中心的である、ということは容易にわかる。この事実は、科学と技術全体の一般分類法の設計をしようとする際に大きな困難をもたらす。(Vickery 1962, p.245)

索引語として付与する際に、同じ語であっても、ある領域では主要な索引語として扱われるが、別の領域ではあまり重要ではない索引語として扱われる可能性がある、ということである。このような場合も、共通ファセットとすることは困難である。

Vickery は、一般分類法を構築するためには以上のような共通ファセットの課題を解決する必要があると指摘している。

5.2.3 基本カテゴリーと共通ファセットの相違

5.2.2(3)項でみたように、Vickery は Ranganathan の基本カテゴリーに対して批判的であるが、それは 5.2.2(2)項でみた一般分類法構築への慎重な態度によるものであるだけでなく、そもそも Vickery の共通ファセットと Ranganathan の基本カテゴリーはまったく異なる概念であることも関係していると思われる。

Ranganathan の基本カテゴリーは、最上位のファセットではないかと思われる。論理学では、1つの区分特性による区分枝群をクラスと呼んでいる(近藤と好並 1964)。Ranganathan のファセットは、区分特性による区分枝の総体であるから、クラスといえるであろう。さらに、区分枝の総体であるクラスは外延であり、そのクラスを特徴づける区分特性は内包である(近藤と好並 1964)。したがって、クラスに該当するファセットは外延である。Ranganathan は、CC 第 1 版(Ranganathan 1933)では内包である区分特性を使用したか、CC 第 3 版(Ranganathan 1950a)では外延であるファセットに変更したことになる。

また、個別の対象を区分特性によってまとめてクラスを構成し、さらに、共通の特性をもつクラスをまとめて上位クラスを構成し、この過程を続けていくと、もはや他のものの下位クラスになりえない最上位のクラスに到達する。この最上位のクラスを範疇(category)と呼ぶ(近藤と好並 1964)(Ranganathan の基本カテゴリーや Vickery がファセットとほぼ同義に用いているカテゴリーと紛らわしいので、あえて範疇という語を用いることにする)。範疇(最上位のクラス)間にはもはやなんの共通の特性もない(もし共通の特性があるなら、さらに上位のクラスにまとめられる)。Ranganathan の基本カテゴリーは、この後で説明するように、最上位のファセットクラスであるから、範疇に該当するといえる。

ファセット F_{A1} と F_{A2} が共通の特性によってファセットクラス F_A にまとめられ、ファセット F_{B1} , F_{B2} , F_{B3} が共通の特性によってファセットクラス F_B にまとめられたとする(図 5-2)。そして、ファセットクラス F_A と F_B に共通の特性がないならば、 F_A と F_B がそれぞれ最上位のファセットクラスとなる。これが Ranganathan の基本カテゴリーではないかと考えられる。

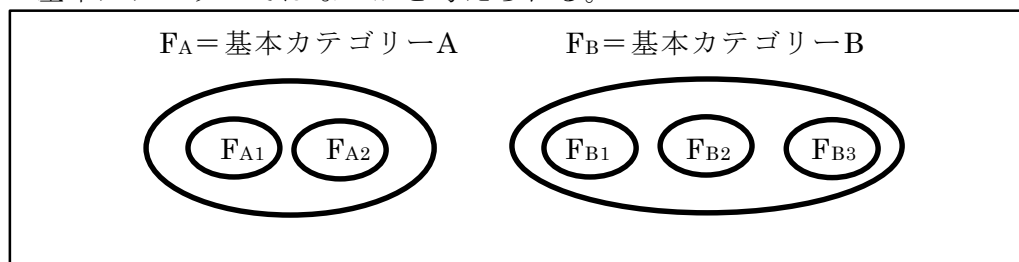


図 5-2 Ranganathan の基本カテゴリー

各基本カテゴリーに属する個々のファセットは、特定の知識領域にだけ現れるものもあれば、多くの知識領域に現れるものもあるであろう。しかし、多くの知識領域に現れるから基本カテゴリーと呼ばれるのではない。どの知識領域に現れるかにかかわらず、共通の特性をもつ最上位のファセットクラスが基本カテゴリーである。

たとえば、国立図書館、公共図書館、大学図書館、学校図書館などの「館種」ファセットは図書館学分野にしか現れず、ヘリウム、ネオン、アルゴンなどの「元素」ファセットは化学分野にしか現れないとする。しかし、「館種」ファセットと「元素」ファセットとの間に「パーソナリティ」という共通の特性があるならば、両者は「パーソナリティ」ファセットという上位のファセットクラスにまとめられる。そのほかに、「マター」ファセットや「エネルギー」ファセットという上位のファセットクラスがまとめられて、これらの上位ファセットクラスの中にこれ以上共通の特性がないならば、これらが最上位のファセットクラスとなる。そして、この最上位のファセットクラスが Ranganathan の基本カテゴリーであると考えられる。

それに対して、Vickery の共通ファセットは、多くの知識領域に現れるファセットを意味している。図 5-3 のように、知識領域 1 にファセット F_B と F_C が現れ、知識領域 2 にファセット F_A , F_B , F_D が現れるとき、両方の知識領域に共通に現れるファセット F_B が共通ファセットと呼ばれる。

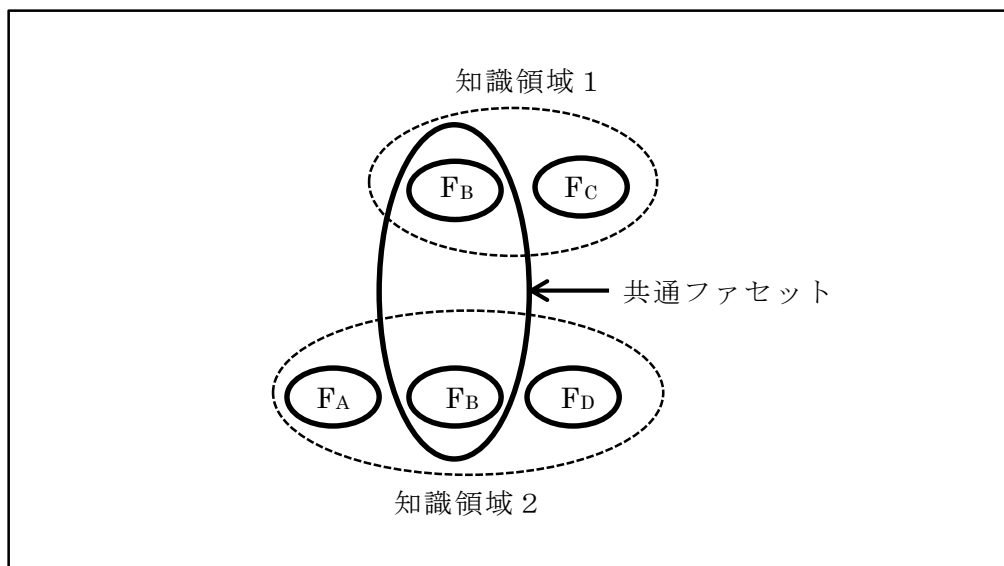


図 5-3 Vickery の共通ファセット

たとえば、「速度」ファセットは、物理学分野(物体の運動速度)、化学分野(化学反応の速度)、生物学分野(植物の生長速度)、天文学分野(天体の自転・公転速度)、

電気工学分野(電流の伝達速度)などさまざまな分野に現れるが、「遺伝子」ファセットは生物学分野にしか現れないであろう。前者のように多くの領域に共通に現れるファセットが Vickery の共通ファセットである。

このように, Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットは, 一見同じ概念に思えるが, 実際はまったく異なる概念であると考えられる。

5.1.2(1)項で, Ranganathan が自身の提唱する分析合成型分類法と Vickery らのファセット化分類法の違いにこだわった理由の 1 つは, それぞれの分類法が基礎としている基本カテゴリーと共通ファセットの違いにあったのではないかと述べた。Ranganathan が苦心の末に与えた基本カテゴリーの役割は, 「基本カテゴリー自体はファセット式で固定されるが, 個々のファセットは必要に応じて基本カテゴリーから体現されることによって硬直化が防げる」ということであった(5.2.1 項参照)。しかし, Vickery の共通ファセットは, 多くの知識領域に出現するとはいえ, 個々のファセットそのものであり, 基本カテゴリーの役割を果たすことはできない。Ranganathan がここまで明確に認識していたかどうかは定かでないが, 少なくとも共通ファセットは基本カテゴリーと異なる概念だということとは感じとっていたと思われる。

一方 Vickery は, 5.2.2(3)項の引用でみたように, 「どの領域にも適用できるカテゴリーのリストを作成する試み」として Ranganathan の基本カテゴリーを例としてあげていることから推測されるように, 基本カテゴリーも共通ファセットの一種である(ただし不完全な)と考えていたと思われる。しかし, Vickery は一般分類法を構築するために共通ファセットを必要としたのであり, Ranganathan の基本カテゴリーでは不十分と考えたのであろう。これが, Vickery が Ranganathan の基本カテゴリーに対して批判的であったもう 1 つの理由と考えられる。

5.3 考察

本章では、Ranganathan のファセット概念に関する考えの変遷を著作ごとに逐次的に調査した第4章の結果をもとに、筆者の提唱する構造-表示方法説の観点から再分析を行った。また、分類論のテキストブックにおけるファセット概念の記述に Ranganathan とともに影響を与えたと思われる Vickery の考えを、Ranganathan と対比させながら検討した。

Ranganathan のファセットとは「区分特性による区分肢の総体」であり、それ自体は単純な概念である。しかし、第3章で分析したように、ファセットを用いることと独立要素からなる記号法を用いることが一体化してとらえられてしまった。さらに、独立要素からなる記号法と記号の合成も混同されてしまった。

構造-表示方法説に基づけば、独立要素からなる記号法は構造という観点からみた多次元構造・自由構造分類法(区分特性を独立に組合せる分類法)のための記号法であり、記号の合成は表示方法の観点からみた合成表示のことである。両者はまったく異なる観点からみた概念である。また、ファセットは独立要素からなる記号法をもつ分類法、すなわち多次元構造・自由構造分類法だけで使われるものではなく、階層構造分類法でも使うことが可能であるし、実際に使われている。分類論のテキストブックでは構造-表示方法説に基づく整理がほとんど行われておらず、Ranganathan の時代からの混乱がそのまま引き継がれている。

Ranganathan の分析合成型分類法と Vickery らのファセット化分類法も、分類論のテキストブックでは同義として扱われることが多い。しかし、Ranganathan 自身は同義ではないとして、両者の相違を明確にしようと努めていた。それに対して Vickery は、両者を同義として扱っていた。分類論のテキストブックにおける両分類法の関係に関する記述は、Vickery の影響が強いのではないかと考えられる(もちろん、Vickery 以外の CRG メンバーやその他の人たちの影響も相乗的にあったと思われる)。

さらに、分析合成型分類法とファセット化分類法が同義であるかどうかは別として、どちらも複合的な主題に対応するために記号の独立性を重視しているという点では多次元構造・自由構造分類法(区分特性を独立に組合せる分類法)を意図していると思えるが、その一方で、どちらも列挙型分類法と対置されているという点で、構造-表示方法説からみて問題がある。構造-表示方法説では、列挙型分類法(列挙表示の分類法)に対置されるのは合成表示の分類法である。ここにも、独立要素からなる記号法と記号の合成との混同の影響がみられる。

ただし、Vickery は列挙型分類法と呼びながらも実際には階層構造分類法を意図していたようにも思える(Ranganathan についてははっきりしない)。そうだとすれば、階層構造分類法に対置されるのは多次元構造・自由構造分類法であり、ファセット化分類法に関しては適切な対応関係になっているといえる。とはいえ、実質的に階層構造分類法であるものを列挙型分類法と呼んでいるということは、両者を混同しているのであり、それ自体も問題であるし、それに対置されるファセット化分類法が純粋に多次元構造・自由構造分類法を意図しているのか疑問である。

なお、分析合成型分類法という名称は、階層構造分類法でも使われている「(記号の)合成」という語を含んでいるし、ファセット化分類法という名称は、階層構造分類法でも使われている「ファセット」という語を含んでいるので、区分特性を独立に組合せる分類法という意味での多次元構造・自由構造分類法を指す名称としては、どちらも適切でないように思われる。

次に、Ranganathan におけるファセットと基本カテゴリーの関係、および、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットの関係について検討した。Ranganathan は、当初は分類作業の初心者のための手引きという役割を基本カテゴリーに与えていた。しかし、知識の専門化に伴って文献の主題も複雑化し、それを表現するファセットの数も増加したため、それらをファセット式で固定すると分類法が硬直化するという問題が生じた。この問題を解決するために、ファセット式で固定するのは基本カテゴリーとし、個々のファセットは必要に応じて基本カテゴリーから体現させるという方法に変えた。基本カテゴリーは固定されるが個々のファセットは束縛されないので、分類法の硬直化が防げるということである。この場合、基本カテゴリーは初心者のための手引きではなく、個々のファセットを体現する源という役割に転換されたことになる。

一方、Vickery はもともと専門分類法にだけ関心をもっていたが、一般分類法にも関心を示すようになる。しかし、CC を含めて既存の一般分類法には否定的であった。また、満足できる一般分類法を構築するためには、多くの(理想的にはすべての)知識領域に共通するファセットが必要であると考えていた。こうした観点から、共通ファセットに関する考察を行っている。

この Vickery の共通ファセットは Ranganathan の基本カテゴリーと類似しているようにも思われるが、実際にはまったく別の概念である。基本カテゴリーは同じ区分特性をもつファセットをまとめたもの(最上位のファセットクラス)である。それに対して共通ファセットは、多くの知識領域に出現するとはいえ、個々のファセット自体である。

したがって、共通ファセットでは個々のファセットを体現させるという基本カテゴリーの役割を果たすことができない。**Ranganathan** が自身の分析合成型分類法とファセット化分類法との違いにこだわった1つの理由は、この基本カテゴリーと共通ファセットの違いにあると考えられる。このことから、**Ranganathan** と **Vickery** は似たような分類法を研究・構築しているけれども、目指す方向はかなり異なっていたと思われる。

5.4 第5章のまとめ

5.1 節では、Ranganathan と Vickery のそれぞれにおける、分析合成型分類法とファセット化分類法に対する考え方を検討した。

Ranganathan は、1937 年の Prolegomena 第 1 版では、分析合成型分類法(この時点ではまだ合成型分類法と呼んでいる)を多次元構造・自由構造分類法の意味で捉えていた。ところが、その後の著作では、分析合成型分類法の対極に列挙型分類法をおいており、分析合成型分類法に合成表示の分類法という性格も与えているように思われる。

Ranganathan は、CRG が提唱するファセット化分類法と自身が使用してきた分析合成型分類法との関係を明らかにすることも試みている。しかし、その説明は著作ごとに異なっている。最初は、公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法であると述べ、分析合成型分類法とファセット化分類法は同義ではないと明言している。その後の著作では、「公準と原理に導かれる」というこれまでの条件に、「自由な」という条件が分析合成型分類法に加えられる。そして、晩年の著作では、分析合成型分類法とファセット化分類法は、それぞれ定義は異なるが結果的にはほぼ同じものを指している、と考えているように思われる。ただし、定義が異なるのであるから、分析合成型分類法とファセット化分類法が別の概念であると考えていることはそれまでと変わらない。

一方、Vickery は分析合成型分類法とファセット化分類法を同義として扱っている。この点では Ranganathan と異なる。しかし、Vickery は Ranganathan と同様に、ファセット化分類法と列挙型分類法を対置させている。ただし、Vickery の列挙型分類法という用語には、実は階層構造分類法の意味が含まれている。Vickery にとっては、列挙型分類法と階層構造分類法は同義であるといえる。

Ranganathan が分析合成型分類法を考案したのは、複合的な主題に対応するためであった。Vickery がファセット化分類法を提唱したのも、複合的な主題への対応が主な理由である。複合的な主題に対応するためには、独立要素からなる記号法の方が単一要素からなる記号法よりも優れていることを Ranganathan は認識していたが、Vickery もファセット化分類法が複合的な主題に対応しやすいことを記号の特性としてとらえている。

5.2 節では、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットに関する検討を行った。

第 4 章でみたように、Ranganathan は基本カテゴリーの意味を、当初の初心

者がファセット分析を行う際の手引きという役割から、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させた。Vickery は、満足できる一般分類法を構築するためには、専門分類法のファセットを寄せ集めるだけでは十分でなく、領域によらない「同質のファセット」を形成する必要があるとし、この「領域によらない同質のファセット」を「共通ファセット」と呼んでいる。

Ranganathan の基本カテゴリーは、最上位のファセット(最上位のクラス=範疇)と考えられる。それに対して、Vickery の共通ファセットは、多くの知識領域に現れるファセットを意味している。つまり、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットは、一見、同じ概念に思えるが、実際はまったく異なる概念であるといえる。

5.3 節では、以上の結果を基に考察を行った。

構造-表示方法説に基づけば、独立要素からなる記号法は構造という観点からみた多次元構造・自由構造分類法(区分特性を独立に組合せる分類法)のための記号法であり、記号の合成は表示方法の観点からみた合成表示のことである。両者はまったく異なる観点からみた概念である。また、ファセットは独立要素からなる記号法をもつ分類法、すなわち多次元構造・自由構造分類法だけで使われるものではなく、階層構造分類法でも使うことが可能であるし、実際に使われている。分類論のテキストブックでは構造-表示方法説に基づく整理がほとんど行われておらず、Ranganathan の時代からの混乱がそのまま引き継がれている。

Ranganathan の分析合成型分類法と Vickery らのファセット化分類法も、分類論のテキストブックでは同義として扱われることが多い。しかし、Ranganathan 自身は同義ではないとして、両者の相違を明確にしようと努めていた。それに対して Vickery は、両者を同義として扱っていた。分類論のテキストブックにおける両分類法の関係に関する記述は、Vickery の影響が強いのではないかと考えられる。

最後に、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットの関係について考察した。Vickery の共通ファセットは Ranganathan の基本カテゴリーと類似しているようにも思われるが、実際にはまったく別の概念である。Ranganathan が自身の分析合成型分類法とファセット化分類法との違いにこだわった 1 つの理由は、この基本カテゴリーと共通ファセットの違いにあると考えられる。Ranganathan と Vickery は似たような分類法を研究・構築しているけれども、目指す方向はかなり異なっていたと思われる。

第 6 章

結 論

本論文では、ファセットを鍵概念として Ranganathan の図書館分類法に対する考え方を明らかにすることを目的として、(1)Ranganathan によるファセット概念の導入は図書館分類法においてどのような意義をもつのか、(2)Ranganathan はファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたのか、(3)Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をどのように考えていたのか、という 3 つの課題を設定した。

まず、課題(1)の「Ranganathan によるファセット概念の導入は図書館分類法においてどのような意義をもつのか」については、功と罪の両面があることを明らかにした。

Ranganathan が導入したファセット概念自体は、「特定の区分特性による区分肢の総体」という、理論的には特に新しい概念ではなかった。また、実際的にも、すでに CC 以前の分類法で、補助表等の形でファセット概念に対応する考えはとり入れられていた。しかし、Ranganathan は、従来の分類法の補助表は本表に対する補足的なものでしかないことを問題とし、本表自体がファセットで構成されていなければならないと考えたのである。Ranganathan によるファセット概念導入の 1 つの意義は、従来の補助表等による合成を、ファセットを使ってより体系性、一貫性をもたせようとしたことにある。

一方、Ranganathan はこのファセット概念を用いて、複合的な主題に対応するために、区分特性に独立性を与えようとした。これは独立要素をもつ記号法を採用することで実現される。独立要素をもつ記号法もすでに UDC や BC で採用されていたが、それは補助表やメインクラスどうしの記号の合成によるものであり、体系性、一貫性に欠けていた。Ranganathan はファセット概念を導入することによって、合成の体系性、一貫性だけでなく、区分特性の独立性にも体系性、一貫性を与えようとしたのである。これがファセット概念導入のもう 1 つの意義である。

このように、Ranganathan によるファセット概念の意図的な導入は、合成と区分の独立性の両者に体系性、一貫性を与えるという意義があった。しかし、補助表やファセットによって合成を行うということと、独立要素からなる記号法を採用するという事は、必ずしも同じではない。Ranganathan は、CC の特徴がもたらす利点として、合成による助記性の向上(利点 A)と区分の独立性による複合的な主題への対応(利点 B)という 2 点をあげている。利点 A は、構造-表示方法説の用語を使えば、合成表示を採用している分類法だということである。一方、利点 B は、やはり構造-表示方法説の用語を使えば、多次元構造・自由構造(区分特性を独立に適用してできる構造)をとる分類法だということである。したがって、

利点Aは表示方法に関するものであり、利点Bは構造に関するもので、両者はまったく別個の観点に基づいている。Ranganathan は両者を区別して 2 つの利点としているのであるから、両者が別個の観点に基づくものであることに気づいているようにも思える。しかし、Ranganathan の見解をよく分析すると、必ずしもそうではない。

まず、複合的な主題への対応(利点B)は、区分の独立性だけでなく、ファセットを組合せることでも実現されていると Ranganathan は考えている。ここでは、ファセット概念が区分の独立性と結びつけられる。これだけなら、ファセット概念は区分の独立性、すなわち、多次元構造・自由構造に関わる概念だということになる。しかし、その一方で、ファセットは助記性へも貢献する(利点A)と考えている。そして、補助表等による合成もこれと同等であるとみなしている。すなわち、ファセットの組合せと記号の合成が同等であるとみなされているのである。これは、ファセット概念が合成表示と結びつけられていることを意味している。

こうして、本来は「特定の区分特性による区分枝の総体」という単純かつ明確なファセット概念が、多次元構造・自由構造という構造の観点と合成表示という表示方法の観点との、両方と係わりをもつ概念として扱われているのである(第3章の図 3-45 参照)。

Ranganathan は、区分の独立性と合成との区別を明示化した点で重要な貢献をしているが、それが構造と表示方法という別個の観点に基づくものであるということまでは読みとっておらず、そのためにファセット概念を両者に関係させてしまい、分類論のテキストブックにみられるような曖昧な理解を生んだのだと考えられる。

さらに、このファセット概念の曖昧性が、課題(3)でみる分類法の種類分けにも影響を与えることになる。しかし、課題(3)は課題(2)とも関係しているので、次は、課題(2)の「Ranganathan はファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたのか」に関する結論をみる。

基本カテゴリーを導入する以前は、知識領域によって異なるさまざまなファセットが存在し、分類作業の初心者にとっては特定の主題に対してどのファセットを用いればよいのか判断が難しかった。そこで、すべてのファセットを整理してみると 5 つのグループにまとめられた。この 5 つのグループを基本カテゴリーと呼ぶ。しかし、ファセット式はこの段階でもまだファセットを並べる形であり、現在のように基本カテゴリーを並べる形ではない。既存のファセット式では表現できない主題が現れた場合には、初心者は基本カテゴリーを参考にしながら新しいファセットを特定する。このように、基本カテゴリーが導入された当初は、基

本カテゴリーはファセット式では使われておらず、新しい主題に対する新しいファセットを特定する際の手引き(ガイド)の役割を与えられていた。

その後、知識領域の進展に伴って深い主題が増加したため、ファセットを並べる形のファセット式も複雑になっていった。特性の主題を表現するのに必要なファセットをすべてファセット式で決めておくことは、主題表現の硬直化を招く。そこで、基本的なファセットだけをファセット式で決めておいて、残りのファセットは必要に応じて挿入するという選択ファセットの考えを取り入れた。この選択ファセットの考えをさらに進めたのが、基本カテゴリーの役割転換である。ファセット式で固定をするのは、ファセットではなく基本カテゴリーとする。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体現させればよいので、自由度が得られる。

こうして、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定されていた基本カテゴリーが、深い主題に対応するために多数のファセットをそこから体現させるという役割に転換させられたのである。

最後に、課題(3)の「Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法の関係をもどのように考えていたのか」に関する結論をみる。

Ranganathan は分析合成型分類法を「ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法」と定義している。ここには「ファセット」という語が含まれている。しかし、最初は分析合成型分類法ではなく「合成型分類法」と呼んでいたことから推測されるように、Ranganathan にとっては、自身の分類法である CC の意義として、「ファセット」よりも「合成」の方が重要と考えたのではないか。

先にあげた CC の 2 つの利点からもこのことがうかがえる。利点 B の「区分の独立性による複合的な主題への対応」は、複合的な主題を要素に分け(分析し)、各要素を表現する記号を組合せる(合成する)ということができる分類法という意味である。また、利点 A の「合成による助記性の向上」は、ファセットだけでなく補助表でも実現できるとしている。さらに Ranganathan は、公準と原理に導かれた(自由な)ファセット化分類法だけが分析合成型分類法であるとしている。これはファセット化だけでは不十分であり、分析合成型でなければならないということである。これらのことから、Ranganathan にとってはファセットよりも合成を重視していたことが推測される。

一方、CRG の代表としてとりあげた Vickery は、Ranganathan の分類法の考え方をとり入れながらも、CC も含めて従来の分類法は不十分であるとする。Vickery が階層構造分類法(列挙型分類法と呼んでいるが、実際には階層構造分類

法という意味である)の不十分な点として、「グループにまとめられている用語は、単一の特性によって類から分けられた並列の種ではない」ことをあげている。

「単一の特性によって類から分けられた並列の種」とはまさに「特定の区分特性による区分肢の総体」と定義されたファセットである。このように Vickery は、ファセット化が不足している従来の分類法は、たとえ CC のような分析合成ができる分類法であっても不十分であるとしている。このことから、Vickery にとっては、分析合成ができることよりもファセット化されていることの方が重要だったと推測される。

Ranganathan と Vickery の考え方の相違は、基本カテゴリーと共通ファセットという概念にも現れている。Ranganathan にとって基本カテゴリーとは、先にみたように、各種のファセットを体現させる源である。共通の特性をもつファセットをまとめていって、これ以上共通項のない最上位のファセットが得られたとき、その最上位のファセットを基本カテゴリーと呼ぶと考えることができる(第 5 章の図 5-2 参照)。それに対して Vickery の共通ファセットは、多くの(理想的にはすべての)知識領域に現れるファセットのことを意味している(第 5 章の図 5-3 参照)。Vickery が共通ファセットを必要としたのは、一般分類法を構築するためである。特定の知識領域だけを対象とした専門分類法ならば、その知識領域全体に現れるファセットを見出すのは比較的容易であるが、科学技術領域全体、あるいは、知識領域全体に現れるファセットを見出すのは容易ではない。Vickery にとって、Ranganathan の 5 つの基本カテゴリーも共通ファセットとしては満足できるものではないと考えていた。一方、上でみたように、Ranganathan は基本カテゴリーを共通ファセットとして考えていたのではない。むしろ、共通ファセットでは、個々のファセットを体現させるという基本カテゴリーの役割を果たすことができないと考えていた。Ranganathan も Vickery も、複合的な主題に対応できる分類法を研究・構築しているという点では共通しているが、目指す方向が異なっていたといえる。

ところで、Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法は異なる概念であると主張し、Vickery は両者の関係にこだわっていない(あるいは関心がない)ように見える。分類論のテキストブックで分析合成型分類法とファセット化分類法が同義であるかのように扱われているのは、Vickery(および他の CRG メンバー)の影響が大きいのではないかと考えられる。

しかし、これまでみてきたように、分析合成型分類法は「(分析)合成」に着目しているのに対して、ファセット化分類法は「ファセット」に着目している。そして、課題(1)のところでみたように、「合成」と「ファセット」は本来は別個の

概念である。

ファセットは「特定の区分特性による区分肢の総体」であり、それ以上のものではない。それが「合成」と結びついたのは、CC という分類法の中で用いられたという歴史的要因による。現在の DDC でもファセットが使われていることからわかるように、ファセットは多次元構造・自由構造分類法だけでなく、階層構造分類法でも使うことができるのである。その意味で、ファセット化分類法という名称は、階層構造分類法に対置される分類法を表現する名称として適切なのか疑問である。

では、階層構造分類法に対置される分類法の名称としては分析合成型分類法が適切なのかということ、それにも疑問がある。なぜなら、これも課題(1)のところでもみたように、Ranganathan の「(分析)合成」は、複合的な主題に対応するために記号に構成要素を与え、要素間の組合せをするというのが本来の意味のはずであるが、ファセット概念を介して、ファセットだけでなく補助表等の「合成」も助記性に貢献するという意味での「合成」とも結びついてしまったからである。前者は多次元構造・自由構造分類法の意味であり、後者は合成表示の意味である。本来の意味で、つまり、多次元構造・自由構造分類法という意味で分析合成型分類法と呼ぶのなら問題はないが、「合成」という言葉が「合成表示」の意味と紛らわしいため、階層構造で合成表示が採用されている分類法まで分析合成型分類法と呼ぶ場合がでてきている。

分析合成型分類法とファセット化分類法を同義とみなすこと、合成表示をとり入れた階層構造分類法まで分析合成型分類法と呼ぶ場合があること、そして、ファセット概念とは直接関わらないので詳しく論じなかったが、階層構造分類法と列挙型分類法を同義とみなすことは、分類法を種類分けする際に構造と表示方法という 2 つの観点を明確に区別していないことに原因がある。

以上、3 つの課題を通して明らかになったことは、複合主題への対応が Ranganathan の図書館分類法研究にとって最も重要な問題の 1 つであったことである。他の分類研究者も同じ問題に取り組んでいたが、Ranganathan はファセット概念を導入することによって、課題を残しながらも、他の研究者よりも問題の本質に迫ることができた。分類論のテキストブックにおいても、ファセット概念の意義を見直す必要がある。

謝辞

亜細亜大学の長田秀一教授には原稿をお読み頂き多くのご意見とご指摘を賜りました。国立国会図書館の小林昌樹氏と慶應義塾大学(非常勤)の須賀千絵氏には資料入手に関して貴重な情報を提供して頂きました。筑波大学の中山伸一教授には論文博士の世話人教員をお引き受けいただきました。また、中山教授をはじめ、審査委員のみなさま（筑波大学の松本浩一教授と吉田右子教授、慶應義塾大学の田村俊作教授、東洋英和女学院大学の金沢みどり教授）には、予備審査での確なご意見を頂きました。筑波大学中央図書館および図書館情報学図書館には資料入手でお世話になりました。本研究は筑波大学の 2012 年度サバティカルを取得して行ったものです。

皆様に深くお礼申し上げます。

参照文献

- 近藤洋逸, 好並英司(1964). 論理学概論. 岩波書店, 295p.
- 根本彰(1981). IIB の世界書誌編さん活動 1895-1914. *Library and Information Science*. no.19, p.21-36.
- 野口恒雄, 吉田暁史(1996). NDC9 版の批判的検討. *図書館界*. vol.48, no.2, p.70-77.
- 丸山昭二郎編著(1990). 主題情報へのアプローチ. 雄山閣, 267p.
- 緑川信之(1996a). 本を分類する. 勁草書房, 224p.
- 緑川信之(1996b). 分類法の構造:階層構造と多次元構造. *図書館学会年報*. vol.42, no.3, p.99-110.
- 緑川信之(1997a). 分類法におけるファセット概念の検討. *図書館学会年報*. vol.43, no.3, p.117-128.
- 緑川信之(1997b). デューイ十進分類法における合成表示は複合主題への対応手段として有効か. *Library and Information Science*. no.38, p.1-21.
- 緑川信之(2007). "第 4 章 知識資源の主題分析". *知識資源のメタデータ*. 谷口祥一, 緑川信之. 勁草書房, p.161-214.
- Bacon, F. (1605). *The Tvvoo Bookes of Francis Bacon : of the Proficiencie and Aduancement of Learning, Diuine and Humane*. Printed [by Thomas Purfoot and Thomas Creedel], 45, 118p. (日本語訳: ベーコン, F. 学問の進歩. 服部英次郎, 多田英次訳. 岩波書店, 1974, 396p.)
- Batley, S. (2005). *Classification in Theory and Plactice*. Chandos Publishing, 181p.
- Batty, D. (1976). Dewey abroad: The international use of the Dewey Decimal Classification. *Quarterly Journal of the Library of Congress*. vol.33, no.4, p.300-310.
- Batty, D. (1981). The Universal Decimal Classification. *Encyclopedia of Library and Information Science*. vol.32, p.125-146.
- Bliss, B. C. (1910). A modern classification for libraries, with simple notation, mnemonics and alternatives. *Library Journal*. vol.35, p.351-358.
- Bliss, B. C. (1933). *The Organization of Knowledge in Libraries and the Subject Approach to Books*. Wilson, 335p.
- Bliss, B. C. (1935). *A System of Bibliographic Classification*. Wilson, 343p.

- Bilss, B. C. (1938). Review: Prolegomena to Library Classification. *Library Quarterly*. vol.8, no.2, p.299-303.
- Bilss, B. C. (1940-53). *A Bibliographic Classification, Extended by Auxiliary Schedules for Composite Specification and Notation*. Wilson, 4v.
- Bilss, B. C. (1952). *A Bibliographic Classification, Extended by Auxiliary Schedules for Composite Specification and Notation*. 2nd edition of vol.1 and vol.2. Wilson, 1v.
- Brunet, J.-C. (1810). *Manuel du Libraire et de d'amateur de Livres*. Leblanc, 3v.
- Campbell, D. J. (1957). "Glossary to Dr. Ranganathan's paper". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, p.13-14.
- Chan, L. M. (2007). *Cataloging and Classification: An Introduction*. 3rd ed., Scarecrow Press, 579p.
- Classification Research Group(1955). The need for a faceted classification as the basis of all methods of information retrieval. *Library Association Record*. vol.57, no.7, p.262-268.
- Comaromi, J. P. (1976a). *The Eighteen Editions of the Dewey Decimal Classification*. Forest Press, 678p.
- Comaromi, J. P. (1976b). Conception and development of the Dewey Decimal Classification. *International Classification*. vol.3, no.1, p.11-15.
- Cutter, C. A. (1879). Classification on the shelves: With some account of the new schime prepared for the Boston Athenaeum. *Library Journal*. vol.4, p.234-243. (Miksa(1977)の p.249-257)に再録)
- Cutter, C. A. (1891-93). *Expansive Classification*. C. A. Cutter, 2v.
- Dewey, M. (1876). *A Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Library*. Melvil Dewey, 44p.
- Dewey, M. (1885). *Decimal Classification and Relativ Index for Arranging Cataloging and Indexing Public and Private Libraries and for Pamphlets, Clippings, Notes, Scrap Books, Index Rerums, etc.* 2nd ed. Library Bureau, 66, [162], 403-486p.
- Dewey, M. (1888). *Tables and Index of the Decimal Classification and Relativ Index for Arranging and Cataloging Libraries, Clippings, Notes, etc.* 3rd ed.

- Library Bureau, [236], 407-588p.
- Dewey, M. (1891). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 4th ed. Library Bureau, 41, [231], 407-593p.
- Dewey, M. (1894). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 5th ed. Library Bureau, 41, [235], 407-593p.
- Dewey, M. (1899). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 6th ed. Library Bureau, 45, [276], 407-612p.
- Dewey, M. (1911). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 7th ed. Forest Press, 777, [13]p.
- Dewey, M. (1913). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 8th ed. Forest Press, 795, [12]p.
- Dewey, M. (1915). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 9th ed. Forest Press, 856p.
- Dewey, M. (1919). *Decimal Classification and Relativ Index for Libraries, Clippings, Notes, etc.* 10th ed. Forest Press, 936p.
- Dewey, M. (1922). *Decimal Clasification and Relativ Index for Libraries and Personal Use in Arranjng for Immediate Reference Books, Pamflets, Clippings, Pictures, Manuscript Notes and Other Material.* 11th ed. Forest Press, 988p.
- Dewey, M. (1927). *Decimal Clasification and Relativ Index for Libraries and Personal Use in Arranjng for Immediate Reference Books, Pamflets, Clippings, Pictures, Manuscript Notes and Other Material.* 12th ed. Forest Press, 1243p.
- Dewey, M. (1932). *Decimal Clasification and Relativ Index for Libraries and Personal Use in Arranjng for Immediate Reference Books, Pamflets, Clippings, Pictures, Manuscript Notes and Other Material.* 13th ed. Forest Press, 1647p.
- Dewey, M. (1942). *Decimal Clasification and Relativ Index.* 14th ed. Forest Press, 1927p.
- Dewey, M. (1951). *Decimal Classification.* 15th ed. Forest Press, 661p.
- Dewey, M. (1958). *Dewey Decimal Classification and Relative Index.* 16th ed. Forest Press, 2v.
- Dewey, M. (1965). *Dewey Decimal Classification and Relative Index.* 17th ed. Forest Press, 2v.

- Dewey, M. (1971). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 18th ed. Forest Press, 3v.
- Dewey, M. (1979). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 19th ed. Forest Press, 3v.
- Dewey, M. (1989). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 20th ed. Forest Press, 4v.
- Dewey, M. (1996). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 21th ed. Forest Press, 4v.
- Dewey, M. (2003). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 22th ed. OCLC Online Computer Library Center, 4v.
- Dewey, M. (2011). *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. 23th ed. OCLC Online Computer Library Center, 4v.
- Diderot, D. ; D'Alembert, J. R. eds. (1751-80) *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers*. Briasson [etc.], 35v. (日本語訳: デイドロ, D. ; ダランベール, J. R. 編. 百科全書: 序論および代表項目. 桑原武夫訳編. 岩波書店, 1971, 413p.)
- Foskett, D. J. (1988). Brian Vickery: A personal memoir. *Journal of Documentation*. vol.44, no.3, p.199-204.
- Harris, W. T. (1870). "Essay on the system of classification". *Catalogue, Classified and Alphabetical, of the Book of the St. Louis Public School Library, including, also, the Collections of the St. Louis Academy of Science, and St. Louis Law School*. Bailey, J. J. ed. Missouri Democrat Book and Jub Printing House, p. ix - x vi. (なお, 同書の p. iv - viii に分類表が掲載されている)
- Indian Standards Institution(1964). *Indian Standard: Glossary of Classification Terms*. Indian Standards Institution, 110p.
- La Barre, K. (2000). "Bliss and Ranganathan: Synthesis, synclonicity or sour grapes?". *Dynamism and Stability in Knowledge Organization: Proceedings of the Sixth International Conference of the International Society of Knowledge Organization (ISKO), 10-13 July 2000, Toronto, Canada*. Beghtol, C. ; Howarth, L. C. ; Williamson, N. J., eds. Ergon Verlag, p.157-163.
- La Montagne, L. E. (1961). *American Library Classification: With Special Reference to the Library of Congress*. Shoe String Press, 433p.
- Miksa, F. L., ed. (1977). *Charles Ammi Cutter: Library Systematizer*.

- Libraries Unlimited, 344p.
- Naudé, G. (1627). *Advis pour dresser une bibliothèque : Présenté à Monseigneur le président de Mesme. Targa*, 167p. (第2版(1644)の日本語訳 : ノーデ, G. 図書館設立のための助言. 藤野寛之訳. 金沢文圃閣, 2006, 136p.)
- Naudé, G. (1643). *Bibliothecae Cordesiana catalogus*. Vitray, 542p.
- Otlet, P. (1895-96). *Sur la structure des nombres classificateurs*. IIB Bulletin. no.1, p.230-243. (英語訳 : "On the structure of classification numbers," International Organisation and Dissemination of Knowledge: Selected Essays of Paul Otlet. Rayward, W. B. (ed. and trans.) Elsevier, 1990, p.51-62.) 引用は英語訳を用いた。
- Palmer, B. I. ; Wells, A. J. (1951). *The Fundamentals of Library Classification*. George Allen & Unwin, 114p.
- Ranganathan, S. R. (1933). *Colon Classification*. Madras Library Association, 3 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1937). *Prolegomena to Library Classification*. Madras Library Association, 305p.
- Ranganathan, S. R. (1939). *Colon Classification*. 2nd ed., Madras Library Association, 4 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1944). *Library Classification: Fundamentals & Procedure, with 1008 Graded Examples & Exercises*. Madras Library Association, 496p.
- Ranganathan, S. R. (1945). *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944*. N.K. Publishing House, 112p.
- Ranganathan, S. R. (1949). *Self-perpetuating scheme of classification*. *Journal of Documentation*. vol.4, no.4, p.223-244.
- Ranganathan, S. R. (1950a). *Colon Classification*. 3rd ed., Madras Library Association, 4 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1950b). *Classification, Coding and Machinery for Search*. UNESCO, 58p.
- Ranganathan, S. R. (1951a). *Classification and Communication*. University of Delhi, 291p.
- Ranganathan, S. R. (1951b). *Philosophy of Library Classification*. Ejnar

- Munksgaard, 133p.
- Ranganathan, S. R. (1951c). "Colon Classification and its approach to documentation". *Bibliographic Organization: Papers Presented before the Fifteenth Annual Conference of the Graduate Library School, July 24-29, 1950*. Shera, J. H. ; Egan, M. E., eds. University of Chicago Press, p.94-105.
- Ranganathan, S. R. (1952). *Colon Classification*. 4th ed., Madras Library Association, 4 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1957a). *Colon Classification*. 5th ed., Madras Library Association, 3 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1957b). *Prolegomena to Library Classification*. 2nd ed., Library Association, 487p.
- Ranganathan, S. R. (1957c). "Library classification as a discipline". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, p.3-14.
- Ranganathan, S. R. (1959). *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944, and in the Schools of Librarianship in Great Britain in December 1956*. 2nd ed., Association of Assistant Librarians, 108p.
- Ranganathan, S. R. (1960). *Colon Classification*. 6th ed., Madras Library Association, 3 pts. in 1 v.
- Ranganathan, S. R. (1961). "Library classification on the March". *Essays in Librarianship in Memory of William Charles Berwick Sayers*. Foskett, D. J. ; Palmer, B. I., eds. Library Association, p.72-95.
- Ranganathan, S. R. (1962). *Elements of Library Classification: Based on Lectures Delivered at the University of Bombay in December 1944, and in the Schools of Librarianship in Great Britain in December 1956*. 3rd ed., Asia Publishing House, 168p.
- Ranganathan, S. R. (1963). "Depth classification, tools for retrieval, and organization for research". *Documentation and Its Facets: Being a Symposium of Seventy Papers by Thirty-two Authors*. Ranganathan, S. R., ed. Asia Publishing House, p.604-621.
- Ranganathan, S. R. (1964). Subject heading and facet analysis. *Journal of Documentation*. vol.20, no.3, p.109-119.

- Ranganathan, S. R. (1965a). *The Colon Classification*. Rutgers University Press, 298p.
- Ranganathan, S. R. (1965b). "Library classification through a century". *Classification Research: Proceedings of the Second International Study Conference held at Hotel Prins Hamlet, Elsinore, Denmark 14th to 18th September 1964*. Atherton, P., ed. Munksgaard, p.15-35.
- Ranganathan, S. R. (1965c). "General and special classifications". *Classification Research: Proceedings of the Second International Study Conference held at Hotel Prins Hamlet, Elsinore, Denmark 14th to 18th September 1964*. Atherton, P., ed. Munksgaard, p.81-93.
- Ranganathan, S. R. (1967). *Prolegomena to Library Classification*. 3rd ed., Asia Publishing House, 640p.
- Ranganathan, S. R. (1969). *Colon Classification Ed 7 (1971): A Preview*. Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 52p.
- Ranganathan, S. R. (1987). *Colon Classification*. 7th ed., Volume 1: Schedules for Classification. Gopinath, M. A. revised and edited. Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 332p.
- Rowley, J. ; Farrow, J. (2000). *Organizing Knowledge: An Introduction to Managing Access to Information*. 3rd ed., Ashgate, p.218-220.
- Rowley, J. ; Farrow, J. (2008). *Organizing Knowledge: An Introduction to Managing Access to Information*. 4th ed., Ashgate, 367p.
- Shamurin, E. I. (1955-59). *Ocherki po Istorii bibliotechno-bibliograficheskoi Klassifikatsii*. Knizhnoi Palaty, 2v. (日本語訳 : シャムーリン, E. 図書館分類 = 書誌分類の歴史. 藤野幸雄, 宮島太郎訳. 金沢文圃閣, 2007, 2 卷.)
- Schwartz, J. (1879). A mnemonic system of classification. *Library Journal*. vol.4, no.1, p.1-7.
- Spiteri, L. (1998). A simplified model for facet analysis: Ranganathan 101. *Canadian Journal of Information and Library Science*. vol.23, no.1/2, p.1-30.
- Taylor, A. G. ; Joudrey, D. N. (2009). *The Organization of Information*. 3rd ed., Libraries Unlimited, 512p.
- Tennis, J. P. (2012). "Comparative modeling of Vickery's faceted classification and oeuvre of S. R. Ranganathan". *FACET of Knowledge Organization: Proceedings of the ISKO UK Second Biennial Conference, 4th-5th July*

- 2011, London. Gilchrist, A. ; Vernau, J., eds. Emerald, p.301-313.
- UDC(1905-07). Classification Décimale Universelle. (第 1 版 フランス語 ;
Manuel du Répertoire Bibliographique Universel. Institut International de
Bibliographie, 1905-1907. の一部として収録されている)
- UDC(1927-33). Classification Décimale Universelle: Édition Complète.
Institut International de Bibliographie. (第 2 版 フランス語)
- UDC(1934-53). Dezimal-Klassifikation: Deutsche Gesamtausgabe; Bearbeitet
vom Deutschen Normenausschuss. Dritte Internationale Ausgabe der
DezimalKlassifikation. Beuth. (第 3 版 ドイツ語)
- UDC(1936). Universal Decimal Classification: English Edition of the
Classification Décimale Universelle of the Institut International de
Documentation. D. van Keerberghen. (第 4 版 英語 ; vol.1 の一部と vol.2 の
み)
- UDC(1943-). Universal Decimal Classification: Complete English Edition;
Fourth International Edition. British Standards Institution. (第 4 版 英
語 ; 1936 版のリプリントおよび後続巻)
- Vickery, B. C. (1950). The structure of a connective index. *Journal of
Documentation*. vol.6, no.3, p.140-151.
- Vickery, B. C. (1952). Notational symbols in classification. *Journal of
Documentation*. vol.8, no.1, p.14-32.
- Vickery, B. C. (1953a). Classification Research Group. *Library Association
Record*. vol.55, p.187-188.
- Vickery, B. C. (1953b). Systematic subject indexing. *Journal of Documentation*.
vol.9, no.1, p.48-57.
- Vickery, B. C. (1953c). The significance of John Wilkins in the history of
bibliographical classification. *Libri*. vol.2, p.326-343.
- Vickery, B. C. (1954). The changing structure of knowledge. *Annals of Library
Science*. vol.1, no.3, p.137-147.
- Vickery, B. C. (1957a). "Relations between subject fields: Problems of
constructing a general classification". *Proceedings of the International
Study Conference on Classification for Information Retrieval held at
Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib,
p.43-49.
- Vickery, B. C. (1957b). Depth classification, 24: Common facets and relations.

- Annals of Library Science, vol.4, no.1, p.8-12.
- Vickery, B. C. (1958). Classification and Indexing in Science. Butterworths, 185p.
- Vickery, B. C. (1960). Faceted Classification: A Guide to Construction and Use of Special Schemes. Aslib, 70p.
- Vickery, B. C. (1962). Classification for documentation. Aslib Proceedings. 1962, vol.14, no.8, p.243-247.
- Vickery, B. C. (1966). Faceted Classification Schemes. Rutgers University Press, 108p.
- Vickery, B. C. (1975). Classification and Indexing in Science. 3rd ed., Butterworths, 228p.
- Vickery, B. (2004). A Long Search for Information. Board of Trustees of the University of Illinois, 33p.

文献リスト

①査読制度のある学術雑誌

- 緑川信之. 構造・表示方法説から見たランガナータンとヴィッカリーのファセット概念. *Library and Information Science*. 2014, no.71, (掲載予定)
- 緑川信之. ランガナータンにおけるファセット概念の展開. *Library and Information Science*. 2013, no.69, p.47-81.
- 緑川信之. ファセット概念の源流. *日本図書館情報学会誌*. 2013, vol.59, no.1, p.17-31.
- 緑川信之. 分類法におけるファセット概念の検討. *図書館学会年報*. 1997, vol.43, no.3, p.117-128.

全研究業績のリスト

○は核となる論文

①査読制度のある学術雑誌

- 緑川信之. 構造・表示方法説から見たランガナータンとヴィッカリーのファセット概念. *Library and Information Science*. 2014, no.71, (掲載予定)
- 緑川信之. ランガナータンにおけるファセット概念の展開. *Library and Information Science*. 2013, no.69, p.47-81.
- 緑川信之. ファセット概念の源流. *日本図書館情報学会誌*. 2013, vol.59, no.1, p.17-31.
- ・ Onodera, N.; Iwasawa, M.; Midorikawa, N.; Yoshikane, F.; Amano, K.; Ootani, Y.; Kodama, T.; Kiyama, Y.; Tsunoda, H.; Yamazaki, S. A method for eliminating articles by homonymous authors from the large number of articles retrieved by author search. *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. 2011, vol.62, no.4, p.677-690.
- ・ 間部志保, 岩澤まり子, 緑川信之. 知識組織化体系におけるSKOS適用の可能性. *情報メディア研究*. 2011, vol.10, no.1, p.75-87.
- ・ 緑川信之. 「情報」概念の再考. *Library and Information Science*. 2006, no.56, p.23-42.
- ・ 緑川信之. デューイ十進分類法における合成表示は複合主題への対応手段として有効か. *Library and Information Science*. 1997, no.38, p.1-21.
- 緑川信之. 分類法におけるファセット概念の検討. *図書館学会年報*. 1997, vol.43, no.3, p.117-128.
- ・ 緑川信之. 分類法の構造：階層構造と多次元構造. *図書館学会年報*. 1996, vol.42, no.2, p.99-110.
- ・ 山本貴子, 緑川信之, 松村多美子. 我が国で求められている情報専門家像：図書館・博物館における調査. *図書館情報大学研究報告*. 1992, vol.11, no.2, p.19-35.
- ・ 松村多美子, 緑川信之. 情報検索における統制語と自然語. *図書館情報大学研究報告*. 1989, vol.8, no.1, p.49-63.
- ・ Kaneiwa, K.; Adachi, J.; Aoki, M.; Masuda, T.; Midorikawa, N.; Tanimura, A.; Yamazaki, S. A comparison between the journals *Nature* and *Science*.

- Scientometrics. 1988, vol.13, no.3-4. p.125-133.
- 緑川信之, 松村多美子. 自動分類への引用分析手法の適用. 図書館情報大学研究報告. 1987, vol.6, no.1, p.107-118.
 - 根本彰, 松本浩一, 緑川信之. Librarianship, Documentation および Information Science の史的関係 : J.H.Shera の見解を中心として. 図書館情報大学研究報告. 1986, vol.5, no.2, p.1-19.
 - 緑川信之, 倉田敬子. パラダイムと引用分析. Library and Information Science. 1985, no.23, p.195-206.
 - 岡千穂美, 緑川信之. 栄養学のポピュラリゼーション : ビタミンを例として. Library and Information Science. 1985, no.23, p.149-163.
 - 斎藤憲一郎, 吉川智江, 小川治之, 金子昌嗣, 逸村裕, 緑川信之. 引用文献からみた理工学分野における文献利用の特徴. Library and Information Science. 1985, no.23, p.125-135.
 - 田村俊作, 緑川信之, 井上直子. 化学論文の生産と利用に関する日露比較. Library and Information Science. 1985, no.23, p.103-114.
 - Midorikawa, N.; Ogawa, H.; Saito, K.; Kaneko, M.; Itsumura, H. The relationships among the citation measures and the factors influence on them. Information Services and Use. 1984, vol.4, no.6, p.417-424.
 - 緑川信之, 松本浩一. 図書館情報学に関する計量的研究 : 調査とレビュー. 図書館情報大学研究報告. 1984, vol.3, no.2, p.11-33.
 - 緑川信之. 図書館・情報学の基本雑誌. Library and Information Science. 1984, no.22, p.87-97.
 - Midorikawa, N. Citation analysis of physics journals: comparison of subfields of physics. Scientometrics. 1983, vol.5, no.6, p.361-374.
 - 緑川信之, 逸村裕, 金子昌嗣, 斎藤憲一郎, 小川治之. 理工学諸分野の雑誌構造. Library and Information Science. 1982, no.20, p.63-80.
 - 緑川信之, 金子昌嗣, 逸村裕, 斎藤憲一郎, 小川治之. 自然科学雑誌の諸引用尺度. 図書館学会年報. 1982, vol.28, no.4, p.157-169.
 - 山崎茂明, 緑川信之. 引用文献による生理学雑誌の構造分析 : Journal Citation Reports(JCR)1978年版をもとに. Library and Information Science. 1980, no.18, p.195-208.

②査読制度のある国際会議

なし

③ 著書

- ・ 緑川信之, 谷口祥一, 大作光子, 横田さおり, 三宅和恵. 学校図書館メディアの構成. 第2版. 学文社, 2008, 168p.(担当:序章 p.10-13, 第3章 p.71-93)
- ・ 谷口祥一, 緑川信之. 知識資源のメタデータ. 勁草書房, 248p, 2007. (担当: 第1章 p.1-5, 11-17, 第4章 p.161-214)
- ・ 緑川信之[ほか 49名]. 図書館・情報学研究入門. 勁草書房, 2005, 226p. (担当: 図書館・情報学への招待 p.185-218)
- ・ 緑川信之, 谷口祥一, 長田秀一, 藤田岳久, 梁瀬三千代, 大庭一郎, 松林麻実子. 新訂情報検索演習. 東京書籍, 2004, 239p. (担当: 第1章 p.15-40, 第3章 p.80-102, 第6章 p.152-171, 付録 p.226-233)
- ・ 緑川信之. 情報検索の考え方. 勉誠出版, 1999, 158p.
- ・ 緑川信之, 谷口祥一, 長田秀一, 藤田岳久, 梁瀬三千代. 情報検索演習. 東京書籍, 1998, 231p. (担当: 第1章 p.13-29, 第4章 p.80-131, 第6章 p.151-171)
- ・ 緑川信之. 本を分類する. 勁草書房, 1996, 224p.
- ・ 上田修一, 緑川信之, 吉川智江, 逸村裕, 金子昌嗣, 原田隆史. 理工学文献の特色と利用法. 勁草書房, 1987, 221p. (全体を全員で分担したので, 特に明示できる箇所はない)
- ・ 緑川信之, 倉田敬子, 真弓育子, 岡千穂美, 杉本由利子. 図書館・情報学のための調査研究法. 勁草書房, 1986, 202p. (担当: 第2章 p.121-188)

④ その他

- ・ 緑川信之. フォークソノミーの新奇性はどこにあるのか. 情報の科学と技術. 2007, vol.57, no.5, p.238-243.
- ・ 緑川信之. 専門図書館と分類法. 専門図書館. 2005, no.212, p.1-7.
- ・ 緑川信之. 分類法において階層構造と多次元構造を区別する意義. TP&D フォーラムシリーズ. 1999, vol. 7, p.13-23.
- ・ 緑川信之. インパクト・ファクターの意味. 細胞工学. 1997, vol.16, no.10, p.1524-1528.
- ・ 緑川信之. 方法としてのビブリオメトリックス. 医学図書館. 1995, vol.42, no.3, p.302-306.
- ・ 緑川信之. EC の情報政策: IMPACT プログラムと図書館プログラム. 情報の科学と技術. 1994, vol.44, no.1, p.58-63.
- ・ 緑川信之. データベース検索におけるユーザの特性. 情報処理. 1992, vol.33,

no.10, p.1171-1177.

- 緑川信之. サイテーション・インデックスとその応用. 化学と工業. 1990, vol.44, no.1, p.120-123.
- 緑川信之. オンライン情報検索. 静電気学会誌. 1990, vol.14, no.6, p.525-530.
- Miyamoto, S.; Midorikawa, N.; Nakayama, K. A view of studies on bibliometrics and related subjects in Japan. Communication Research. 1989, vol.16, no.5, p.629-641.(Review)
- Ogawa, H.; Midorikawa, N.; Yoshikawa, C.; Saito, K.; Itsmura, H.; Kaneko, M.; Niki, E. How much of cited conference materials can be found using bibliographic tools?, Journal of the American Society for Information Science. 1989, vol.40, no.5, p.350-355. (Brief Communications)
- 緑川信之. OA 機器と図書館に関する文献展望. 現代の図書館. 1985, vol.23, no.1, p.59-64. (文献展望)
- 田村俊作, 緑川信之, 金子昌嗣. 大学教科書に関する文献展望. 図書館学会年報. 1984, vol.30, no.3, p.97-107. (文献展望)
- 緑川信之, 小川治之, 逸村裕, 金子昌嗣, 斎藤憲一郎. 生物・医学雑誌の諸引用尺度. 医学図書館. 1983, vol.30, no.2, p.195-201.
- 逸村裕, 金子昌嗣, 小川治之, 斎藤憲一郎, 緑川信之. 理工学分野の諸引用尺度. ドクメンテーション研究. 1983, vol.33, no.6, p.273-279.
- 金子昌嗣, 逸村裕, 斎藤憲一郎, 小川治之, 緑川信之. レター誌の特徴. 図書館学会年報. 1983, vol.29, no.1, p.41-47. (研究ノート)
- 緑川信之, 金子昌嗣, 斎藤憲一郎, 小川治之, 逸村裕. 理工学雑誌の引用度順位の比較. 情報管理. 1982, vol.25, no.9, p.797-807.
- 緑川信之. 引用文献分析の方法とその応用. 医学図書館. 1981, vol.28, no.2, p.83-91.

